

八尾市・東大阪市所在

池島・福万寺遺跡2

(福万寺I期地区)

—一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—

遺構・遺物編

2002年8月

財団法人 大阪府文化財センター

池島・福万寺遺跡の現景観



◀ 1. 30年ほど前の調査地周辺

(北から、1969年10月撮影)

大阪府寝屋川水系改修工営所提供



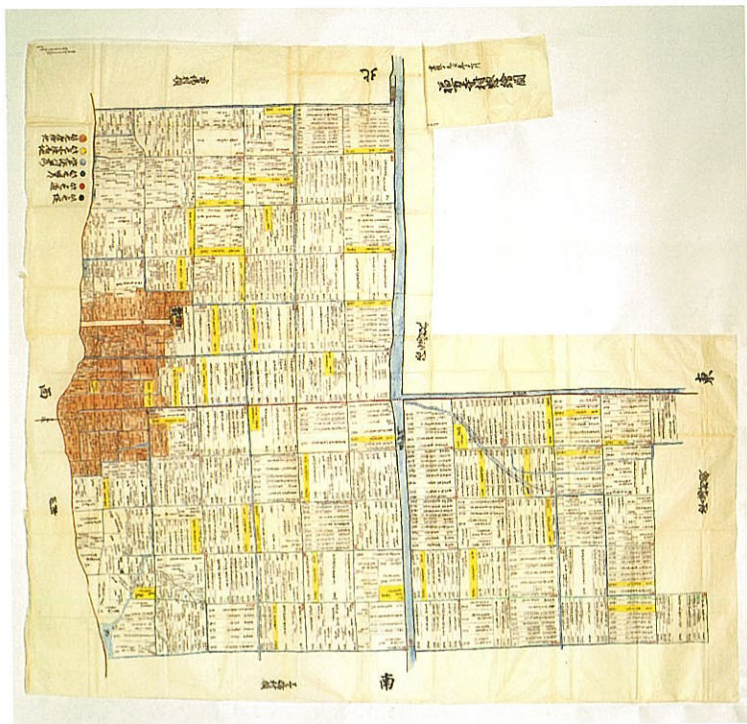
2. 恩智川治水緑地となった調査地▶

(北から、2001年5月撮影)

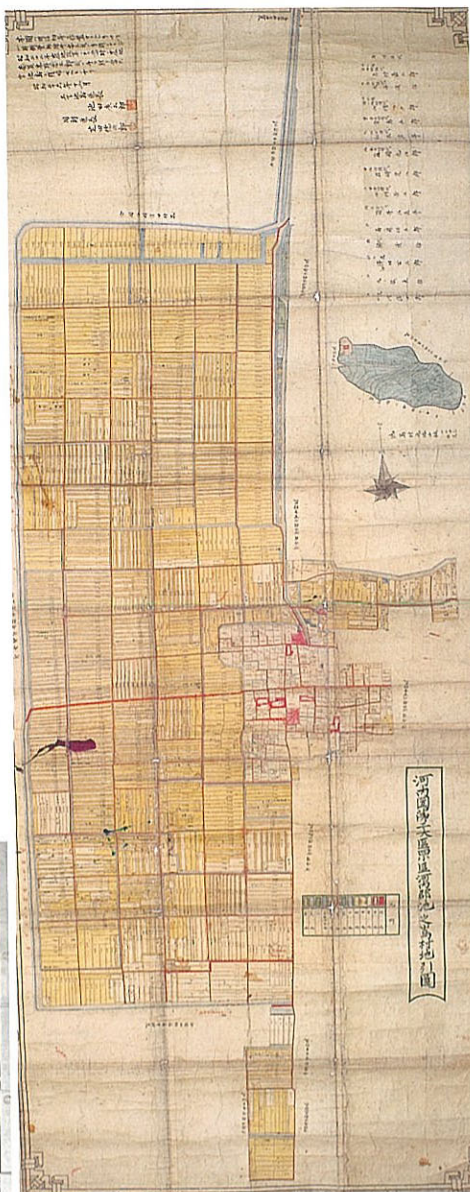


3. 池島・福万寺遺跡の立地 (西から、1991年6月撮影)

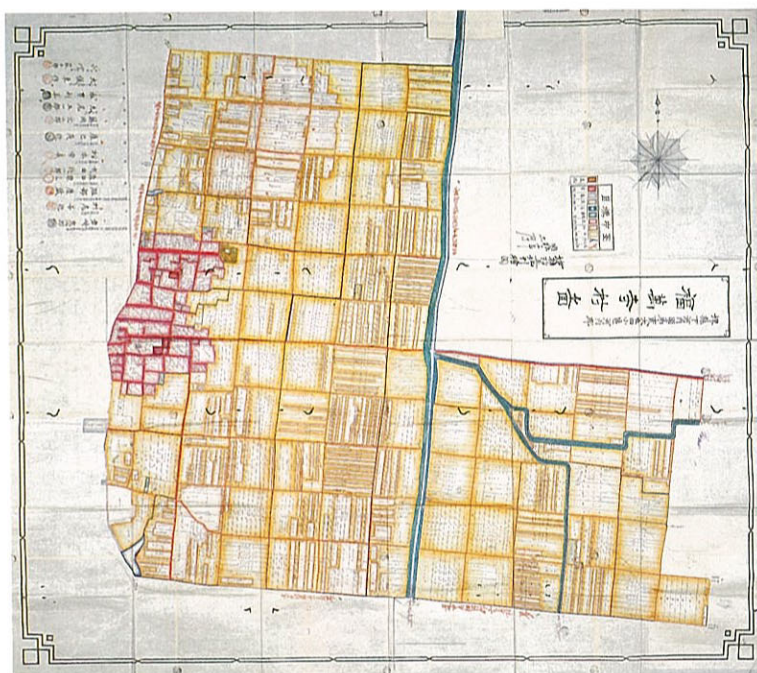
古地図に見る地割・土地利用



4. 『福萬寺村惣繪圖』(沢井浩三氏影写本)
(享保19[1734]年作成、昭和32[1957]年模写)



6. 『河内郡池之寫村地引圖』(明治初期作成)



5. 『堺縣河内郡第二大區四小區河内郡福萬寺村
地租改正地引繪圖』(明治12[1879]年作成)

この3枚は、江戸時代～明治時代に作られた当遺跡周辺の古地図である。これらに記載された内容は、発掘調査成果を理解する上で参考になる情報を含んでいる。

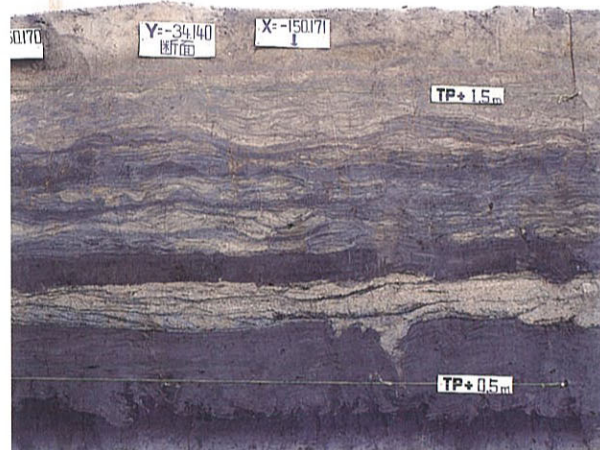
地層に刻まれた人間活動の痕跡



7. 地表面から約3 m下までの地層



8. 飛鳥時代～平安時代の水路・大畦畔
(第9 a層・第8 a層)



9. 弥生時代前期の氾濫堆積物 (第13 b層)



10. 砂で埋まった畦畔をさがす
(第12-1 a面)



11. 泥で埋まった畦畔をさがす (第11-2 a面)

古代～中世の農耕技術



12. 中世後期の島畠 (第3 - 3 a 面)



13. 現代に受け継がれた島畠
(奈良県大和郡山市長安寺町、2001年6月撮影)



14. 表層条里型地割と一致する最古の水田 (第8 a 面)



15. 水田作土の下面に残った馬鋤の歯の痕跡
(第6 b 面)

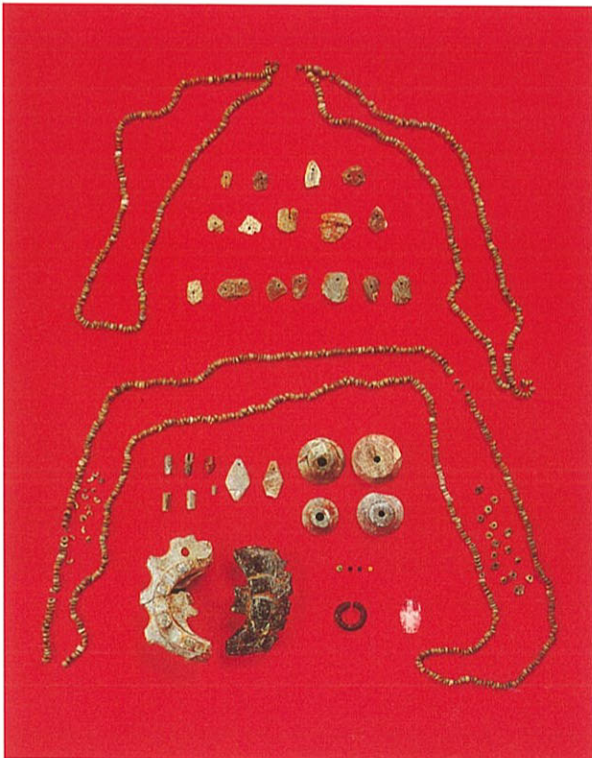


16. 馬鋤の歯 (第3層・第7層・第8 a 層)

古墳時代のムラ



17. 古墳時代中期後半～後期の建物群（第10b面）



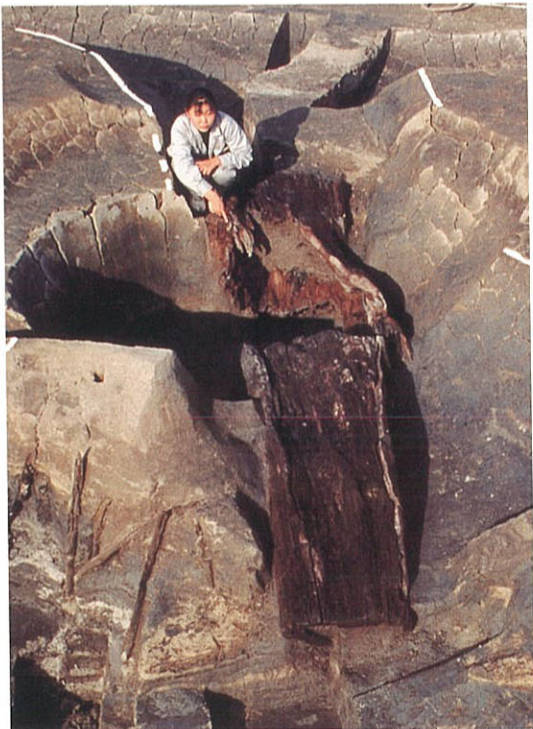
18. 玉類・滑石製品

弥生時代後期の流路が埋まって形成された微高地の上に、古墳時代中期後半～後期の居住域が立地していた。建物が集中する部分は区画溝で囲まれ、周囲に小規模な畠も存在していた。居住域内の遺構や居住域周辺からは、多量の滑石製玉類、土師器甕・羽釜・甑などが出土している。

弥生時代後期の灌漑システムと水田



19. 灌漑施設（取水堰と水路）



20. 木製導水管 1



21. 水路の中に設けられた分水堰（堰16）



22. 水路38・40・41と小区画水田



23. 小区画水田

弥生時代の農具



24. 木製鍬（第13b層・第13a面）

当遺跡からは木製農具も若干出土している。特に、弥生時代後期（第11-2a面）の水路肩部から出土した鍬は破損していたが、泥除け具がついたままの状態出土した。



25. 泥除け具がつけられた鍬（第11-2a面）



26. 石庖丁（第11b層）

石庖丁は、弥生時代前期末～中期初頭水田面（第13a面）、弥生時代中期水田面（第12-1a面）から出土した。

序 文

池島・福万寺遺跡は、大阪府が建設を進めている恩智川治水緑地付近に広がっており、1989年以降、財団法人大阪府文化財センターは恩智川治水緑地内での発掘調査を継続して行ってきました。恩智川治水緑地は、河内平野の東端を南北に流れる恩智川の洪水対策の一環として設けられた施設で、豪雨時には恩智川から勢いよく水が流れこむ遊水池となっています。そのために、掘削深度は地表面からおおよそ4～5mにも達し、縄文時代以降の遺物や遺構が検出されています。池島・福万寺地区のⅠ期部分は調査が完了しており、休日は野球やサッカーをする人達で賑わっています。

今回報告する福万寺Ⅰ期地区は恩智川左岸に位置しており、広さは約9万㎡を測ります。調査は1989年から1994年にかけての六ヶ年間行われ、調査区も延べ14調査区におよびました。調査結果は調査区ごとに概要報告書として既に報告されていますが、今回はその総集編ともいべき調査報告書になります。

調査開始以降、調査担当者は真摯に調査にとりくみ、計画通り調査を終えることができました。しかし、調査面積が余りにも膨大なことや遺構面数の多さなどから部分的に齟齬をきたしている部分も存在しましたが、今回の報告書では、担当者の鋭い洞察力と観察力によって多くの面で問題点の解決が図られており、新たな見解が報告されています。また分析・考察編では、貴重な玉稿をいただき、弥生時代以降の耕作地の変遷など今までの調査成果と合わせて詳細な検討を行うことができました。

池島・福万寺地区のⅠ期は前述のように調査が完了しており、野鳥の楽園とよばれた十数年前の姿に戻りつつあります。また近年、鮮やかな空色の羽根を持つカワセミが調査地付近に巣を作っており、その営巣地の確保のために池島Ⅰ期地区では水に囲まれた中の島が残されました。人間が生活していくうえで破壊という行為は不可避なものです。上記のようにほんの少しの努力によって自然と共存する可能性ができました。現在、池島・福万寺地区のⅡ期では発掘調査が一部で始まっており、今後の調査成果に期待したいと思います。

最後になりましたが、調査の過程でお世話になった大阪府土木部、寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、その他関係者各位に御礼申し上げます。

平成14年 8月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水 野 正 好

例 言

1. 本書は、恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）発掘調査の整理事業に対する本報告書である。なお、池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）は八尾市福万寺町北地内に所在する。
2. 発掘調査は財団法人大阪文化財センター、整理事業は財団法人大阪府文化財調査研究センターが、大阪府寝屋川水系改修工営所の委託を受けて実施した。
3. 総括的な整理事業および本書の作成作業は平成10年度～13年度に実施し、印刷に関しては平成14年度に行った。
4. 整理事業および本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。整理事業は調査部長井藤 徹、中部調査事務所長赤木克視（平成10・11年度）、藤田憲司（平成12・13年度）の指示の下、中部調査事務所調査第二係で実施した。各年度の担当者は以下のとおりである。
平成10・11年度
係長 小野久隆・専門調査員 新倉 香
平成12年度
係長 国乗和雄・主査 畑 暢子・技師 井上智博・専門調査員 新倉 香
平成13年度
係長 国乗和雄・主査 畑 暢子・技師 井上智博
なお、遺物写真撮影に関しては中部調査事務所主査片山彰一・調査補助員米子千智・水取康人が担当し、木製品の保存処理・樹種同定は主査山口誠治が担当した。
5. 遺物整理には以下の方々を中心に参加・協力を得た。
安富猛員・井上幸子・奥村宏美・角田亜希乃・黒崎善雄・阪井祐美子・里 百代・佐藤智晶・田中エミ子・辻田有美・辻田多江・沼澤順子・増井英子・松本章子・宮本史子・若林 史・山本麻理・山本由紀子・湯澤洋子
6. 福万寺Ⅰ期地区の発掘調査履歴に関しては、表Ⅰ-1（3ページ）に示した。
7. 発掘調査および整理作業に伴い、委託分析として自然科学分析を実施した。その詳細については、第Ⅴ章1（359～360ページ）に示した。
8. 遺跡周辺の古地図については、以下に記す所蔵者の方々の許可を得て写真撮影し、本書に掲載した。記して厚く感謝の意を表する次第である。なお、写真撮影は片山彰一・米子千智が行った。

『福萬寺村惣繪圖』（沢井浩三氏影写本）

八尾市立歴史民俗資料館

『河内國第二大區四小區河内郡池之寫村地引圖』

池島町自治会

『堺縣河内國第二大區四小區河内郡市場村地引圖』

岩崎孝朗氏

『堺縣河内國第二大區四小區河内郡福萬寺村地租改正地引繪圖』

岩崎孝朗氏

『堺縣河内國第二大區四小區河内郡上之島村地引圖』

岩崎孝朗氏

9. 発掘調査成果の総括的整理および遺物整理作業の過程で、次の方々をはじめとする多くの方々に御指導・御教示賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。
粟田 薫（富田林市教育委員会）・泉 拓良（奈良大学）・大野 薫（大阪府教育委員会）・萩田昭次（東大阪市文化財保護委員）・岸岡貴英（京都府教育委員会）・工楽善通（財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所）・清水みき（向日市教育委員会）・高橋 学（立命館大学）
・趙 哲済（財団法人大阪市文化財協会）・戸原和人（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）
・長谷川 睦（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）・平川 南（国立歴史民俗博物館）・別所秀高（財団法人東大阪市文化財協会）・松井 章（奈良文化財研究所）・松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）・森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）
10. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。
11. 本書の執筆分担は目次に示すとおりである。編集は井上が行った。

凡 例

1. 地層の記載方法に関しては、第三章に示した。発掘調査では、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990年度版を用いて土色の記載を行っており、今回掲載した断面図には、これに従って土色を提示したものがある。
2. 挿図のうち、平面図・断面図は適宜縮尺を変えて掲載した。それぞれの縮尺は、各図に示している。
3. 遺物実測図の縮尺は、以下のとおりである。
土 器：1/4
土製品：1/3
瓦：1/4, 1/6
石 器：2/3, 1/2, 1/3, 1/4
木 器：1/2, 1/3, 1/4, 1/6, 1/20
金属器：1/2, 1/3, 1/4
4. 遺物写真の縮尺は図版に記入している。未記入のものは任意である。
5. 遺物実測図は、以下のような原則にもとづいて掲載した。
 - ・口縁部残存部分が1/6未満の土器は、実測図の口縁部水平線を途中で切って表現する。
 - ・遺物実測図の断面は原則として白抜き、須恵器は断面黒抜きとする。
 - ・遺物の赤色顔料塗布の部分は朱彩で表す。

目次

巻頭カラー図版

池島・福万寺遺跡の現景観
古地図に見る地割・土地利用
地層に刻まれた人間活動の痕跡
古代～中世の農耕技術
古墳時代のムラ
弥生時代後期の灌漑システムと水田
弥生時代の農具

序文 例言 凡例

財団法人大阪府文化財センター 理事長 水野正好

第Ⅰ章 発掘調査・整理作業の概要	(井上智博) 1
第Ⅱ章 位置と環境	(井上) 7
第Ⅲ章 遺構面の認識と標準層序	(井上) 18
第Ⅳ章 遺構・遺物	(畑 暢子・井上) 28
1. 遺構・遺物整理の前提	28
2. 第1 a面～第9 a層－条里型水田面の調査－	29
3. 第10 b面－古墳時代遺構面の調査－	131
4. 第10 b層～第13 b層－弥生時代水田の調査－	181
4-1. 弥生時代後期	181
4-2. 弥生時代中期	244
4-3. 弥生時代前期～中期	257
5. 第14-1面～第17層－縄文時代～弥生時代前期の古環境と人間活動－	304
掲載遺物一覧表	311
第Ⅴ章 自然科学分析	
1. 概要	359
2. 微化石・大型植物遺体・堆積物の分析	
2-1. 池島・福万寺遺跡の古環境復元	(辻本裕也・辻 康男) 361

2-2. 池島・福万寺遺跡の立地と環境	……………(外山秀一)	411
2-3. 池島・福万寺遺跡における種実同定	……………(榊古環境研究所)	432
2-4. 池島・福万寺遺跡第18層の粒度分析	……………(井上智博)	436
微化石・大型植物遺体・堆積物の分析について	……………	439
3. 残存脂肪分析		
3-1. 池島・福万寺遺跡から出土した土坑に残存する脂肪の分析	……………(中野益男・中野寛子・長田正宏)	443
3-2. 池島・福万寺遺跡出土土器の残存脂肪分析及び解析	……………(中野益男・中野寛子・長田正宏)	450
残存脂肪分析について	……………	458
4. X線回折試験・化学分析		
4-1. 池島・福万寺遺跡出土弥生土器の胎土分析	……………(井上 巖)	459
4-2. 池島・福万寺遺跡出土須恵器の胎土分析	……………(井上 巖)	471
4-3. 池島・福万寺遺跡出土滑石製品の化学分析	……………(井上 巖)	478
X線回折試験・化学分析について	……………	488
5. 金属分析		
5-1. 池島・福万寺遺跡出土品の金属学的分析調査(1994年度)	……………(大澤正己)	489
5-2. 池島・福万寺遺跡出土馬鍬の金属学的調査(2001年度)	……………(大澤正己)	507
金属分析について	……………	518
6. 放射性炭素年代測定	……………	520

第Ⅵ章 考 察

1. 弥生時代における水田開発・経営の動態	……………(井上智博)	521
2. 弥生時代の井堰に関する予察	……………(井上智博)	527
3. 池島・福万寺遺跡の「滑石製品」-出土滑石製品とその「生産」について-	……………(廣瀬時習)	533
4. 古代～近世における耕作地景観の動態	……………(井上智博)	545

挿図目次

第 I 章

図 I - 1 福万寺 I 期地区調査区位置図	2	図 I - 2 地区割図 (第 III・IV 区画)	5
-------------------------	---	----------------------------	---

第 II 章

図 II - 1 河内平野等高線図	7	図 II - 7 『福万寺村地引図』における地割と土地利用	13
図 II - 2 地形分類図	8	図 II - 8 『池島村地引図』における地割と土地利用	14
図 II - 3 表層における微高地の分布	9	図 II - 9 1880年頃の土地利用	15
図 II - 4 池島・福万寺遺跡周辺の遺跡	10		
図 II - 5 表層条里型地割と坪付関連地名	12		
図 II - 6 『福萬寺村惣繪圖』に描かれた地割・水利系統	13		

第 III 章

図 III - 1 福万寺 I 期地区断面柱状図	22	図 III - 3 第13b～第21b層柱状図	25
図 III - 2 福万寺 I 期地区断面模式図	23～24		

第 IV 章

図 IV - 1 第 1 a 層出土遺物	30	図 IV - 35 第 6 a 層・第 6 b 面・層出土遺物	68
図 IV - 2 第 1 b 面平面図	31	図 IV - 36 第 7 面平面図	69
図 IV - 3 第 1 b 面井戸分布図	32	図 IV - 37 第 7 面島岡関連断面図	70
図 IV - 4 第 1 b 面土坑群	33	図 IV - 38 水路12遺物出土状況	72
図 IV - 5 井戸形態模式図	34	図 IV - 39 第 7 面水路12出土遺物①	76
図 IV - 6 第 1 b 面井戸①	34	図 IV - 40 第 7 面水路12出土遺物②	77
図 IV - 7 第 1 b 面井戸②	35	図 IV - 41 第 7 面水路12出土遺物③	78
図 IV - 8 第 1 b 面遺構出土遺物①	37	図 IV - 42 第 7 面水路12出土遺物④	79
図 IV - 9 第 1 b 面遺構出土遺物②	38	図 IV - 43 第 7 層出土遺物	80
図 IV - 10 第 1 b 層出土遺物	38	図 IV - 44 第 7 b 面土器埋納遺構	81
図 IV - 11 第 2 - 1 a 面平面図	39	図 IV - 45 第 7 b 面遺構・第 7 b 層出土遺物	82
図 IV - 12 第 2 - 1 a 面と『福萬寺村惣繪圖』の比較	40	図 IV - 46 第 8 a 面平面図	83
図 IV - 13 足跡列 A～E	41	図 IV - 47 第 8 a 面等高線図	84
図 IV - 14 第 2 - 1 a 層出土遺物	42	図 IV - 48 第 8 a 面島平面図	85
図 IV - 15 第 2 - 2 a 面平面図	44	図 IV - 49 第 8 b 面溝平面図	85
図 IV - 16 第 2 - 2 a 面・第 2 - 2 a 層出土遺物①	46	図 IV - 50 第 8 a 面～第 8 b 面遺物出土位置図	87
図 IV - 17 第 2 - 2 a 面・第 2 - 2 a 層出土遺物②	47	図 IV - 51 大畦畔 1 下面検出遺構・遺物出土位置図	89
図 IV - 18 第 2 b 層出土遺物	47	図 IV - 52 第 8 b 面土器埋納遺構	91
図 IV - 19 第 3 - 2 a 面平面図	49	図 IV - 53 第 8 a 面遺構・第 8 a 層出土遺物①	93
図 IV - 20 第 3 - 2 a 面等高線図	50	図 IV - 54 第 8 a 面遺構・第 8 a 層出土遺物②	94
図 IV - 21 第 3 - 2 a 面～第 5 a 面における島岡の変遷	51	図 IV - 55 第 8 a 面遺構・第 8 a 層出土遺物③	95
図 IV - 22 第 2 - 1 a 面～第 4 a 面島岡断面図①	52	図 IV - 56 第 8 a 面遺構・第 8 a 層出土遺物④	96
図 IV - 23 第 2 - 1 a 面～第 4 a 面島岡断面図②	53	図 IV - 57 第 8 a 面遺構・第 8 a 層出土遺物⑤	97
図 IV - 24 第 3 - 2 a 面遺構・第 3 - 2 a・3 a・4 a 層出土遺物	54	図 IV - 58 第 8 b 面土器埋納遺構出土遺物	98
図 IV - 25 第 3 b 層出土遺物	54	図 IV - 59 第 8 b 面遺構出土遺物	99
図 IV - 26 第 4 a 面平面図	57	図 IV - 60 第 9 a 面・第 9 b 面検出遺構	100
図 IV - 27 第 4 a 面遺構・第 4 a 層出土遺物①	58	図 IV - 61 水路35断面図	101
図 IV - 28 第 4 a 面遺構・第 4 a 層出土遺物②	59	図 IV - 62 土器埋納遺構と微地形の関係	102
図 IV - 29 第 5 a 面平面図	60	図 IV - 63 第 9 b 面土器埋納遺構①	105
図 IV - 30 第 5 a 面遺構・第 5 a 層出土遺物	61	図 IV - 64 第 9 b 面土器埋納遺構②・土坑	106
図 IV - 31 第 6 a 面平面図	62	図 IV - 65 第 9 a 面遺構・第 9 a 層出土遺物①	108
図 IV - 32 第 6 a 面遺構・第 6 a 層出土遺物①	63	図 IV - 66 第 9 a 面遺構・第 9 a 層出土遺物②	109
図 IV - 33 第 6 a 面遺構・第 6 a 層出土遺物②	64	図 IV - 67 第 9 a 面遺構・第 9 a 層出土遺物③	110
図 IV - 34 第 6 b 面平面図	67	図 IV - 68 第 9 a 面遺構・第 9 a 層出土遺物④	111
		図 IV - 69 第 9 a 面遺構・第 9 a 層出土遺物⑤	112
		図 IV - 70 第 9 a 面遺構・第 9 a 層出土遺物⑥	113

図Ⅳ-71	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑦	114	図Ⅳ-125	第10 b 層出土遺物④	185
図Ⅳ-72	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑧	115	図Ⅳ-126	第10 b 層出土遺物⑤	186
図Ⅳ-73	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑨	116	図Ⅳ-127	第10 b 層関連出土遺物	187
図Ⅳ-74	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑩	117	図Ⅳ-128	第11-1 面出土遺物	189
図Ⅳ-75	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑪	118	図Ⅳ-129	第11-1 層出土遺物	190
図Ⅳ-76	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑫	119	図Ⅳ-130	第11-2 a 面流路復原図	191
図Ⅳ-77	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑬	120	図Ⅳ-131	第11-2 a 面平面図	191
図Ⅳ-78	第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物⑭	121	図Ⅳ-132	第11-2 a 面等高線図	192
図Ⅳ-79	第9 b 面遺構出土遺物(奈良時代)	122	図Ⅳ-133	第11-2 a 面水田ブロック・遺構名称	194
図Ⅳ-80	第9 b 面遺構出土遺物(飛鳥時代)	123	図Ⅳ-134	流路1 右岸水利施設・水田遺構	195
図Ⅳ-81	第9 a 面以上から出土した弥生時代 遺物①	124	図Ⅳ-135	第11-2 a 面堰9 平面・立面図	196
図Ⅳ-82	第9 a 面以上から出土した弥生時代 遺物②	125	図Ⅳ-136	第11-2 a 面堰12 平面・立面図	197
図Ⅳ-83	第10 b 面平面図	131	図Ⅳ-137	第11-2 a 面木製導水管1	198
図Ⅳ-84	第10 b 面等高線図	132	図Ⅳ-138	木製導水管1 断面図	199
図Ⅳ-85	第10 b 面集落関連遺構平面図	134	図Ⅳ-139	流路1 右岸水利施設の変遷	200
図Ⅳ-86	第9 b・10 b 面建物①	137	図Ⅳ-140	堰12と流路堆積物の関係	201
図Ⅳ-87	第9 b・10 b 面建物②	138	図Ⅳ-141	第11-2 a 面水利系統復原図	204
図Ⅳ-88	第9 b・10 b 面建物③	139	図Ⅳ-142	第11-2 a 面関連土器出土状況	205
図Ⅳ-89	第9 b・10 b 面建物④	140	図Ⅳ-143	第11-2 a 面微高地出土遺物①	208
図Ⅳ-90	第9 b・10 b 面建物⑤	141	図Ⅳ-144	第11-2 a 面微高地出土遺物②	209
図Ⅳ-91	第9 b・10 b 面建物⑥	142	図Ⅳ-145	第11-2 a 面微高地出土遺物③	210
図Ⅳ-92	第9 b・10 b 面建物出土遺物①	144	図Ⅳ-146	第11-2 a 面微高地出土遺物④	211
図Ⅳ-93	第9 b・10 b 面建物出土遺物②	145	図Ⅳ-147	第11-2 a 面畦畔出土遺物①	212
図Ⅳ-94	第9 b・10 b 面建物出土遺物③	146	図Ⅳ-148	第11-2 a 面畦畔出土遺物②	213
図Ⅳ-95	第9 b・10 b 面建物出土遺物④	147	図Ⅳ-149	第11-2 a 面堰出土遺物①	215
図Ⅳ-96	第9 b・10 b 面建物出土遺物⑤	148	図Ⅳ-150	第11-2 a 面堰出土遺物②	216
図Ⅳ-97	第10 b 面ピット出土遺物	150	図Ⅳ-151	第11-2 a 面堰出土遺物③	217
図Ⅳ-98	第10 b 面井戸	152	図Ⅳ-152	第11-2 a 面堰出土遺物④	218
図Ⅳ-99	第10 b 面井戸出土遺物①	153	図Ⅳ-153	第11-2 a 面水路出土遺物①	221
図Ⅳ-100	第10 b 面井戸出土遺物②	154	図Ⅳ-154	第11-2 a 面水路出土遺物②	222
図Ⅳ-101	第10 b 面土坑出土遺物①	155	図Ⅳ-155	第11-2 a 面水路出土遺物③	223
図Ⅳ-102	第10 b 面土坑出土遺物②	156	図Ⅳ-156	第11-2 a 面流路1 出土遺物①	224
図Ⅳ-103	第10 b 面溝出土遺物①	157	図Ⅳ-157	第11-2 a 面流路1 出土遺物②	225
図Ⅳ-104	第10 b 面溝出土遺物②	158	図Ⅳ-158	第11-2 a 面流路1 出土遺物③	226
図Ⅳ-105	第10 b 面溝出土遺物③	159	図Ⅳ-159	第11-2 a 面流路1 出土遺物④	227
図Ⅳ-106	第10 b 面溝出土遺物④	160	図Ⅳ-160	第11-2 a 面流路1 出土遺物⑤	228
図Ⅳ-107	第10 b 面溝出土遺物⑤	161	図Ⅳ-161	第11-2 a 面流路1 出土遺物⑥	229
図Ⅳ-108	第10 b 面溝21・22	163	図Ⅳ-162	第11-2 a 面流路2 出土遺物①	230
図Ⅳ-109	第10 b 面土器埋納遺構	164	図Ⅳ-163	第11-2 a 面流路2 出土遺物②	231
図Ⅳ-110	第10 b 面土器集積遺構1 出土遺物	165	図Ⅳ-164	第11-2 a 層出土遺物①	232
図Ⅳ-111	第10 b 面土器埋納遺構出土遺物①	166	図Ⅳ-165	第11-2 a 層出土遺物②	233
図Ⅳ-112	第10 b 面土器埋納遺構出土遺物②	167	図Ⅳ-166	第11 b 面平面図	234
図Ⅳ-113	第10 b 面落ち込み1 出土遺物①	169	図Ⅳ-167	第11 b 面建物	235
図Ⅳ-114	第10 b 面落ち込み1 出土遺物②	170	図Ⅳ-168	第11 b 面溝30 出土遺物①	236
図Ⅳ-115	第10 b 面耕作痕出土遺物	170	図Ⅳ-169	第11 b 面溝30 出土遺物②	237
図Ⅳ-116	遺物出土位置図凡例	172	図Ⅳ-170	第11 b 面溝30 出土遺物③	238
図Ⅳ-117	第10 b 面関連遺物出土位置①	172	図Ⅳ-171	第11 b 面溝30 出土遺物④	239
図Ⅳ-118	第10 b 面関連遺物出土位置②	174	図Ⅳ-172	第11 b 面溝30 出土遺物⑤	240
図Ⅳ-119	第10 b 面関連遺物出土位置③	175	図Ⅳ-173	第11 b 面溝30 出土遺物⑥	241
図Ⅳ-120	第10 b 面関連遺物出土位置④	176	図Ⅳ-174	第11 b 面溝30 出土遺物⑦	242
図Ⅳ-121	第10 b 面関連遺物出土位置⑤	178	図Ⅳ-175	第11 b 面遺構出土遺物	242
図Ⅳ-122	第10 b 層出土遺物①	182	図Ⅳ-176	第11 b 層出土遺物①	245
図Ⅳ-123	第10 b 層出土遺物②	183	図Ⅳ-177	第11 b 層出土遺物②	246
図Ⅳ-124	第10 b 層出土遺物③	184	図Ⅳ-178	第11 b 層出土遺物③	247
			図Ⅳ-179	第12-1 a 面平面図	249
			図Ⅳ-180	第12-1 a 面流路復原図	250

図Ⅳ-181	第12-1 a 面水田ブロック・遺構名称	251	図Ⅳ-205	第13 a 面～第12 b 面の層序と遺構・遺物の関係	280
図Ⅳ-182	第12-1 a 面水利系統復原図	253	図Ⅳ-206	堰21平面・立面図	281
図Ⅳ-183	第12-1 a 面等高線図	253	図Ⅳ-207	第13 b 面平面図	282
図Ⅳ-184	第12-1 a 面遺物出土状況	255	図Ⅳ-208	第13 b 面落ち込み2平面・断面図	283
図Ⅳ-185	第12-1 a 面遺構出土遺物	257	図Ⅳ-209	第13 b 面遺構出土遺物①	285
図Ⅳ-186	第12-1 a 層出土遺物①	258	図Ⅳ-210	第13 b 面遺構出土遺物②	286
図Ⅳ-187	第12-1 a 層出土遺物②	259	図Ⅳ-211	第13 b 層～第14-1 面平面図	287
図Ⅳ-188	第12-1 a 層出土遺物③	260	図Ⅳ-212	第13 b 層出土遺物①	288
図Ⅳ-189	第12-1 a 層出土遺物④	261	図Ⅳ-213	第13 b 層出土遺物②	289
図Ⅳ-190	第12-1 a 層出土遺物⑤	262	図Ⅳ-214	第13 b 層出土遺物③	290
図Ⅳ-191	第13 a 面平面図	263	図Ⅳ-215	第13 b 層出土遺物④	291
図Ⅳ-192	第13 a 面水田ブロック・遺構名称	265	図Ⅳ-216	第13 b 層出土遺物⑤	292
図Ⅳ-193	第13 a 面水利系統復原図	266	図Ⅳ-217	第13 b 層出土遺物⑥	293
図Ⅳ-194	第13 a 面等高線図	266	図Ⅳ-218	第13 b 層出土遺物⑦	294
図Ⅳ-195	第13 a 面堰20平面・立面図	267	図Ⅳ-219	第13 b 層出土遺物⑧	295
図Ⅳ-196	堰20の立地	268	図Ⅳ-220	第13 b 層出土遺物⑨	296
図Ⅳ-197	第13 a 面遺物出土状況	270	図Ⅳ-221	第13 a 面～第10 b 面の微地形	298
図Ⅳ-198	第13 a 面出土遺物①	271	図Ⅳ-222	第10 b 層～第14-2 a 層断面図①	301
図Ⅳ-199	第13 a 面出土遺物②	272	図Ⅳ-223	第10 b 層～第14-2 a 層断面図②	302
図Ⅳ-200	第13 a 層出土遺物①	273	図Ⅳ-224	第10 b 層～第14-2 a 層断面図③	303
図Ⅳ-201	第13 a 層出土遺物②	274	図Ⅳ-225	第14-1 面遺構・第14-2 a 層出土遺物	306
図Ⅳ-202	第13 a 層出土遺物③	275	図Ⅳ-226	第14-2 a 面出土遺物	307
図Ⅳ-203	第13 a 層出土遺物④	276			
図Ⅳ-204	第13 a 層出土遺物⑤	277			

表目次

第Ⅰ章

表Ⅰ-1	福万寺Ⅰ期地区調査一覧	3	表Ⅰ-2	池島・福万寺遺跡概要報告一覧	3
------	-------------	---	------	----------------	---

第Ⅳ章

表Ⅳ-1	福万寺Ⅰ期地区遺構面対応表	28	表Ⅳ-22	第8 b 面遺構名称	90
表Ⅳ-2	第1 b 面遺構名称	31	表Ⅳ-23	第9 面遺構名称	100
表Ⅳ-3	第1 b 面井戸一覧	35	表Ⅳ-24	第9 b 面検出遺構一覧	107
表Ⅳ-4	第2-1 a 面遺構名称	39	表Ⅳ-25	第10 b 面遺構名称	130
表Ⅳ-5	第2-2 a 面遺構名称	43	表Ⅳ-26	第9 b・10 b 面建物一覧	143
表Ⅳ-6	第3-2 a 面遺構名称	48	表Ⅳ-27	第10 b 面土器埋納遺構一覧	165
表Ⅳ-7	第3-3 a 面遺構名称	51	表Ⅳ-28	第10 b 面関連動物遺存体一覧	177
表Ⅳ-8	第4 a 面遺構名称	56	表Ⅳ-29	第11 面遺構名称	193
表Ⅳ-9	第5 面遺構名称	60	表Ⅳ-30	水田ブロック面積	203
表Ⅳ-10	第6 a 面遺構名称	62	表Ⅳ-31	第11-2 a 面関連出土土器一覧	206
表Ⅳ-11	第6 a 面出土動物遺存体一覧	65	表Ⅳ-32	第11 b 面遺構名称	234
表Ⅳ-12	第6 b 面遺構名称	66	表Ⅳ-33	第12-1 a 面遺構名称	250
表Ⅳ-13	第6 b 面関連土器埋納遺構一覧	68	表Ⅳ-34	水田ブロック面積	251
表Ⅳ-14	第7 面遺構名称	69	表Ⅳ-35	第12-1 a 面出土遺物一覧	256
表Ⅳ-15	第7 面水路12出土動物遺存体一覧	73	表Ⅳ-36	第13 a 面遺構名称	264
表Ⅳ-16	第7 面水路12出土岩石肉眼鑑定結果	77	表Ⅳ-37	水田ブロック面積	265
表Ⅳ-17	第7 b 面土器埋納遺構一覧	81	表Ⅳ-38	第13 a 面出土遺物一覧	269
表Ⅳ-18	第8 a 面遺構名称	83	表Ⅳ-39	第13 b 面遺構名称	282
表Ⅳ-19	第8 a 面関連動物遺存体一覧	87	表Ⅳ-40	第13 b 層中遺構名称	287
表Ⅳ-20	第8 a 面直上遺物一覧	88	表Ⅳ-41	第14 面遺構名称	305
表Ⅳ-21	第8 a 層・第8 b 面遺物一覧	88			

第 I 章 発掘調査・整理作業の概要

1. 発掘調査の経緯と経過

旧大和川水系の河川活動は、河内平野南東部の地形形成に大きな影響を与えてきた。旧大和川の河道は中世以降に築堤によって固定化されたため、中世末～近世初頭には天井川化が深刻な問題となり、河川の氾濫が活発化した。当遺跡の西を北流する玉串川筋では、特に延宝2（1674）年の二重堤決壊の後、洪水が頻発するようになった。こうした状況を克服すべく、宝永元（1704）年には大和川を西へ向けて付け替える工事が実施された。

しかし、大和川付け替え後も、旧大和川流域では排水不良の問題が解決したわけではなかった。当遺跡の中を北流する排水河川の恩智川は明治初年に大規模な浚渫が実施されたが、その後河床に土砂が堆積して排水機能が低下したため、1930～34年に改修工事が実施された（恩智川水防事務組合1987）。また1960年代になると、河内平野一帯で市街化が進行し、地下水の汲み上げによって大きな地盤沈下が引き起こされた。その結果、豪雨時には河川水位の急激な増水がみられるようになり、水田・溜池など、降雨時に水位調節の役割を果たしていた施設の激減と連動して水害に悩まされるようになった。大阪府はこれに対処するための治水事業として、幹線河川の河幅の拡張や堤防の補強に合わせて、豪雨時に水を一時的に貯留し、平水時には公園として利用する「多目的遊水池」の建設を1975年に計画した。恩智川流域に計画されたのは花園多目的遊水池と、当遺跡の調査に関わる恩智川治水緑地である。後者は総面積40.2ha、のべ掘削土量124万 m^3 におよぶ大規模なもので、恩智川左岸の福万寺地区Ⅰ・Ⅱ期（八尾市）、右岸の池島地区Ⅰ・Ⅱ期（東大阪市）の4期に分割して整備されることになった。

この恩智川治水緑地が計画された地域には条里型地割が良好に遺存しており、「池島条里遺構」と呼ばれて注目されていた（井上1921）。そして、1972～80年には東大阪市池島地区において、府立池島高校建設や水道管理設に伴う発掘調査が実施された（荻田ほか1973、芋本1974、上野・阿部1981）。これらの調査では、条里遺構だけでなく、その下層から古墳時代や弥生時代の遺構・遺物も発見された。こうした状況をふまえて治水緑地建設に先立ち、大阪府土木部都市河川課と大阪府教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。そして、その合意にもとづいて1981・82年には、福万寺Ⅰ期地区において試掘調査が実施された。その結果、現地表下約2.5mまで条里遺構が重層的に遺存していること、さらにその下層に弥生時代前期の遺物包含層や遺構が遺存していることなどが判明した。この結果をふまえて関係機関による協議が再度おこなわれ、①治水緑地の構造上、現状保存は不可能であること、②破壊が不可避な部分については発掘調査を実施し、記録保存を図ることが合意された。そして1984年には、大阪府教育委員会によって福万寺Ⅰ期地区の発掘調査が開始された。

その後、1989年には福万寺Ⅰ期地区の諸施設の完成に伴い、池床部の文化財調査が必要となった。このため、今後の調査体制についての検討がなされた結果、福万寺Ⅰ期・池島Ⅰ期分については（財）大阪文化財センター（1995年4月～（財）大阪府文化財調査研究センター、2002年4月～（財）大阪府文化財センター）が調査を担当するという結論に達した。

福万寺Ⅰ期地区における（財）大阪文化財センターの調査は1989年4月から開始し、1995年3月に終了した。その調査区割は、図Ⅰ-1・表Ⅰ-1に示したとおりである。

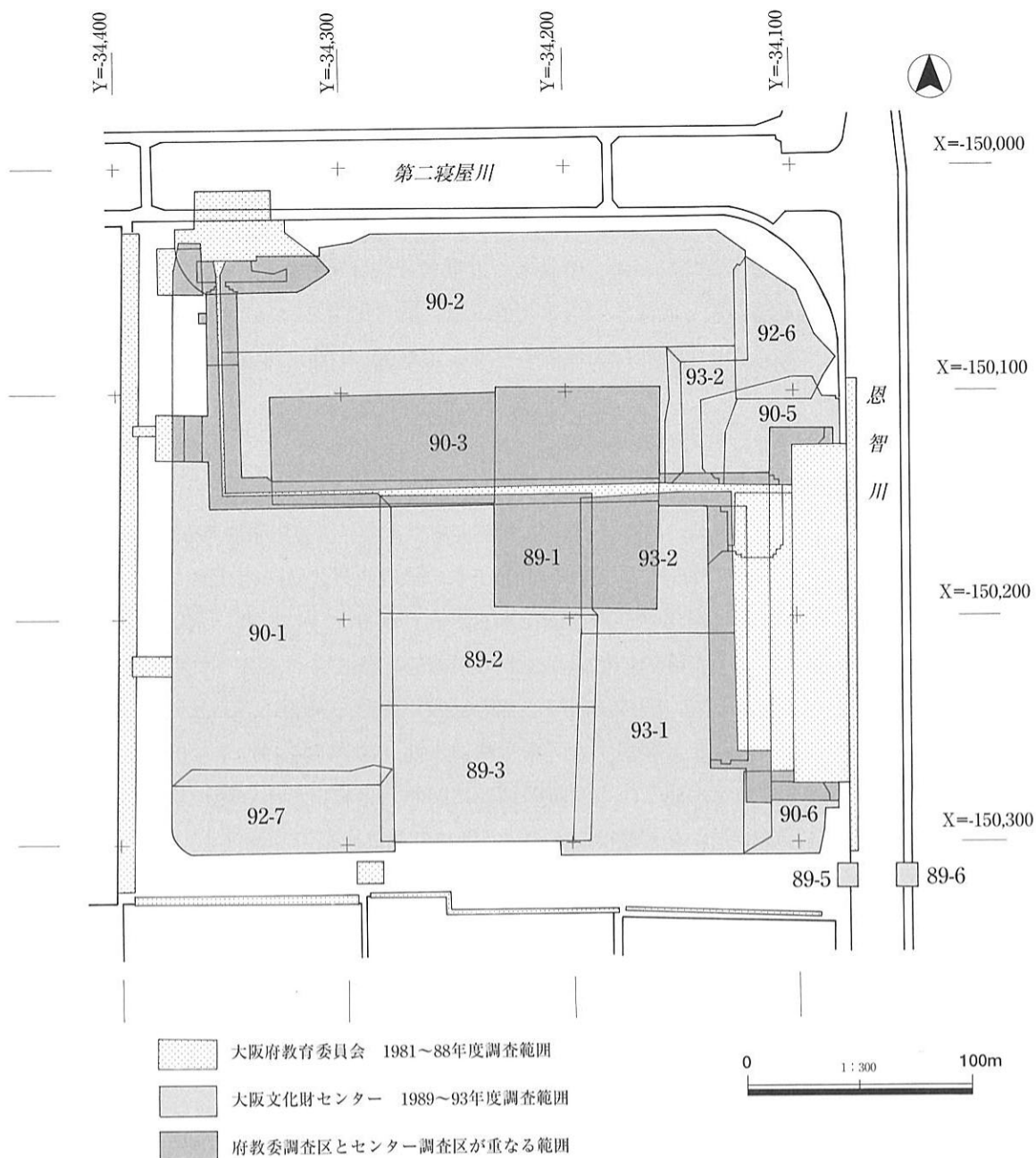


図 I - 1 福万寺 I 期地区調査区位置図

2. 発掘調査の方法

発掘調査は、(財)大阪文化財センターが制定した『遺跡調査基本マニュアル』(財大阪文化財センター1985)に準拠した地区割を用いて実施した。

その地区割は、国土座標軸(第Ⅵ座標系、原点は東経136度00分、北緯36度00分)を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第Ⅰ区画は、1/10,000地形図の区画割図をそのまま利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。

第Ⅱ区画は、1/2,500地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。地区名は、南西端を1、北東端を16とする東方向への平行式で表示する。

表 I - 1 福万寺 I 期地区調査一覧 (財大阪文化財センター分)

調査区名称	調査期間	面積 (㎡)	担当者	概要報告
89-1調査区 (池島その1)	1989.4.22~1990.3.25	5020	江浦 洋 本間元樹	I
89-2調査区 (池島その2)	1989.4.22~1990.3.25	3440	小野久隆 金光正裕	I
89-3調査区 (池島その3)	1989.5.2~1990.3.25	4570	寺川史郎 松山 聡 三宮昌弘	I
89-5調査区 (池島その5)	1990.3.1~1990.3.25	80	國乗和雄 寺川史郎	I
90-1調査区 (池島その4)	1990.5.12~1993.3.25	13910	寺川史郎 三宮昌弘 森本 徹 佐藤玲子	X II
90-2調査区 (池島その5)	1990.5.12~1993.3.25	10700	松山 聡 本間元樹 後藤信義	III・VI・X
90-3調査区 (池島その6)	1990.5.12~1993.3.25	12440	金光正裕 江浦 洋 井上智博 佐藤玲子	II・VII・XI
90-4調査区 (池島その4)	1990.5.12~1993.3.25	12300	寺川史郎 三宮昌弘 森本 徹	X II
90-5調査区 (池島その5)	1990.5.12~1993.3.25	2000	松山 聡 本間元樹 後藤信義	III
90-6調査区 (池島その6)	1990.5.12~1993.3.25	1320	金光正裕 江浦 洋 井上智博 佐藤玲子	II
92-6調査区 (池島その7)	1993.3.26~1994.3.25	3840	寺川史郎 後藤信義 佐伯博光 奈加智美	X IV
92-7調査区 (池島その7)	1993.3.26~1994.3.25	2010	寺川史郎 後藤信義 佐伯博光 奈加智美	X IV
93-1調査区 (池島その8)	1993.5.11~1995.3.25	7830	小野久隆 森本 徹 井上智博 宮路淳子 下岡珠美	X V
93-2調査区 (池島その9)	1993.5.11~1995.3.25	6220	本間元樹 村田幸子 本田奈都子	X VI

表 I - 2 池島・福万寺遺跡概要報告一覧 (1982~1997)

編者名	発行年	書名	編集機関	頁数	略称
大野 薫	1982	『池島遺跡試掘調査概要 I』	大阪府教育委員会	22	府試 I
大野 薫・阪田育功	1983	『池島遺跡試掘調査概要 II』	大阪府教育委員会	34	府試 II
阪田育功	1985	『池島遺跡発掘調査概要 I』	大阪府教育委員会	81	府発 I
岸本道昭	1986	『池島遺跡発掘調査概要 II』	大阪府教育委員会	59	府発 II
岸本道昭	1988	『池島遺跡発掘調査概要 III』	大阪府教育委員会	131	府発 III
大野 薫	1989	『池島遺跡発掘調査概要 IV』	大阪府教育委員会	146	府発 IV
大野 薫・小山田宏一	1990	『池島遺跡発掘調査概要 V』	大阪府教育委員会	—	府発 V
江浦 洋	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』	財大阪文化財センター	188	概要 I
江浦 洋	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 II』	財大阪文化財センター	136	概要 II
松山 聡・本間元樹・ 後藤信義	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 III』	財大阪文化財センター	64	概要 III
森本 徹	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 IV』	財大阪文化財センター	44	概要 IV
國乗和雄	1991	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 V』	財大阪文化財センター	10	概要 V
松山 聡・本間元樹・ 後藤信義	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 VI』	財大阪文化財センター	70	概要 VI
江浦 洋・井上智博	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 VII』	財大阪文化財センター	106	概要 VII
森本 徹	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 VIII』	財大阪文化財センター	30	概要 VIII
國乗和雄	1992	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 IX』	財大阪文化財センター	16	概要 IX
松山 聡・本間元樹・ 後藤信義	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X』	財大阪文化財センター	63	概要 X
井上智博	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X I』	財大阪文化財センター	114	概要 X I
森本 徹	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X II』	財大阪文化財センター	162	概要 X II
本間元樹・村田幸子・ 本田奈都子	1995	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X VI』	財大阪府文化財調査研究センター	98	概要 X VI
寺川史郎・佐伯博光	1996	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X IV』	財大阪府文化財調査研究センター	76	概要 X IV
井上智博・森本 徹	1997	『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X V』	財大阪府文化財調査研究センター	140	概要 X V

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦軸A～O、横軸1～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦軸a～j、横軸1～10となる。なお、遺物の出土地点など、現場における地区表示は、第Ⅲ・Ⅳ区画のみでおこなっている。

マニュアルではこの他、第Ⅳ区画を5m単位で4分割する第Ⅴ区画、第Ⅴ区画を任意に細分する第Ⅵ区画が規定されているが、これらについては遺物集中地点など、ごく一部で使用したにとどまる。

本書で報告する福万寺Ⅰ期地区の地区割は、第Ⅰ区画がG6、第Ⅱ区画が14となる。また図Ⅰ-2には、第Ⅲ区画、第Ⅳ区画の地区割を示した。

なお、地区割が国土座標を基準としているため、方位は座標北を用いているが、それは磁北あるいは真北とは若干のずれが存在することに留意されたい。

水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面（T.P.）を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾最低干潮面（O.P.）もあり、今も大阪府関係の土木工事などで使用されている。両者のレベル差は $T.P.0m = O.P. + 1.3m$ と定められている。

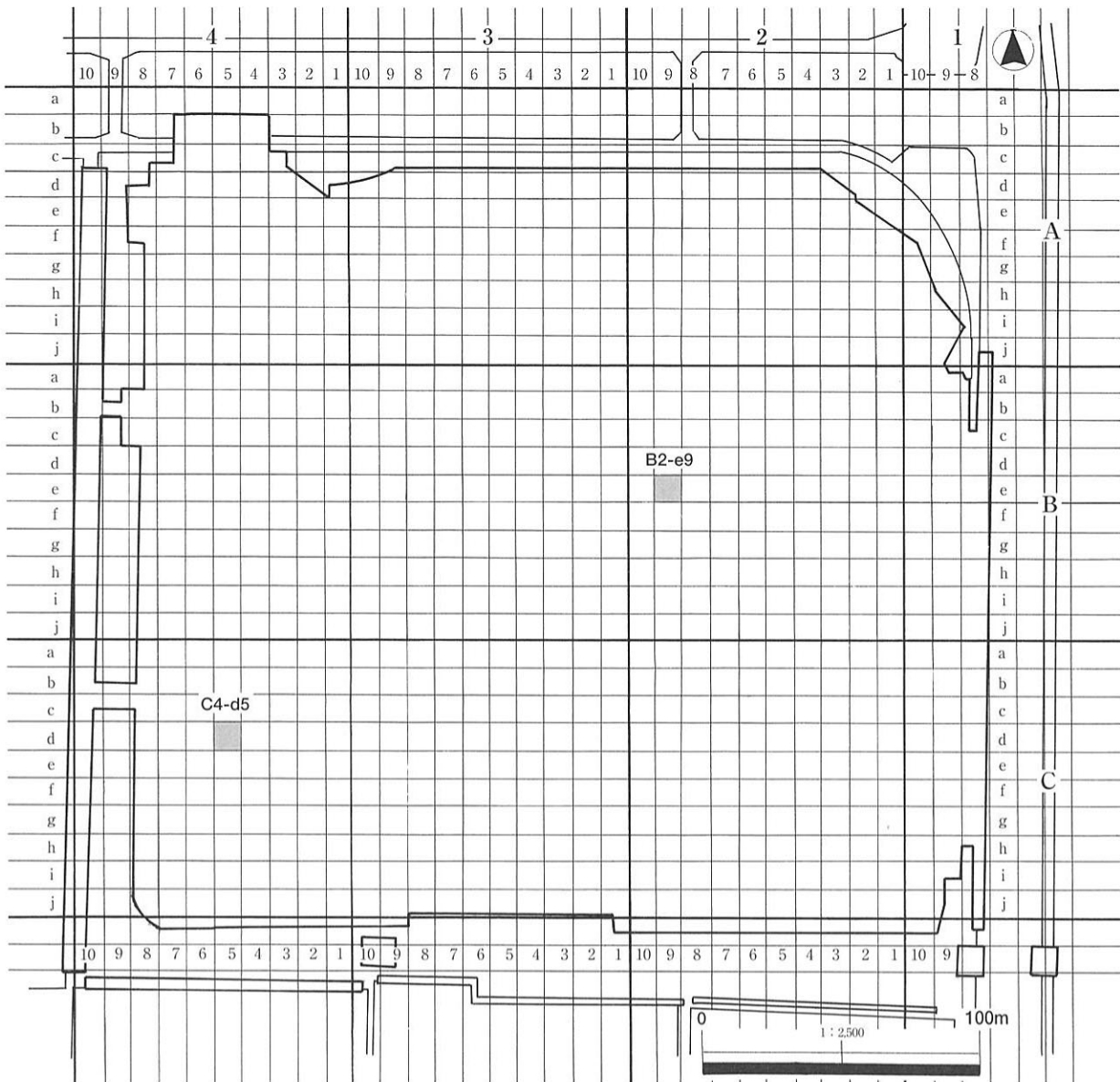
また、調査区が細分されることから、福万寺Ⅰ期地区全域をカバーする断面図の作成を意図したセクションベルトの設定が必要になった。さらに、調査面積が広いため、細かく層準をチェックして調査を進めなければ、層序対比すら完全にはできず、平面の調査精度も低くなってしまいうことも危惧された。そのため、東西南北とも国土座標に合わせて20m間隔で幅1mのセクションベルトを設定し、南北方向のものについては東側、東西方向のものについては南側に、幅0.5～1mのトレンチを先行して掘削して、層序と平面の情報をつき合わせながら調査を進めるという方針をとった。ただし、坪境を縦断するものなど、平面調査の支障になる場合は、セクションベルトの設定およびトレンチの掘削を取り止めた。設定した断面は基本的にすべて縮尺1/20で実測したが、この結果、断面の実測に関わる作業量は膨大なものになった。しかし、実測までおこなうことで、複雑な層序を観察して平面調査で得られた情報とつき合わせる意識が次第に定着し、調査精度を高めるのに役立った。また、残された図面・写真類も膨大なものになったが、これらは調査終了後の再検討に大きな役割を果たした。今回の報告にあたっては、この資料を駆使して徹底した再検討をおこなうことができた。

各遺構面については、縮尺1/100の平板測量をおこなった他、重要な面については航空測量を実施した。また、検出遺構については、それぞれの規模や性格に応じて縮尺を適宜設定して、平面・断面・立面の実測をおこなった。なお、遺構面および検出遺構の一部には、トータルステーションを使った「てづかやま」システム（現、カタタ・システム）による測量をおこなったものもある（概要Ⅰ，pp.13-14）。

3. 整理作業の経過と本書の課題

各調査区では、調査終了後概要報告書を作成し、順次刊行してきた（表Ⅰ-1、本文中で概報を引用する際は、この表の略称を使用する）。今回の整理にあたっては、その記載を出発点として、全面的な再検討をおこなった。また、福万寺Ⅰ期地区では大阪府教育委員会も調査を実施しており、その成果についても概要報告書が刊行されている。大阪府教育委員会調査分については別途整理が進められているが、その情報を除外すると遺跡の評価が困難になるため、これも含めて検討をおこなった。

当遺跡の発掘調査が開始された1980年代は、全国各地で水田遺構の調査事例が増加し始めた時期にあたり、その後半には「東日本の水田跡を考える会」などの活動によって、水田遺構の認定方法や調査方



図I-2 地区割図(第三・IV区画)

法の充実がはかられた。1990年代に入ると調査精度は一定の水準に達し、水田遺構の調査方法をまとめた冊子も刊行された(財静岡県埋蔵文化財調査研究所1992)。福万寺I期地区の調査は、調査技術確立のために試行錯誤していた段階のものであり、現在の水準からすると精度が高いとはいえ、誤った理解や解釈をしている部分も見うけられる。したがって、今回の報告にあたっては、できるかぎり現段階の認識にもとづいてデータを読み直すように努めた。

具体的な作業としては、整理の基本となる層序と遺構面の検討をおこなった。調査段階では、調査区ごとに層序番号や遺構面番号がつけられていた。その対応関係についてはその都度検討されていたが、概報刊行が遅れた調査区など、検討が不十分な部分もあった。また、ひとつの調査区内において、層序や遺構面に混乱や矛盾が存在するものもあり、全面的な再検討が必要であった。さらに、当地区の東に隣接する池島I期地区の調査の進行に伴って、より広域の対応関係についても考慮する必要が生じてきた。本書では、こうした点をふまえて当遺跡の標準層序を設定し、その層序番号を用いて遺構面を整理した。遺物の出土層位についても、それにもとづいて整理した。

検出遺構の遺構番号は、調査区ごとに、遺構種類別につけられていた。概報はこれに従っているが、複数調査区にまたがって検出された遺構に対して、調査区ごとに異なった番号がつけられているなどの問題から、そのままでは使用することができなかった。したがって、今回の整理にあたっては遺構種類別に新たな番号を付け、それと調査時の遺構番号との対応関係を示すことにした。

また、遺構や遺物出土位置については遺物台帳などの記載と概報の記載をチェックしたほか、残されたカラー写真・スライドを積極的に活用し、図面との整合性、層位や出土状況をチェックした。その結果、概報の記載に明らかな誤りがあったものについては本書で訂正するとともに、全体の評価に関わるものについては訂正の経緯についても記述している。

当遺跡のように、縄文時代以降の堆積によって地形が形成されてきた沖積低地に立地する遺跡では、各時期の遺構面が重層して遺存しており、その地域の景観変遷に関する重要な情報を得ることができる。特に当遺跡では広い面積を調査したため、遺構配置などの空間的情報が良好な形で得られている。今回の整理作業の目的は、景観変遷を明らかにするための基礎データを整備することにある。そのためには、層序・遺構・遺物それぞれの情報だけでなく、それらの関係を明確にし、遺跡形成過程を復原することが課題となる。また、微化石などの分析結果もそうした観点から評価することで、遺跡の理解を深めるために利用できると思われる。

当遺跡の調査成果は一般向けの概説書（寺沢2000など）に引用されるようになっただけでなく、海外でも発表され（Miyaji1995, Inoue1999）、代表的な考古学の教科書のひとつにも取り上げられている（Renfrew & Bahn2000）。しかしながら、その成果をさらに生かすためには、調査成果に対する厳しい検証作業が必要である。本書はその作業にあたっての基本資料のひとつであり、これをふまえて今後さらにデータの検討を続けていく必要がある。

参考文献

- 井上正雄1921『大阪府全志』巻四, pp.874-878. (復刻版1985,清文堂出版)
- 芋本敬裕1974『池島町の条里遺構 - 48年度・49年度発掘調査概要』, 東大阪市遺跡保護調査会, 14p.
- 上野利明・阿部嗣治1981「北島池遺跡・池島遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 1980年度』, pp.31-72.
- 荻田昭次ほか1973『池島町の条里遺構 - 調査概報 -』, 東大阪市遺跡保護調査会, 38p.
- 恩智川水防事務組合1987『水防のあゆみ - 30年 -』, 28p.
- (財)大阪文化財センター 1985『遺跡調査基本マニュアル』, 55p.
- 寺沢 薫2000『日本の歴史02 王権誕生』, 講談社, pp.72-73, pp.84-85.
- Inoue,T. 1999. Early irrigation systems of rice paddy fields in Japan. Coles,B.,Coles,J. &Jørgensen,M. (eds.) *Bog bodies, Sacred Sites and Wetland Archaeology*. WARP Occasional Paper 12, pp.115-120.
- Miyaji,A. 1995. Ikejima-Fukumanji site at Osaka, Japan. *News WARP* 17. Wetland Archaeology Research Project, pp.6-11.
- Renfrew,C. & Bahn,P. 2000. *Archaeology : Theories, Methods and Practice* (3rd edition). Thames&Hudson, p.257.

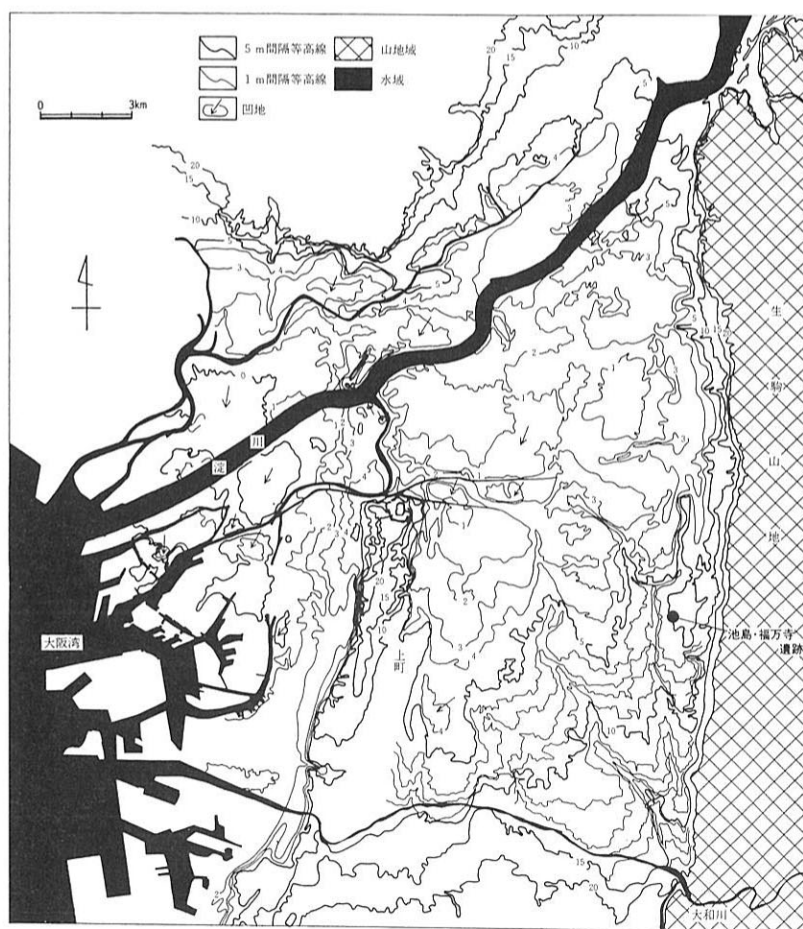
第Ⅱ章 位置と環境

1. 河内平野における古地理変遷の概要

池島・福万寺遺跡の立地する河内平野の古地理変遷については、梶山彦太郎・市原 実（梶山・市原 1972・1986）の先駆的研究以来、いくつかの研究が発表されている。また、最近では、発掘調査データをもとにした地層や古環境復原についての研究成果も公表されつつある（地学団体研究会関西支部編 1999）。当遺跡においても、1989～96年に高橋 学が地形環境分析を実施している（概要Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ・ⅩⅠ・ⅩⅢ・ⅩⅤ）。ここではまず、こうした研究を参考にして、10³年程度のオーダーでの河内平野の古地理変遷を簡単にみておきたい。

現在の河内平野にあたる部分は、最終氷期には山地に囲まれた丘陵と台地・段丘の間を淀川や大和川が流れる盆地であったと推定されており、古大阪平野と呼ばれている。花粉分析の結果などから、この時期、生駒山地西麓には湿原が広がっていたと推定されており、「古深野沼」と呼ばれている。当遺跡においても、池島Ⅰ期地区の96-3・99-1調査区で、T.P.-9.5m付近に泥炭質シルト～泥炭層（第21層）が堆積しており、その層中に始良T n火山灰（AT）が挟まれていることが確認されている。

そして、治水緑地や下水道の工事に伴う立坑掘削の際に実施された断面観察では、縄文海進期の海成層も確認されており、¹⁴C年代で7000yBPごろから縄文時代中期にかけての堆積環境の変化も明らかにな



図Ⅱ-1 河内平野等高線図（高橋1991）

った（秋山・朝田編2000）。この状況は、市原・梶山の命名した「河内湾Ⅰの時代」に対比される。なお当遺跡は、縄文時代後期には陸域になったが、この時期、河内平野中央部には河内潟が広がっていた。この河内潟は縄文時代晩期の海水準低下によって晩期末までに淡水化し、河内湖となった。そして、その名残は新開池・深野池として、近世初めまで残存した。

2. 遺跡周辺の地形形成

当遺跡は河内平野東南部に位置する（図Ⅱ-1）。地形的には、天井川化した玉串川（旧大和川の分流）と生駒山地西麓に広がる扇状地の間の后背湿地に立地する。表層では自然堤防などが

確認できるが、これはあくまで地表面の状況であり、調査では縄文時代以降の微地形変遷過程を明らかにする必要がある。

高橋 学（1991）は従来の地形分類図の問題点を整理し、高橋独自の視点にもとづいて河内平野の地形分類図を作成した。その図では、高橋の考える地形発達モデルにもとづき、三角州の発達過程に着目して、河内平野主要部を三角州帯Ⅰと三角州帯Ⅱに分類し、前者をさらにⅠaとⅠbに細分した。当遺跡は三角州帯Ⅰaに立地するが、この地形帯は弥生時代中期までに陸化した範囲とした。この研究に対しては、各地形帯の境や陸化の時期などの検証や、海水準・湖水準変動、河道変遷などに着目した河内平野の発達史モデル（地学団体研究会関西支部編1999）との比較検討が必要であろう。

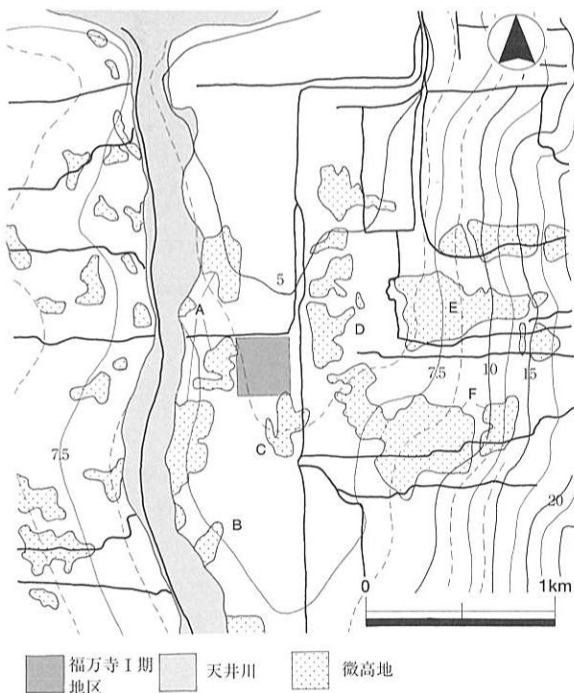
当遺跡周辺を対象にした地形分類図としては、河角龍典（1999）や別所秀高（1999）によるものが公表されている。河角は、生駒山地西麓の扇状地の発達過程に注目して地形分類図を作成した（図Ⅱ-2）。その中では、扇状地が5つに分類されている。その中で当遺跡に直接関連するのは「扇状地Ⅴ」で、形態および成因からみて、生駒山地から流下する河川に沿う自然堤防と考えられている。また、別所も地形発達を考慮しつつ、河角とは若干異なった観点から分類をおこなっており、最も下位の扇状地については、ロウブ状の高まりと開析谷との関係がつかめるように表現されている。これらの扇状地のうち、箕後川沿いに存在するものについては、(財)東大阪市文化財協会による池島遺跡第15次調査成果から、古墳時代後期以降に発達したことが判明した（三輪1997）。また、長門川沿いにも同様の地形面があるが、これについても上流に位置する段上遺跡における堆積層の検討によって、古墳時代後期以降に形成されたと推定されており（松田1999）、その南にある池島の集落が立地する微高地も同様な時期に形成された



図Ⅱ-2 地形分類図（河角1999を再トレース）

ものであろう。

なお、当遺跡の発掘調査の過程で、小山田宏一（1989）が土地条件図にもとづいて表層微地形を整理しており、その成果は井上（1995・1999）でも利用されている。それによると、当遺跡周辺で4つの微高地が存在しているとされていたが、後述する明治時代の地引図の検討結果（図II-9）から、微高地の範囲や数を修正する必要が出てきたため、修正したものを図II-3に示した。このうち、微高地Aは玉串川から供給された氾濫・破堤堆積物によって形成されたもので、福万寺の集落から北東方向にのびるものである。1880年ごろの土地利用をみると、この微高地に対応して畠が分布することがわかる。この微高地については、福万寺I期地区および助東大阪市文化財協会による池島遺跡第12次調査成果（松田1995）によって、中世後期～近世初期に形成されたことが判明した。また、微高地Bについても微高地Aと同様の成因が考えられ、1880年ごろには畠として利用されていた。なお、この微高地の端にあたる玉串川堤防脇には「綿池」と呼ばれる溜池があり、その水が農業用水に利用されてきた。この池は『福萬寺村惣繪圖』（1734）にも記載されており、周囲に「切下」という地名が記載されていることが注意される（図II-6、図版2-2）。このことから、高橋 学はこの池を玉串川の破堤によって生じたクレバスであると考えた（高橋1995、井上1995）。また、微高地Cは恩智川沿いに分布している。表層ではわずかな範囲しか認められないが、1880年代ごろの畠の分布からみて、本来は上之島村の範囲から福万寺村の北端付近までのびていたと考えられる。その形成時期については、福万寺I期地区の発掘調査成果から、中世後期以降と考えられる。また、13～14世紀の屋敷地が検出された福万寺遺跡もこの範囲に含まれるが、この調査地点では屋敷地廃絶後に堆積した厚い砂層が確認されている（米田・徳谷1990）。この砂層は微高地Cの形成に関わったものである可能性が高く、微高地Cの形成が中世後期以降であることを示している。なお、この微高地の形成に関わった堆積物は、玉串川から供給されたと考えられる。さらに、恩智川右岸沿いに分布する微高地Dについては、池島I期地区の調査により、中世末～近世に



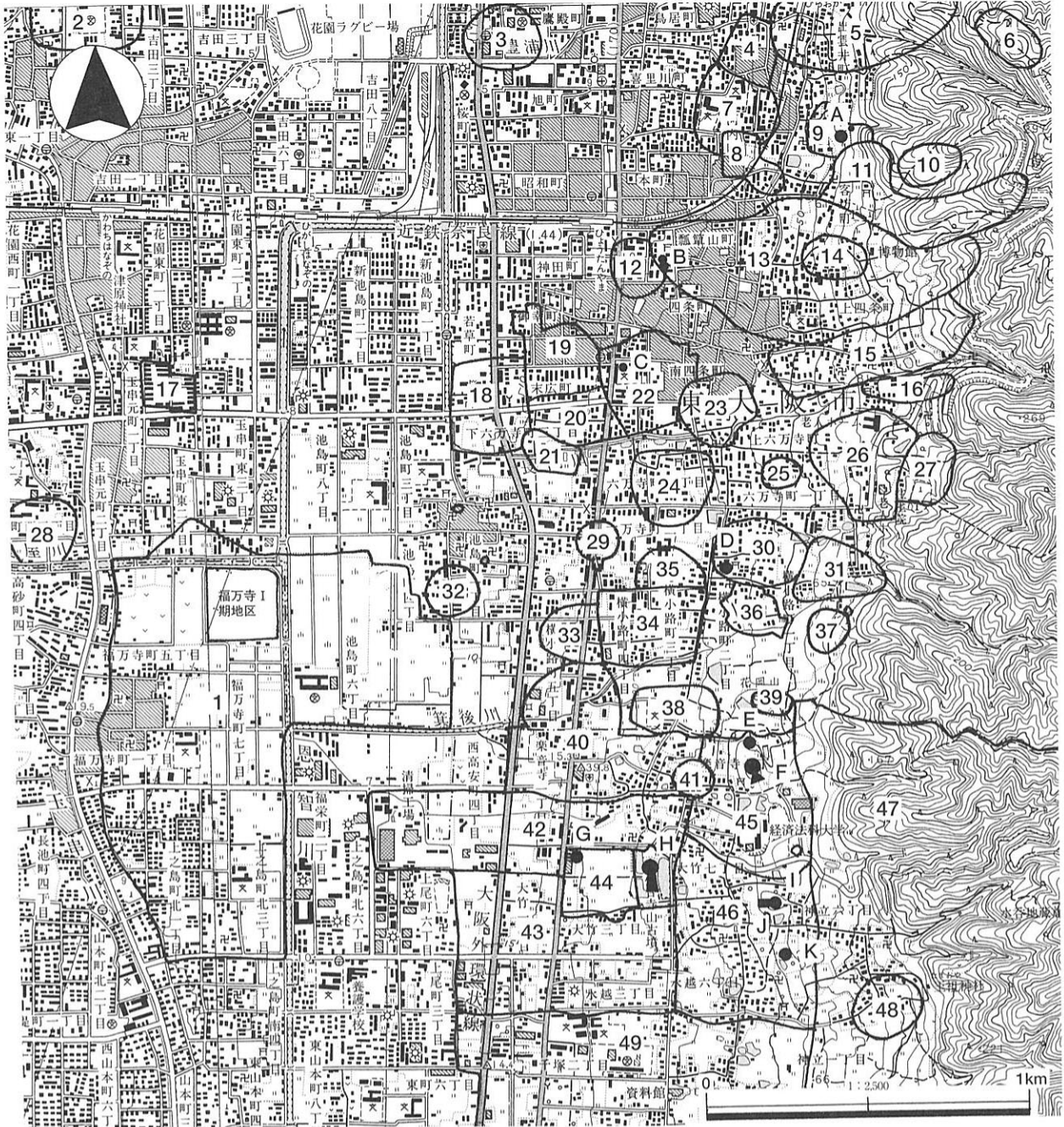
図II-3 表層における微高地の分布

地形区分は1/25,000土地条件図（1983）による
等高線は陸地測量部複製日本図（明治18：1885）による

形成されはじめ、第1b層（19世紀初頭）の堆積によって現在の形となったことや、形成に関わった堆積物の供給源は恩智川であることが判明しつつある（河角2000）。そして、池島の集落が立地する微高地Eと、箕後川沿いの微高地Fは、前述のように古墳時代後期以降に形成されたと考えられる。

当遺跡の地形発達には旧大和川の分流と生駒山地から流下する河川が関与したと考えられるが、それに関連する河道変遷についても議論されてきた。また、玉串川沿いの自然堤防と生駒山地西麓扇状地の間を北流する恩智川の性格や起源についても検討がなされてきた。

まず高橋 学は、福万寺I期地区に関して、弥生時代までは生駒山地から流下した河川の影響が強く、玉串川の影響は中世以降に活発化するとした。そして、玉串川については、中世以前にはなかったか、きわめて小規模なものであった可能性を指摘した。



図Ⅱ-4 池島・福万寺遺跡周辺の遺跡

- | | | | |
|-------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 池島・福万寺遺跡 | 16. 五里山古墳群 | 31. 浄土寺谷古墳群 | 46. 大竹遺跡 |
| 2. 稲葉遺跡 | 17. 花園遺跡 | 32. 池島東遺跡 | 47. 高安古墳群 |
| 3. 鶴立遺跡 | 18. 北島池遺跡 | 33. 西代遺跡 | 48. 蘭光寺遺跡 |
| 4. 狐塚遺跡 | 19. 五合田遺跡 | 34. 馬場川遺跡 | 49. 水越遺跡 |
| 5. 出雲井古墳群 | 20. 段上遺跡 | 35. 北屋敷遺跡 | A. 五条古墳 |
| 6. 神津嶽祭祀遺跡 | 21. 下六万寺遺跡 | 36. 貝花遺跡 | B. 瓢箪山古墳 |
| 7. 皿池遺跡 | 22. 縄手遺跡 | 37. 浄土寺跡 | C. えのき塚古墳 |
| 8. 河内寺跡 | 23. 上六万寺遺跡 | 38. 西の口遺跡 | D. 大賀世古墳 |
| 9. 水走氏館跡 | 24. 船山遺跡 | 39. 萩山古墳 | E. 禿山古墳 |
| 10. 五条山古墳群 | 25. 桜井古墳群 | 40. 楽音寺遺跡 | F. 西の山古墳 |
| 11. 客坊町古墳群 | 26. 岩滝山古墳群 | 41. 楽音寺跡 | G. 鏡塚古墳 |
| 12. 市尻遺跡 | 27. 往生院金堂跡 | 42. 大竹西遺跡 | H. 心合寺山古墳 |
| 13. 山畑古墳群 | 28. 玉串遺跡 | 43. 太田川遺跡 | I. 向山古墳 |
| 14. 山畑遺跡 | 29. コモ田遺跡 | 44. 心合寺跡 | J. 向山瓦窯 |
| 15. 花草山古墳群 | 30. 半堂遺跡 | 45. 大光寺山遺跡 | K. 愛宕塚古墳 |

※この地図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「大阪東南部」(平成10年3月1日発行)、「信貴山」(平成10年11月1日発行)を使用したものである。
遺跡の範囲については、大阪府教育委員会「大阪府文化財分布図」(2001年3月発行)を参照した。

ただし、この点については、松田順一郎や阪田育功らの異論がある。松田は、現在の玉串川西側のボーリングデータを検討し、弥生時代に堆積した沖積頂部陸成層下部と考えられる層準に厚さ2～3mの砂礫層がしばしば挟まれることに注目し、現在の玉串川近辺に大和川の分流が北流していた可能性を指摘した(松田1998)。また阪田は、大和川水系の河道変動の過程を追究し、古墳時代中期～後期には付け替え以前の玉串川の流路が形成されていた可能性を指摘した(阪田1997)。なお、ここで想定されている流路の実態は現在のところほとんど明らかになっておらず、今後調査の機会があれば、堆積物を観察して流路変遷などについて検討する必要がある。

さらに、大竹西遺跡第3次調査で検出された縄文時代晩期から古墳時代中期にかけて流れていた河道については、堆積物の古流向などから、大和川の分流のひとつとする見解が出されている(藤岡1997、松田1998)。また、池島遺跡第11次調査における堆積物の砂礫鉱物組成から、恩智川左岸側において縄文時代後期～弥生時代の地形発達に大きな影響を与えたのは、旧大和川水系であるという見解も出されており(松田1994)、地区ごとに碎屑物の鉱物組成の層的变化を検討する必要も出てきている。なお、福万寺Ⅰ期地区および池島Ⅰ期地区においては弥生時代の流路跡が複数検出されているが、当遺跡周辺の流路変遷に関する議論を深めるために、その整理を本書で試みることにしたい。

3. 歴史的環境

次に、当遺跡周辺での人間活動に関わる歴史的情報を簡単にまとめておきたい(図Ⅱ-4)。

当遺跡が海域であった縄文時代早期末から中期にかけての遺跡は、現在のところ当遺跡東方の扇状地上からは発見されていない。ただし、河内湾沿岸では、東大阪市鬼虎川遺跡(前期)、大阪市勝山遺跡(早期末～前期初頭)、宰相山遺跡(早期末～中期)、寝屋川市讃良川遺跡(中期)などでこの時期の遺構・遺物が見つかり、今後周辺の調査によって発見される可能性がある。その際には、当遺跡で明らかになった古環境変遷と生業形態・集落変遷との対比が必要であろう。

当遺跡で出土した最古の遺物は、池島Ⅰ期地区の第15b層から出土した縄文時代中期末の北白川C式土器である(概要X X I¹⁾)。そして、その上の古土壌である第15-2a層(第5黒色泥層)、あるいはその上位の第15-1層からは縄文時代後期の遺物が出土している。この時期における周辺地域の遺跡としては、中期末～晩期の馬場川遺跡、後期の縄手遺跡、中期末～後期の段上遺跡があり、これらの遺跡を含む当遺跡東方の扇状地上に営まれた集落との関連が注目される。

縄文時代晩期には、河内湖周辺の低地に遺跡が増加する。特に、晩期における海水準・湖水準の低下とその直後の上昇に伴って、晩期末～弥生時代前期には河内湖南東岸付近では小規模貝塚がみられるようになる。この時期の貝塚は規模、継続期間、貝種構成などにおいて、それ以前の貝塚と異なり、ウエットランドの環境変化に対応した食料獲得戦略の変化を反映するという見通しが出されている(松田・藤城・別所・三輪1997)。一方、当遺跡では弥生時代前期中葉の水田跡が検出されているが、これも河内湖沿岸部における弥生時代開始期の生業形態を明らかにする上で重要な資料である。

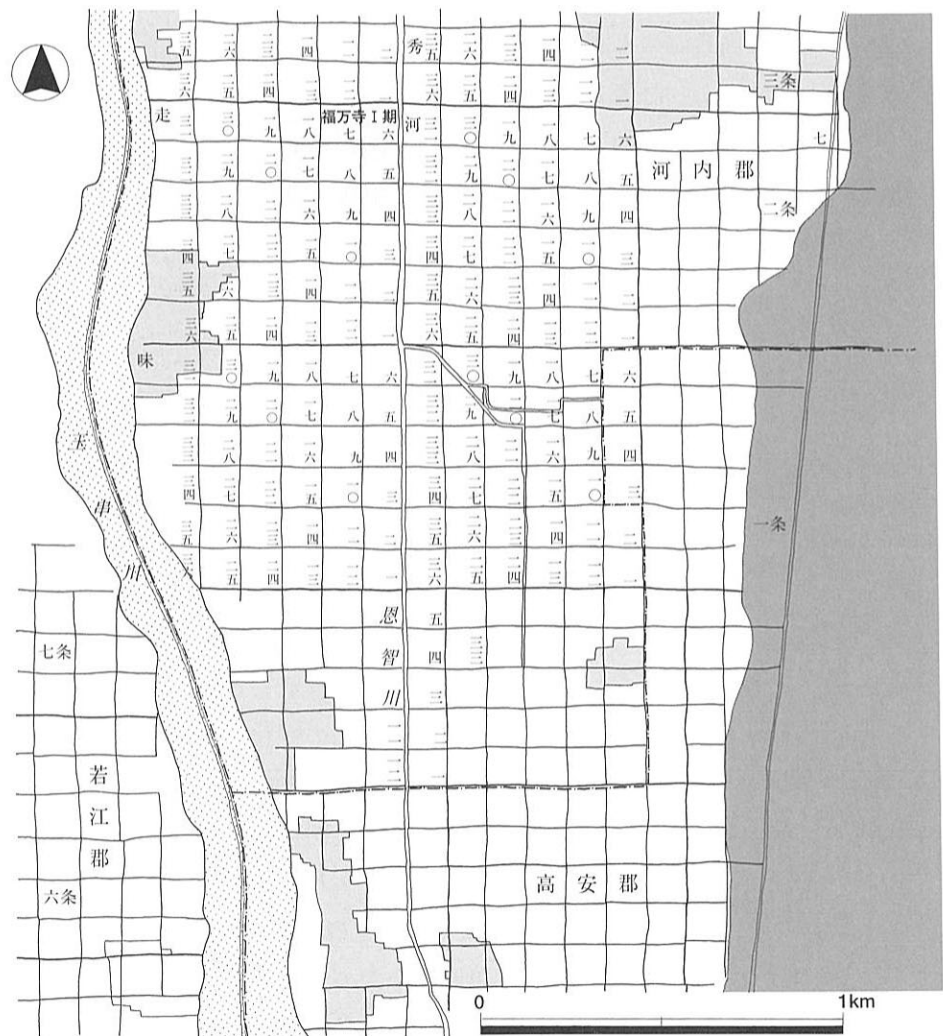
次に、当遺跡に隣接する弥生時代遺跡についてふれたい。まず、当遺跡の南東に隣接する大竹西遺跡からは弥生時代中期に属すると考えられる水田遺構面が3面検出された(高萩1991)。また前述のように、第3次調査では縄文時代晩期～古墳時代中期の河道が検出された。この河道は、弥生時代後期になると細粒の堆積物が堆積するようになるが、その段階で河道内に意図的に埋められた鉄剣(後期初頭)が出土している(西村・樋口1997)。また、後期の北島池遺跡も当遺跡の北東に位置している。このよ

うに、当遺跡周辺ではいくつかの遺跡が知られているが、詳細は不明な点が多い。これらを含む周辺遺跡に関する情報が増えれば、当遺跡で検出された水田遺構と合わせて、弥生時代の集落景観の復原を試みることも可能になる。

さて、当遺跡では古墳時代前期の遺構群や後期の集落跡が検出されている。出土遺物としては、前期では内行花文鏡と思われる鏡片を利用した懸垂鏡、画文帯神獸鏡片、後期では大量の滑石製玉類などがある。当遺跡の古墳時代の状況については、生駒山地西麓に築かれた古墳との関連を検討する必要がある指摘されてきた。当遺跡東南の扇状地上には「楽音寺・大竹古墳群」があり、前期から後期までの首長墓系列が追える点で注目されている。特に心合寺山古墳については、近年史跡整備のための発掘調査が実施され、築造時期、墳丘形態、主体部の構造、副葬品など、詳しい内容が明らかになった（吉田編2001）。また、後期の群集墳としては、高安千塚、山畑、郡川、服部川などの古墳群が知られている。なお、当遺跡の古墳時代後期集落を「葬送儀礼專業集落」ととらえる見解も提示されており（森本1997）、その具体的な検証が必要となっている。

さて、当遺跡周辺に現在も遺存する条里型地割については、井上正雄（1921）によって条里プランの復原がなされて以来、「池島条里遺構」として注目されてきた。その条里プランを図Ⅱ-5に示す。ちなみに、福万寺I期地区は河内郡字走四・五・六・七・八・九・十六・十七・十八ノ坪にあたる。

古代においては、当遺跡は「玉櫛庄」の範囲内であったと想定されている。この荘園は当初、摂関家の所領であったが、平等院創建とともに平等院へ施入され、平等院の維持管理に深く関与した荘園と考えられている。福万寺I期地区において、表層条里型地割と一致する地割が施工されたのは10世紀であったことが判明しているが、これについては荘園開発と関連したものであ



図Ⅱ-5 表層条里型地割と坪付関連地名



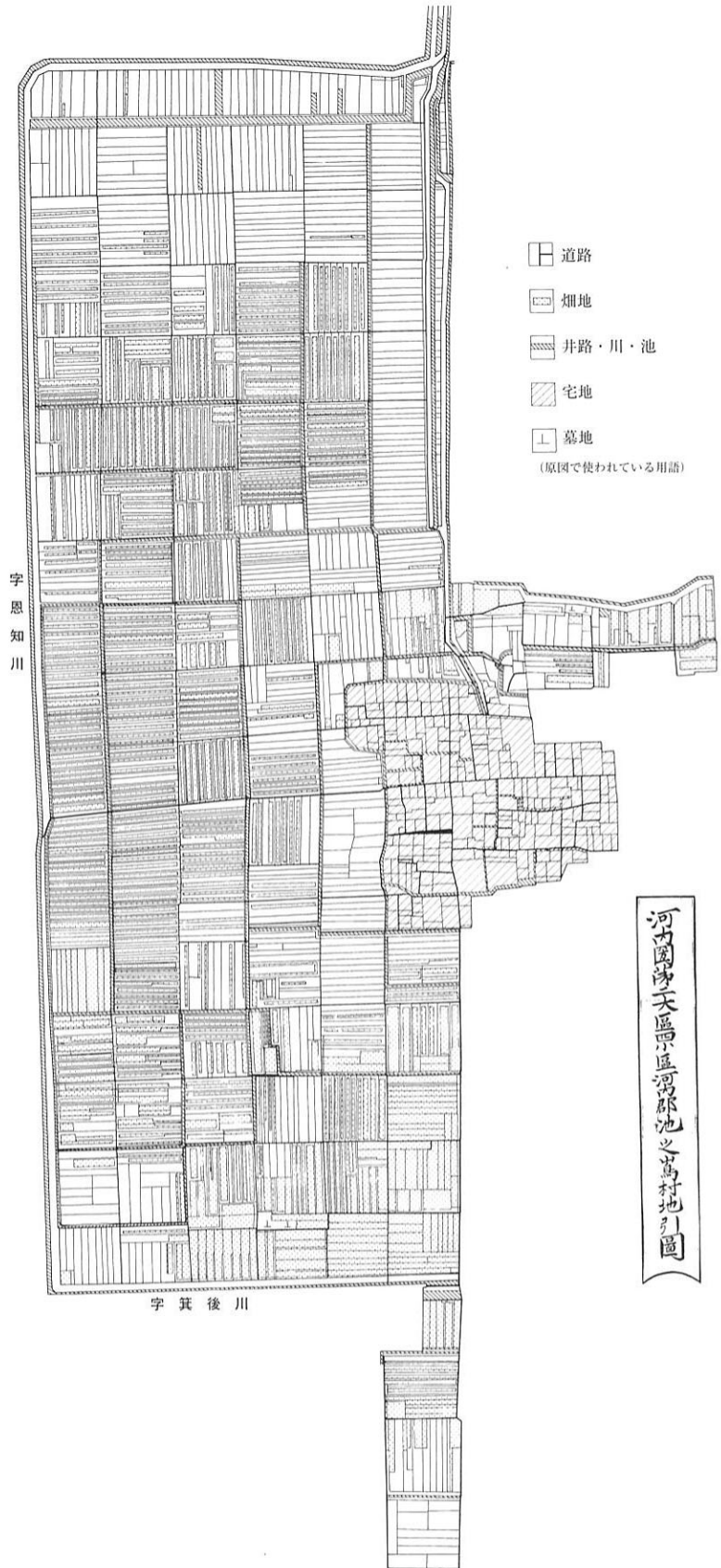
図II-6 『福万寺村惣繪圖』に描かれた地割・水利系統



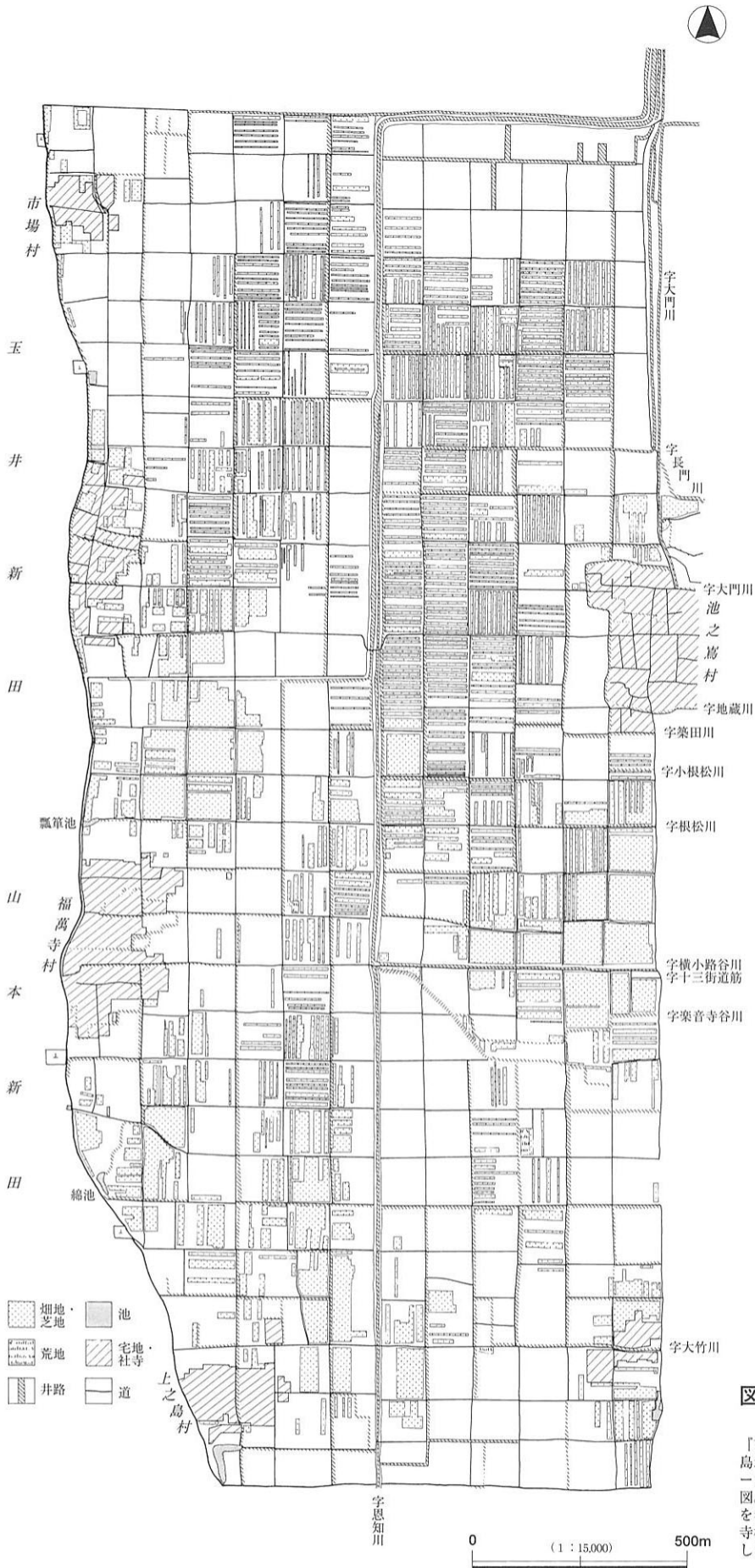
図II-7 『福万寺村地引図』における地割と土地利用

た可能性が指摘されている（江浦1992）。また、恩智川は玉串川から取水した水路と生駒山地から流下する河川に関わって、人為的に整備された排水路である。恩智川が整備された時期については、条里型水田面の水利系統の変遷からみて、10世紀から11世紀末の間の時期であった可能性が指摘されている（井上1995）。

当遺跡では、中世の田畠が重層的に検出されているが、中世の水田跡は大竹西遺跡でも検出されている。また、八尾市立上之島小学校建設に伴って調査された福万寺遺跡では、13～14世紀の屋敷地（米田・徳谷1990）が検出されている。さらに、大和と河内を結ぶ十三街道が当遺跡の南側を通っているが、その北に接する位置に福万寺という寺院があったという伝承がある（井上1921など）。この福万寺は古代～中世前期ごろに存在した可能性があり、近世の絵図に記載がないことから、中世後期には廃絶していたと思われる。この寺については、福万寺I期地区から出土した平安時代前半の瓦に注目して、その存続時期を推定しようとする研究もある（新倉2000）。さらに、福万寺町の集落内に位置する三十八神社の敷地は14世紀には「福万寺城」であったという伝承がある（井上1921）。これについては在地領主の居館が存在した可能性も考えておく必要があり、福万寺村の形成時期を考える上でも注意すべき問題といえる。また、



図Ⅱ-8 『池島村地引図』における地割と土地利用



図Ⅱ-9 1880年頃の土地利用

『市場村地引図』・『福萬寺村地引図』・『上之島地引図』・『池島村地引図』をもとに作成。ベースマップは1961年大阪府作製1/3000地形図。川の名称は各地引図と萩田ほか(1973)を参照した。なお、箕後川については『福萬寺村地引図』の記述に従い、「横小路谷川」とした。

池島の集落にも、「城の内」、「城が淵」、「北柵戸」、「外柵戸」、「大門」、「馬場」などの字名・呼名が残っており、「池島城」であったという説（荻田1985）や、集落の西・南縁を巡る水路を環濠とする説（枚岡市史編纂委員会1966）がある。ただし、この水路に関していえば、西方の水田の灌漑とともに、集落の排水を処理する機能も有していたと考えられる。いずれにせよ、当遺跡における耕作地のデータは、こうした情報とともに、中世の村落景観を考える上で重要な役割を果たすことが期待される。

近世・近代に関する史料としては、当遺跡周辺を描いた絵図・地引図が現存している。まず、享保19（1734）年に作成された『福萬寺村惣繪圖』は、模写が八尾市立歴史民俗資料館に保管されている（尾崎編2000、カラー図版4、図版2、図Ⅱ-6）。この絵図には、屋敷地、神社、溜池、水路、畦などが図示され、各坪の坪番号が記載されている。また最近、明治12・13（1879・80）年に作成された市場村、福万寺村、上之島村の地引図の所在が明らかになった。『堺縣河内國第二大區四小區河内郡市場村地引圖』（明治13年1月）、『堺縣河内國第二大區四小區河内郡福萬寺村地租改正地引繪圖』（明治12年11月）、『堺縣河内國第二大區四小區河内郡上之島村地引圖』（明治12年6月）の3枚である（カラー図版5、図Ⅱ-7、図版2・3）。また、池島地区を描いた地引図としては、『河内國第二大區四小區河内郡池之寫村地引圖』の存在が知られている（荻田ほか1973、カラー図版6、図Ⅱ-8、図版2）。これについては、1951年に池島町自治会の所蔵となった際、「明治初年」作成と記載されたものの、作成時には年号が記されていない。この種の地引図は地租改正後に作成されたものであるため、この地引図についても他のものと同時期に作成されたと考えられる。これらの地引図には、宅地、墓地、畦、畠、水路などが表示されている。この記載をもとに土地利用図を作成した（図Ⅱ-9）が、前述のように、これは表層微地形を理解するのにも有効である²⁾。

当遺跡の発掘調査では、縄文時代以降の各時期の情報が得られている。ただし、当遺跡の調査面積は広いものの、河内平野南東部という範囲で見れば、人間活動や地形形成のごく一部を明らかにしたに過ぎない。周辺遺跡と合わせて検討を進めることが、今後の課題として残されている。

註

- 1) この土器が出土した95-2調査区においては、調査段階に第10層の設定がなされていなかったため、概報では「第14b層」と記載されている。
- 2) 以下、地引図については、『市場村地引図』、『福万寺村地引図』、『上之島村地引図』、『池島村地引図』と略称する。

参考文献

- 秋山浩三・朝田公年編2000「旧石器・縄文時代古環境の復原」『池島・福万寺遺跡』1（98-3・99-1調査区）、(財)大阪府文化財調査研究センター、pp.148-186.
- 井上智博1995「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程－池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）の調査から－」『大阪文化財研究』第9号、(財)大阪府文化財調査研究センター、pp.29-54.
- 井上智博1999「島島の考古学的研究－池島・福万寺遺跡の事例の再検討－」『光陰如矢』、荻田昭次先生古稀記念論集刊行会、pp.193-200.
- 井上正雄1921『大阪府全志』巻四、pp.869-871、pp.874-878。（復刻版1985、清文堂出版）
- 江浦 洋1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅶ、(財)大阪文化財センター、pp.77-104.
- 荻田昭次1985「縄手の歴史散歩」『我が街わが農協』、縄手農業協同組合、pp.207-360.

- 尾崎良史編2000『特別展 絵図が語る八尾のかたち』, 八尾市立歴史民俗資料館, 66p.
- 梶山彦太郎・市原 実1972「大阪平野の発達史-¹⁴C年代データからみた-」『地質学論集』第7号, 日本地質学会, pp.101-112.
- 梶山彦太郎・市原 実1986『大阪平野のおいたち』, 青木書店, 138p.
- 河角龍典1999「池島・福万寺遺跡およびその周辺の地形」『研究調査報告』第2集, (財)大阪府文化財調査研究センター, pp.193-196.
- 河角龍典2000「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動-大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例-」『歴史地理学』第42巻第1号, 歴史地理学会, pp.1-15.
- 小山田宏一1989「87-2調査区の調査成果」『池島遺跡発掘調査概要』IV, 大阪府教育委員会, pp.9-79.
- 阪田育功1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』, 和泉書院, pp.99-122.
- 高萩千秋1991「大竹西遺跡発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第24回)資料』, (財)大阪文化財センター, pp.25-36.
- 高橋 学1991「河内平野の地形環境分析Ⅰ-河内平野の環境復原に関する基礎的考察-」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』89-1~6 調査区の概要, (財)大阪文化財センター, pp.171-185.
- 高橋 学1995「河内平野の地形環境分析Ⅳ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XⅠ, (財)大阪文化財センター, pp.71-80.
- 地学団体研究会関西支部編1999「大地のおいたち-神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類-」, 築地書館, pp.149-194.
- 新倉 香2000「位置と環境」『池島・福万寺遺跡』1 (98-3・99-1調査区), (財)大阪府文化財調査研究センター, pp.1-8.
- 西村公助・樋口 薫1997『大竹西遺跡第3次発掘調査-現地説明会資料-』, (財)八尾市文化財調査研究会, 3p.
- 枚岡市史編纂委員会編1966『枚岡市史』第3巻 史料編(1), 大阪府枚岡市役所, p.176.
- 藤岡達也1997「発掘現場での河川堆積物からみた先史時代の古環境と人間活動への影響-大阪府大竹西遺跡の旧玉串川を例として-」『歴史地理学』第39巻第5号, 歴史地理学会, pp.19-32.
- 別所秀高1999「微細形態学の試行-その方法と考古遺跡への応用例-」『光陰如矢』, 荻田昭次先生古稀記念論集刊行会, pp.147-158.
- 松田順一郎1994「池島遺跡第11次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1992年度』, (財)東大阪市文化財協会, pp.49-68.
- 松田順一郎1995「池島遺跡第12次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1993年度』, (財)東大阪市文化財協会, pp.23-30.
- 松田順一郎1998「弥生・古墳時代の沖積低地河川堆積物-大阪府大竹西遺跡の事例-」関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相-「実証」の地平-』, 大明堂, pp.19-36.
- 松田順一郎1999「段上遺跡第8次・下六万寺遺跡第3次調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1998年度-』, (財)東大阪市文化財協会, pp.131-138.
- 松田順一郎・藤城 泰・別所秀高・三輪若葉1997「縄文時代晩期末の河内潟・河内湖における貝塚形成の変化」『世界古代湖会議 要旨集』, p.195. (ポスターセッション発表)
- 三輪若葉1997「池島遺跡第15次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1995年度-』, (財)東大阪市文化財協会, pp.5-8.
- 森本 徹1997「古墳時代葬送儀礼專業集落についての一考察」『大阪文化財研究』第12号, (財)大阪府文化財調査研究センター, pp.11-18.
- 吉田野乃編2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』, 八尾市教育委員会, 165p.
- 米田敏幸・徳谷尚子1990「福万寺遺跡-上之島3丁目22-1の調査-」, (財)八尾市文化財調査研究会, 82p.

第Ⅲ章 遺構面の認識と標準層序

1. 層序整理の方針

当遺跡の発掘調査における地層観察の方法については、井上（1998）でふれている。ここで簡単に述べると、①粒度と堆積構造に着目して堆積環境の変化する部分で分ける堆積学的地層区分、②土壌とその母材の關係に着目する土壌層位学的観点、③連続する地層の粒度・構造が側方にどのような変化を示すのか（層相の同時異相）を把握する観点、という3つを組み合わせ、遺跡全体をカバーする層序（標準層序）を確立するというものである。ここでは、その問題点について論じることにする。

まず、「土壌化」という概念である。沖積低地では頻繁に氾濫堆積物をはじめとする水成堆積物が供給され、水成層とその上部を母材とする土壌のセットが重層的に確認されることがある。当遺跡では古土壌をa層、その母材となった水成層をb層と呼称している。a層は土壌学でいうA層に対応する（運積土における土層のとりえ方については加藤〔1978〕を参照）。A層の定義としては、起源の岩石や堆積物の組織を失ったもので、①腐植化した有機物の集積、②耕うん、放牧、または同様の攪乱の結果生じた性質、③表層攪乱作用の結果生じたB・C層とは異なる形状、のうちの1つ以上の特徴を持つものと定義されている（日本ペドロロジー学会編1997）。縄文時代から弥生時代にみられる「黒色泥層」は①の特徴を有し、古代以降の水田作土層は②の特徴が顕著である。攪乱¹⁾については、異種土塊、特に下層土のものが上の層に混じりこんだり、ラミナ構造が乱されている状況などに注目して認識する（加藤1992）。攪乱の度合いについて加藤芳朗（1997）は、大小多数の異質ブロックがある場合を「攪乱度弱」、ブロックが小さくかつ少なくなった場合を「攪乱度中」、ブロックがほとんどなく、均質な土層となったものを「攪乱度強」とする。これについては分類基準に曖昧な部分もあるが、第3層など、多数のブロックが明瞭に認められ、耕作期間が短かったと推定される作土層を評価する際に利用した。なお、第7層のような泥質の堆積物では、保存状態がよい部分でも攪乱の状況が肉眼では認識しにくく、土壌とその母材という關係が現地では明瞭でないものもある。こうした事例については今後、土壌微細形態の観察をおこない、攪乱の状況などを検討する必要がある。

遺構面については、さきに述べた土壌と母材の關係に対応して、古土壌の上面・下面をそれぞれ、a面・b面としている（遺構検出面のとりえ方については趙〔1995〕も参照）。また、調査の進展により、ひとつのa層が細分されることが判明したり、b層と考えていたものを個別の番号で表示したほうがよいと判断した場合は、例えば第3-1a層、3-2a層などと枝番号をふって表示する。そして、前述した第7層のようにシルト～粘土が耕作された場合、攪乱の状況などがはっきりせず作土と下層土の区別が難しいことがあるが、これについては第7a層とはせず、単に第7層と呼称することにする。なお、第14-1層のように沼沢地の環境で堆積した地層など、古土壌とはいえない場合でも、上面で足跡をはじめとする人間活動の痕跡が確認されることもある。このような地層についてはb層として扱うのではなく、個別の番号を付した。さらに、第16層以下については海成層の評価をはじめとして、堆積環境の変化が問題となるため、堆積物の粒度・構造に注目して番号を付した。ここで注意しなければならないのは、上位の水田作土（a層）に対する耕作によって、下位のa層が削られて消滅してしまった場合である。この場合、上位の作土層下面を精査すると、層序が良好に保存されていれば下位の古土壌下面で

検出されたはずの遺構も同時に検出されることになる。その例は第10 b 面検出時にみられるが、遺構の整理にあたっては、出土遺物とともに遺構埋土を構成する土がどの地層に起源するものかを検討する必要がある。

次に、水田跡の時期推定の方法をまとめておきたい。加藤（1979）では、土壌の時期決定方法について、母材の中に含まれていた物体が土壌に取りこまれる場合と、土壌化の過程やそれと並行して起こる母材の緩やかな供給の過程で物体が土壌中に取りこまれる場合の両者があると整理している。また、Waters（1992）でも堆積・土壌化の進行過程と遺物の取り込まれ方に関する検討がなされている。こうした見方は水田作土中の遺物の性格を考える上で参考になる。さらに、作土層の上に作土層が直接重なっている場合には、下の作土層の上部は多少とも削られているため、本来下の作土層中にあった土器片が上の作土層中に含まれることがあるだけでなく、次のような技術的問題が生じる。すなわち、粒度が上下で極端に違わなければ、作土層と作土層の境の凹凸を厳密にわけることが難しいことも多く、上の作土層を掘削中に、掘りすぎて下の作土中の土器片を取り上げてしまったり、下の作土上面検出時に上の作土層の小さな落ち込みを認識できず、その落ち込み（上の作土）中に含まれている土器片を下の作土層の遺物として取り上げてしまう危険がある。こうした点をふまえた上で、水田跡の時期推定には以下のような資料を使用するのが望ましい。すなわち、①水田を構成する水路内に遺棄された土器や大畦畔に埋納された土器、②作土層下面で検出される土器埋納遺構などから出土した土器、③作土上面が明瞭に検出された場合、その直上に貼りつくような形で出土した土器である。それらと合わせて、作土中の土器片や前後の地層から出土した土器片も考慮して、水田跡の時期を検討するようにしている。

また、組み立てられた標準層序にも問題点が存在する。特に、層序対比の対象範囲が広がると、例えば福万寺 I 期地区北西隅では第15-2 a 層から宮滝式土器が出土したのに対し、池島 I 期地区では第14-2 a 層最下部から宮滝式土器が出土し、第15-1 層から元住吉山 I 式土器が出土するなど、層相が酷似し、層の前後関係などからみても対比できる地層において、遺物からみると場所により若干時期の異なる場合がある。これについては、その地層の段階の微地形や前後の層の堆積過程をみて、それらの地点が微地形や堆積過程においてどのように違っているのかを検討する必要がある。

なお、残されたデータをみると、調査区内でも層序に矛盾の存在するものがあつた。具体的な問題点についてはその都度記述するが、代表的な誤りとして、水田作土層が連続して堆積している部分において、分層に際して混乱が起きた場合と、地層の埋積後に生じた酸化鉄や二酸化マンガンの集積による色の変化を層界と誤認したことがある。後者は「偽畦畔（転写畦畔）」（赤木1989）の問題とも関わる。これらについては写真資料を用いて検証をおこない、基本的な点については整理できたと考えている。

今回の報告にあたっては、福万寺 I 期地区を南北方向（Y = -34,160ライン）、東西方向（X = -150,080ライン）に横切った断面を作成した（図Ⅲ-2）。また、各層の粒度や構造を表現するために、7本の柱状図も作成した（図Ⅲ-1）。粒度については地質学で標準とされるWentworthによる区分²⁾を使用すべきであるが、現場で作成された断面図の記載には明瞭な基準があるとはいえないため、今回はその区分に合わせながら、やや幅をもたせて表示した。いずれにせよ、これによって全体の堆積状況の概略を知ることができる。ただし、これらの断面は必ずしも地形に合わせて切った断面ではないため、微地形の形成過程がうまく表現できない。したがって、その問題を論じるために、部分的な断面をいくつか作成し、各面の記述の中で提示している。その際、堆積構造については、近接写真を拡大して観察した上で、原図の記載と合わせて検討して描きこんだ。堆積構造の理解にあたっては、公文・立石編

(1998)、フリッツ・ムーア(原田訳, 1999)などを参考にした。また、「洪水砂」という言葉については、当センターの発掘調査においても定義が曖昧な形で使用されることが多い。単に砂礫層の呼称として使用したり、河道を充填する堆積物に対しても用いる担当者もいる。本書ではこうした地層について、粒度、構造、分布などの特徴をとらえた後、その性格について解釈する際に次のような用語を使用する。すなわち、「逆グレーディング構造」(増田・伊勢屋1985)が認められるなど、人工堤防・自然堤防を溢流して堆積したと考えられるものを「氾濫堆積物」、水田域内に舌状に分布し、トラフ型斜交層理が認められるなど、人工堤防や自然堤防の破堤によってもたらされたと考えられるものを「破堤堆積物」とする。そして、流路を埋積する砂礫に対しては、「洪水砂」という用語は使用せず、「流路堆積物」という用語を用いる。ただし例えば、同一の地層においても、ある部分は流路堆積物で、別の部分は氾濫堆積物などということはよくあることであるし、判断に困るような状況もしばしば認められる。堆積学の知識に乏しいという担当者の能力の問題もあり、本書では、堆積営力の解釈についてはごく初歩的なレベルにとどめ、無理な解釈は避けるようにした。

2. 福万寺 I 期地区の標準層序

以上のことをふまえて、各層準について順番に説明したい。なお、粒度・色調は場所によって異なるため、各調査区の記載に目を通した上で、やや幅をもたせて記載した。また、地層の堆積状況について詳細な説明が必要な場合は、調査成果の記述の中でふれることにする。

第 1 a 層は、中砂～細礫混じりシルト(7.5Y5/2灰オリーブ～2.5Y6/2灰黄)で、現代作土に関連する酸化鉄および二酸化マンガンの斑紋が著しい。ただし、この層自体も攪乱されていると考えられ、水田作土層であった時期があると思われる。また、福万寺 I 期地区西部では、その下に砂混じりシルト(7.5YR 5/3にぶい褐)が部分的に残存し、その中に第 1 b 層の砂のブロックを含む部分もある。第 1 b 面検出土坑群の埋土はこの土壌であり、これ自身も作土層と考えられる。**第 1 b 層**は下部が平行葉理のみられる極細砂～シルト(2.5Y3/2黒褐～7.5Y4/1灰)、上部が平行葉理やプラナー型などの斜交層理のみられる中砂～粗砂(2.5Y5/4黄褐～7/2灰黄)で、上方粗粒化しており、氾濫堆積物と考えられる。

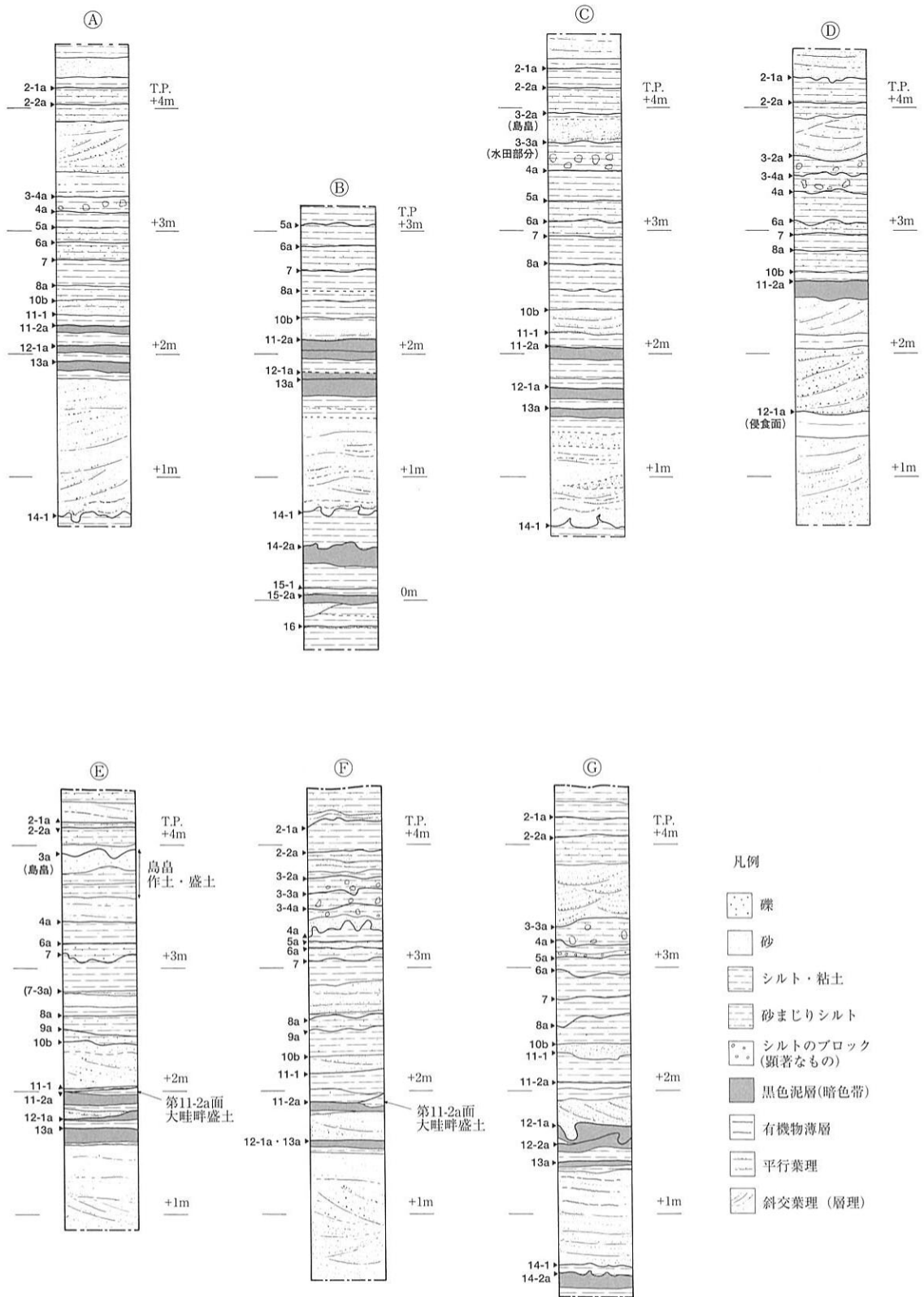
第 2 - 1 a 層は中砂～粗砂混じりシルト(5Y5/1灰～7.5Y4/1灰)で酸化鉄の斑紋(糸根状～うん管状)が多く認められる。特に島島の部分では酸化鉄・二酸化マンガンの斑紋が著しく認められる。砂とシルトの混じり方からみて、攪乱された水田作土層と考えられる。また、**第 2 - 2 a 層**は粗砂～細礫混じりシルト(色調は第 2 - 1 a 層に類似)で攪乱されており、酸化鉄・二酸化マンガンの斑紋(糸根状～うん管状)が多く認められる。この層の上には第 2 - 1 a 層が直接のっている。そして、**第 2 b 層**は砂礫層(10YR6/6明黄褐～7.5Y5/2灰オリーブ)で、シルトの薄層を挟む部分もある。当地区を南西-北東方向に横切るラインを中心に厚く堆積しており、その中心部ではトラフ型斜交層理が認められる。ただし、当地区北西部では層厚が薄く、島島間に部分的に遺存するにすぎない。なお、90-3調査区や93-1調査区などでは、第 2 b 層の中位に砂とシルトブロックが入り混じった部分が認められている。これは第 2 b 層が少なくとも二度の洪水によって堆積したことを示すが、特に90-3調査区のものについては人為的に攪乱された可能性が高い(図版10-4)。また、93-1調査区のもは、ブロックが横方向に連なっていること、下位のシルト層の上面がほぼ水平であることからみて、侵食によって生じたブロックが再堆積したと考えられる(図版10-5)。なお、第 2 b 層の砂礫が噴砂として上がり、第 2 - 2 面検出時に確認された地点があるが、これについては後述したい。

第3層は、シルトのブロックと砂が混じる攪乱された地層（2.5Y6/3にぶい黄～5BG5/1青灰）で、こうした地層が島島間に累重している。ただし、その攪乱の度合いは低いと考えられ、それぞれが比較的短期間の水田作土層と考えられる。島島間の地層の数は3層の部分が多いが、4層ある部分や1層、2層しかない部分も存在する。なお、当地区北西部の島島間では最上部に1層多く存在し、島島がかなり埋積された段階で第2b層が堆積したことが判明した。そこでこの部分にのみ認められる層を第3-1a層とし、全体で連続して認められる最も上の層を第3-2a層とした。そして、その下にさらに地層が存在する場合は第3-3a層、第3-4a層とした。また、第3b層は斜交層理がみられる砂礫層（2.5Y7/4浅黄～6/6明黄褐）で、下層を削って生じたシルトのブロックが含まれる部分もある。この層は当地区西半部に厚く堆積し、東半部では残存していない。

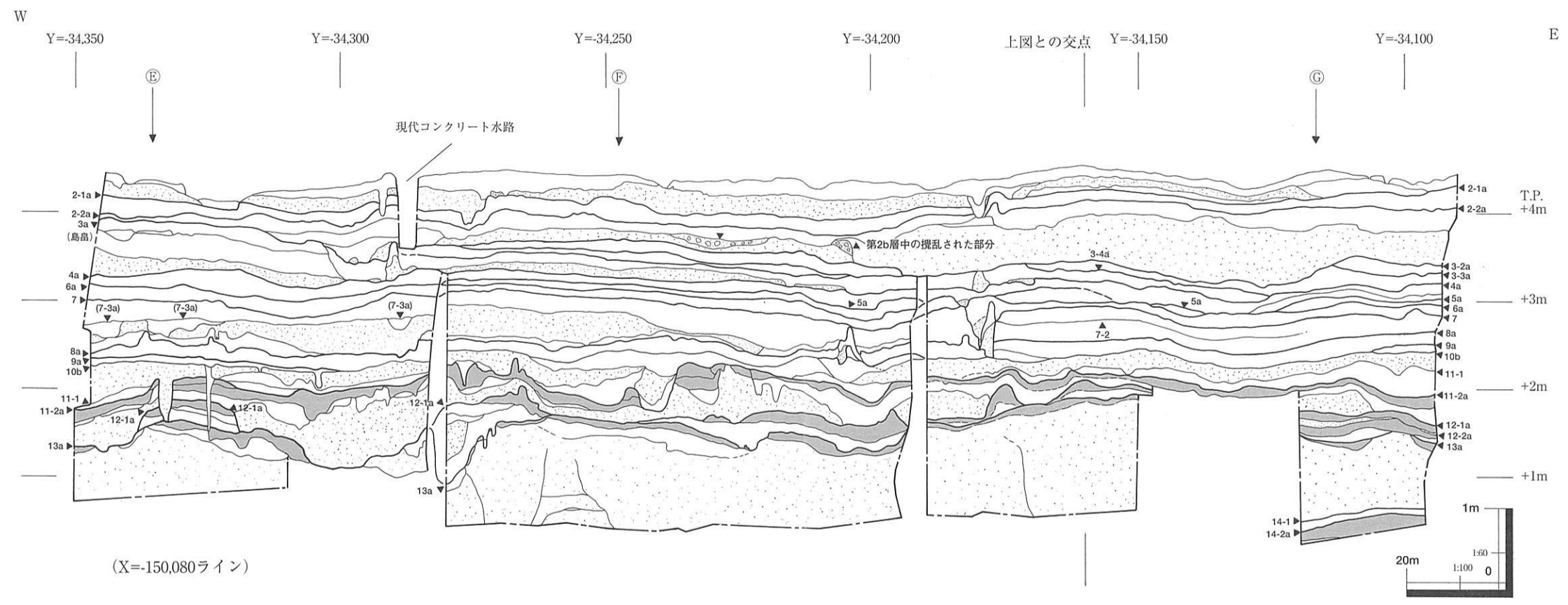
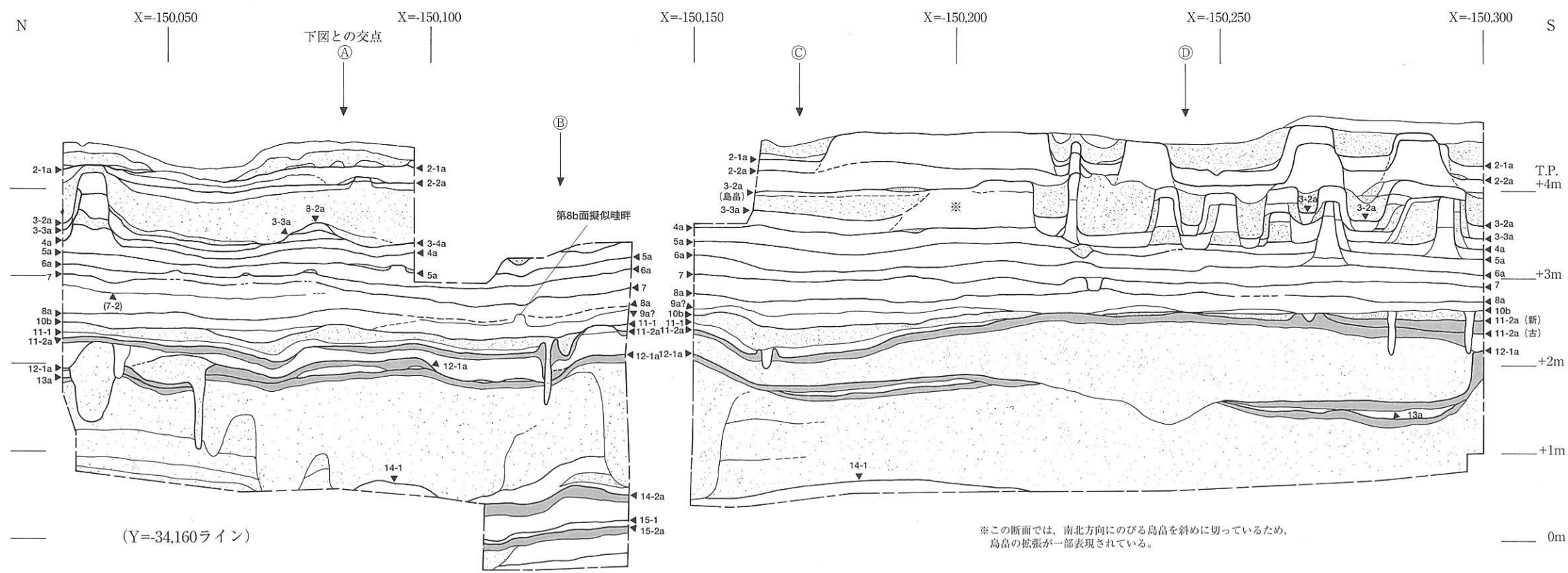
第4a層は細砂～中砂混じりシルト（5BG4/1暗青灰～7.5Y4/1灰）である。第5a層は中砂～細礫混じりシルト（2.5GY4/1暗オリーブ灰～7.5Y4/2灰オリーブ）で、当地区の東半部にのみ残存する。第6a層は粗砂～中礫混じりシルト（5B4/1暗青灰～5Y5/2灰オリーブ）である。それぞれが攪乱された水田作土層であると考えられるが、大半の地点では間層がなく、連続して堆積している。このため、第4a～6a層の細分は、局所的に認められる間層（砂・シルト）とともに、粒度の違いや島島・坪境畦畔の立ち上がりなどに着目しておこなった。なお、詳細は後述するが、第6a層の母材となった第6b層は、2回にわたって堆積した氾濫・破堤堆積物である。

第7層はシルト～粘土（5B4/1暗青灰～5Y4/1灰）である。第6b層の粗砂が若干残存し、上面が覆われた部分もあるが、その部分でも上部が若干暗色を呈する程度で、肉眼では攪乱などの特徴はとらえられていない。また、第6a層段階の耕作により上部が削られた部分も多いと考えられ、後述する第6b面の島島の下に残存した田面との比高から、削られた厚さは2～4cm程度と推定される。なお、当地区北東部では、坪境水路の埋没過程を目安にして第7層が2層に細分されたため、必要な場合は第7-1層、第7-2層と呼び分けた。また、第7b層は当地区の西半部に厚く堆積している。下部はシルト～粘土質シルト（10BG4/1暗青灰～10Y3/1オリーブ黒）、上部は葉理のみられる細砂～粗砂（2.5Y5/4黄褐～7.5Y5/2灰オリーブ）で上方粗粒化しており、氾濫堆積物と考えられる。ただし、上部は第8a面畦畔1の西側にのみ認められ、東半部には代わりに第7層が厚く堆積する。なお、第7b層直上に部分的ながら、5Y5/2灰オリーブシルトブロック混じり細砂が存在していた。詳しくは後述するが、この層は攪乱されており、その下面には馬鍬の歯の痕跡が残されていた。この層については、第7-3a層と呼称したい。

第8a層は粗砂混じりシルト～シルト（5G4/1暗緑灰～2.5GY2/1オリーブ黒）である。当地区西半部では明瞭に認識できるものの、東半部ではあまり明瞭ではない部分もあり、調査段階で第7層との区別ができなかった部分も存在した。また、第9a層は細砂～粗砂混じりシルト（5B4/1暗青灰～7.5Y5/1灰）で、90-1・90-2・90-3調査区などで残存していた。上面で水路跡が検出されたことからみて、水田が営まれていたと考えられる。なお、当地区東半部で第8a層が明確に認識できなかった部分では、中砂～粗砂混じりシルト（10Y6/1灰）の上面で、第8b面に帰属すると考えられる擬似畦畔を検出した。この層は第8a層と比べて灰白色を呈していた。93-1調査区では第8a層とこの層の上部において、また93-2調査区（A区）では第7層下部からこの層の上部の間で、変形構造が認められる部分もあった。こうした点は池島I期地区の状況に類似しており、この層が第9a層に対比される可能性を示している。そして第10a層は、調査時には注意されていなかったが、90-3調査区などの断面写真を検討した結果、局



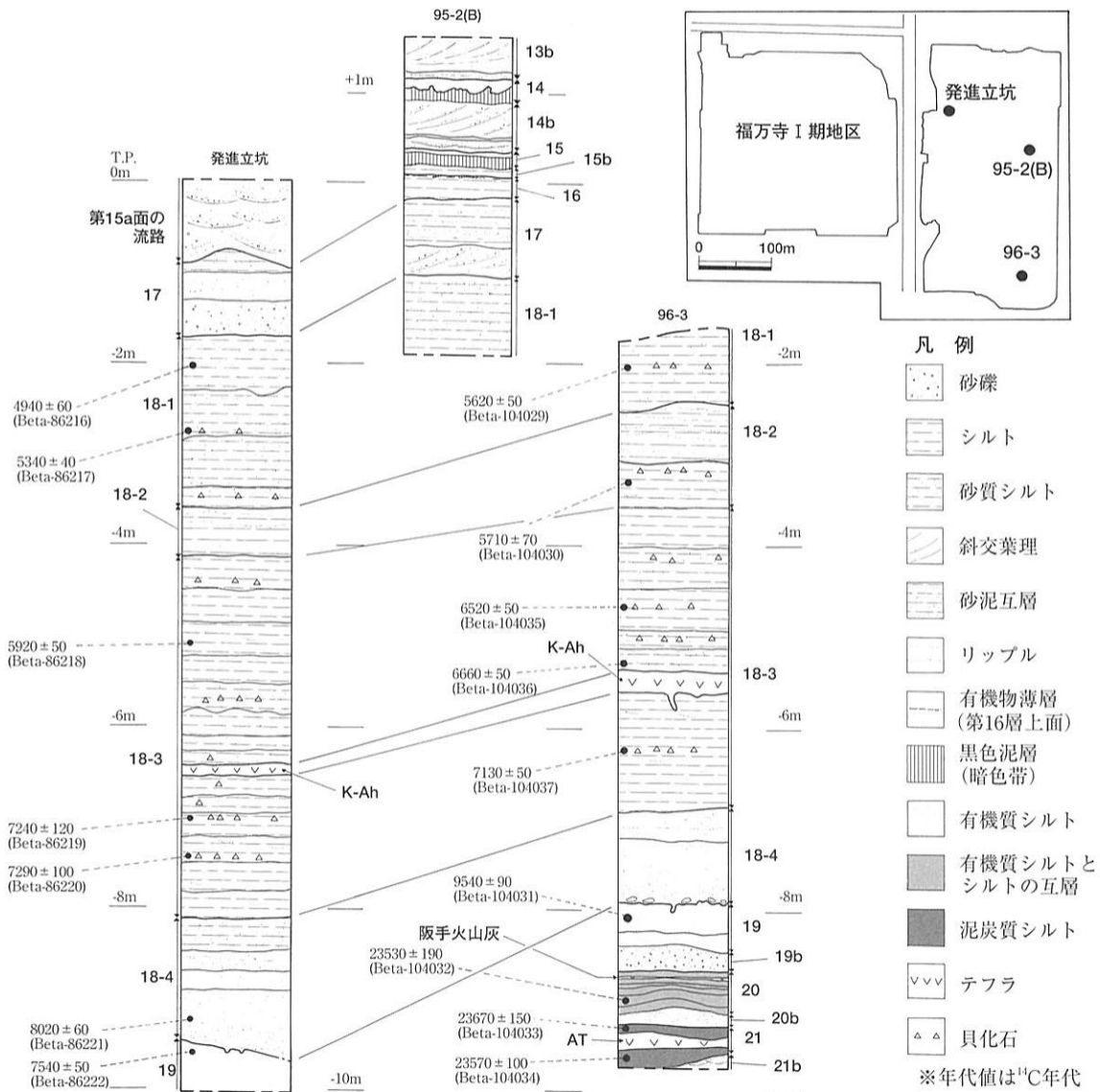
図Ⅲ-1 福万寺I期地区断面柱状図



図Ⅲ-2 福万寺 I 期地区断面模式図

所的に残存していたと考えるに至ったものである（図版22-7・8）。古墳時代の遺構埋土をみると、第9 a層とは異なった土が埋土の中に混入しているものも少なくないため、本来存在していた第10 a層が第8 a・第9 a層段階の耕作によって削られてしまったと考えられる。第10 b面の精査時に第9 b・第10 b面に帰属する遺構が同時に検出されたのは、このためである。なお、第10 b層は砂礫層（5Y6/4オリーブ黄～2.5GY5/1オリーブ灰）で、氾濫・破堤堆積物の地点と流路堆積物の地点がある。

第11-1層はシルト～粘土層（5BG4/1暗青灰）で、上面で多くの足跡が検出されている。第11-2 a層はシルト～粘土（N4/0灰～5B3/1暗青灰）で有機物を多く含み、場所によっては砂礫が混じる部分もある。いわゆる「第1 黒色泥層」である。なお、当地区南東隅では、その上にシルト（5B4/1暗青灰～10GY4/1暗緑灰）が堆積し、「第1 黒色泥層」が細分される。この部分では、上層を第11-2 a層（上）、下層を第11-2 a層（下）とした。また、第11 b層は、上部はシルト～粘土（5BG5/1～10BG5/1青灰）であり、これが第1 黒色泥層の母材となっている部分が多い。そして、下部は砂礫（7.5Y6/3オリーブ黄～N6/0灰）で、当地区東半部ではトラフ型斜交層理が確認できた。なお、下部の砂礫が厚く堆積した部分は、上部のシルト～粘土が薄く、砂礫が第11-2 a層と直接接している部分もあった。そうした部分にお



図Ⅲ-3 第13b～第21b層柱状図

る第11-2 a層には砂礫が多く混じる。

第12-1 a層はシルト～粘土（5BG4/1暗緑灰～10YR4/1褐灰）で、有機物を含み、細砂が混じる部分もある。いわゆる「第2黒色泥層」である。当地区北東隅の92-6調査区では、砂礫が間層として挟まることで第12 a層が2層にわかれる部分があり、第12-1 a層・第12-2 a層とした。詳しくは後述するが、この状況は池島I期地区との層序対比や、弥生時代中期水田面の評価に際して重要な意味を持っている。

第13 a層は砂混じりシルト～粘土（2.5Y3/1黒褐～N5/0灰）で、有機物を多く含んでいる。いわゆる「第3黒色泥層」である。その下の第13 b層は従来、「弥生時代前期洪水砂層」と呼ばれてきたが、これは流路堆積物と氾濫・破堤堆積物の集合体であると考えられる。その堆積過程は弥生時代の地形形成に密接に関わるので、後に詳しく論じる。なお89-2調査区では、第13 b層上部において噴砂が確認されている。これは第13 b層中で収束していたようである。

第14-1層は植物遺体を多く含むシルト～粘土（2.5Y4/1黄灰）で、ヒシの種実が多く含まれる。その上面では人・シカ・イノシシ・大型の鳥類の足跡が多数検出された。また、この層の上面から第13 b層最下部には変形構造が顕著に認められるが、これについては松田順一郎が地震動によって生じたとする見解を発表している（Matsuda2000）。第14-2 a層はシルト（2.5YR2/1赤黒～10YR1.7/1黒）で、腐植を多く含む。いわゆる「第4黒色泥層」である。池島I期地区南半部では、この層の上面で弥生時代前期中葉の水田跡が検出されているが、その部分と粒度を比較すると、当地区のほうが泥質である。第14 b層は大部分がシルト（10G6/1緑灰）であるが、一部砂礫が堆積している部分もある。第15-2 a層はシルト～粘土（上部5YR1.7/1黒、下部N5/0灰）で、腐植を多く含む。いわゆる「第5黒色泥層」である。その直上にはやや色の薄いシルト～粘土（層厚3 cm程度）が堆積した部分があり、これを第15-1層とした。その下には、抽水植物の茎が横位ないし斜めになって含まれるシルト～粘土（上部5G5/1緑灰～2.5GY7/1明オリーブ灰、下部5Y5/2灰オリーブ）の第15 b層が堆積する。また、その下には有機物層が数枚集積する部分（厚さ1～2 cm）があり、その下には第15 b層と同じように抽水植物の茎が入り、色調も第15 b層の状況に類似するシルト～粘土が堆積している。この有機物層以下を第16層とした。

次に、立坑掘削に伴う立会で観察したのみであるが、当遺跡の形成過程を論じる上で必要な、第17層から第21層について説明する。この層準に関しては秋山・朝田編（2000）で詳しく検討されている。この層序番号は、その成果および粒度分析結果（第V章2-4）にもとづいて設定した。

第17層は上部が砂泥互層、下部が斜交葉理のみられる砂礫層であり、河川性の堆積物と考えられる。第18層は縄文海進期の海成層で、以下のように細分する。第18-1層上部はシルト質細砂で貝化石の破片が散在する。第18-1層下部もシルト質細砂であり、上部に比べて砂の量は多い。また、貝化石が帯状に集中する部分が認められる。なお第18-1層では、砂分にしめる中砂～極粗砂の量が上位に向かって増加する傾向が確認されている。第18-2層は上部と下部に細分する。上部は細砂～極細砂を主体とする砂層と泥層が互層をなし、リップルが明瞭に認められる。下部は細砂～極細砂質シルトで、生物擾乱が激しいが、リップルが不明瞭ながら観察できる。第18-3層は細砂～極細砂質シルトで、砂と泥の比率は半々に近く、リップルが観察される部分もある。また、貝化石が帯状に集中する部分が数ヶ所認められる。なお、この層の下半部にK-Ah（鬼界アカホヤ火山灰）が挟まれる。第18-4層は細砂～極細砂を主体とする砂層で、礫もわずかに含まれるが、中砂以上の粒子は上位に向かって減少する。生痕化石は多く認められるものの、貝化石は含まれない。なお、この層の最下部には第19層のブロックを

多く含む部分がある。

海成層の下は、砂礫層を挟んで特徴的な堆積物が存在していることに注目して番号をつけた。第19層は中礫～中砂混じりシルトで、有機物を多く含む。この下には淘汰の悪い砂礫層である第19b層が堆積している。第20-1層上部は腐植質シルトとシルトの薄層が互層をなし、中位に阪手火山灰を挟む。第20-1層下部は腐植を含まないシルトである。また、第20-2層も上部が腐植質シルトとシルトの薄層が互層をなし、下部は腐植を含まないシルトとなる。その下には中砂～極細砂の第20b層が堆積する。第21層上部は泥炭とシルトの薄層が互層をなしており、下部は泥炭～泥炭質シルトである。両者の間にはAT（始良Tn火山灰）が挟まれる。また、その下には葉理のみられる中砂～極細砂が堆積する（第21b層）。さらにその下にはシルトが堆積する（第22層）が、掘削限界のため詳細は不明である。

註

- 1) 概要報告では、これを「攪拌」と呼称していたが、本書では「攪乱」に統一する。
- 2) 具体的には64～4mmを中礫、4～2mmを細礫、2～1mmを極粗砂、1～1/2mmを粗砂、1/2～1/4mmを中砂、1/4～1/8mmを細砂、1/8～1/16mmを極細砂、1/16～1/256mmをシルト、1/256mm以下を粘土とする。なお、シルトと粘土を包括した名称が泥である。粒度は現地において、粒径見本と対照して記載している調査区もある。

参考文献

- 赤木克視1989『『偽遺構』考』『大阪文化財論集－財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集』, (財)大阪文化財センター, pp.31-42.
- 井上智博1998「遺構面の認識と基本層序」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XXI, (財)大阪府文化財調査研究センター, pp.8-11.
- 加藤芳朗1978「土壌生成因子,母材」『土壌調査法—野外研究と土壌図作成のための』, 博友社, pp.70-91.
- 加藤芳朗1979「土壌の生いたち」『新潟県理科実験講習, 高校(地学), 資料』, 新潟県立教育センター, pp.1-20.
- 加藤芳朗1992「遺跡埋没水田の認定に関する土壌学的問題」『ペドロジスト』第36巻第2号, ペドロジスト懇談会, pp.167-174.
- 加藤芳朗1997「水田土壌の観察 資料」『奈良国立文化財研究所専門研修水田遺構調査課程資料』6p.
- 公文富士夫・立石雅昭編1998『新版碎屑物の研究法』地学双書29, 地学団体研究会, 399p.
- 趙 哲済1995「本書で用いる層序学的堆積学的視点からの用語」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ, (財)大阪市文化財協会, pp.41-44.
- 日本ペドロロジー学会編1997『土壌調査ハンドブック 改訂版』, 博友社, 165p.
- ウイリアムJ. フリッツ・ジョニー N. ムーア (原田憲一訳) 1999『層序学と堆積学の基礎』, 愛智出版, 386p.
- 増田富士雄・伊勢屋ふじ子1988「逆グレーディング構造」：自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造』『細粒碎屑性堆積物とその堆積機構』堆積学研究会報22/23, 堆積学研究会, pp.108-116.
- Matsuda, J. 2000. Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology* 135, pp.99-116.
- Waters, M. 1992. *Principles of Geoarchaeology: a North American perspective*. The University of Arizona Press, pp.93-95.

第Ⅳ章 遺構・遺物

1. 遺構・遺物整理の前提

遺構の整理にあたっては、前章で説明した遺構面の認識方法をもとに、次のような方針を立てた。すなわち、各調査区の遺構面の対応関係を標準層序に合わせて整理することと、各遺構面における微地形を等高線図によって表示することである。

調査段階では、各調査区において独自に遺構面が設定されていた。それらの対応関係については調査段階から検討が繰り返されており、その成果をふまえて今回再検討をおこなった。その結果、いくつかの点で修正が必要となった。それについては後述するが、ここではまず、標準層序番号を用いて遺構面を設定し、それらと各調査区の遺構面の対応関係を表Ⅳ-1に示しておきたい。

また、当遺跡では広い範囲を調査しているため、遺構配置と微地形との関係を比較的明瞭に把握することができる。水田内での水回りを復原する場合、隣り合う水田区画の高低を矢印で表示する方法もあるが、今回は等高線図によって微起伏を表示し、微地形と遺構分布との関係を検討することにした。調査においては主要な遺構面で航空測量による平面図を作成しており、それをつなぎ合わせて各面の等高線図を作ることは可能である。しかし、作成された等高線図を解析する際には、次のような問題点を考慮する必要がある。まず、砂層で覆われて検出が容易であった面であっても、埋没時に侵食されていたり、埋没後の圧密等によって変形や不等沈下する場合もある。また、粒度があまり変わらない地層が累重している場合には、細かな凹凸を掘りわけるとは難しく、掘り過ぎた部分や、掘り足りない部分が存在することも少なくない。さらに、航空測量図、あるいは平板・レベルを使用して作成した測量図の精度についても考慮しなければならない。このような問題に対処するために、等高線で表現される起伏が

表Ⅳ-1 福万寺Ⅰ期地区遺構面对応表

遺構面	89-1	89-2	89-3	90-1	90-2 (H2)	90-2 (H3)	90-2 (H4)	90-3 (A)	90-3 (B)	90-3 (C)	90-5	90-6	92-6	92-7	93-1	93-2 (A)	93-2 (B)	93-2 (C)	93-2 (D)
1b	2	2	2-1	3	3			3				3							
2-1a	3	4	3	4	5	4	5	4	4	4	4	4	3	2	2	3	3	2	2
2-2a	4	5	4	5	6	6	6	5	5	5	5		4	3	3	4	4	3	3
3-1a				6															
3-2a	5	6	5	7	7	7-1	7-1	6-1	6-1	6	6		6	5	4-1	5	5	4	(4)
3-3a						7-2							7						
3-4a						7-3	7-3					5			4-II		6	4	4
4a	6	7	6	9	8	8	8	7	7	7-1	7		8	6	5-1	6	7	(5)	(5)
5a										7-2		6		7-2	5-II	7	(8)	(6)	6
6a		9		10	9	9	9	8	8	8	8		9	8-9	6	(8)	9	7	7
7	7	10	7	11	10	10	10	9	9	9			10	10	7	9	10	8	8
7-2							11			9-2									
7-3a																			
7b				12	11	11		10	10				11	11					
8a	8	11	9	14	12	12	12	11	11	11		7	12	12	8			9	9
8b			10													10	11	10	10
9a				16-1		13-0		11 ₂	12-1										
10b	9	12	11-1	16-2	13	13-1	13-1	12	12-2	12	10	8	13	13	9	11	12	11	11
11-1				17			14-0												12
11-2a	10	13	12-2	18	14	14	14-1	13	13	13	11	9-1	14	15	10-1	12	13	13	13
11-2a(下)												9-2			10-II				
11b				19	15	15	15								10-2	13	14	14	14
12-1a	12	14	14-1	20	16	16	16	14	14	14	12		15	17	11-1	14	15	15	15
12b				21											11-2				
13a	13	15	14-2	22	17	17	17	15	15	15	13	11	16	18	12-1	15	16	16	16
13b				23											12-2		17	17	17
14-2a					18			16	16	16-1	14	12	18	19	13	16	18	18	18
15a					19			17			15	13			14	17	19	19	19

生じた原因を、断面の検討によって明らかにしたい。例えば、破堤堆積物は上に凸の断面形を呈することが多いため、堆積後にその部分は微高地となり、堆積物と堆積後の起伏が対応する。また、田面の埋没の際に侵食によって形成された凹地は、埋没以前の微地形を考える際には除外する必要がある。このように起伏の特徴とその形成要因が明らかになれば、その中から意味のある起伏を抽出し、それと遺構配置の関係を検討することができる。なお、等高線については5cm間隔が望ましいが、今回は残された記録の制約から10cm間隔で表現した。しかし、それでも堆積状況と対比できるような起伏を示すことはできた。ただし、a層上面が上位のa層に関わる耕作によって削られている場合、上層の耕作の影響によって凹凸が生じており、意味のある起伏を読み取ることはできない。したがって、そのような場合は等高線図を作成しなかった。

また、遺物については、第1a層から第14-2a面まで、近世から弥生時代（一部縄文土器も含む）の遺物を掲載している。どのように器種分類し、時期を判断¹⁾したかは、本章の末尾の掲載土器一覧で確認していただきたい。なお、各遺物の時期について、陶磁器に関しては堺市立埋蔵文化財センター森村健一氏に、瓦に関しては当センター駒井正明に御教示いただいた。その他の参考文献については本章末尾に掲載している。

註

1) 時期についてはある程度の幅をもたせて考える必要もあり、そのくらいと判断したということである。

2. 第1a面～第9a面一条里型水田面の調査一

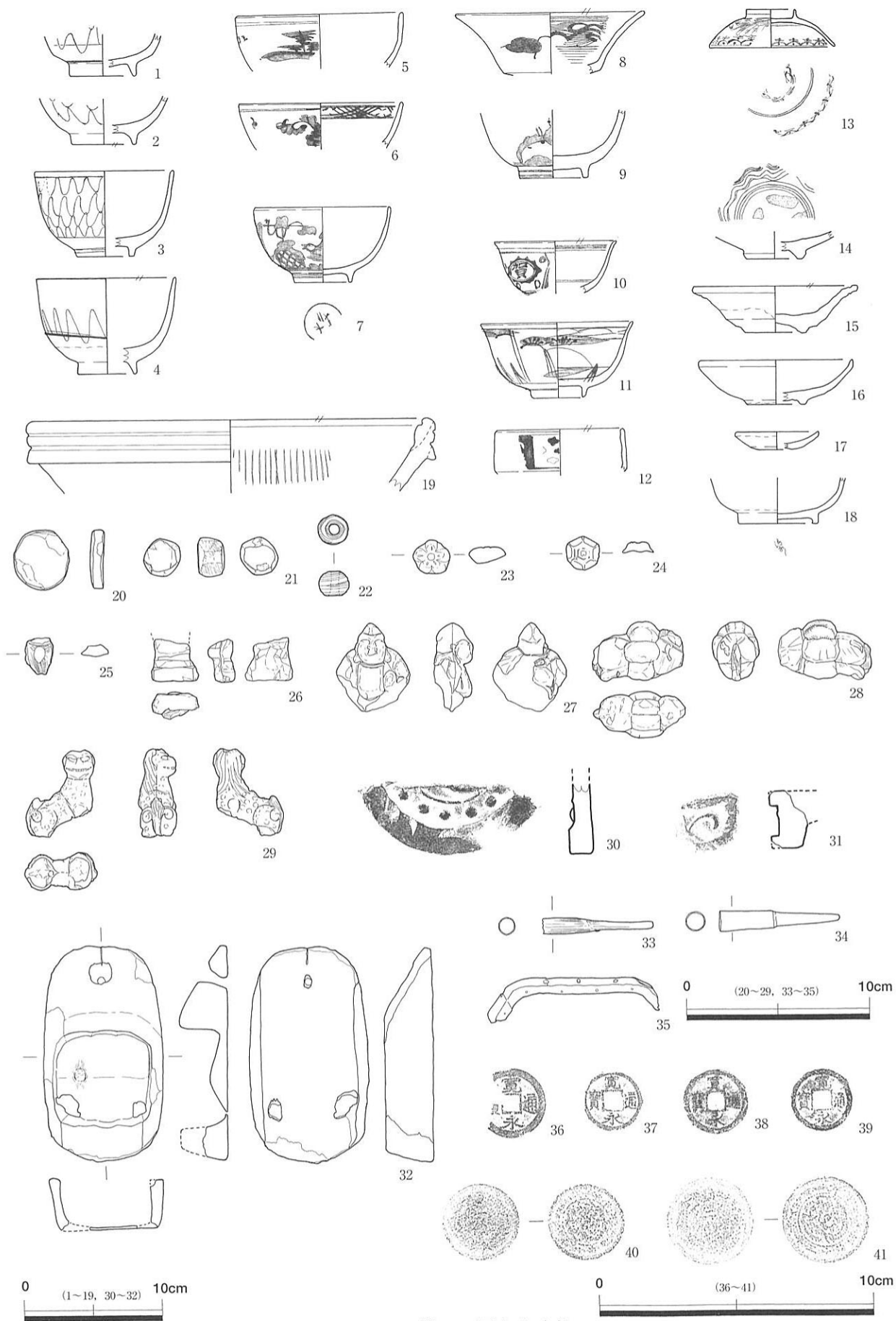
第1a面 第1a面は、盛土および現代作土を重機によって掘削して検出した。この面は現代の耕作、攪乱の影響が大きく、坪境や島畠の痕跡が検出できたのみである。

この面の作土層と考えられる第1a層からは、以下のような遺物が出土した（図IV-1:1～41）。磁器杯（10）・碗（1～7・9・11）・蓋碗蓋（13）・鉢（8）・重ね鉢（12）、陶器小皿（17）・反端皿（15）・丸皿（16）・碗（14・18）・播鉢（19）、瓦質円板（20・21）、ミニチュア土製品（23～29）、軒丸瓦（30）、軒平瓦（31）、玉（22）、木製下駄（32）、金属製キセル（33・34）、金属製品（35）、銭貨（36～41）である。

磁器は17世紀後半～18世紀の波佐見焼染付が多く、19世紀の瀬戸焼染付も出土している。（13）は伊万里窯系で、19世紀のものである。（12）は伊万里焼の五彩である。陶器は17～18世紀の唐津窯系、肥前窯系のものである。（19）は堺播鉢である。ミニチュア土製品は遊び道具の泥面子、泥人形である。銭貨は寛永通寶が4枚出土している。このように、第1a層から出土した遺物の時期は17～19世紀である。

第1b面 第1a層を除去した面が第1b面である。ここからは、第1a層を埋土とした遺構や、シルトブロックが多く混じる土で埋まった遺構が検出された（図IV-2・3）。検出遺構は当地区西側に集中しているが、これは第1b層の残りがよかった範囲に対応している。これらは第1a層の耕作に関連する井戸・土坑・溝等であるが、埋土の状況などからみて、検出された遺構には時期幅があると考えられる。ここでは新しいものとして井戸を、比較的古いものとして土坑群を取り上げる。

井戸は図IV-5に示すように、4類に分類される。図IV-6・7はその代表例を示したものである。I類は井戸枠として桶と方形木枠を組み合わせるもので、図IV-5では最下段に桶が描かれているが、方形木枠で終わるものもある。II類は桶を連結して井戸枠とするものであり、III類は竹籠と桶を組み合



图IV-1 第1 a层出土遗物

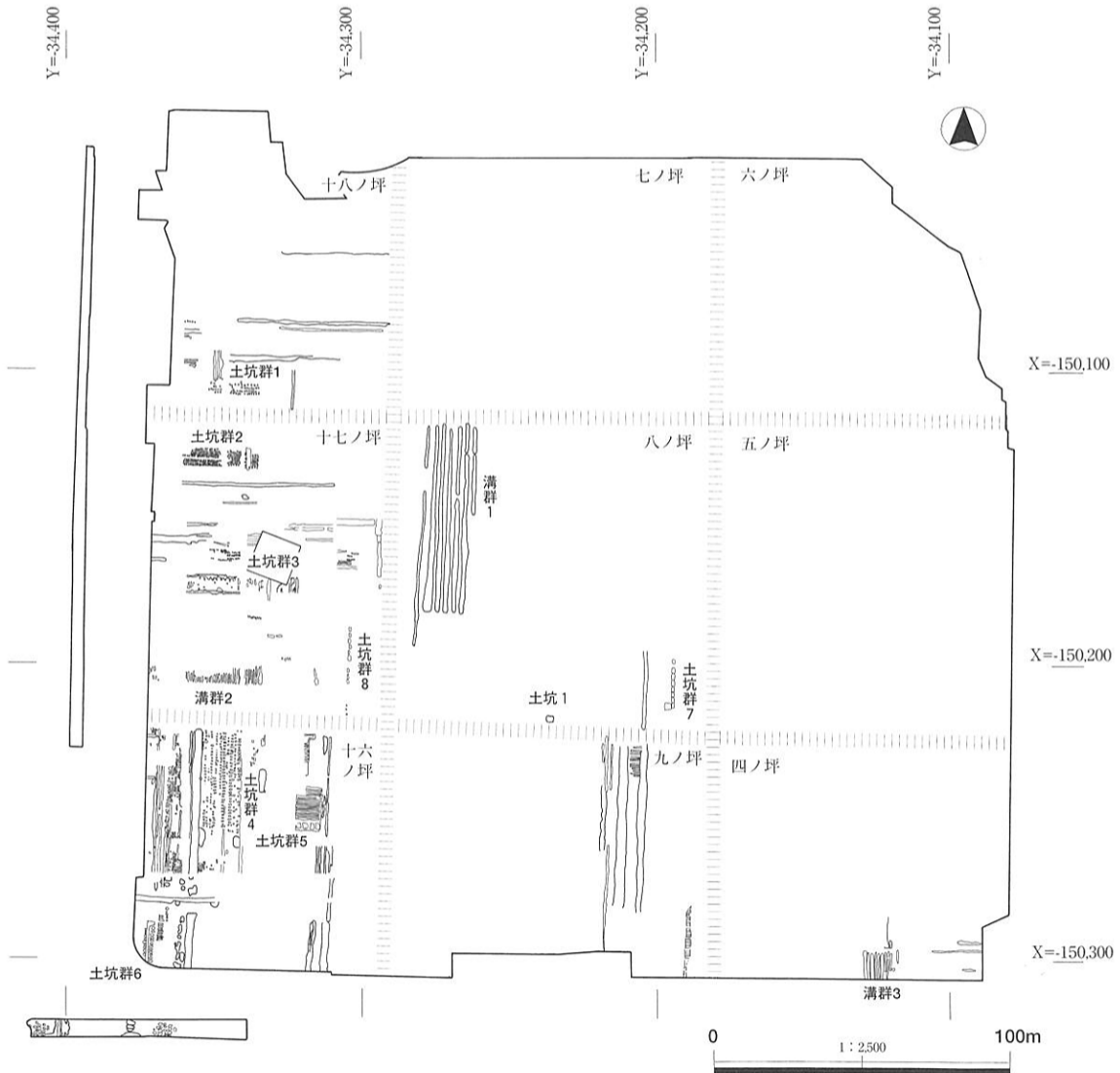
わせた井戸枠を有するものである。I～III類には、井戸枠の最上段に瓦を1段～数段積み上げるものが多い。また、IV類は素掘りのものである。図IV-7に示した井戸37では、底を抜いた杓2つに瓦管を差し込んで埋めていたが、これは水を上げるための工夫と考えられる。なお、井戸には「はねつるべ」が伴っていたと考えられるが、その支柱の痕跡と考えられるピットは井戸30(府発I, pp.44-47)を除いて検出されていない。これは、支柱を据えるための穴があまり大きなものではなかったことと、井戸の機能していた面が検出面よりも上であることに関係すると考えられる。

表IV-2 第1b面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
土坑群1	90-3(A) 方形土坑群1
土坑群2	90-3(A) 方形土坑群2
土坑群3	90-1 —
土坑群4	90-1 —
土坑群5	90-1 土坑167
土坑群6	92-7 —
土坑群7	89-2 土坑群
土坑群8	90-1 —
溝群1	89-1 畝状遺構1~6
溝群2	90-1 —
溝群3	93-1 溝18~23 90-6 溝1~6
土坑1	89-2 土坑2

なお、第2-1a面の精査時に確認された井戸もあるが、福万寺I期地区においては、第1b層や第2-1a層によって埋没した状態で検出されたものはない。したがって、それらは少なくとも第1b面までは立ち上がっていたが、廃絶時に上部が破壊されたことにより、下層に至って輪郭が明瞭に確認されたものと考えられる。

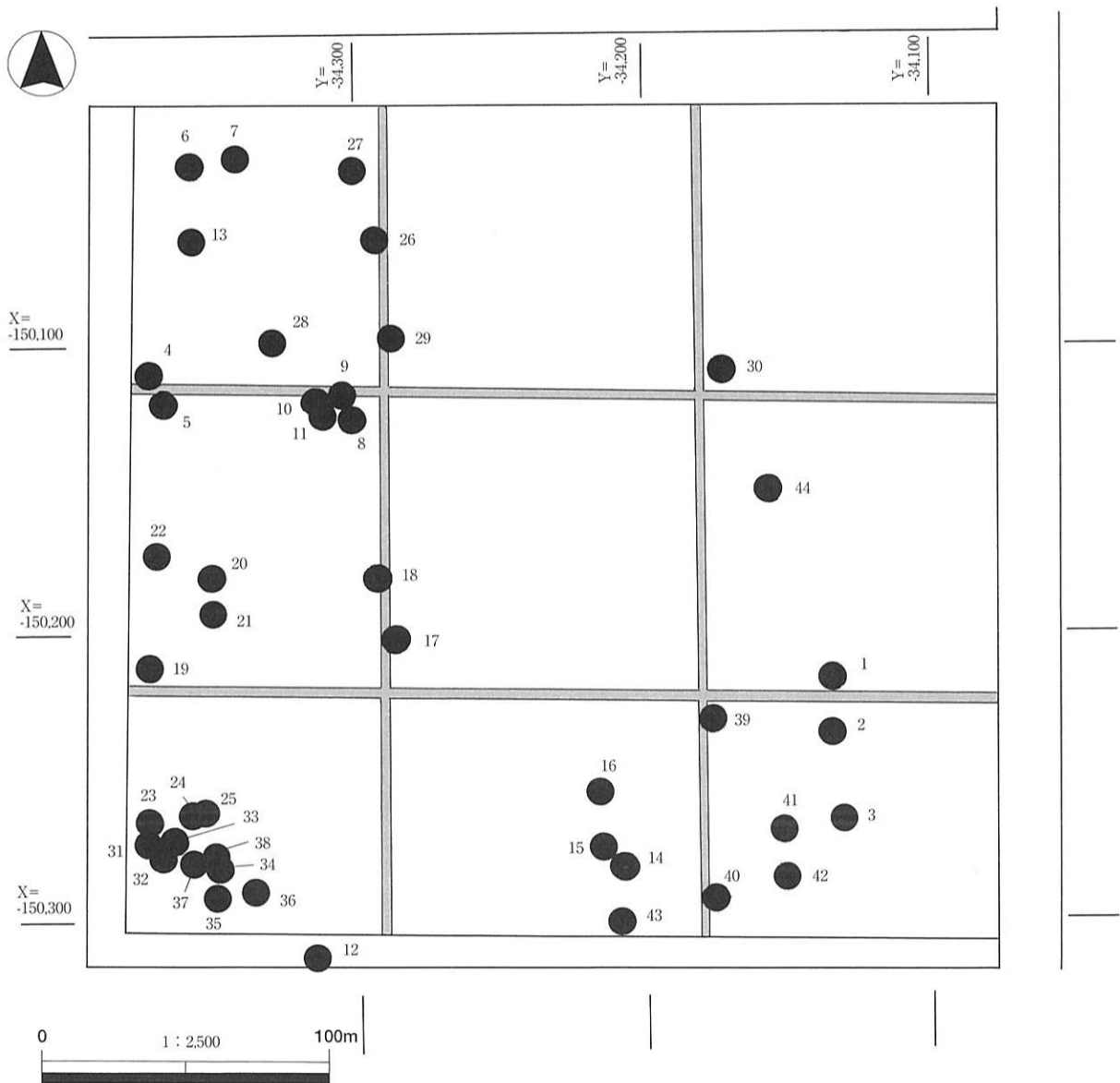
図IV-3には井戸の分布を示した。これらは1時期に掘削されたものではないが、各坪にまんべんなく存在するのではなく、集中する部分が認められる。まず、本地区南西部に集中する部分が認めら



図IV-2 第1b面平面図(井戸を除く)

れるが、これは弥生時代の流路の位置におおむね対応している。この部分では、下層の流路堆積物が地下水を多く含んでおり、水が得やすかったと考えられる。また、大局的にみて、井戸の分布が当地区の西部と南東部に集中することも注意される。この分布は、図Ⅱ－3で示した微高地AとCの末端に対応しており、微地形に対応した土地利用や水回りと関連する可能性がある。

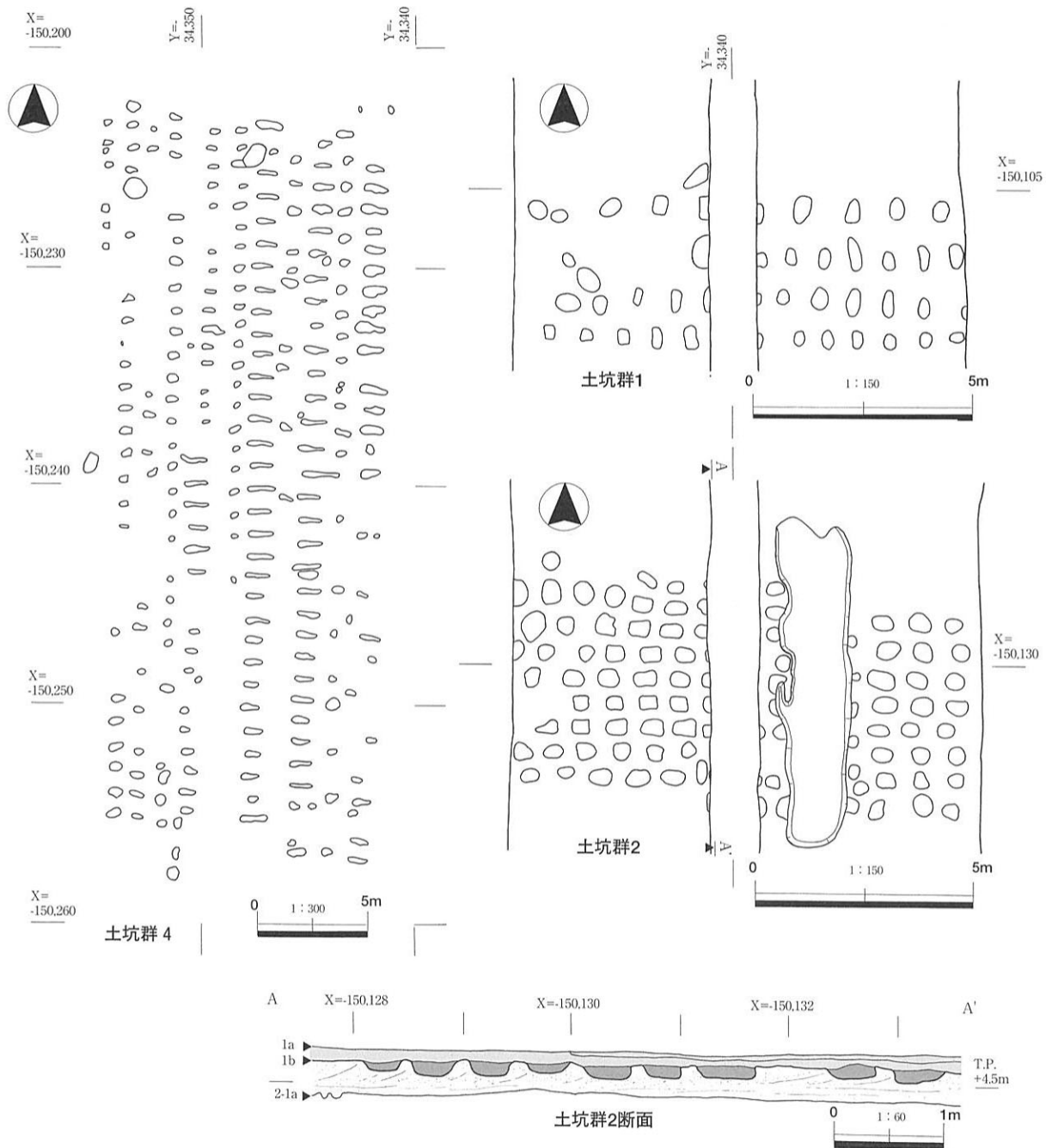
土坑群は当地区西部で検出された(図Ⅳ－4、図版5－4～7)。それらの特徴は、第1b層の中程まで掘削され、第1a層下部(7.5YR5/3にぶい褐細砂～中砂混じりシルト)に第1b層の砂のブロックが若干混じった土で充填されていることにある。このことは、この遺構が第1a層の初期段階の耕作に伴って形成されたことを示している。土坑群は、整然と並んだ長辺1m前後の土坑によって構成されている。また、溝群も断面の様子が土坑群と類似する。これらはすべて、第1b層が攪乱を受けずに良好に残存している場所でのみ検出されているが、同様な遺構が他の部分にも本来存在し、第1a面の耕作によって消滅してしまった可能性もある。これらの遺構の性格については断定できないが、ひとつひとつの土坑が何らかの作物に対応するようにも見えるため、畝作に関連する遺構の可能性もある。



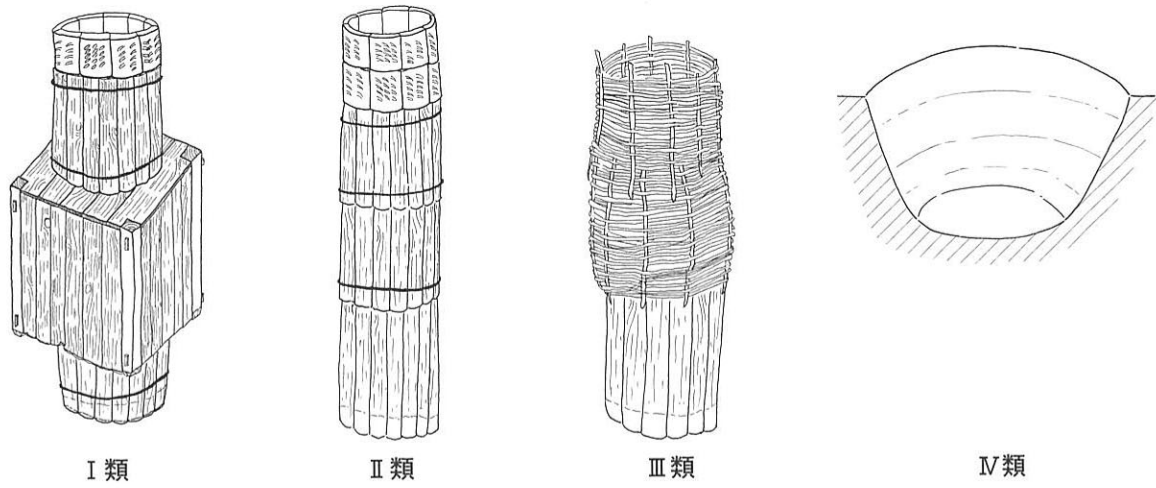
図Ⅳ－3 第1b面井戸分布図

また、十六ノ坪で検出された土坑群5は、第2-2a層下面まで達する土坑により構成されていた。その埋土はシルトブロックと第1b層の砂が入り混じったもので(図版5-7)、一気に埋め戻したものと考えられる。この遺構の性格については、何らかの目的で第2-1a・2-2a層の砂混じりシルトを採取した痕跡と推定される。

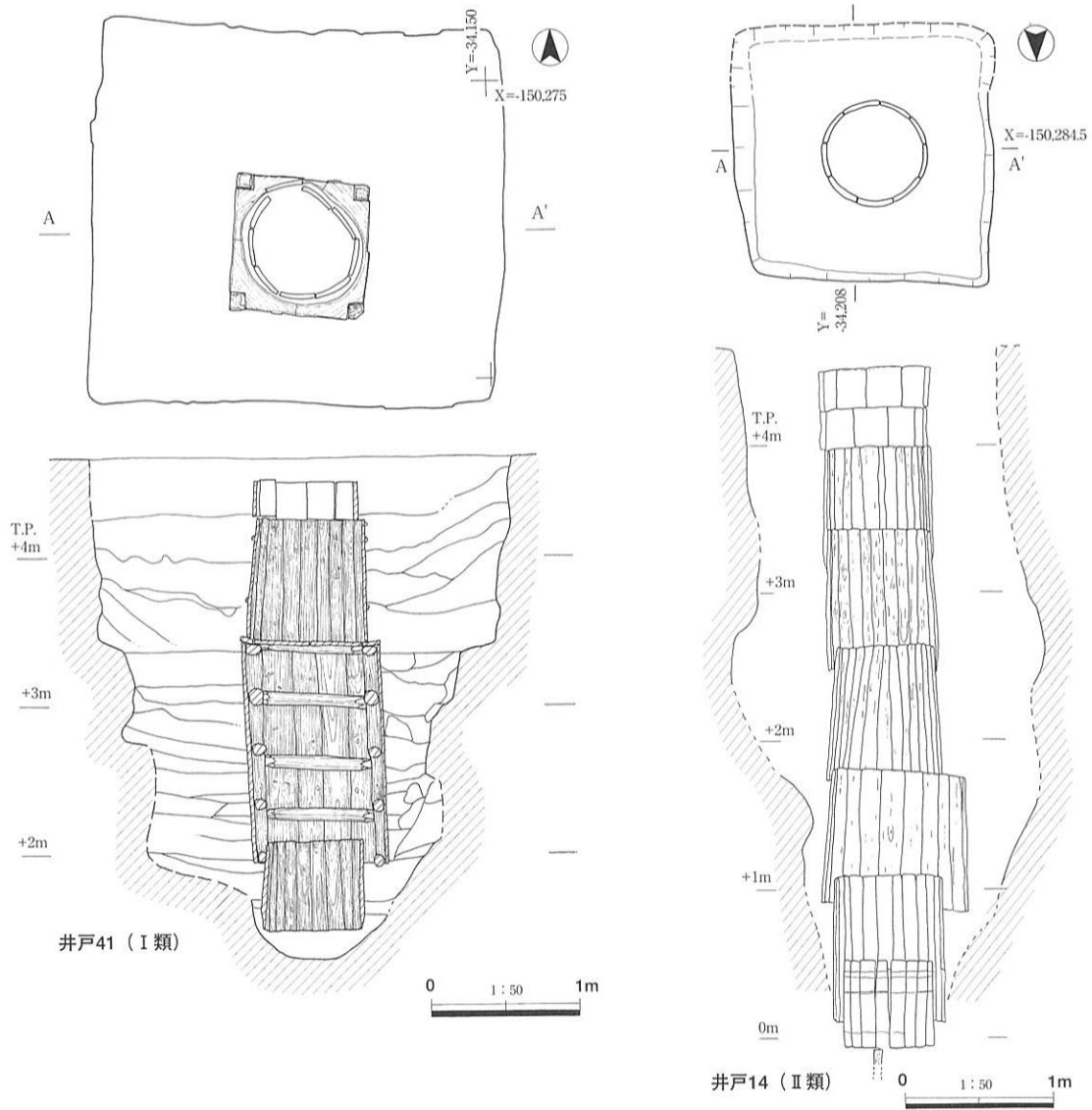
なお最後に、遺物との関係で大きな変更がある土坑1についてふれておく。この遺構は第1b面で検出されたが、第1b面段階の掘削の際に完掘できていなかったようであり、第2-2a面の写真(図版8-1)でその存在が確認できた。概要I(p.54)では、第2-2b面検出の土坑とそこから出土したとされる磁器の写真が並べて掲載されているが、台帳で確認したところ、磁器はこの遺構から40mも離



図IV-4 第1b面土坑群



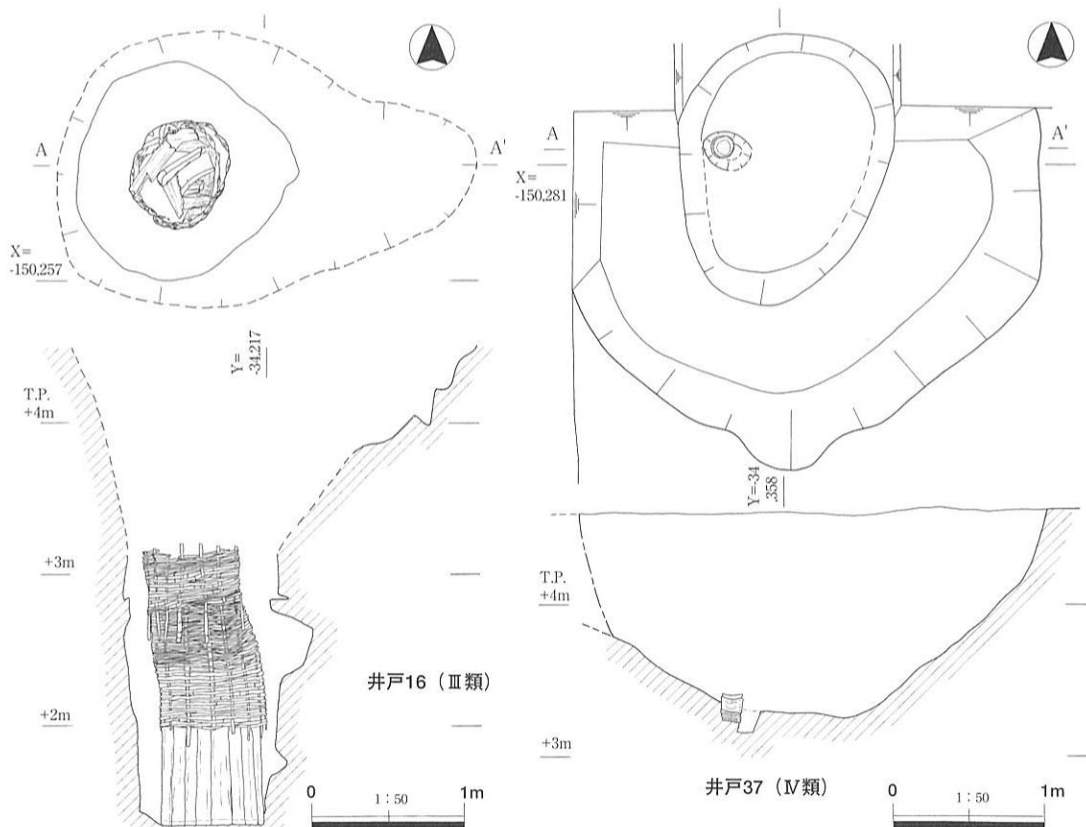
図IV-5 井戸形態模式図



図IV-6 第1b面井戸①

表IV-3 第1b面井戸一覧

番号	調査区	調査時の遺構名称	現状構造 (上から)	備考	掲載報告書	概要XII掲載番号
1	Dトレ	SE01	II 瓦1段桶4段	内部より瓦出土	府試I	1
2		SE02	II 桶4			2
3		SE03	II 桶1			3
4	Bトレ	SE201	I 方形枠1桶1	抜取痕あり。下部を93-1調査区で調査(井戸7)	府試II	4
5		SE202	I 方形枠二重1桶1			5
6	86-1	井戸1001	I 方形枠1	側板半割竹。枠上に板並べる。内部より瓦	府発III	6
7		井戸1002	I 方形枠1。内部より瓦出土			7
8	86-2	井戸101	IV 素	水溜		8
9		井戸102	IV 素			9
10		井戸103	IV 素			10
11		井戸104	IV? 木杭			11
12	86-4	井戸101	II 瓦2桶2以下不明	瓦落ち込む		12
13	88-1	井戸101	I 瓦1方形枠1桶1		府発IV	13
14	89-3	井戸1	II 瓦2桶6	90-4調査区井戸1として下部を調査	概要I	14
15		井戸2				15
16	90-1(B)	井戸3	III 竹籠2桶1			16
17		井戸4	I 瓦1方形枠1桶1		概要IV/XII	17
18		井戸6	I 方形枠1桶1			18
19	90-1(C)	井戸9	I 方形枠1	桶抜取痕あり	概要XII	19
20		井戸11	I 方形枠1			20
21		井戸12	I 方形枠1			21
22		井戸13	II 桶4(方形枠1)			22
23	90-1(D)	井戸17	I 方形枠1	方形枠破壊後桶のみで再構築(当初はI類)		23
24		井戸19	I 方形枠1			24
25		井戸25	I 方形枠1桶1			25
26	90-2(A)	井戸1	I 方形枠1桶2	井戸19によって破壊される。井戸19を壊して設置。桶抜取痕あり	概要III	26
27		井戸2	IV 素			27
28	90-3(A)	井戸1	I 方形枠	現代水路により上部破壊	概要II	28
29		井戸4	I 桶1方形枠1桶1			29
30	90-3(C)	井戸1	I 瓦1桶1方形枠1桶3小桶1	府教委E11ノSE201と同じ	概要未掲載	30
31	92-7	井戸1	II 桶2	上部は抜き取られる。井戸瓦あり	府発I・概要XI	31
32		井戸2	I 方形枠1			32
33		井戸3	I 桶2方形枠1桶1			33
34		井戸4	I 方形枠1桶2			34
35		土坑1	IV 素			35
36		土坑3	IV 横倒した瓦管1			36
37		土坑5	IV 瓦管を柄杓2の中に差し込む			37
38	土坑6	IV 素	38			
39	93-1(A)	井戸1	II? 桶3	廃絶時に井戸枠抜き取られる	概要XV	39
40	93-1(B)	井戸2	II 桶3			40
41		井戸3	I 瓦1桶1方形枠1桶1			41
42		井戸4	I 桶2方形枠1			42
43		井戸5	I 瓦2方形枠1			43
44		93-2(B)	井戸1	I 桶1方形枠1桶1	内部に井戸瓦落ち込む	概要XVI



図IV-7 第1b面井戸②

れた位置から出土したことが判明した。その位置は土坑1の周辺にあたるため、この磁器（図Ⅳ-9：22）は土坑1埋土に含まれていた可能性が高い。

次に第1b面の遺構から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ-8・9）。

（1～5）は井戸44から出土したものである。磁器蓋（3）、碗（2）、陶器播鉢（4）、硯（5）等である。磁器は18世紀代の波佐見焼染付である。硯（5）の石材は高嶋石で、外面以外に黒色物質が塗布されており、凹みは砥石としての使用痕かもしれない。（1）は井戸椀瓦である。井戸31からは磁器碗（6）、漆器椀（7）等が出土した。（6）は波佐見焼染付で18世紀中頃後半のものである。（7）は外面に黒漆、内面に朱漆が塗られている。井戸29からは磁器碗（8）が出土した。17世紀後半～18世紀前半の唐津系灰釉陶器である。井戸25からは、磁器蓋碗蓋（9）、皿（10）、砥石（11）、鉄釘（12）等が出土した。（9）は伊万里窯系、（10）は波佐見焼染付で、どちらも18世紀代である。井戸26からは土師器皿（13）が出土した。17世紀ぐらいのもと考えられる。井戸33からは、陶器蓋（15）、ミニチュア土製品（14）等が出土した。（15）は唐津窯系灰釉の茶入れの蓋であるが、木や骨で作られた蓋が多いため、出土することは少ないものらしい。16世紀末～17世紀のもので、（14）の土人形が18～19世紀のもと考えられるので、遺構の時期は示さない。井戸17からは木製簪（16）が出土した。井戸18からは木製下駄（17）が出土した。井戸34からは金属製簪（18）が出土した。金メッキで耳かきがつき、18世紀前半くらいのもと思われる。また、（19）・（20）の木製柄杓と（21）の瓦質土管は、前述のように井戸37の底面に設置されていたものである。時期は不明である。なお、（22）は肥前系黒釉徳利で、前述のように土坑1から出土したと考えられる。19世紀代のものである。

このように、第1a層中や第1b面検出遺構の出土遺物は、時期にばらつきがある。このうちの最新遺物の時期や第1b層・第2-1a層出土遺物の時期を勘案すれば、第1a層の耕作時期は19世紀以降と考えられる。

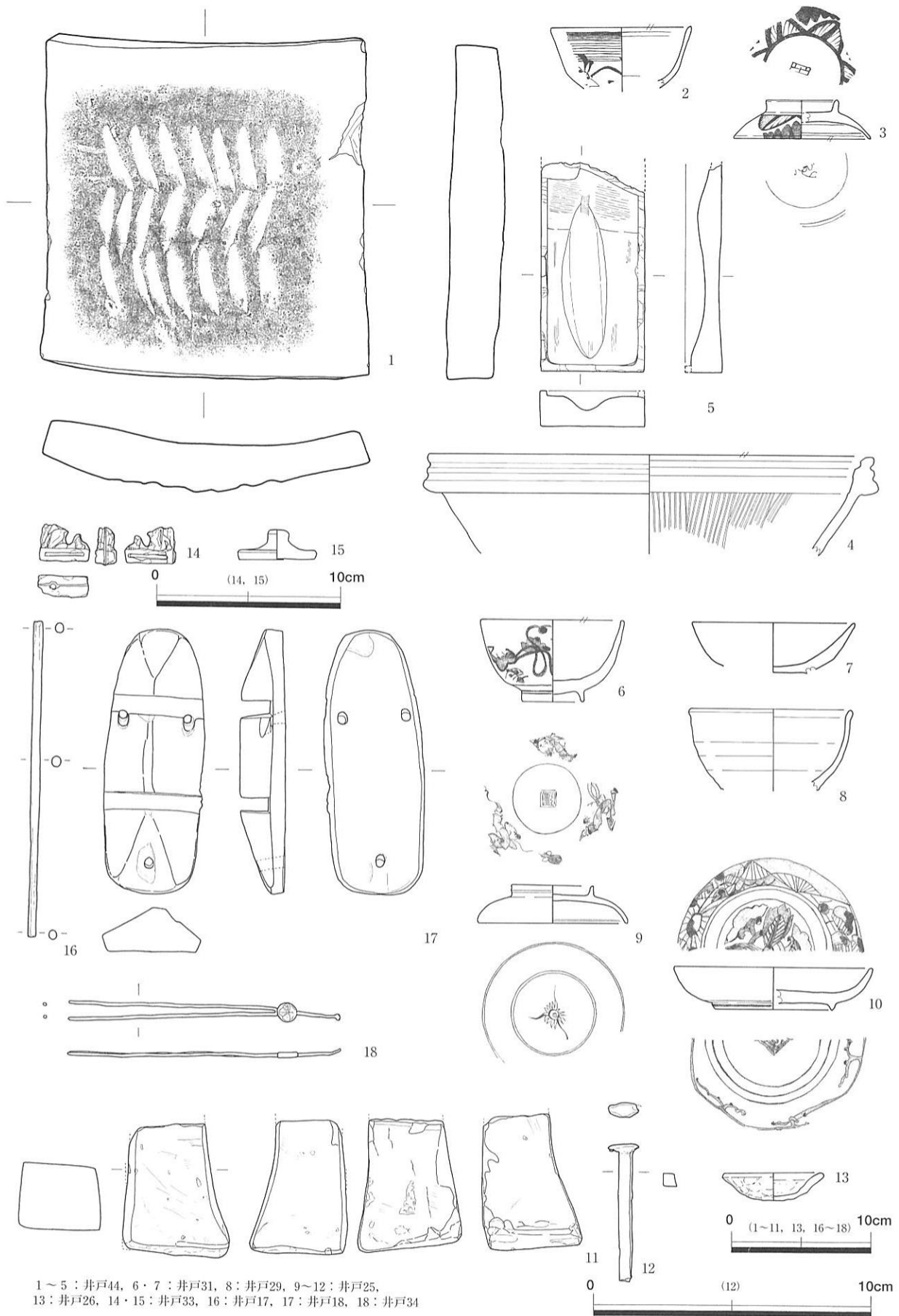
第1b層 氾濫堆積物である第1b層からは、図Ⅳ-10に示した遺物が出土した。磁器碗（4）、重ね鉢（3）、陶器端反皿（6）、碗（1）、鉢（2）、乗燭灯明皿（5）、土師器皿（7・8）、羽釜（9）、木製横櫛（10）等である。

磁器は伊万里窯系染付（3）、波佐見焼染付（4）で、いずれも18世紀のものである。陶器は瀬戸・美濃窯系（1）、美濃窯系（6）、唐津窯系（2）、備前焼（5）とさまざま、時期も16世紀中頃～18世紀と幅がある。（1）は黄釉天目、（2）は灰釉である。土師器皿は16～17世紀ごろ、土師器羽釜は15世紀と思われる。このように、第1b層から出土した土器は18世紀までのものである。

第2-1a面 この面は第1b層を除去して検出した。遺存状況については、第1b層が厚く残存していた当地区西部と南東部ではよかったが、他の部分では第1a層段階の耕作の影響で悪かった。なお、90-2調査区においては第2-1a層が2層に細分されているが、平面図では第1b面に覆われた面を対応させた。このため、90-2（H3）調査区については、第4面が第2-1a面に対応する。

遺存状況がよかった十六ノ坪、十八ノ坪、四ノ坪においては、レベルはそれぞれT.P.+4.1～4.4m、3.9～4.3m、4.2～4.4mであり、全体として平坦であることがわかる（図Ⅳ-11）。

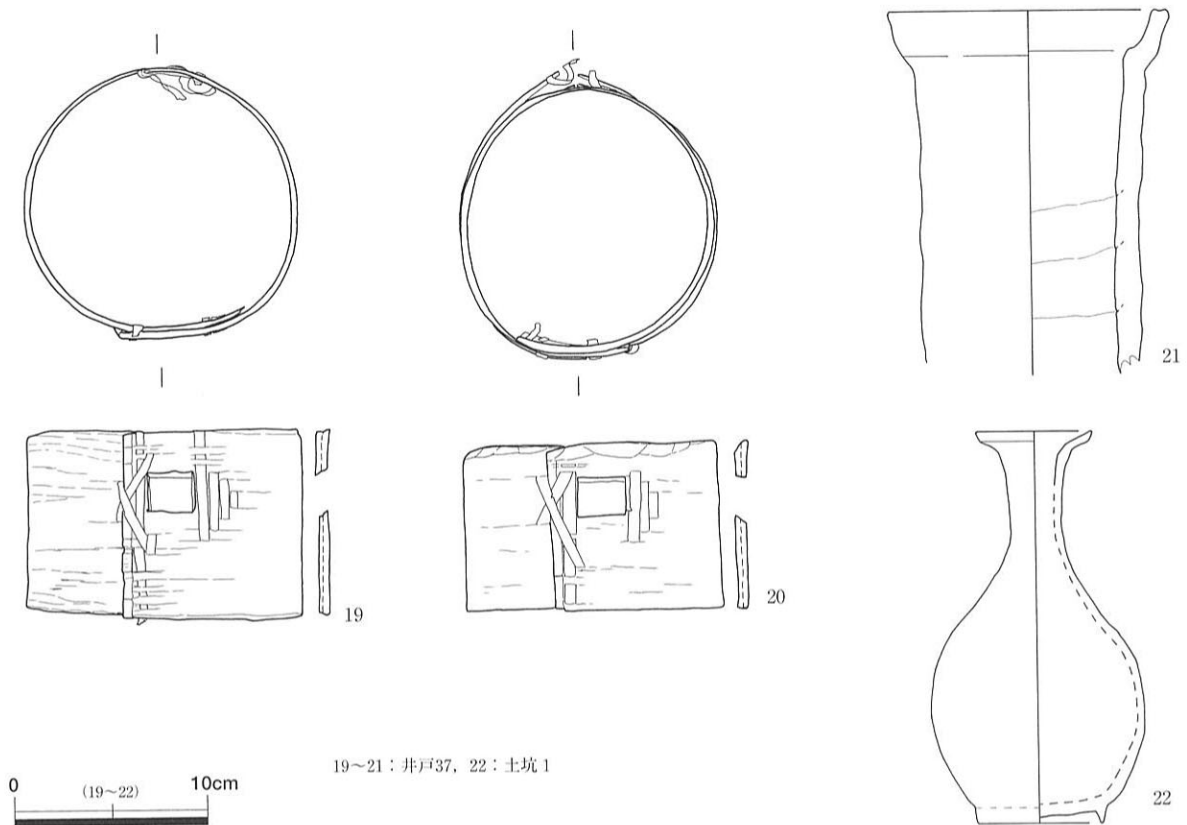
検出した遺構としては水路、畦畔、島畠等がある。まず坪境では、六・七ノ坪、五・八ノ坪、四・九ノ坪間を南北に貫く水路1が検出された（図版7-4）。この水路の東側は坪境畦畔によって画されていたが、西側は島畠16、島畠13、小畦畔によって画されていた。この水路1に関連する遺構として、九ノ坪北東隅では水口が、また四ノ坪北西隅では大畦畔に埋設された木樋1が検出された（図版7-6）。木



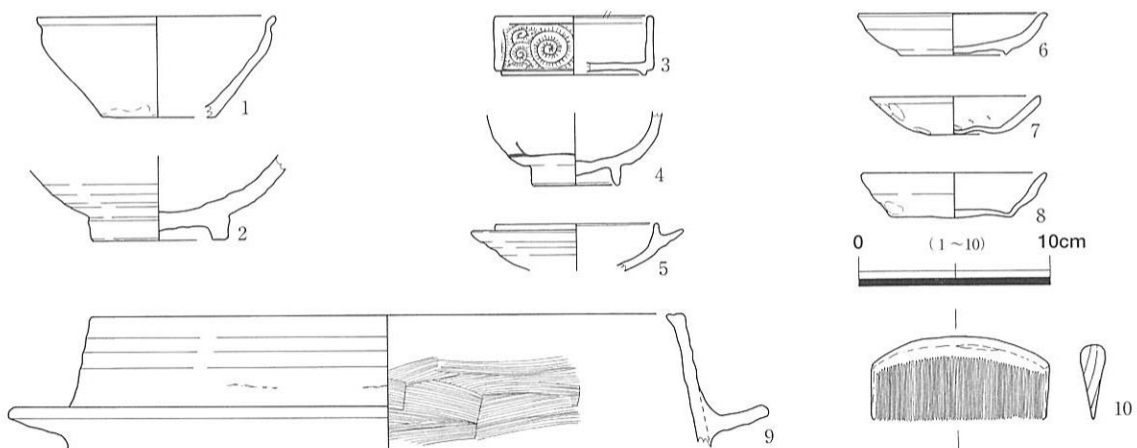
1~5: 井戸44, 6・7: 井戸31, 8: 井戸29, 9~12: 井戸25,
13: 井戸26, 14・15: 井戸33, 16: 井戸17, 17: 井戸18, 18: 井戸34

図IV-8 第1 b面遺構出土遺物①

樋1は板材を組み合わせたものである。また、七・十八ノ坪、八・十七ノ坪、九・十六ノ坪間の坪境は、現代のコンクリート水路によって破壊されていた。その他の坪境では大畦畔が検出されたが、このうち、七・八ノ坪間のものには水口が2ヶ所認められた。なお90-1調査区では、B地区とD地区の間で十六・十七ノ坪間坪境の畦畔が数mずれて検出されたと報告されている（概要XII, pp.37-38）。このうち、B地区に関しては概要IV（p.21）に断面図が掲載されているが、この断面の解釈には大きな問題があり、これが遺構検出に影響を与えたと考えられる。すなわち、第2-1 a面の坪境畦畔は、第2-2 a面坪境の南側にある大畦畔が踏襲されたと想定されている。これは、第1 b層に対比される「3-2層」が堆積時の構造を保持していると判断し、それを除去した段階の段差を第2-1 a面に帰属すると考えた



図IV-9 第1 b面遺構出土遺物②



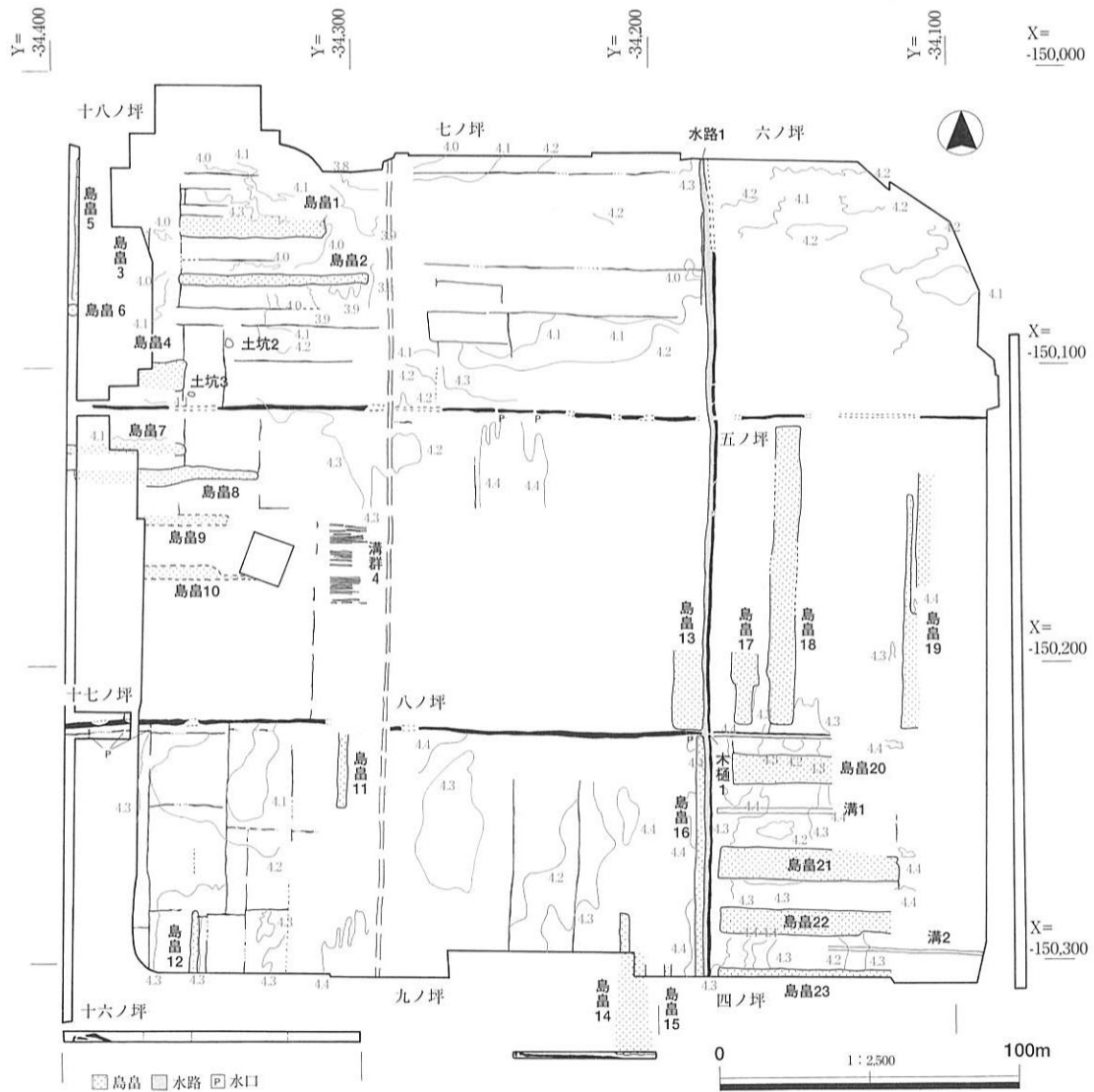
図IV-10 第1 b層出土遺物

表Ⅳ-4 第2-1 a面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
島畠1	90-2(H2) 島畑1	島畠17	93-1 島畑1
島畠2	90-2(H2) 島畑2		93-2(C) 島畑17
島畠3	90-1 島畑1	島畠18	90-3(C) 島畑4
島畠4	90-1 島畑5		93-1 島畑2
島畠5	Fトレンチ島畑		93-2(B) 島畑4
島畠6	Fトレンチ島畑		93-2(C) 島畑16
島畠7	Fトレンチ島畑	島畠19	87-2 島畠204
島畠8	90-1 島畑2		88-2 島畠403
島畠9	90-1 —	島畠20	93-1 島畑4
島畠10	90-1 島畑49	島畠21	93-1 島畑5
島畠11	90-1 島畑6	島畠22	93-1 島畑25
島畠12	92-7 島畑1	島畠23	93-1 島畑26
島畠13	89-2 島畑3	水路1	90-2(H4) 溝132
	93-1 島畑6		90-3(C) 坪境3
	93-2(C) 島畑18	木樋1	93-1 木樋1
島畠14	89-3 島畑3	溝群4	90-1 畝群
	93-1 島畑28	土坑2	90-3(A) 水溜め状遺構1
島畠15	93-1 島畑27	土坑3	87-3 土坑201
島畠16	93-1 島畑7	溝1	93-1 —
		溝2	93-1 溝26

ものである。確かに、X = -150,220地点付近には段差が存在するが、写真を確認したところ、「3-2層」と記載された砂層にはシルトブロックが多く混じっており、人為的攪乱を受けた可能性が高いことが判明した。この段差は、第2-1 a面埋没後の人為的攪乱によって形成されたと推定される。なお、D地区で検出された坪境畦畔の延長部分は平坦であるが、人為的攪乱を受けた「3-2層」はこの部分にも存在しているので、第2-1 a面の坪境畦畔は削られてしまった可能性が高い。

その他の畦畔は、第1 b層が厚く堆

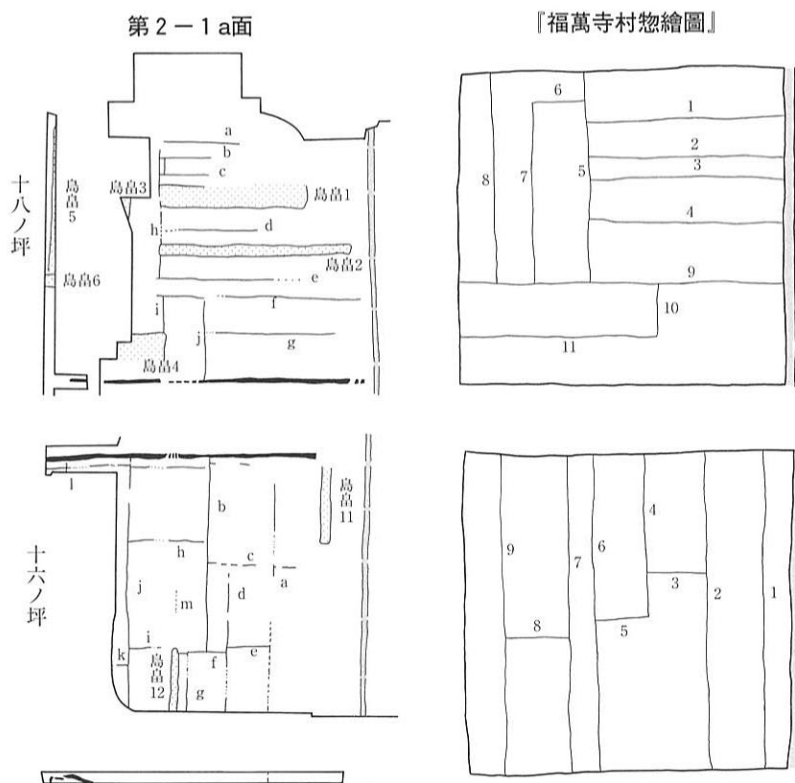


図Ⅳ-11 第2-1 a面平面図

積していた十六・十八ノ坪や七ノ坪の一部で良好に検出された。その配置状況は後述することにし、ここでは水回りに関係する畦畔について説明する。まず、十六・十七ノ坪間坪境畦畔の南側で検出された東西方向の畦畔は、坪境畦畔に平行してのびており、幅3m程度の細長い区画を形成していた。この区画の中は南北方向の畦畔で細分されていた。また、四・五ノ坪間でも大畦畔の南側に小畦畔が平行して存在しており、同様の細長い区画が存在していたが、この区画の西端には木樋1があり、水路1からこの区画に導水していたと考えられる。このような細長い区画内は田面の他の部分とレベル差がないため、稲が植えられていた可能性が高いものの、導水時には坪内に水を回すための水路としての役割も有していたと推定される。このような細長い水田区画は、第3-2a面や第4a面でも検出されており、坪内の水回りに関係した畦畔配置の工夫と考えられる。

島島は、当地区南東部にあたる四ノ坪、五ノ坪、八ノ坪東端、九ノ坪東部、そして当地区西部にあたる十六ノ坪の一部、十七ノ坪北半、十八ノ坪において、計24基検出された。前者の範囲で検出されたものは高さが20cm程度であったが、後者の範囲のものは5cm程度と低かった。

その他の主要遺構としては、土坑2・3、溝1・2、溝群4があげられる。これらはすべて第1b層によって埋没していた。十八ノ坪で検出された土坑2・3は溜井と考えられる。さらに、四ノ坪の溝1・2は深さが5cm程度であるが、坪内の水回りの補助的役割を果たしたのか、地割に関わるものの可能性がある。なお、十七ノ坪で検出された溝群4は調査が不十分で不確定要素もあるが、畝間の溝の可能性が考えられる。その場合、溝群4の西側で南北方向にのびる小畦畔が検出されており、この畦畔と八・十七ノ坪間坪境に挟まれた部分が畝として利用されていたと推定される。ただし、この畝が常畝であったかどうかは疑問であり、周囲の田面とレベル差がないことからすれば、田畝輪換(宮本1994)によって、水田が畝に切り替えられた段階で埋没した可能性も考えられる。

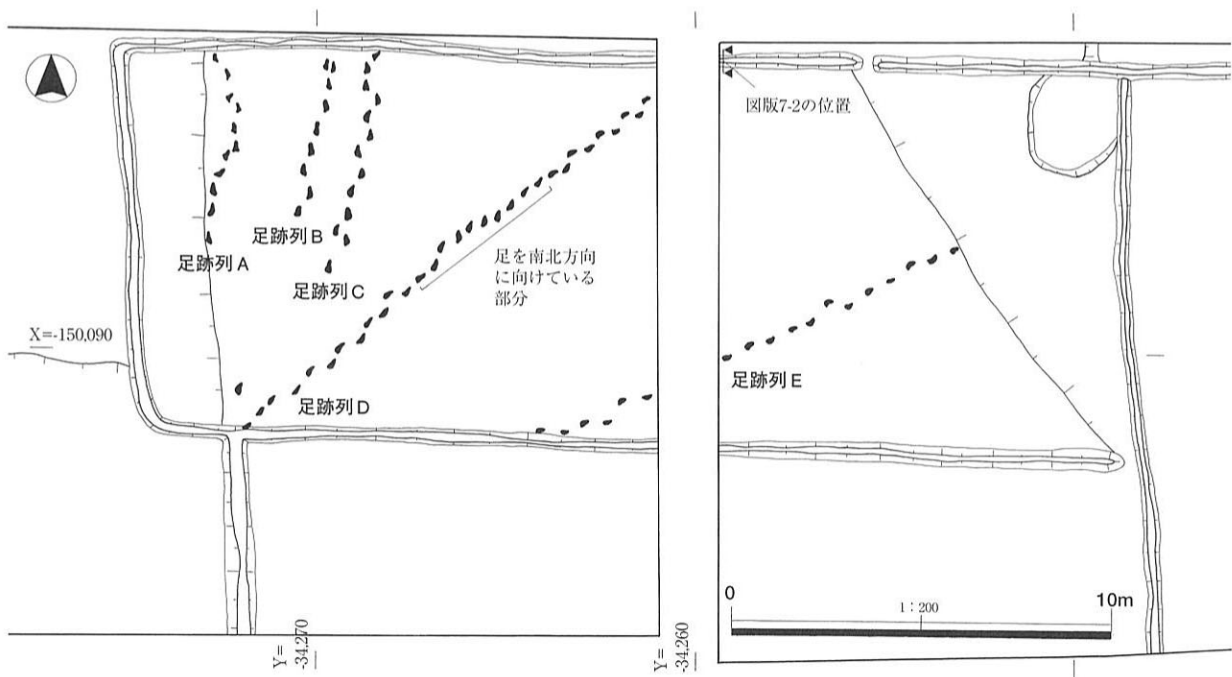


図IV-12 第2-1a面と『福萬寺村惣繪圖』の比較

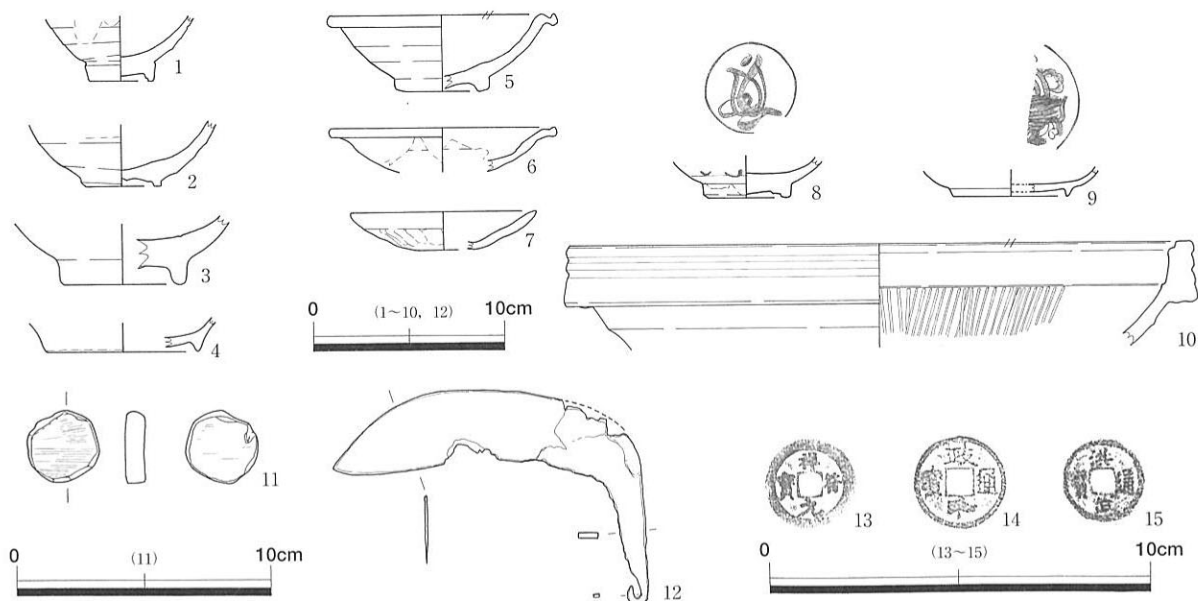
遺構配置で注目されるのは、『福萬寺村惣繪圖』との比較である(図IV-12)。この問題については、遺構配置の全容がほぼ判明した十六ノ坪、十八ノ坪を中心に検討されたことがある(井上1995)が、遺構の認識に若干の変更があるため、ここで再検討したい。まず十八ノ坪の北側では、畦畔hを境に地割の方向が変化している。すなわち、その東側は東西方向で、西側は島島3・5からみて南北方向と思われる。そして、島島6は東西方向にのびる可能性が高く、その北端と畦畔eをつないだ線の南側は、間に南北方向の畦畔i・jがあるものの、基本的に東西方向の地割と考えられる。こうした

点は絵図にみられる地割の特徴と一致する。さらに細かい部分をみると、畦畔 e・d・c が絵図の 9・4・3 に対応し、島畠 1・2 はこれらの畦畔で区画された地割内の中央に造成されていた可能性が考えられる。また、絵図の 2 は畦畔 a ないし b に、絵図の 10 は畦畔 j の北半に対応する可能性がある。一方、十六ノ坪では畦畔 b・f・島畠 12 を結ぶクランク状の区画線の存在が注意される。これは絵図の 4・5・6 の南半を結ぶ区画線に対応すると考えられる。そして、絵図の 2・3 が畦畔 a・c、7 が畦畔 j に対応し、畦畔 1 のあり方からみて、絵図の 9 に対応する畦畔が調査区外に存在すると予想される。なお、絵図の 6 の北半に対応する畦畔は検出されていないが、誤認の不安があるため破線で示した m が正しいとすれば、これが 6 北半に対応する可能性も考えられる。このように、これらの坪においては、遺構配置と『福萬寺村惣絵圖』に示された地割は完全には一致しないものの、共通点が認められる。その他の坪に関しては、四ノ坪では島畠および第 1 b 層で埋没した溝が検出されているが、東半では遺構が検出されておらず、十分な比較ができない。また、七ノ坪は基本的に南北方向の地割と考えられるが、遺構の遺存状況が悪く、本来存在した畦畔の一部しか検出されていない可能性が高いため、詳細な検討はできない。

また、この面からは足跡が多数検出されている。ただし、第 1 b 層の構造が乱された部分では第 1 a 層の段階で踏みこまれた足跡（特にウシのもの）も存在すると考えられる。図 IV-13 には、七ノ坪で検出された人の足跡列を示した。これらは第 1 b 層で埋まっており、第 2-1 a 面埋没直前につけられたと考えられるもので、歩行状態が明確に認識できる。特に、足跡列 D（図版 7-3・5）は全体として北東から南西に向かって歩いているが、足を南北方向に向けて歩いた部分が一部存在する。足の向きと進行方向から考えて、この部分は足を交差させて歩いたと考えられるが、その動きから何かをまたいで歩いた状況が推定できる。つまり、この田面には稲が植わっていたが、丈がまだ低く、またいで歩けたと想像される。この点に注目すれば、第 2-1 a 面が埋没したのは初夏であったという推定も可能になる。江浦 洋（1992 a）は、この点と水害関連史料を合わせて検討し、第 2-1 a 面は享和 2（1802）年の洪水によって埋没したと考えた。この推定は、前述した第 1 b 層出土遺物の時期とも矛盾しない。



図IV-13 足跡列 A～E



図IV-14 第2-1 a層出土遺物

第2-1 a層から出土した遺物を、図IV-14に示した。中国製磁器（3・4・8・9）、陶器溝縁皿（5・6）・杯（1）・碗（2）・搥鉢（10）、土師器皿（7）、瓦質円板（11）、鉄鎌（12）、銭貨（13～15）等である。

中国製磁器は、龍泉窯系（3）、景德鎮窯系（4・9）、漳州焼（8）である。15世紀前半～17世紀初めのものである。陶器は唐津窯系（2・5・6）、肥前系（1）があり、（10）は堺産である。陶磁器の時期としては17～18世紀のものが多く、瓦質円板は面子に使ったためか、周縁を擦っている。銭貨は（13）が北宋銭（祥符元寶）、（14）が北宋銭（政和通寶）、（15）が明銭（洪武通寶）である。

以上のような遺物のあり方と第2-2 a層出土遺物の時期、さらには第1 b層の時期に関する推定を勘案すると、第2-1 a層の耕作時期は18世紀代と考えられる。

第2-2 a面 第2-1 a層を除去することによって検出した面である。第2-2 a層の上には第2-1 a層が直接のっているため、第2-1 a面の耕作による攪乱で本来の第2-2 a層上面は削られてしまっており、第2-2 a層自体が消滅してしまった部分も少なくなかった。なお、第2-1 a層を除去した段階で第2 b層の頭（第2-2 b面）が検出された範囲では、帯状にのびる砂礫の盛り上がりが見出された部分もあった。これは第2-2 a面に存在した島島の芯であったと推定されるため、それによって島島の位置を复原した（図IV-15）。

遺構面の対比に関しては、当センターの調査範囲では変更はないが、府教委87-3調査区と同Bトレンチの間で変更が必要となった。従来の考え方では、87-3調査区の第4遺構面とBトレンチの第2遺構面が対応するとされていた。しかし、前者がT.P.+4.0m前後であるのに対し、後者はT.P.+4.2m前後と食い違っている。しかも、後者については厚い砂層に覆われているが、その砂の上には、第1 b面土坑群と酷似する遺構が断面で確認できる。これらのことからみて、後者は第2-1 a面に対応すると考えられる。また、87-3調査区では第3遺構面という面が設定されたが、部分的に残存した砂層の頭で遺構検出をおこなったため、「遺構面としての認識が混乱しており、誤認の部分が多い」と報告されている（府発IV, pp.94-95）。また、Bトレンチ第3遺構面（T.P.+4.0m前後）では島島が検出されているが、写真を見ると島島の芯の砂が露出した状態で検出されたようである。位置関係からみて、この島島は87-3調査

区第3遺構面で砂の高まりとして表示されたものに連続する。したがって、87-3調査区第3遺構面については、すべてが誤認というわけではないと考えられる。さらに、90-1調査区における断面観察から、87-3調査区第3遺構面ベース層とされた砂層が第2b層に対比されると考えられ(図IV-23:下)、第2-2a面に対比されるのは87-3調査区第3遺構面、Bトレンチ第3遺構面と思われる。なお、87-3調査区第4遺構面は後述の第3-1a面に対比できる。

この面で検出されたのは、坪境畦畔、畦畔、島畠等である。まず、坪境の畦畔については、この面で造成されたものが第2-1a面にまで踏襲されたことが判明した。しかし、第2-1a面水路1についてはこの段階から存在したかどうかは明確にできていない。そして、現代コンクリート水路の部分はこの面も破壊されており、本来の姿は明らかにできなかった。ただし、七・八・十七・十八ノ坪の接点となる坪境交差点では「湿地」とされる凹地が検出されている(府発Ⅲ, p.73)。これは第2b層の堆積に伴って形成されたと推定されているが、「砂を踏みこんだ足跡が何層にもわたって検出された」とされており、徐々に埋没していったようである。この凹地に関しては、水田に導水する際に溜井として機能した可能性も考えられる。なお、第2-

表IV-5 第2-2a面遺構名称

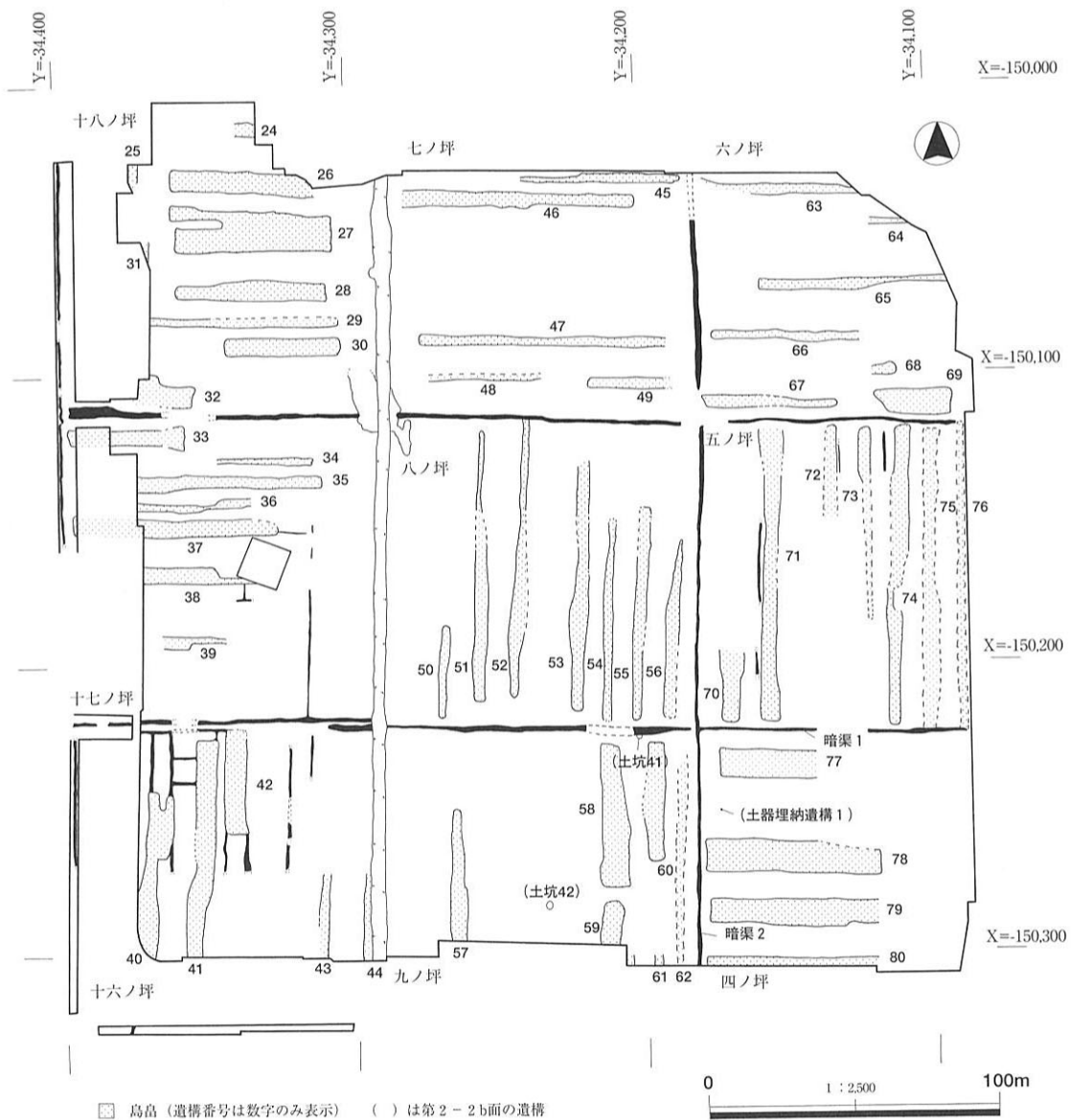
遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
島畠24	86-1 島畑2004	島畠56	89-2 島畑5
島畠25	86-1 名称不明(第2面)		Eトレンチ(第3面)
島畠26	86-1 島畑2001	島畠57	89-3 島畑9
島畠27	90-2(H2) 島畑3	島畠58	89-2 島畑13
	86-1 島畑2002・2003		89-3 島畑7
島畠28	90-2(H2) 島畑4	島畠59	89-3 島畑3
島畠29	90-1 島畑68		93-1 島畑33
	90-3(A) 名称不明(第5面)	島畠60	89-2 島畑12
島畠30	90-3(A) 名称不明(第5面)		89-3 島畑6
島畠31	90-1 島畑7	島畠61	93-1 島畑32
島畠32	90-1 島畑70	島畠62	93-1 島畑31
島畠33	87-3 砂の高まり	島畠63	90-2(H4) 島畑48
島畠34	86-2 名称不明(第3面)		92-6 島畑1
島畠35	90-1 島畑8・9	島畠64	92-6 島畑2
	90-3(A) 島畑2	島畠65	90-2(H4) 島畑49
	87-3 島畑304		92-6 島畑3
島畠36	90-1 島畑10	島畠66	90-3(C) 島畑5
	87-3 島畑305・306		93-2(A) 島畑1
島畠37	90-1 島畑11・48	島畠67	93-2(A) 島畑2
	87-3 島畑307		90-5 島畑5
島畠38	90-1 島畑49		Eトレンチ 名称不明
島畠39	90-1 島畑50	島畠68	90-5 島畑6
島畠40	90-1 島畑74	島畠69	90-5 島畑1
	92-7 名称不明(第3面)	島畠70	93-1 島畑8
島畠41	90-1 島畑75		93-2(C) 島畑20
	92-7 ー	島畠71	90-3(C) 島畑6
島畠42	90-1 島畑76		93-1 島畑9
島畠43	92-7 島畑2		93-2(B) 島畑5
島畠44	92-7 島畑3		93-2(C) 島畑19
島畠45	90-2(H3) 島畑36	島畠72	90-5 島畑5
島畠46	90-2(H3) 島畑27	島畠73	90-5 島畑3
島畠47	90-3(B) 島畑1		88-2 ー
島畠48	86-2 名称不明(第3面)	島畠74	90-5 島畑2
島畠49	Eトレンチ 名称不明		Iトレンチ ー
島畠50	89-1 島畑3	島畠75	86-3 ー
	89-2 島畑11	島畠76	86-3 ー
島畠51	89-1 島畑2	島畠77	93-1 島畑10
	89-2 島畑10	島畠78	93-1 島畑11
	86-2 名称不明		Dトレンチ ー
島畠52	89-1 島畑1	島畠79	93-1 島畑29
	89-2 島畑9	島畠80	93-1 島畑30
	86-2 名称不明	暗渠1	93-1 暗渠1
島畠53	89-2 島畑8	暗渠2	93-1 暗渠2
	Eトレンチ 名称不明		
島畠54	89-2 島畑7		
	Eトレンチ 名称不明		
島畠55	89-2 島畑6		
	Eトレンチ 名称不明		

1 a 面の記述でもふれた90-1調査区B地区の坪境は、この面においても問題がある。すなわち、概要IV(p.21)に掲載された坪境の断面図(Y=-34,300ライン)と、平面で検出された遺構の間に矛盾点が存在する。断面図では、X=-150,220ラインの南側には大畦畔が明瞭に確認できるものの、その北側には第2-2a層が存在しないことになっている。概要IV(p.22)の説明によると、第2b層の堆積後、幅約7mの溝が掘られたとされている。この溝については、下の面の坪境をあまり破壊していないことから、「坪境探しの溝」と推定された。第2-2a層が存在しないのは溝とされた部分にあたるが、平面調査ではこの部分から坪境畦畔が検出されたことになっている。こうした矛盾は、概要IVで推定された溝が平面調査で確認されたのではなく、断面図を見ながら想像されたものであることに起因するようである。今回断面写真を検討したところ、この溝の埋土の最下層は、第2b層の斜交層理を細分したものの可能性が高く、上層の

「ラミナのある粘土～シルト層」(2層分)のうち、上は攪乱を受けた地層で、第2-2a層に対比できることがわかった。その上を覆う「砂層」は第2-1b層というべきものである。なお、第2-2a層の上に蒲鉾状に表現された地層があるが、位置的にはこれが坪境畦畔と認識されたと考えられる。この部分に関しては良好な写真がなかったため十分な検証はできなかったが、D地区で検出された坪境に連続するため、畦畔が存在した可能性は十分考えられる。なお、この坪境南側の大畦畔の延長線上では、島島42の北端とそこから西にのびる畦畔が検出されている。両者の間には遺構が検出されなかった部分もあるが、本来は全体に畦畔が存在し、坪境畦畔とその畦畔の間が水路として機能していた可能性も考えられる。

また、四・五ノ坪間坪境畦畔盛土中から瓦管がつぶれた状態で出土した。これについては暗渠として機能していた時期があると推定し、暗渠1とした。また、四・九ノ坪間坪境畦畔盛土中からは、丸瓦を組み合わせた暗渠2が検出された(図版8-4)。

この面で検出された島島は57基ある。このうち四ノ坪のものは、一部が拡張されて、第2-1a面に踏襲されたことが判明した。しかし大半のものは、第2-1a面の耕作によって削られ、芯になってい



図IV-15 第2-2a面平面図

た砂だけが帯状に盛り上がって遺存していた。また、十六・十七ノ坪においては畦畔が検出されたと報告されている（概要ⅩⅡ，pp.39-41）。このうち、島島40の北端から北にのびる2本の畦畔は、畦畔としてはやや規模の大きなものである。第3-2 a面にも同じ位置に畦畔が存在しており、それが第2-2 a面に踏襲されたと考えられる。ちなみに、島島40も第3-2 a面島島98を踏襲したものである。その他の畦畔についても一応図示したが、面の遺存状況からみて疑問もあり、その存在を前提とした議論には注意が必要である。

ちなみに、この面の遺構配置を『福萬寺村惣繪圖』と比較すると、十八ノ坪では島島26～28の西端を結ぶラインが図Ⅳ-12の5に対応する可能性があり、島島25・31のあり方からみて、その西側の地割の方向は南北方向と考えられる。一方、十六ノ坪は絵図とは一致しないようである。

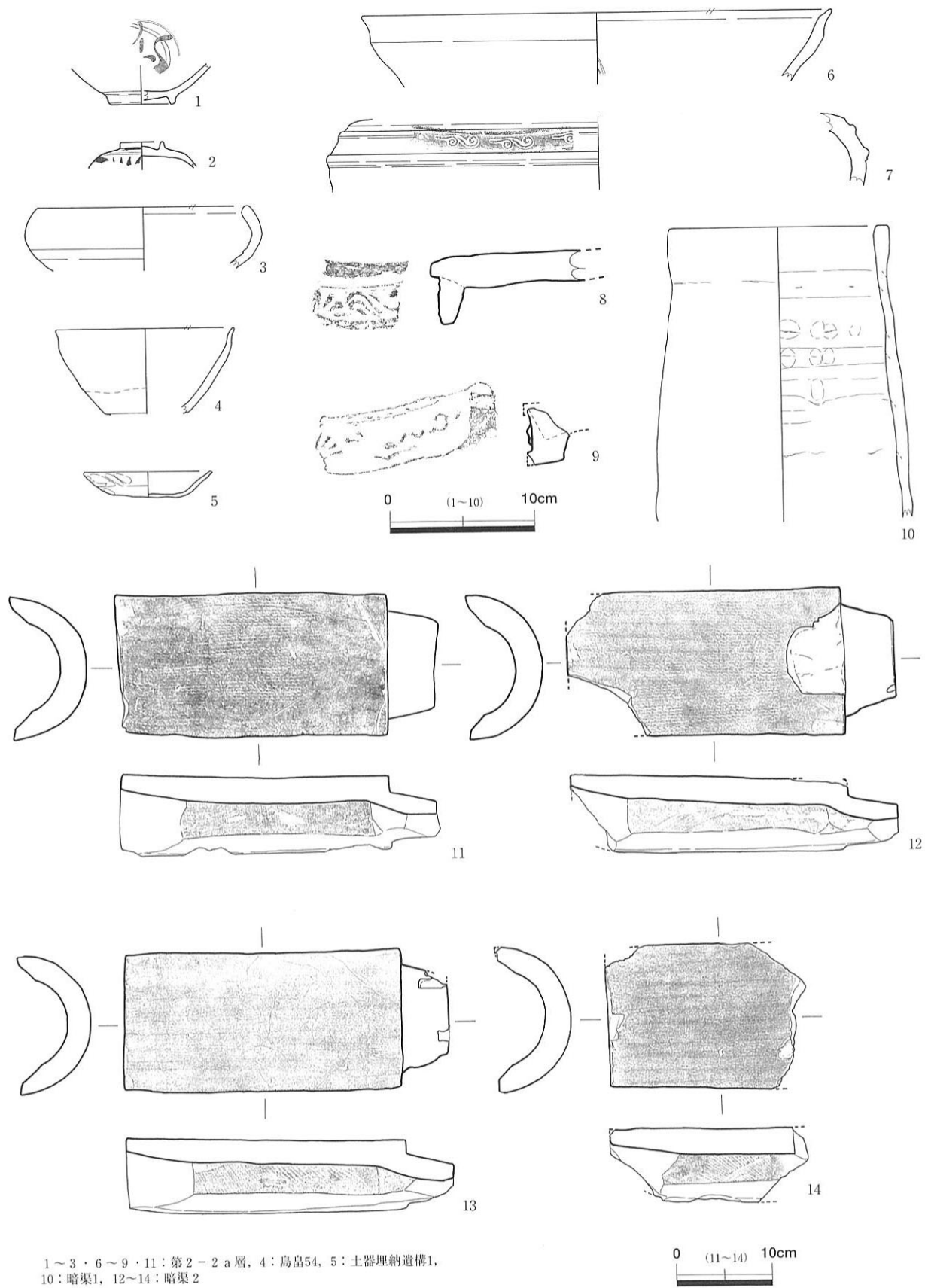
なお、第2-2 b面に帰属すると考えられる遺構もいくつか検出されている。四ノ坪では第2 b層掘削中に完形の土師器皿が出土したが、その周囲から種子がまとまって発見された。ウリ類30点、イヌホオズキ1点が取り上げられた（第Ⅴ章2-3）が、すべて回収することはできなかった。この状況からみて、第2-2 b面の遺構を見落としたものである可能性が高く、土器埋納遺構1とした。後述するように、この種の土器埋納遺構は農耕祭祀に関わるものと推定されているが、その中でも最も新しい事例である。また、八・九ノ坪間坪境畦畔脇にあたる部分から、土坑41が検出された（図版8-5）。断面のみで確認されているので平面形態は不明であるが、幅2 m、深さ1.2 mを測り、底は第4 a層下部まで達している。断面形状は上部がすり鉢状で、下部はほぼ垂直に立ち上がる。報告では、これを水田復旧時に坪境を探した「試掘」の跡と解釈している（概要Ⅰ，p.54）。その根拠は、七・八ノ坪間、五・八ノ坪間の坪境でそのような「試掘」跡と解釈される土坑が検出された（府発Ⅰ，pp.48-49）ことである。しかし、それらは深さが0.4 m程度で皿状を呈しており、土坑41とは形状や規模が異なる。位置や形状からすれば、井戸ないし水溜の可能性が高く、短期間の使用の後、人為的に埋め戻されたようである。また、土坑42も同様な機能を果たしたと推定される。

最後に、第Ⅲ章で若干ふれた噴砂についてみておくことにする（図版4-5）。これは89-1調査区において、第2-2面検出時に確認されたものである。ただしこの部分では、第2-1 a面の耕作によって第2-2 a層が大きく削られており、噴き出して地表に広がった砂も確認されていない。このため、噴砂が第2-2 a面まで上がっていたかどうかは不明である。この噴砂を生じさせた地震の発生時期は、第2 b層堆積以降、第2-1 a面の埋没以前と推定される。寒川 旭は、この地震を1707年10月28日の宝永南海地震に比定している（宮地・田結庄・吉川・寒川1998）。

第2-2 a層からは以下のような遺物が出土した（図Ⅳ-16・17：1～3・6～9・11・16・18～22）。磁器蓋（2）・碗（1）、陶器鉢（3）、瓦質播鉢（6）、火鉢（7）、軒平瓦（8・9）、丸瓦（11）、鉄製犁先（16）、漆器椀（18）、銭貨（19～22）等である。

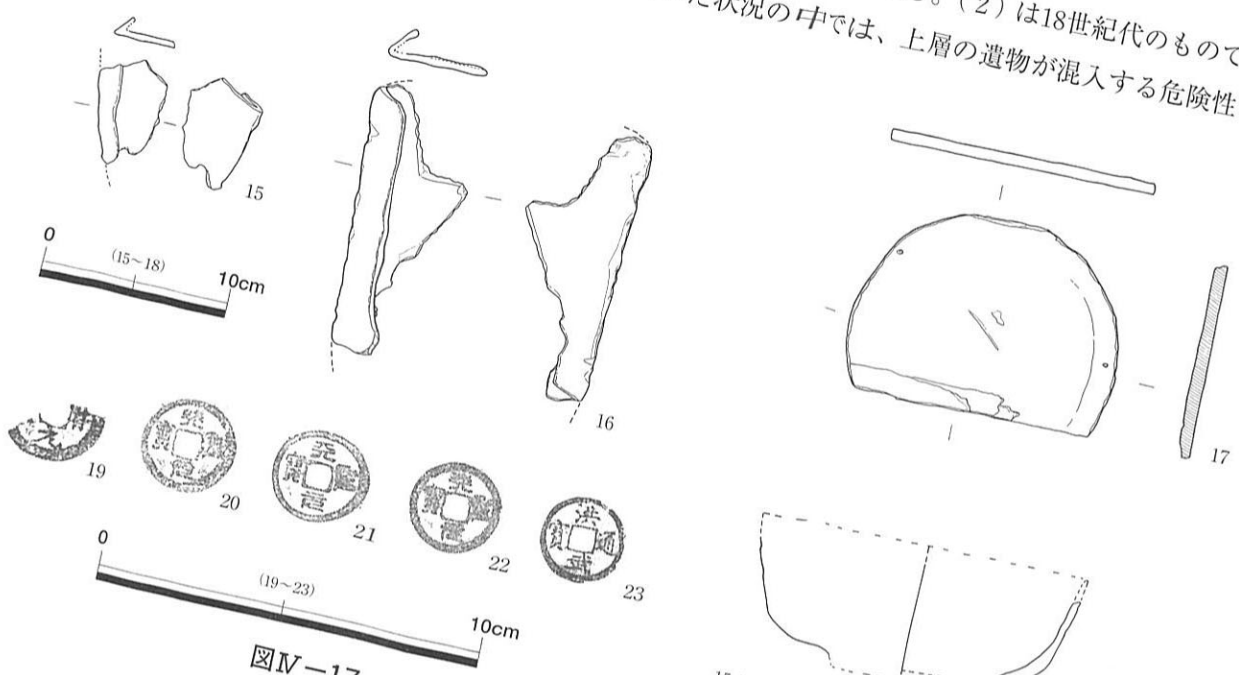
磁器は広東省のものかと思われるもの（1）と波佐見焼（2）で、時期は17世紀前半、18世紀のものである。（2）は五彩である。陶器鉢（3）は肥前系で16世紀後半～17世紀初めのもと考えられ、重ね焼きの痕跡がある。瓦質播鉢・火鉢は14世紀後半～16世紀ぐらいのもので、軒平瓦は室町時代前半のもの、丸瓦は室町時代（後半か？）のものである。17世紀までの時期の遺物が多い中、（2）のみが18世紀である。

漆器椀には内外面とも黒漆を塗っている。銭貨（19～22）はいずれも北宋銭で、祥符元寶（19）、天聖元寶（20～22）である。初鑄は前者が1009年で、後者が1023年である。



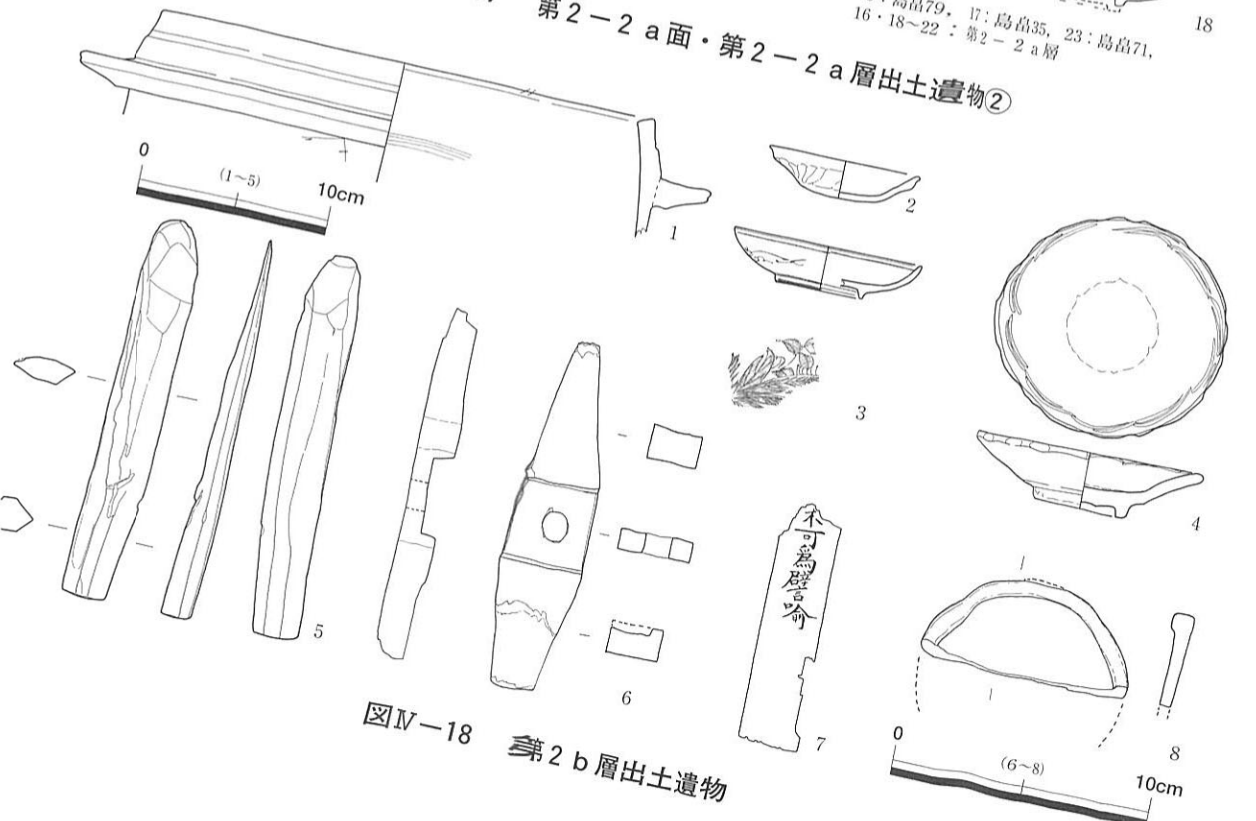
図IV-16 第2-2a面・第2-2a層出土遺物①

次に、第2-2a層関連の遺構から出土した遺物を列挙する(図IV-16・17)。島畠35盛土内からは、木製杓か桶の底板(17)が出土した。島畠54盛土内からは瀬戸・美濃窯系天目茶碗(4)が出土した。明銭であり、初鑄は鉄泥で16世紀前半のものである。島畠71盛土内からは洪武通寶(23)が出土した。明銭であり、初鑄は1368年である。島畠79盛土内からは鉄製犁先(15)が出土した。(10)は暗渠1に使用された瓦管である。(12~14)は暗渠2に使用された丸瓦であり、室町時代(後半か)のものと思われる。(5)は第2-2b面土器埋納遺構1から出土した土師器皿である。16~17世紀頃のものと思われる。(2)は18世紀代のものであるが、このように、第2-2a層では17世紀代までの遺物が主体をしめる。(2)は18世紀代のものであるが、第2-1a層と第2-2a層が接して堆積していた状況の中では、上層の遺物が混入する危険性もある。



15: 島畠79, 17: 島畠35, 23: 島畠71,
16・18~22: 第2-2a層

図IV-17 第2-2a面・第2-2a層出土遺物②



図IV-18 第2b層出土遺物

この作土層の耕作時期を推定するために最も適した遺物は、第2-2b面土器埋納遺構1出土の土師器皿であるが、この土器については時期の絞り込みが難しい。以上の点と、第2-1a層・第2b層出土遺物の時期を勘案して、第2-2a層の耕作時期は17世紀代を中心とし、18世紀に一部かかる可能性もある、と考えておきたい。

第2b層 氾濫・破堤堆積物である第2b層からは、図IV-18に示した遺物が出土した。中国磁器稜花皿(4)、土師器皿(2)、瓦質羽釜(1)、篋状木製品(5)、木製糸巻(6)、柿経(7)、漆器蓋(8)等である。

(4)は龍泉窯系青磁で16世紀後半のもの、土師器皿や瓦質羽釜は15世紀のものである。このように、第2b層出土土器の時期は16世紀後半までである。(6)は糸巻の横木である。柿経は『法華経』第六巻の一部、「不可為譬喩」と書かれている。柿経は第3-2a層(図IV-24:8)からも出土している。漆器は蓋かと思われるもので、内外面に黒漆が塗られている。

なお(3)の磁器皿は、89-3調査区において第2b層から出土したとされ、第3-2a面の時期推定に利用されたこともあった(三宮1991)。この調査区からは、この他にも同層準から染付の細片が出土したとされている。この点について関連資料を点検したところ、問題の陶磁器が出土したのはC3-h3地区に限られることが明らかになった(合計5点、遺物登録番号151)。空撮写真や平面図などを検討したところ、出土地区には府立八尾学園の基礎に伴う大きな攪乱が2つあり、両者合わせて10mグリッドの半分近い面積をしめていたことがわかった。この攪乱は第2b層の中位までおよんでいたことが判明しているため、問題の陶磁器は攪乱土中の遺物の混入品である可能性がきわめて高い。ちなみに、

表IV-6 第3-2a面遺構名称

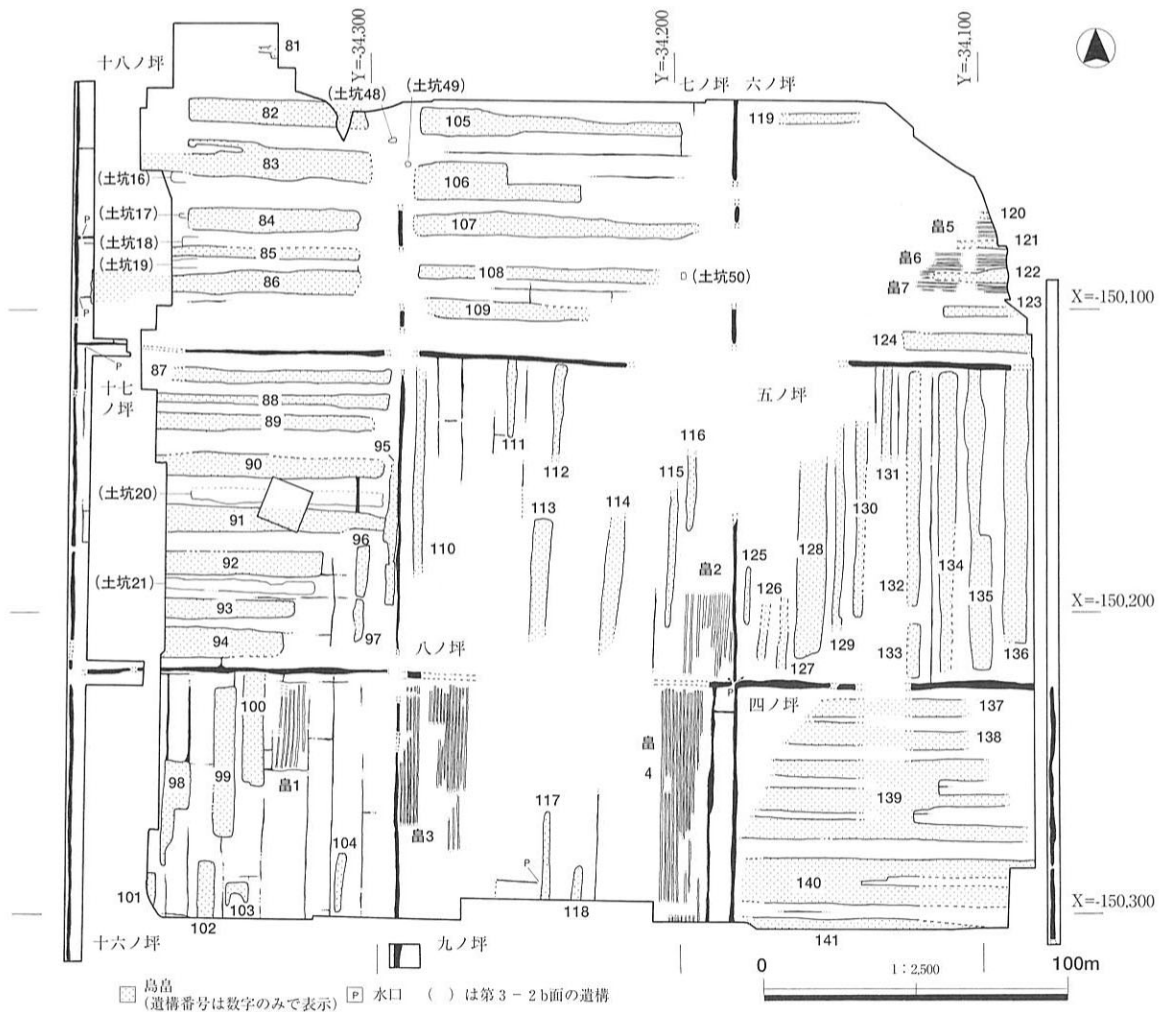
遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
島島81	86-1 島畑3001	島島120	90-2 島畑6
島島82	90-2(H2) 島畑8	島島121	92-6 島畑5
	86-1 島畑3002	島島122	92-6 島畑4
島島83	90-2(H2) 島畑9	島島123	90-5 島畑7
	90-1 島畑71	島島124	90-5 島畑8
	86-1 島畑3003・3004	島島125	93-2(C) 島畑23
島島84	90-2(H2) 島畑10		Eトレンチ 名称不明(第4面)
島島85	90-3(A) 島畑7	島島126	93-1 島畑18
	90-1 島畑24	島島127	93-1 島畑17
島島86	90-3(A) 島畑6	島島128	93-1 島畑12
	90-1 島畑25		93-2(C) 島畑22
島島87	90-3(A) 島畑5		93-2(B) 島畑8
	86-2 島畑405	島島129	93-2(C) 島畑21
島島88	90-3(A) 島畑4		93-2(B) 島畑7
	86-2 島畑406		Dトレンチ -
	90-1 島畑26	島島130	Dトレンチ -
島島89	90-3(A) 島畑3	島島131	90-5 島畑11
	90-1 島畑27	島島132	90-5 島畑10
	86-2 島畑407		87-2 島畑203
島島90	90-1 島畑23	島島133	88-2 島畑708
	90-1 島畑23 島畑37	島島134	90-5 島畑9
島島91	90-1 島畑23 島畑51		87-2 島畑205
島島92	90-1 島畑23 島畑52	島島135	Iトレンチ 掻き揚げ田8
島島93	90-1 島畑23 島畑53	島島136	Iトレンチ 掻き揚げ田7
島島94	90-1 島畑23 島畑54	島島137	93-1 島畑13
島島95	90-1 島畑23 島畑38	島島138	93-1 島畑14
島島96	90-1 島畑23 島畑40	島島139	93-1 島畑15
島島97	90-1 島畑23 島畑41		93-1 島畑16
島島98	90-1 島畑23 島畑77		93-1 島畑34
	92-7 島畑11		Iトレンチ 掻き揚げ田2・3・4
島島99	90-1 島畑23 島畑78	島島140	93-1 島畑35
	92-7 島畑12	島島141	93-1 島畑36
島島100	90-1 島畑79	島1	90-1 畝群22
島島101	92-7 島畑13	島2	93-1 畝1
島島102	92-7 島畑14		93-2(D) 溝46~50
島島103	92-7 島畑15	島3	89-2 畝溝群2
島島104	92-7 島畑16		89-3 畝群
島島105	90-2 島畑28		90-1 畝群
島島106	90-2 島畑26	島4	89-2 畝溝群1
島島107	90-2 島畑25		89-3 畝群
島島108	90-3(B) 島畑2		93-1 畝2
島島109	90-3(B) 島畑3	島5	92-6 畝立て状遺構
	86-2 島畑401	島6	92-6 畝立て状遺構
島島110	90-1 島畑39	島7	92-6 畝立て状遺構
	86-2 島畑404	(第3-2b面)	
島島111	86-2 島畑403	遺構番号	概要における遺構番号
島島112	86-2 島畑402	土坑16	90-1 掘田1
島島113	89-1 島畑4	土坑17	90-1 土坑29
	89-2 島畑16	土坑18	90-1 掘田2
島島114	89-2 島畑15	土坑19	90-1 掘田3
	Eトレンチ 島畑401	土坑20	90-1 掘田4
島島115	89-2 島畑14	土坑21	90-1 掘田5
	Eトレンチ 島畑402	土坑48	90-2(H2) 土坑2
島島116	Eトレンチ 島畑403	土坑49	90-2(H2) 土坑3
島島117	89-3 島畑11	土坑50	90-3(B) 土坑2
島島118	89-3 島畑10		
島島119	90-2(H4) 島畑50		

(3)は伊万里窯系染付で、17世紀末のものである。また、その他の陶磁器片には18世紀以降と考えられるものも含まれている。

こうした状況と前後の層準の遺物を勘案すると、第2 b層の堆積時期は16世紀後半代と推定される。

第3面 第2 b層と、水田作土層である第4 a層に挟まれた層準が第3層である。この層には、第4 a面を覆う第3 b層以外に複数の氾濫堆積物が挟まれ、これに注目することで細分できる。その細分は鳥島の肩部から水田部分で可能であるが、細分された地層には砂とシルトがブロック状に混じった様子が認識できるものも複数存在し、それぞれが比較的短期間耕作された水田作土層と推定された。

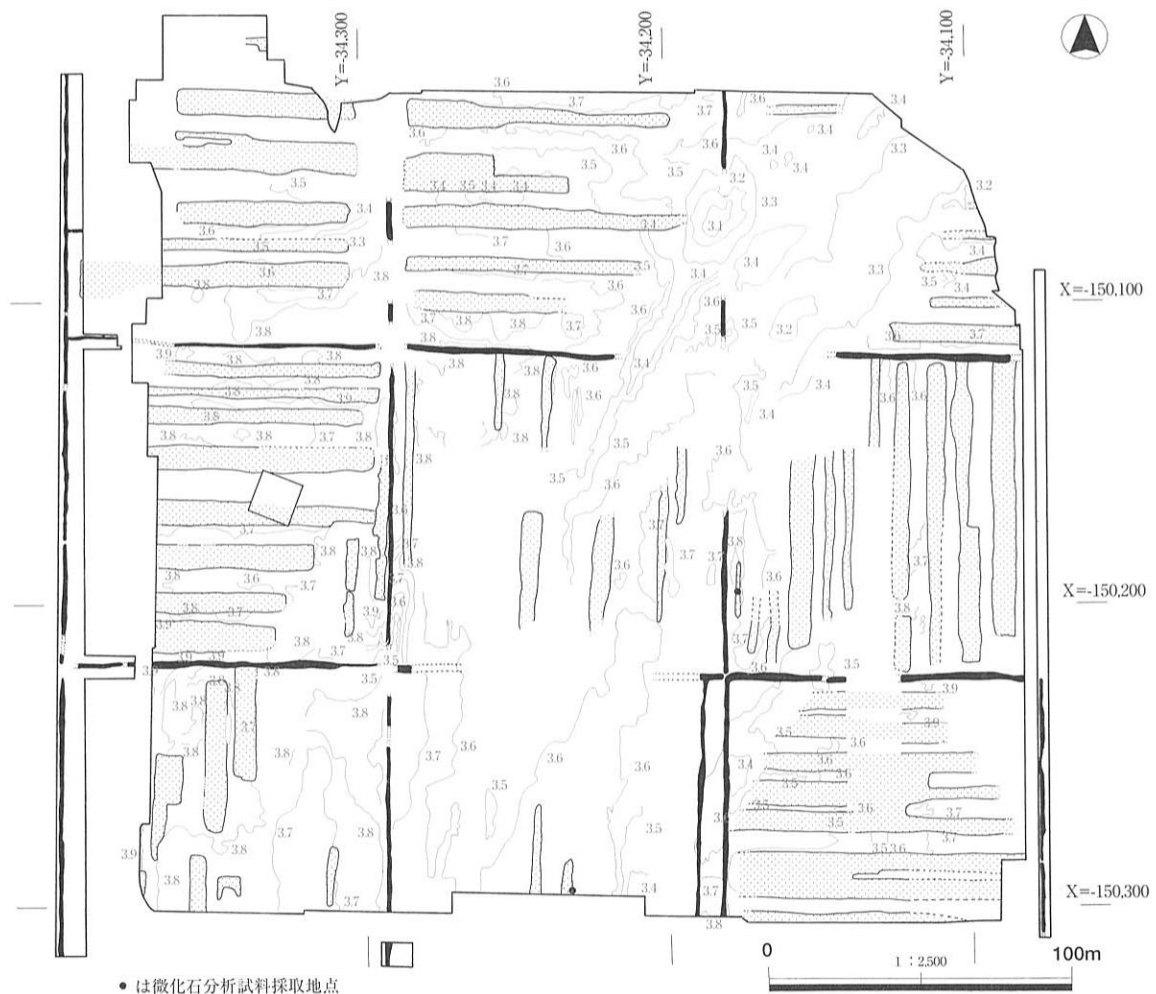
遺構面対比にあたって、整理の必要な点が2つある。まず、十七・十八ノ坪の状況である。90-1調査区では第2 b層に対比される「第5 - 2層」の下に、「第6面」が設定されている(概要X II, pp.41-44)。これについては、層位的な関係や面的広がり十分にとらえられておらず、混乱があるとされる。十六ノ坪では「第6面」と「第7面」の遺構は基本的に同一なので、「第6面」が設定できる部分は十七・十八ノ坪に限られる可能性が高い。また、90-1・87-3調査区の断面図の比較からみて、前述した87-3調査区の「第4遺構面」がこの「第6面」に対比されると考えられる。調査区全体に存在する「第7層」の上に「第6層」が堆積していたという所見が正しいとすれば、この2つの坪の鳥島間には堆積が起こったものの、他の部分では堆積がほとんどなかったため、同一の面を耕作し続けたと推定される。ここでは、この2つの坪にのみ存在する地層を第3 - 1 a層、その下の当地区全域で確認される面を第3 - 2



図IV-19 第3-2 a面平面図

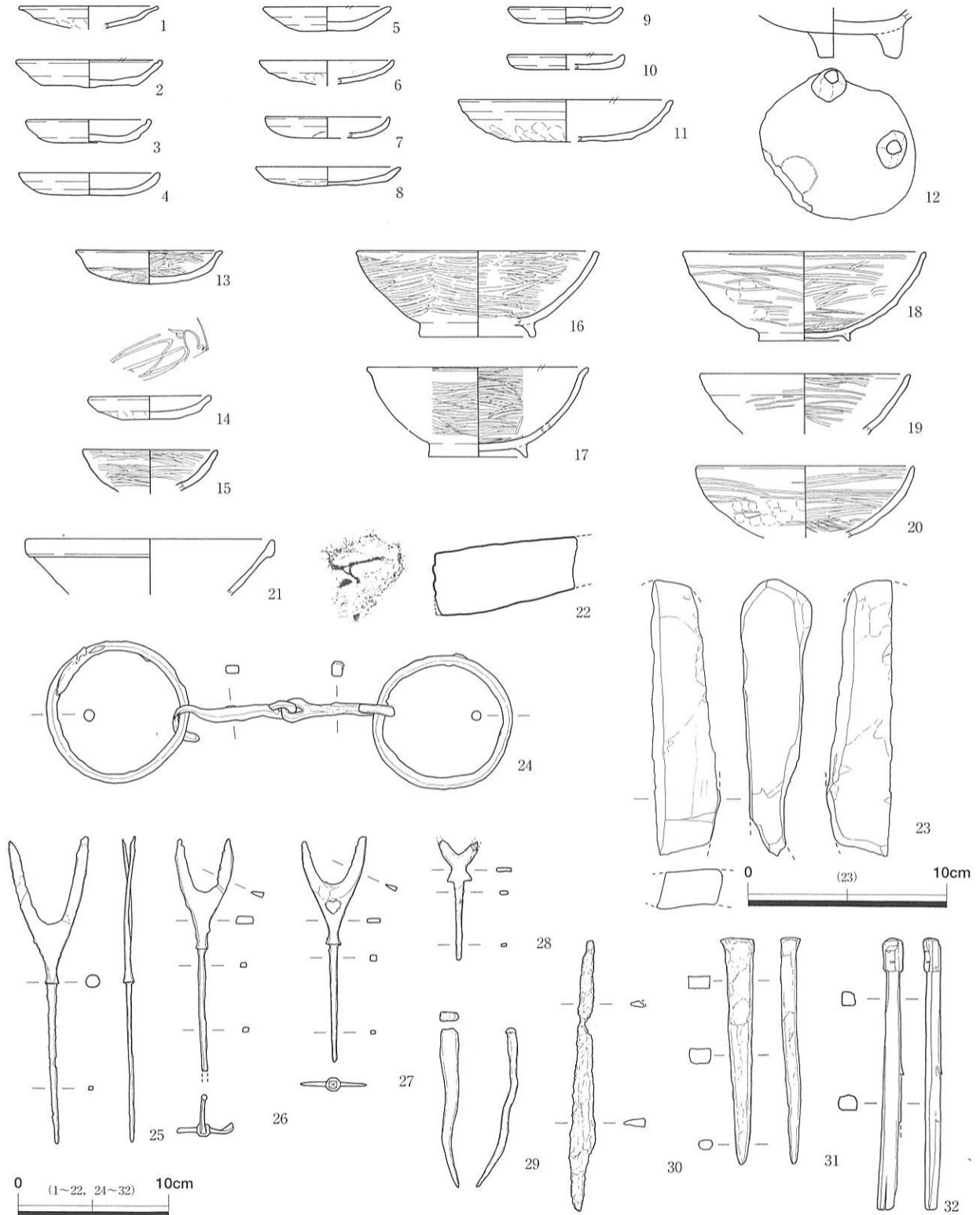
a面とし、平面図としては、第3-2 a面のものを示した(図IV-19)。次に問題になるのが、93-2調査区である。この調査区では、第3層から第5 a層にかけての層序対比に問題があり、概報も未整理の状態にて記述されている。今回、平面図と断面図を比較点検したところ、両者に記された認識が異なっていることが判明した。断面図に示された認識は、写真の検討によってその妥当性が確認できるだけでなく、隣接する93-1調査区のものとも一致している。この調査区の問題は、平面を精査した段階の不十分な認識が、その後断面の検討によって修正されたにもかかわらず、平面図の修正がおこなわれなかったことに起因すると思われる。例えば、93-1調査区「島畑17・18」の続きは93-2調査区では検出されていないが、断面図・写真では明瞭に確認できる。また、A区の「島畑6」については、南側のB・C区の島畑と食い違っているが、これはA区において、第2 b層堆積時に生じた侵食痕を島畑の肩と誤認したものである。なお、第3-3 a面に対比される可能性が高いC区「第5面」では、「島畑24」の東肩に畦畔が存在したとされているが、これは酸化鉄・二酸化マンガンによる変色部分を、層界と誤認して掘削したものである。

第3-2 a面は砂礫層で覆われていたため、等高線図を作成した(図IV-20)。それをみると、九ノ坪南西隅から六ノ坪北東隅に向かってのびる凹地が確認できる。この凹地はトラフ型斜交層理が認められる砂礫層で埋没していた(図IV-22:下)。これは周囲の遺構を破壊して形成されているため、第2 b層

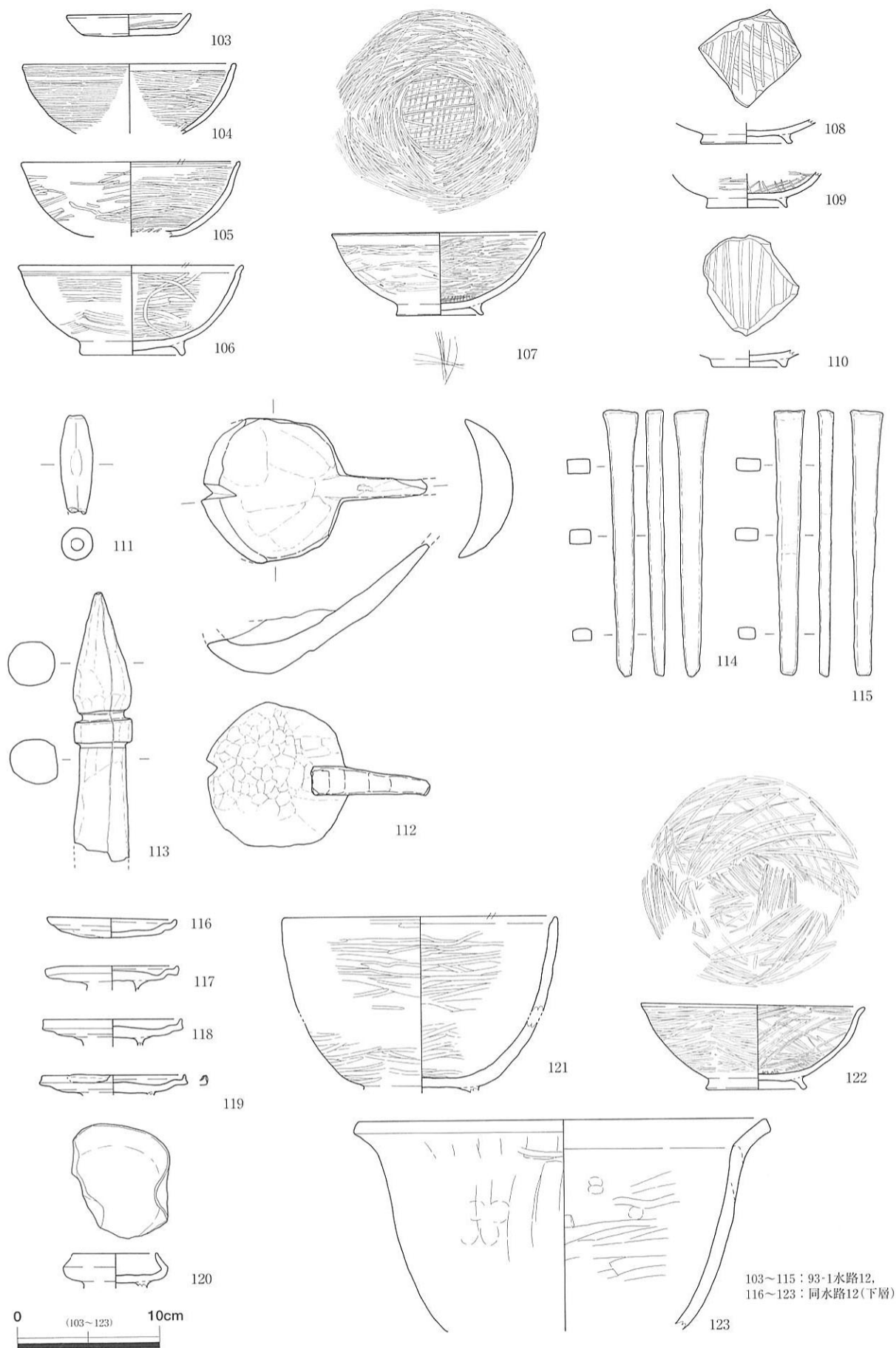


図IV-20 第3-2 a面等高線図

次に、第7 b面の遺構から出土した遺物を列举する(図IV-45)。土器埋納遺構5からは瓦器碗が出土した(図IV-45:1)。12世紀中頃のものである。土器埋納遺構7からは黑色土器B類碗(2)が出土した。11世紀中頃のものである。土器埋納遺構8からは瓦器碗(3)が出土した。大和型で、12世紀中頃のものである。土器埋納遺構9からは瓦器碗(4)が出土した。大和型で12世紀初め頃のものである。土器埋納遺構10からは瓦器碗(5)が出土した。12世紀中頃のものである。土器埋納遺構11からは瓦器碗



図IV-43 第7層出土遺物

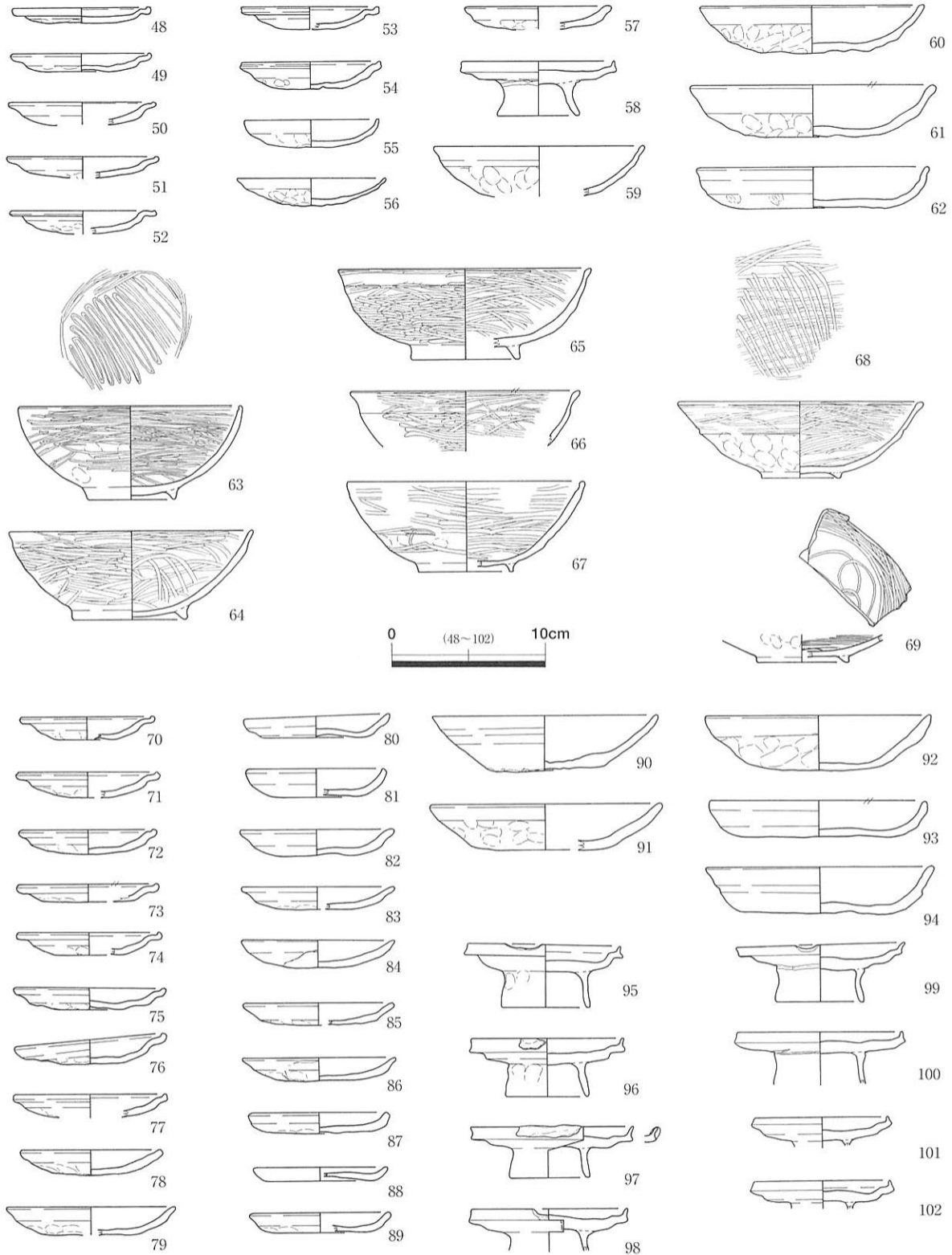


103~115: 93-1水路12.
116~123: 同水路12(下層)

図IV-42 第7面水路12出土遺物④

構面で検出されたものと同様に、平面形が方形を呈し、壁の立ち上がりが垂直に近いものである。

また、土器埋納遺構は十六ノ坪南部に集中して認められる（図IV-36）。遺構の詳細は図IV-44・表IV-17に示した。なお、内容が不明となっているものは、第7層～第7b層掘削中に取り上げられ、状況からみて土器埋納遺構と推定されたものである。



図IV-41 第7面水路12出土遺物③

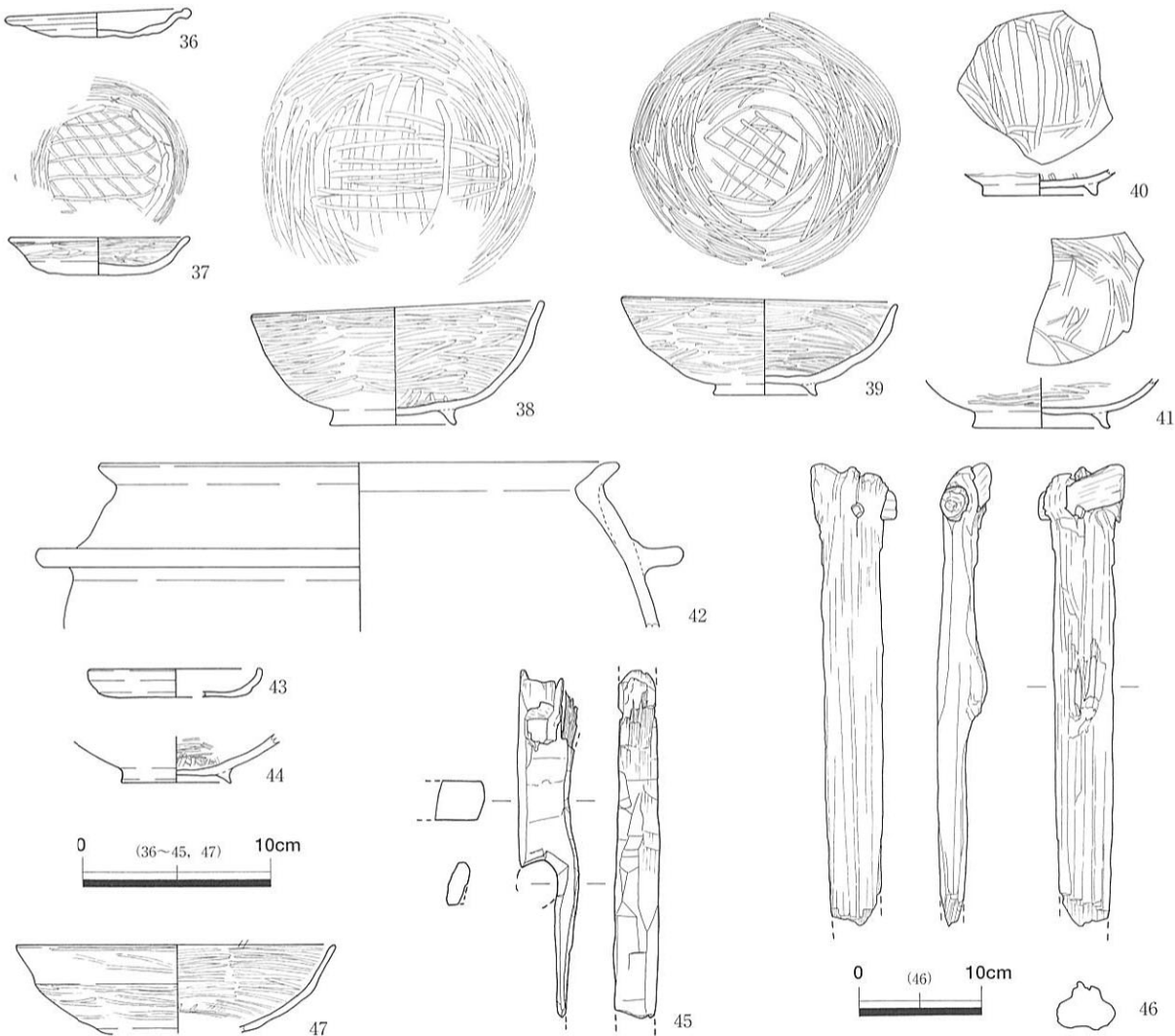
48～69：93-2水路12, 70～102：93-1水路12

から出土している。前述した第6層の堆積過程を考慮すると、この部分には第6b層（下）が堆積しなかった可能性が考えられる。

第7b面 第7層（シルト）の下には氾濫堆積物と考えられる第7b層が存在するが、この砂層の上には部分的ながら攪乱された砂混じりシルトが存在した（第7-3a層）。第7b層の上（第7b面）では馬鍬の歯の痕跡と思われる平行した筋状の落ちが検出された（図版14-8）が、その中には第7-3a層が入っており、第7-3a層の耕作に伴うものと考えられる。このことからみて、第7b面で検出された遺構の中には、第7層関連のものとともに、第7-3a層関連のものが存在すると思われる。この面で検出された遺構としては土坑、落ち込み、ピット、土器埋納遺構がある。土坑37~39は上位の遺

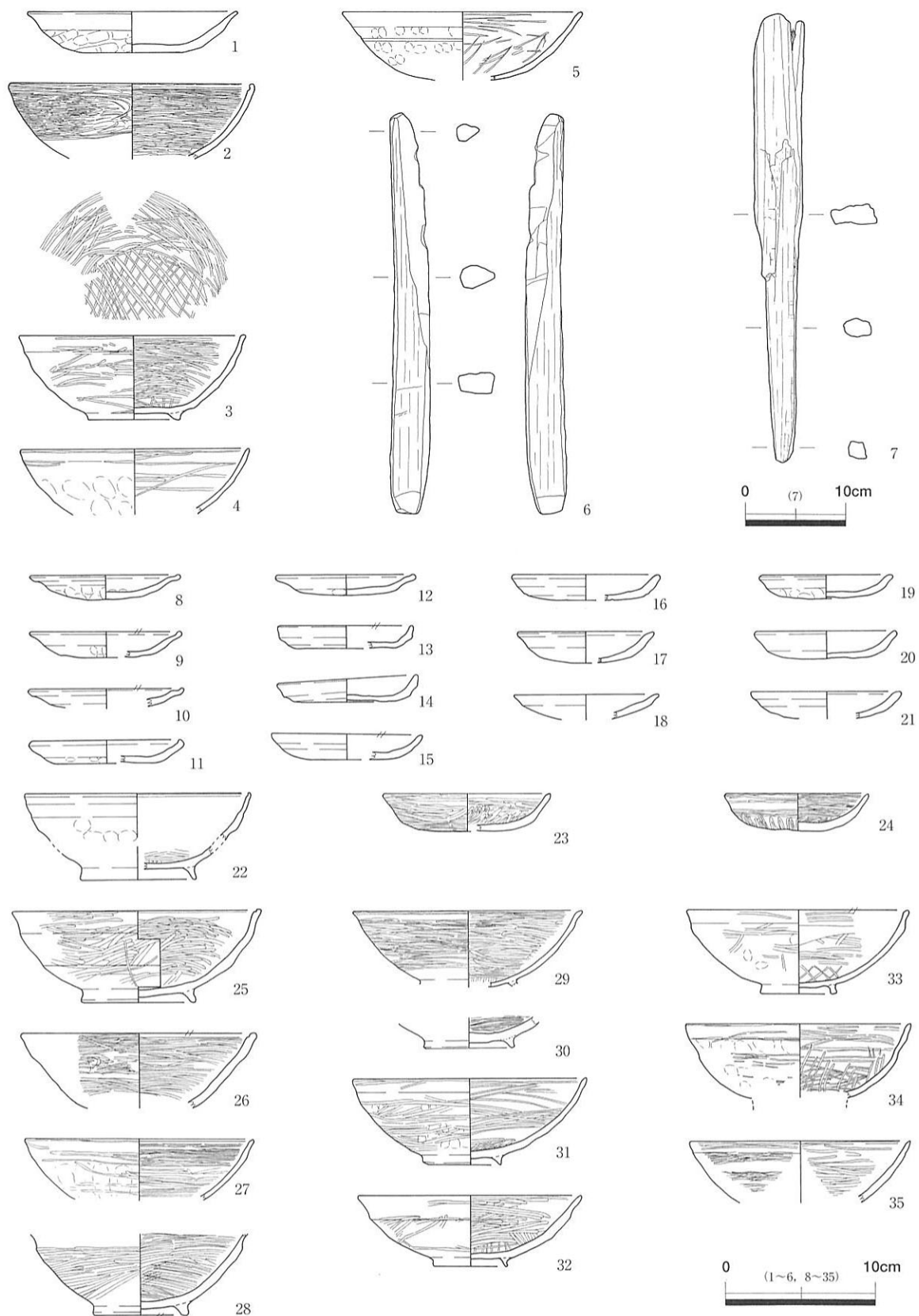
表IV-16 第7面水路12出土岩石肉眼鑑定結果

深成岩	71	アブライト	28	花崗閃緑岩	11	トータル岩	11	斑 縞 岩	3
		閃 緑 岩	3	花 崗 岩	5	輝 緑 岩	4	角閃石斑縞岩	1
		黒雲母花崗岩	1	微石英閃緑岩	1	ヘグマタイト	2	片状花崗閃緑岩	1
火山岩	3	輝石安山岩	1	デイサイト	1	流 紋 岩	1		
火 碎 岩	1	凝 灰 岩	1						
堆 積 岩	5	花崗砂岩	3	砂 岩	2				
変 成 岩	1	片 麻 岩	1						
変 質 岩	1	変斑縞岩	1						



図IV-40 第7面水路12出土遺物②

36~42・45・46：90-3(C) 水路12, 43・44：同水路12(古) ※47：水路75



图IV-39 第7面水路12出土遗物①

1~5 : 90-2(H4) 水路12(新), 6~35 : 同水路12(古)

落ち込み部分（下層）と、それよりも上層に分かれる。

（D）地点およびその南側周辺の上層からは、土師器皿（76～83・86～89・91・93・94）・杯（90）・台付皿（95～102）、瓦器皿（103）・椀（104・105・107～110）、土錘（111）、鉄製馬鍬の齒（114・115）等が出土した。また、（E）地点は（D）地点の上層にあたる部分から、土師器皿（70～75・84・85・92・94）、瓦器椀（106）、木製杓子（112）、木製擬宝珠（113）等が出土した。これらの土器を見ると、土師器皿は11～12世紀、土師器台付皿は11世紀後半、瓦器皿は12世紀後半、瓦器椀は11世紀後半～12世紀後半のものである。このうち台付皿は、（D）地点から集中して出土している。また、木製杓子には黒漆が塗られている可能性がある。

（D）地点の下層から土師器皿（116）・台付皿（117～119）・台付耳皿（120）・甕（123）、黒色土器A類鉢（121）、瓦器椀（122）等が出土した。土師器皿・台付皿・台付耳皿、瓦器椀は11世紀後半ぐらいのもので、黒色土器A類鉢、土師器甕は11世紀ぐらいのものである。

水路12出土土器は、全体的にみて11世紀後半～12世紀後半のものが多いといえる。水路底落ち込み部分とそれより上層に分かれた部分、あるいは（古）と（新）に分かれた部分では、上層の方が下層の遺物より少し新しい時期の遺物が多い傾向がみられる。

次に、水路12から出土した石についてまとめておきたい。石の大きさは拳大から人頭大程度で、人為的に搬入されたと思われる。それらには加工痕が認められたものはほとんどなく、被熱の痕跡の認められたものがわずかにあった。これらのうち、82点については岩石肉眼鑑定を実施した³⁾（表IV-16）。その結果、深成岩ないし半深成岩が圧倒的に多いことが判明した。その特徴は生駒山地を形成する領家深成岩類に酷似しており、苦鉄質岩類が少ないことを考慮すると、生駒山地でも南部の福貴畑～堅上付近からのものが多いと推定された。また、凝灰岩が1点含まれていたが、これは灰色の軽石を多く含み、二上山付近に分布する下部ドンズルポー累層に起源するものと考えられる。この凝灰岩には加工した面が一部残存しており、石製品の破片であると思われる。

その他、第7面に帰属する遺構としては土坑4がある。長辺4m、短辺2m、深さ10cmを測るもので、第6b層で埋没していた。その機能については不明である。

次に、第7層から出土した遺物を列挙する（図IV-43）。この層の上には第6a層が重なっている部分が多く、一部第6a層の遺物を含めて取り上げてしまった可能性のある調査区も存在する。土師器皿（1～11）・三脚盤（12）、瓦器皿（13・14）・小椀（15）・椀（16～20）、中国製白磁碗（21）、軒平瓦（22）、砥石（23）、鉄製品（24～31）、木製人形（32）等が出土した。

白磁碗は厦門窯系で、森村健一による編年では12世紀後半のものである。土師器皿は12～13世紀、瓦器皿は11世紀後半と13世紀ぐらいのもの、瓦器椀は11世紀後半～12世紀前半のものである。軒平瓦も12世紀ぐらいのものである。（16）は黒色土器B類かもしれない。なお、13世紀代に入ると考えられる瓦器皿は、当地区北東隅の第7-1面水路12（新）周辺から出土している。

鉄製品は、（24）が素環式鏡付轡、（25～28）が雁叉鍬、（29）が釘であり、（30）は不明品である。また、（32）の木製人形は目？と口を表現しているように見える。砥石（23）は黒雲母デイスイトで、1面のみ使用している。

このように、第7面の遺構や第7層から出土した遺物を見ると、11世紀後半～12世紀後半のものが多い。このうち、新しい時期のものは第6a面直上土器群の時期と重なる。なお、この面に関連して出土した遺物のうち、13世紀代になると考えられる瓦器椀・皿などは、第7-1面水路12（新）およびその周辺

和型、(26) は楠葉型である。

さらに (A)・(B) 地点では、水路12(古) 埋土から骨68点、石52点も出土した(図版15-3・4)。骨はウシが多く、イヌ・サギ科・スッポン?なども認められた。なお、表IV-15で「ウシ/ウマ」としたものは遺存状況が悪く、ウシかウマか判別できないものを示す。ウマの骨は、頭蓋骨、下顎骨、歯、肋骨、椎骨、肩甲骨、上腕骨、大腿骨、脛骨、寛骨など、各部にわたっており、上腕骨、大腿骨、橈骨には解体痕が認められた。ただし、水路12(新) 埋土にはほとんど含まれておらず、シカの下顎骨(B69)と同定不能の骨が出土した程度であった。

また、五・六・七・八ノ坪交差点にあたる部分の水路底部からは土坑5が検出された。この土坑にはウシの頭蓋骨がさかさまの状態では埋納されていた(図版15-1)。掘削ミスにより骨を大きく破損してしまっただが、上顎の歯は回収されたのに対し、下顎骨・下顎の歯および角は存在しなかった。したがって、下顎骨や角が外れた状態の骨が埋納されたと考えられる。さらに、土坑5から南へ約25m離れた地点では土坑6が検出された。この土坑からはウシの下顎骨(右)が出土した(図版15-2)。これは土坑の底から浮いた状態で出土したが、土坑の埋土にはシルトブロックが多く含まれており、人為的な埋め戻しの際に骨が入れられたと推定される。なお、土坑5と土坑6の骨については歯の磨耗のあり方から、前者が老齢と推定されるのに対し、後者は比較的若いと推定されるため、別個体の可能性が高い。

90-3調査区Cトレンチでは、五・六・七・八ノ坪交差点付近を中心とする場所から、土師器皿(36)・羽釜(42)、瓦器皿(37)・椀(38~41)、木製品(45・46)等が出土した。土師器皿は11世紀後半、瓦器皿は11世紀末、瓦器椀は11世紀末~12世紀前半、土師器羽釜は12世紀後半ぐらいのものである。木製品(45)は第5a層出土のもの(図IV-30:10)と同じようなものである。(46)は頭部に横棒を通した後、穿孔を1ヶ所施している。用途は不明である。両方とも樹種はスギである。

(C) 地点よりも南では、後述する水路底落ち込み部分の他に、埋土が細分される部分も認められた。その部分が遺構面とどのように対応するのかわからなかったため、一括して遺物を取り上げてしまったが、上位の層準は第6b層(下)堆積後の可能性もある。ただし、上位の層準から出土した遺物の量は少なく、大半の遺物は第7面段階のものといえる。

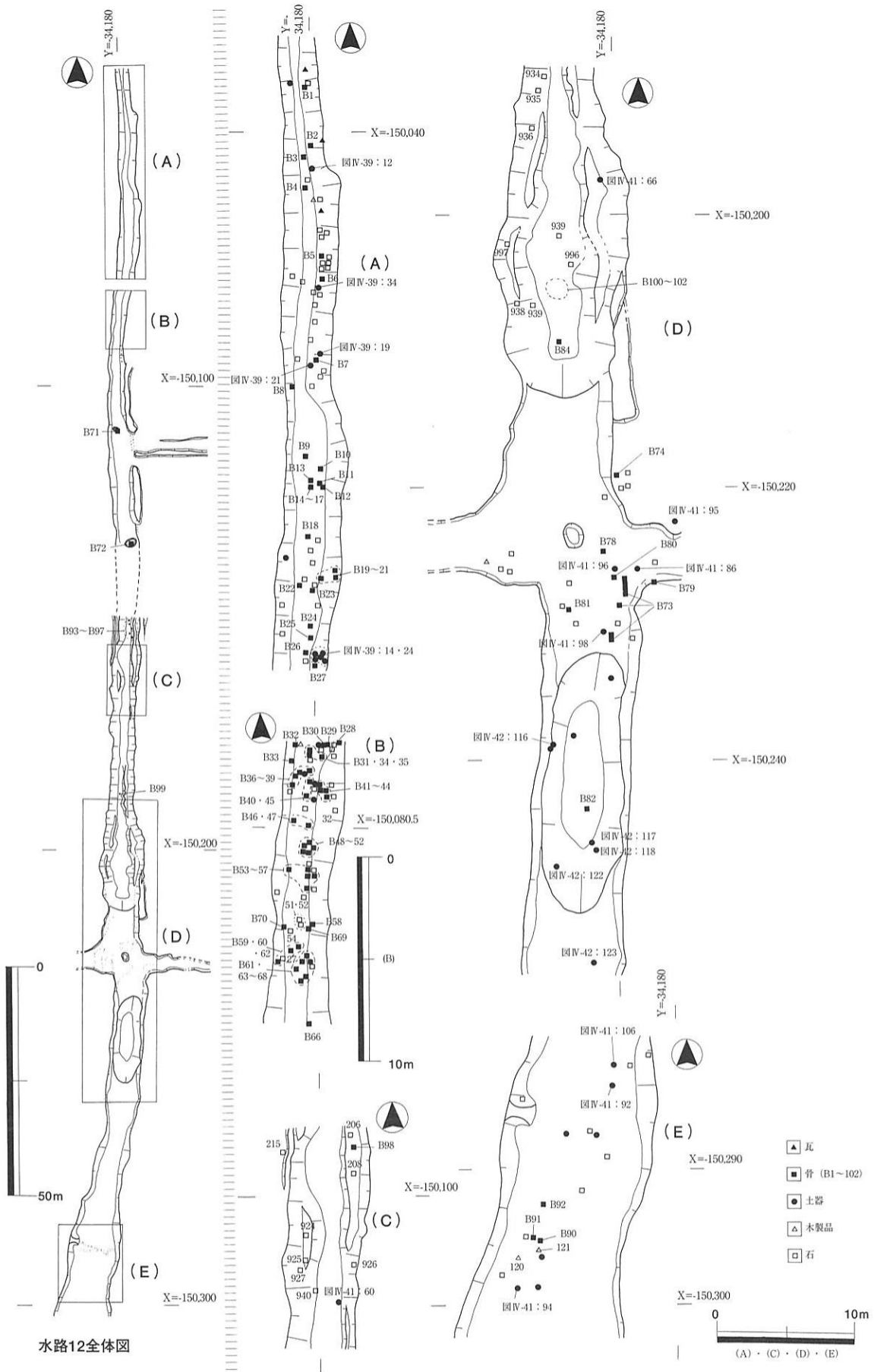
(C) 地点を中心とする93-2調査区からは、土師器皿(48~57・59~62)・台付皿(58)、瓦器椀(63~69)等が出土した。土師器皿は11~12世紀、土師器台付皿は11世紀後半、瓦器椀は11世紀後半~12世紀のものである。瓦器椀(63)は楠葉型である。(64)の外底部には、ひっかいたような×印がある。

また、(C) 地点付近からは骨6点、石7点も出土した。骨はウマ、ウシ、スッポンのものであり、スッポンの頭蓋骨には鉄製刺突具によると思われる刺突痕が認められた。

さらに、四・五・八・九ノ坪交差点にあたる部分の水路底からは土坑7が検出された。ここから骨は出土しなかったが、本来ウシやウマの骨や肉が埋納されていた可能性も考慮して、残存脂肪分析を実施した(第V章3-1)。しかし、動物の骨や肉を埋納していた可能性を示すデータは得られなかった。

四・五・八・九ノ坪交差点付近にあたる(D) 地点では、骨が20数点、石が21点出土した。骨はウマのものが多く、シカ、サギ科、スッポン、イシガメ?が若干認められた。出土状況で注目されるのはB73の北側であり、すべてが取り上げられなかったものの、肋骨と椎骨が並んだ状態で出土した(図版15-5)。これは肋骨と椎骨がつながった状態で廃棄されたことを示すと考えられる。また、シカの大腿骨には解体痕が認められた。さらに、(E) 地点ではスッポンの腹甲板数点と石が8点出土した。

93-1調査区の範囲内では、(D) 地点と(E) 地点から遺物が集中して出土した。また、前者は水路底



図IV-38 水路12遺物出土状況

七、八、十七、十八ノ坪では、畦畔、島畠、土坑が検出された。畦畔については、部分的に残存していた第6 b層を除去して検出されたものを、この面の遺構として認識した。また、島畠は7基検出した。これらは図IV-37：中・下段に示すように、第6 b層に覆われて残存していたものである。これについては幅が1～2 m程度と狭く、これまで説明してきた島畠とはやや様子が異なる。しかし、第6 b面や第6 a面に踏襲されたものは、後の島畠と共通した拡張過程をたどっている。その分布をみると、十七ノ坪南半に多く認められ、十八ノ坪からも検出されている。面の遺存状況が悪いため、削られてしまったものも存在する可能性は否定できない。このような不確定要素も存在するが、現状でその分布の特徴を検討すれば、その下層に第8 a面で畠として利用されていた微高地が存在する点が注目される。この微高地は第7層によって埋積が進んだが、第7面段階でもやや高くなっていた可能性がある。そして、坪内の水回りをよくするために地表面が削平され、その結果生じた土を畦畔部分にかき寄せて、島畠が造成されたのではなかろうか。

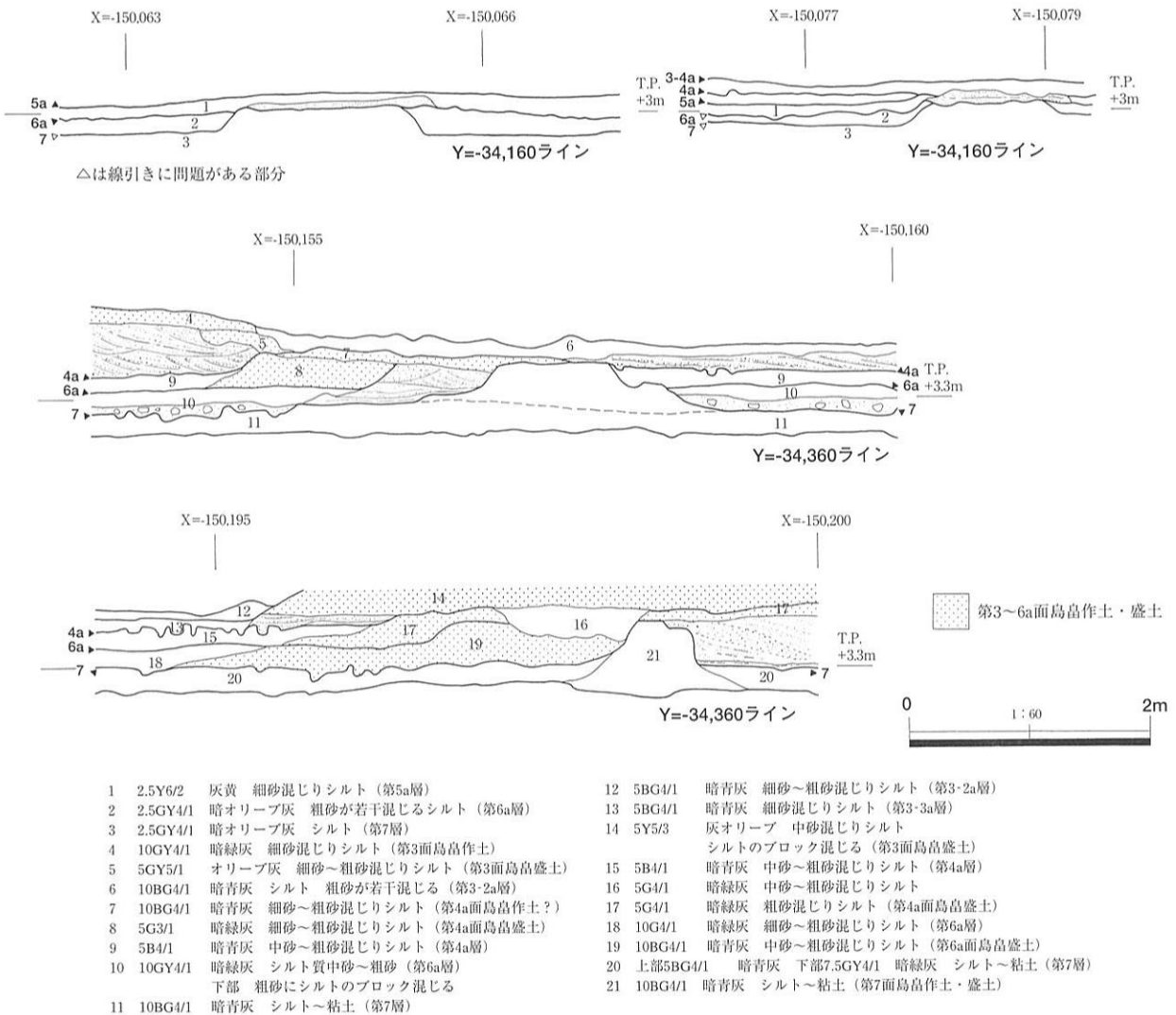
問題は、ここで島畠とした高まりが畠として利用されたかどうかである。調査時にはこの点を直接検討することができなかったが、今後は高まり部分の土壌微細形態（宮路2001、別所・井上〔伸〕2001、松田2001）を検討することで、この問題に対する見解を示す必要がある。現在のところ得られているデータの中で利用できるものとしては、花粉分析結果がある（第V章2-1）。それによると、第7層からソバ属の花粉が検出され、以後上位の層準ではソバ属の花粉が連続して検出されている。この状況はまさに、調査で島畠と呼称した遺構の動向と一致する。なお、前述した第6 b層の堆積過程を考慮すれば、第7層で検出された花粉は第6 b層（下）堆積後の状況を示すとする意見もあり得る。しかし、花粉分析5・6地点は第6 b層（下）に対比した破堤堆積物の範囲内に含まれており、この地点でも同様の結果が得られているので、ソバ属花粉が認められ始めるのは第7面段階と思われる。さらに、こうした花粉の検出動向は、池島I期地区における花粉分析結果（金原・井上・金原1997、辻本2002）とも整合している。ソバ属の花は虫媒花で、花粉の生産量も低く、飛散範囲も狭いが、実際に栽培されていた場所の特定は難しい面もある。しかし、この点をふまえたとしても、複数地点の結果が一致することからみて、こうした花粉の動向は当遺跡内および周辺の栽培の動向を反映している可能性が高い。第7面では、福万寺I期地区・池島I期地区ともに第8 a面で認められたような微高地は認められないため、ここで島畠と呼んだ高まりが畠作地の候補となる。

第7面の遺構のうち、水路12からは多数の遺物が出土した。大きく4ヶ所の遺物集中地点が認められた他、水路底部からウシの骨を埋納した土坑が2基検出された（図IV-38：左）。水路埋土中からも多数の骨が出土した（図IV-38・表IV-15）²⁾。

まず（A）・（B）地点では、前述のように、第7-1面と第7-2面の段階の2段階にわけられた。前者を水路12（新）、後者を水路12（古）と呼称することにする。（A）地点を中心とする90-2（H4）調査区において、水路12（新）から出土した遺物は（図IV-39：1～5）であり、水路12（古）から出土した遺物は（6～35）である。前者には、土師器皿（1）、瓦器椀（2～5）、刀子状木製品（6）・剣形木製品（7）等がある。土師器皿は12世紀後半ごろのもの、瓦器椀は11世紀後半～13世紀前半ごろのものと時期差がある。瓦器椀（2）は楠葉型である。木製品の樹種はいずれもヒノキである。また後者には、土師器皿（8～21）・椀（22）、瓦器皿（23・24）・椀（25～35）等がある。土師器皿は11世紀後半～13世紀ぐらいのもの、土師器椀は11世紀中頃ぐらいで、瓦器皿は11世紀後半～末、瓦器椀は11世紀後半～12世紀後半のものである。土器の時期としては11世紀後半～12世紀といえる。瓦器椀の（25）・（27）は大

第7面 第6 a層ないし第6 b層を除去することにより検出した。第6 b層は一部しか残存しておらず、第6 a層段階の耕作によって削られた部分も多いが、前述した第6 b面の島畠部分に残存した第7面と周囲のレベルを比較すると、削られた深さは数cmと考えられる。しかしながら、削られた深さは一定していないため、等高線図は作成しなかった。

従来提示されていた第7面の平面図には第6 b面の遺構が混在していたが、今回、第6 b層で埋没したのもののみを抽出して図示した(図IV-36)。まず、坪境においては四・九ノ坪間、五・八ノ坪間、六・七ノ坪間を南北に貫く水路12が検出された。この水路は、南端の幅12m、北端の幅3mを測る大規模なものである。この水路の中には周囲の水路底よりも20cmほど深くなった部分が2ヶ所存在した。また、水路の脇では部分的に大畦畔が検出されたが、面の遺存状況を考慮すると本来は全体に存在していた可能性が高い。なお、水路12の北端では、埋土が2層に細分され、右岸側の第7層がそれに対応して細分された(概要XI,p.25)。そのため、図III-2ではこれらを第7-1層・7-2層としたが、こうした細分は当地区北東隅でのみ確認できるものである。その他の坪境のうち、八・九ノ坪間を流れる水路13、四・五ノ坪間を流れる水路14、五・六ノ坪間を流れる水路75は、いずれも水路12から分岐する。また、それ以外の坪境からは大畦畔が検出されている。



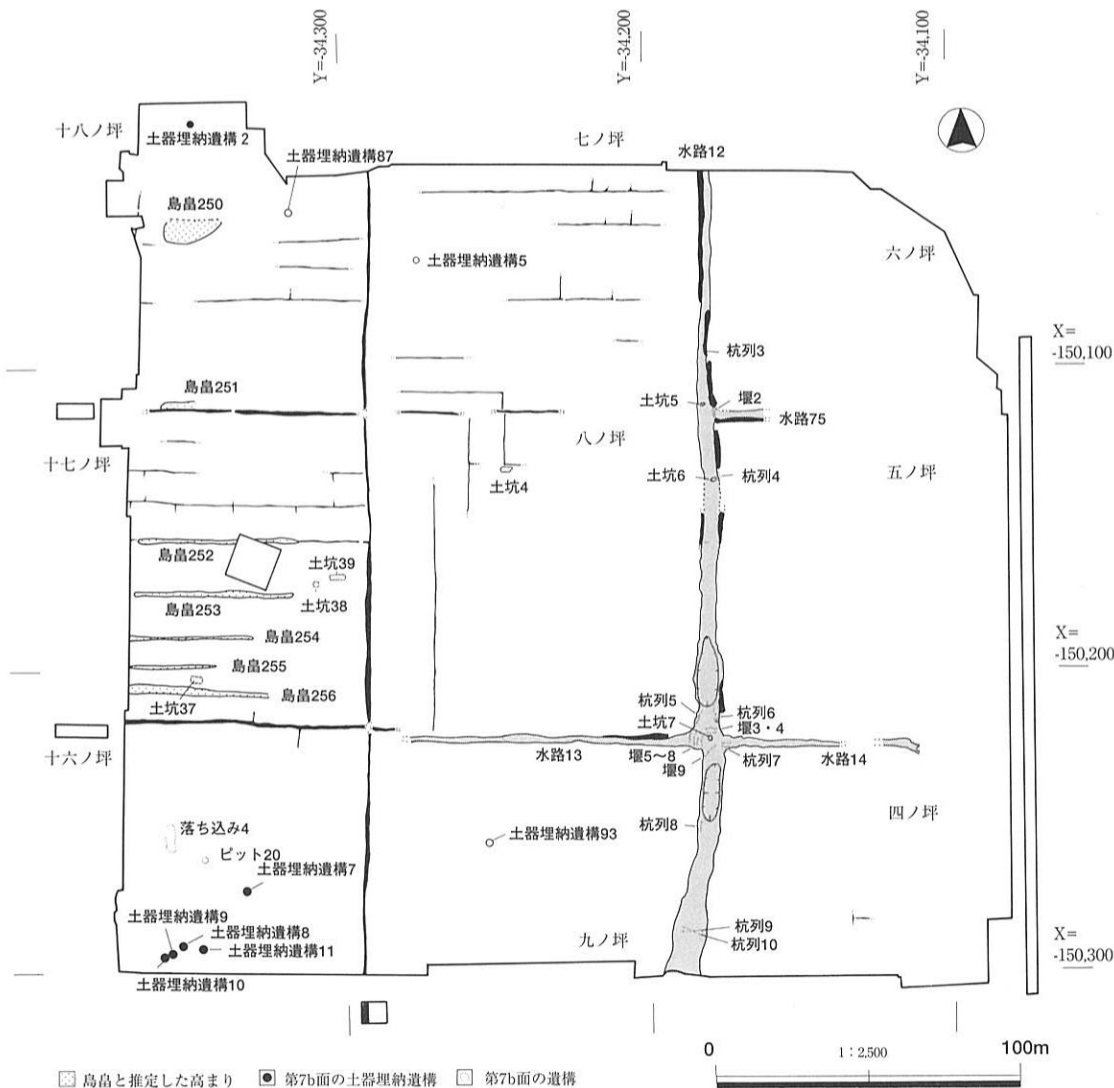
図IV-37 第7面島畠関連断面図

した瓦器碗は、13世紀中頃のものである。この調査区には第6b層(上)は堆積しなかったと考えられるため、この遺構と第6b層(上)との先後関係は不明である。

これまで述べてきた点をまとめると、第6a層は、12世紀後半と13世紀代の2回にわたって供給された堆積物を母材とする作土層といえる。第6a層中に含まれる最新の遺物は14世紀前半代であることも考慮し、第6a層の継続期間を12世紀後半から14世紀代と推定しておきたい。

表IV-14 第7面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
島畠250	90-2(H2) 島畑22	杭列7	93-1 杭列4
島畠251	87-3 島畑801	杭列8	93-1 杭列7・8
島畠252	90-1 島畑76	杭列9	93-1 堰10
島畠253	90-1 島畑65	杭列10	93-1 堰11・12
島畠254	90-1 島畑66	堰2	90-3(C) 杭列2
島畠255	90-1 畦畔78	堰3	93-1 堰3
島畠256	90-1 島畑67	堰4	93-1 堰13
水路12	90-2(H4) 溝153	堰5	93-1 堰4
	90-3(C) 坪境17	堰6	93-1 堰5
	93-1 坪境30	堰7	93-1 堰6
	93-2(B) 溝25	堰8	93-1 堰7
	93-2(C) 溝65		
水路13	89-2 坪境溝	(第7b面)	
	93-1 坪境31	遺構番号	概要における遺構番号
水路14	93-1 坪境29	土器埋納遺構7	92-7 ビット4
水路75	90-3(C) 坪境18	土器埋納遺構8	92-7 ビット3
土坑4	90-3(B) 土坑3	土器埋納遺構9	92-7 ビット2
土坑5	90-3(C) 獣骨埋納土坑2	土器埋納遺構10	92-7 ビットA
土坑6	90-3(C) 獣骨埋納土坑1	土器埋納遺構11	92-7 ビットC
土坑7	93-1 土坑10	土器埋納遺構87	90-2(H2) —
杭列3	90-3(C) 杭列3	土器埋納遺構93	89-3 —
杭列4	90-3(C) 杭列1	土坑37	90-1 土坑113
杭列5	93-1 杭列6	土坑38	90-1 土坑116
杭列6	93-1 杭列5	土坑39	90-1 土坑118
		ビット20	89-3 ビット218
		落ち込み4	90-1 溝1002



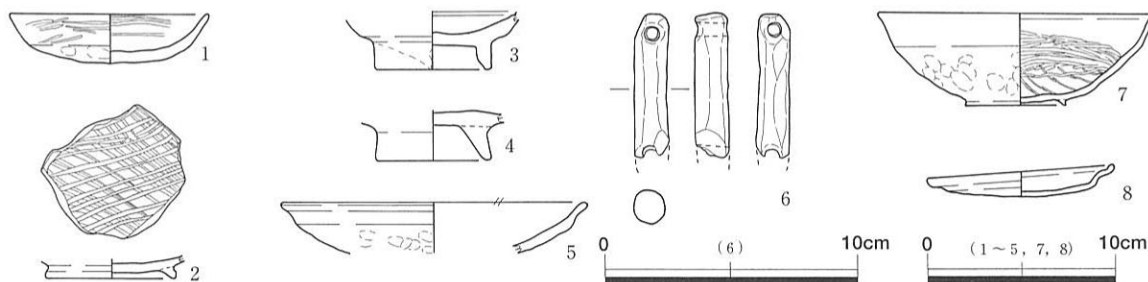
図IV-36 第7面平面図

さらに上から掘り込まれた可能性が高い。この遺構が検出された92-7調査区では、第7層に対応する「第10層」の上に「第9層」と呼ばれた地層が存在し、さらにその上に砂礫混じりシルトの「第8層」が堆積していた。「第9層」は「第10層」起源のシルトブロックを主体とし、その間に細砂が含まれるもので、人為的に攪乱された作土層と考えられる。土器埋納遺構6検出の経過を検証することは困難であるが、粒度の大きく異なる「第8層」が埋土に含まれていれば、第7面精査段階に気づく可能性が高い。その段階で気づかなかったのは、埋土が泥質であったためと考えられる。そのように考えると、土器埋納遺構6は「第9層」に関連した遺構であった可能性があり、その土器の時期からみて、「第9層」の母材となった砂は第6b層（下）に対比できる。また、この層は90-1調査区南側にも存在しており、第7層最上部の「攪乱層」と記載されていた（概要XII, pp.13-16）。この「攪乱層」の上にはレンズ状に砂層が残存しており、これが第7面の島畠を覆う砂と同一のものと推定されたが、連続する状況が確認されたわけではない。むしろ、第7面の島畠が砂で覆われた部分において、その脇の水田部分に「攪乱層」が存在しなかったことが注意される。このことから、「攪乱層」は第7面の島畠を覆う砂層堆積後に形成された作土層の可能性が考えられる。第7面島畠を覆う砂層と「攪乱層」の母材となった砂の粒度を比較すると、後者のほうが細かいようであるが、これは同一の堆積物が側方に粒径変化したものとも考えられる。ここではそうした考え方に立ち、第6b面島畠の芯となった破堤堆積物も第6b層（下）と推定したい。なお、府教委86-1調査区で検出された土器埋納遺構3は12世紀末～13世紀初頭のもので、土器埋納遺構6の時期に近接する。さらに、後述するように、第7層が細分された当地区北東隅では、上層の第7-1層に関連して13世紀前半代の土器が出土している。第7-1層は粒度がシルト～粘土であり、第6b層（下）とは全く異なっているため別の地層と考えたが、この部分には第6b層（下）は堆積しなかった可能性が高い。

第6a層は、第6b層（下）が堆積しなかった部分でも砂礫混じりシルトであり、第6b層（下）の堆積後に、もう一度砂礫が堆積したと考えられる（第6b層〔上〕）。90-1調査区でレンズ状に残存していたのは、この砂層に対比できる。第6b層（下）の堆積後に造成された島畠のほとんどは、第6b層（上）堆積後の耕作によって削られた。なお、府教委86-1調査区で検出された土器埋納遺構4から出土

表IV-13 第6b面関連土器埋納遺構一覧

遺構番号	調査区	調査報告時名称	出土遺物	所在坪名	遺構の概要			時期	図番号
					遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土器の埋納状況		
土器埋納遺構3	86-1調査区 (府発III)	ビット6004	瓦器椀1	十八ノ坪	土坑	直径40×15	埋土中位に埋納	12世紀末～13世紀初頭	—
土器埋納遺構4	86-1調査区 (府発III)	土坑6026	瓦器椀1	十八ノ坪	土坑	50×30×51	土坑底面中央に正位で埋納	13世紀中頃	—
土器埋納遺構6	92-7調査区 (XIV)	瓦器ビット1	瓦器椀1	十六ノ坪	土坑	一辺50×16	土坑底面南東寄りに正位で埋納	13世紀初頭	図IV-35:7



図IV-35 第6a層・第6b面・層出土遺物

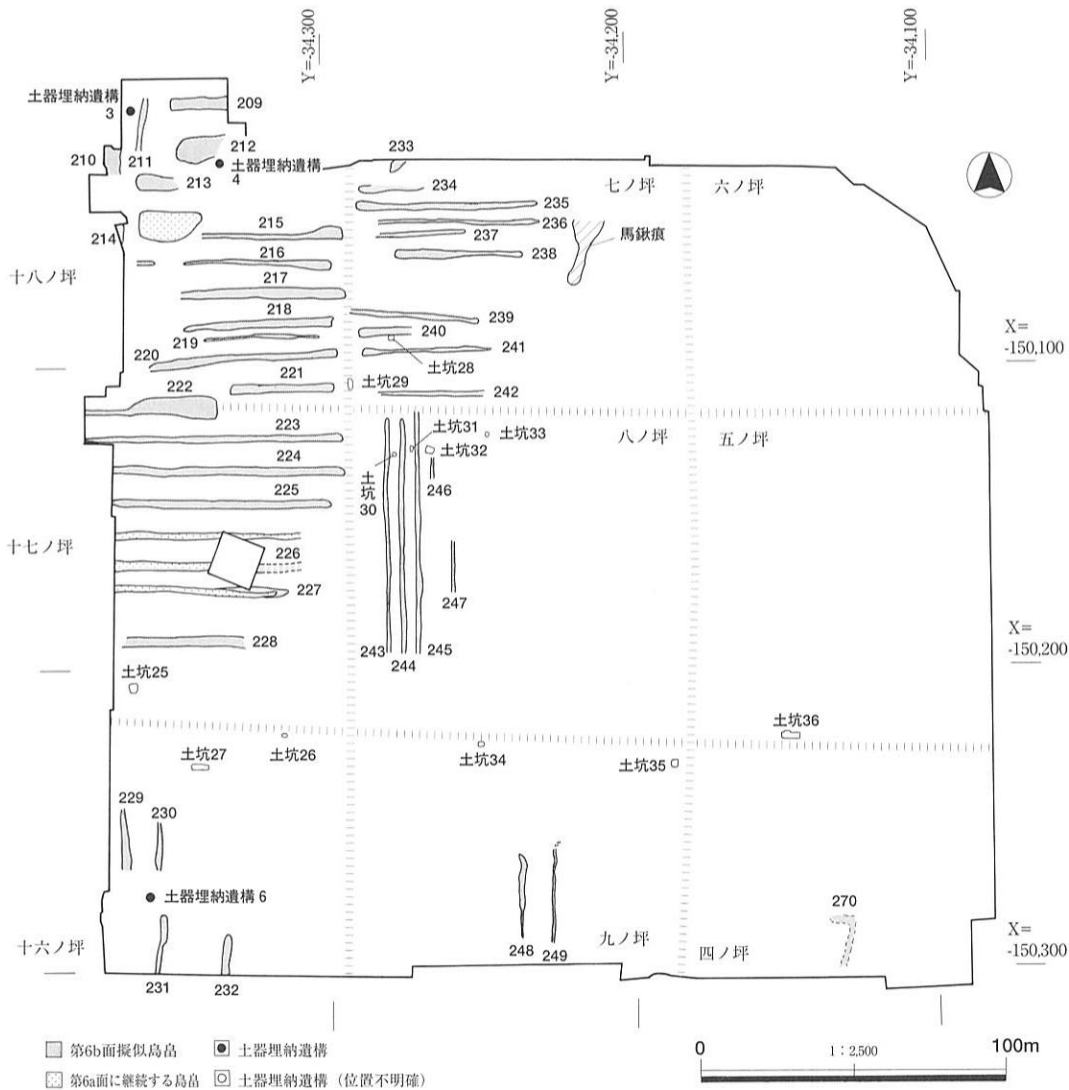
1～6：第6a層、7：土器埋納遺構6、8：第6b層

の堆積過程と合わせて後にふれることにする。

また、第6 b層からは11世紀後半頃の土師器皿（8）等が出土した。

第6 b層の島畠の一部は第6 a面の最終段階まで残存するが、多くはその段階には存在していない。この状況の原因は、第6層の堆積過程にあると思われる。そこで、この点を検討するために、第6 b層の堆積過程と遺構の関係について整理したい。

当地区南東部にあたる四ノ坪北西部には、第6 b層が比較的良好に残存していた。これは、第7面水路12から供給された砂礫と考えられる。この砂礫堆積後に形成された第6 a層の直上からは、前述した瓦器碗の一括資料（12世紀中頃～後半）が検出されたが、その時期は後述する第7面水路12の最新遺物の時期と重なっている。このことから、この砂礫は第6 b層の中でも最も古いものと考えられる（第6 b層〔下〕）。一方、当地区北西部の島畠集中部は、南西－北東方向にのびている。府教委86-1調査区が第6 b層の堆積の末端に位置していたことを勘案すると、これは砂が堆積した範囲に対応する可能性が高い。堆積構造については観察されていないが、分布状況から破堤堆積の末端であった可能性が考えられ、その堆積によって生じた微高地を利用して島畠が造成されたと推定される。また、土器埋納遺構6（13世紀初め頃）は第7 b面の精査時に確認されたが、第7面の遺構の遺物よりも新しいため、本来は



図IV-34 第6 b面平面図

沢遺跡において「擬似畦畔B」と呼称されているもの（佐藤1999）と共通している（図IV-34）。

島島の分布をみると、十七・十八ノ坪、七ノ坪西半、八ノ坪西端に集中する。また、島島248・249は89-3調査区の調査段階では第8a面の遺構とされたが、第8a面の島との関係が不自然であり、再検討が必要となっていた。断面図および写真をみると、これは第7層の上が盛り上がるものとして認識されたようであり、89-3調査区では第7面を調査しなかったために、第8a面精査段階まで残されたようである。写真では細かな点までチェックできないが、この調査区では第6a層と第7層が接しており、第7面の遺存状況はよくないと考えられるため、ここでは一応、第6b面の遺構に含めている。

その他、この面に帰属する遺構としては土坑がある。このうち、土坑25～

35は一辺2m、深さ1m程度のもので、人為的に埋め戻されたものである。また、土坑36は長辺6.5m、短辺2m、深さ1mを測り、泥質のブロック土で埋積されている。この土坑では埋没時の環境を考えるために珪藻分析を実施した（第V章2-1）が、堆積環境を示すようなデータは得られなかった。

さらに、第7層上面で認識された農耕具痕の多くは、深さが数cmしかないことからみて、第7面段階の耕作に伴うものではなく、この面の段階のものと考えられる。鋤ないし鍬の痕跡がこの面の島島の周囲を巡る形で検出された（図版13-2）ことも、その推定を補強する。さらに、七ノ坪東部では、馬鍬の齒の痕跡と考えられる平行する筋状の落ちも検出された（カラー図版15、図版13-3）。

なお当遺跡では、杯・椀などの土器を1個体ないし数個体埋納した古代～中世の土坑が検出されている。こうした土器埋納遺構のうち、第7b面（砂層の上）の精査時に検出されたものの中に、土器の時期からみて第6a層の耕作期間中に埋納されたと思われるものが含まれている。そこで、土器埋納遺構出土土器の時期と、第7面や第6a面から出土した土器の時期を比較し、第6b面に帰属する可能性が高いもの3基を図IV-34・表IV-13に示した。これらについては、第6層の堆積過程の整理と合わせて評価したい。

土器埋納遺構のうち、当センター調査区で検出されたものは土器埋納遺構6である。この遺構からは瓦器椀（図IV-35：7）が出土した。13世紀初め頃のものである。なお、府教委86-1調査区で検出された土器埋納遺構3・4の時期は概報に記載されているが、概報刊行後に瓦器椀の暦年代が見直されることになったため、写真（府発Ⅲ：図版32-1～3）を見て再検討した。その結果については、第6b層

表IV-12 第6b面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
島島209	86-1 ー	島島239	90-3(A) 島畑26
島島210	86-1 ー		90-3(B) 島畑3
島島211	86-1 ー	島島240	90-3(A) 島畑27
島島212	86-1 ー		90-3(B) 島畑10
島島213	86-1 ー	島島241	90-3(A) 島畑28
島島214	90-1 ー		90-3(B) 島畑11
島島215	90-2(H2) 島畑19	島島242	90-3(B) 島畑12
島島216	90-2(H2) 島畑20	島島243	89-1 畦畔15
	90-1 ー		90-3(B) 島畑13
島島217	90-2(H2) 島畑21	島島244	89-1 畦畔14
島島218	90-3(A) 島畑20		90-3(B) 島畑14
島島219	90-3(A) 畦畔18	島島245	89-1 畦畔13
島島220	90-3(A) 島畑21		89-2 畦畔15
	87-3 ー		90-3(B) 島畑15
島島221	90-3(A) 島畑22	島島246	90-3(B) 島畑16
島島222	90-3(A) 島畑23	島島247	89-1 畦畔12
	87-3 ー	島島248	89-3 大畦畔4
島島223	90-3(A) 島畑24	島島249	89-3 畦畔12
	87-3 ー	島島270	93-1 ー
島島224	90-3(A) 島畑25	土器埋納遺構2	86-1 土坑6011
	87-3 ー	土器埋納遺構3	86-1 ビット6004
島島225	87-3 ー	土器埋納遺構4	86-1 土坑6026
島島226	90-1 ー	土器埋納遺構5	90-2(H3) ー
島島227	90-1 ー	土器埋納遺構6	92-7 ビット1
島島228	90-1 ー	土坑25	90-1 土坑96
島島229	90-1 島畑89	土坑26	90-1 土坑35
島島230	90-1 島畑90	土坑27	90-1 土坑199
島島231	92-7 ー	土坑28	90-3(B) 土坑5
島島232	92-7 ー	土坑29	90-3(A) 土坑3
島島233	90-2(H3) 島畑45	土坑30	90-3(B) 土坑6
島島234	90-2(H3) 島畑44	土坑31	90-3(B) 土坑7
島島235	90-2(H3) 島畑43	土坑32	90-3(B) 土坑4
島島236	90-2(H3) 島畑42	土坑33	90-3(B) 土坑8
島島237	90-2(H3) 島畑41	土坑34	89-2 土坑3
島島238	90-2(H3) 島畑40	土坑35	93-1 土坑8
		土坑36	93-1 土坑9

表IV-11 第6 a面出土動物遺存体一覧

番号	遺構	調査区	調査時の遺構名称	時期	遺物番号	種名	部位	左右	部分	観察	
1	第6 a面・水路10	93-1	坪境27	12世紀後半～14世紀?	1138	不明					
2					1143	不明					
3					1154	スッポン	甲板				
4					1166	ウマ	脛骨				
5					1167	ウマ	下顎骨				オス12～13才。 I _{1,2,3} ,C
6					1168	不明					
7					1169	ウマ	臼歯	左下			
8					1193	不明					ウシ/ウマか?
9					1229-a	ウマ	中足骨				解体痕あり
10					1229-b	ウマ	踵骨	右			
11					1295	不明					
12					1332	ウマ	中手骨				解体痕あり。最大長 225mm+α

13世紀ぐらいのもので、瓦器椀は12世紀中頃～14世紀初めまでのものと、時間幅がある。土師器皿も11世紀後半から14世紀ぐらいのものと時間幅がある。土器の時期としては14世紀前半までにおさまるとされる。

また図IV-35: 1～5は、90-3調査区Aトレンチにおいて第6 b層から出土したと報告されたものである(概要II, p.26)。しかし、この調査区では第6 b層がほとんど残存しておらず、出土地区との照合の結果、第6 a層から出土したものである可能性が高くなった。その中には瓦器皿(1)・椀(2)、中国製白磁碗(3)、土師器台付皿(4)、土師器皿(5)、土錘(6)等がある。

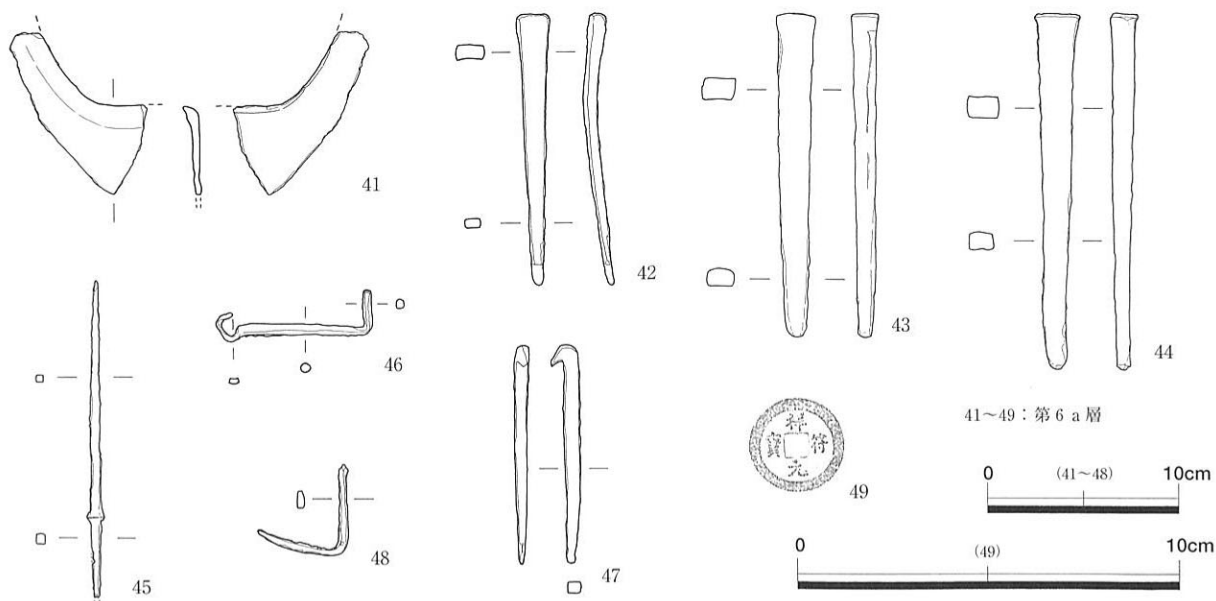
白磁碗は13世紀第1四半期頃のものである。また、瓦器椀は11世紀末～12世紀前半頃のもので、土師器皿は12世紀ぐらいのものである。また土錘は棒状有孔で、形態から古代以前のものである。

鉄製品は犁先(41)、馬鋤の歯(42～44)、鋤(45)、扇止(46)、釘(47)、不明品(48)である。扇止は扉や戸を開けたまま壁や柱に固定する金具である。銭貨は北宋銭の祥符元寶(初鑄1009年)である。

第6 a層の時期については、その母材となった氾濫・破堤堆積物の堆積過程と遺物との関係を丁寧に検討する必要があり、第6 b層の記述の後に整理することにした。

第6 b面 この面の状況は、鳥島の起源に関する従来の議論を理解するために重要な意味を持っている。ここでは層序・遺構についての再検討をおこない、後の検討にあたっての前提としたい。

まず、90-2・90-3調査区などにおいて、第7面で検出されたとされる鳥島の帰属面の問題を検討する。これらについては高さが数cm程度しかなく、鳥島の上から畦畔が検出されるなど、検討が必要とされていた。この点について、井上(1999)は府教委86-1調査区の状況を検討し、同調査区「第5遺構面」が鳥状に残存した部分は第6 b面の鳥島の痕跡であることを明らかにした。さらに、部分的に確認された第6 a層(粗砂が多く混じる)の上に第4 a層が直接のっているにもかかわらず、第4 a層には砂がほとんど含まれていないことから、第6 a層が第4 a層の耕作によって消滅したのではなく、第6 b層(砂)の堆積域の末端部に当たっていたため、第6 b層(砂)が堆積しなかった部分では第7層を耕作し続けた状態に近かった可能性が高いことを示した。ただし、この時は他の調査区の検討が不十分であり、90-2・90-3調査区のもの第7面から存在し、第6 b層堆積後にも踏襲されると考えていた。しかし、さらに検討を進めたところ、図版13-4に示すとおり、鳥島の上で検出された畦畔が砂でバックされていたことが判明した。その砂(第6 b層)は鳥島とされた部分にのみ顕著に残存しており、調査時に鳥島とされたものは、この砂を芯にして造成された鳥島の痕跡と考えられる。この成因は、宮城県富



図IV-33 第6 a面遺構・第6 a層出土遺物②

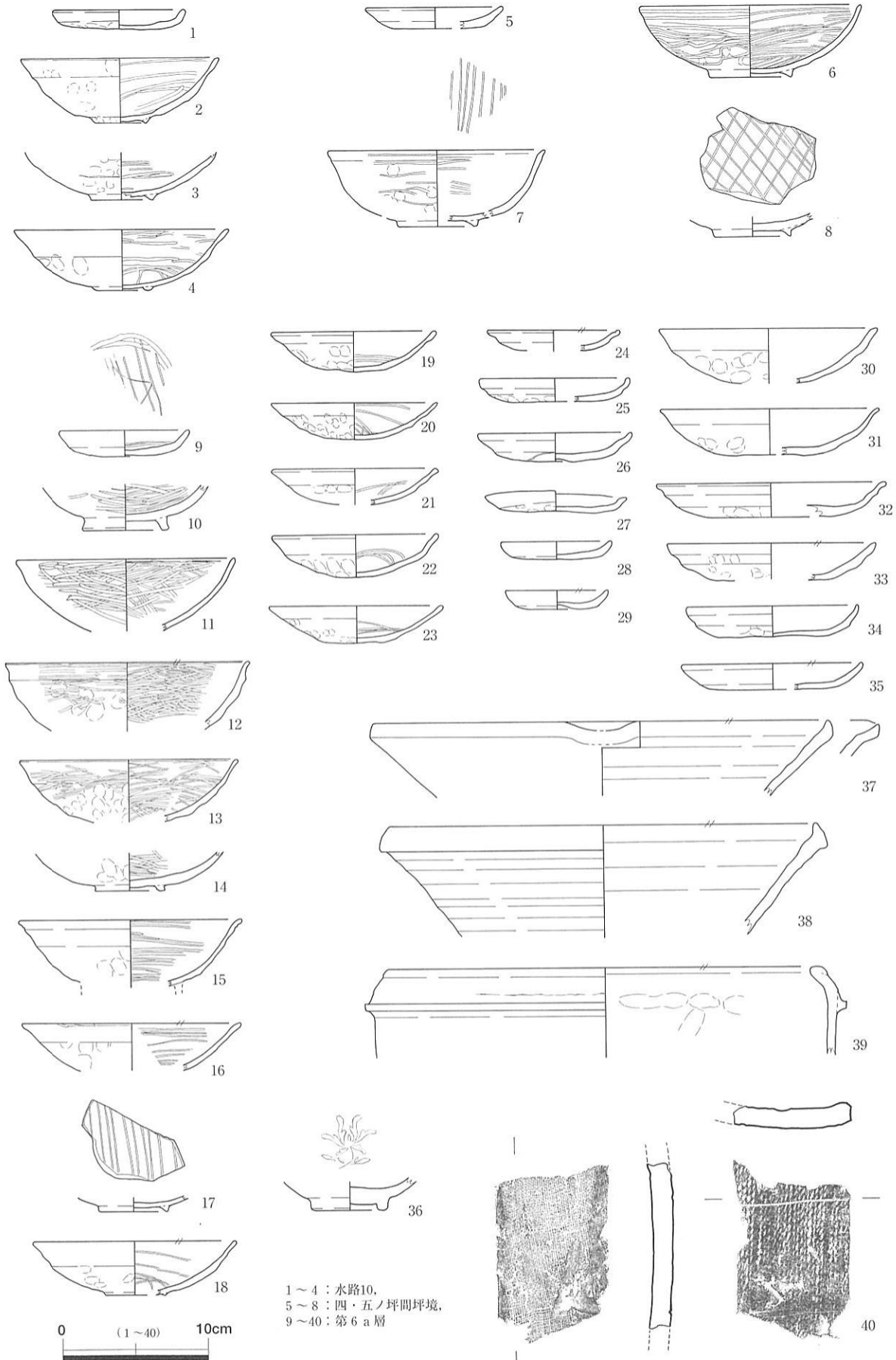
坪で検出されたものの中には、後述する第6 b面の鳥壺を踏襲し、第4 a面まで踏襲されるものもある。また、他のものについては、砂層を芯にして造成されるのではなく、盛土のみで造成されている。なお、十六ノ坪では畝間の溝と推定される小溝群が検出された(畝10)が、これは鳥壺168の芯となった砂でパックされた状態で検出された。畝幅は約1 mを測る。さらに、四、五ノ坪では畦畔が検出されているが、これは第5 b層がわずかに残存した部分で検出されたものである。

遺物の出土状況として注目されるのは、四・五ノ坪間坪境畦畔の南側の状況である。この部分の第6 a面直上からは、土師器皿(図IV-32:5)、瓦器碗(6~8)が出土した。後者は3個体がまとまって出土し(図版12-2)、前者はそこから若干離れた位置から出土した。この瓦器碗の一括資料は、第6 a面の存続時期を推定する上で重要な資料である。また、水路10からも遺物が出土した。特に、杭列1・2付近の水路底からは骨がまとまって出土した(表IV-11)²⁾。骨はウマのものが大半をしめており、中手骨、中足骨には解体痕が認められた。なお、第7面水路12においてもほぼ同じ位置から遺物がまとまって出土したが、両者は層位的にわかれて出土しており、第7面段階の骨を誤って掘り出したとは考えられない。また、第7面段階に出土した骨はスッポンの腹甲板しかないため、本来下層に含まれていたウマの骨が巻き上げられたとは考えにくい。これらのことから、ウマの骨はもともと水路10埋土に含まれていたと判断した。

次に、第6 a面の遺構から出土した遺物を列挙する(図IV-32:1~8)。水路10からは、土師器皿(1)、瓦器碗(2~4)等が出土した。13世紀前半~中頃のものと思われる。(3)には重ね焼きの痕跡がある。四・五ノ坪間坪境畦畔脇の第6 a面直上からは、前述のように、土師器皿(5)、瓦器碗(6~8)が出土した。土師器皿は13世紀ぐらいのものである。また、まとまって出土した瓦器碗は12世紀中頃~後半のものと思われる。

次に、第6 a層から出土した遺物を列挙する(図IV-32・33)。この層からは、瓦器皿(9)・碗(10~23)、土師器皿(24~35)・羽釜(39)、中国製磁器(36)、瓦質?片口鉢(37)、須恵器片口鉢(38)、平瓦(40)、鉄製品(41~48)、銭貨(49)等が出土した。

中国製磁器は龍泉窯系青磁碗で、内底面に陰印刻草花文があり、13世紀後半のものである。瓦器皿は



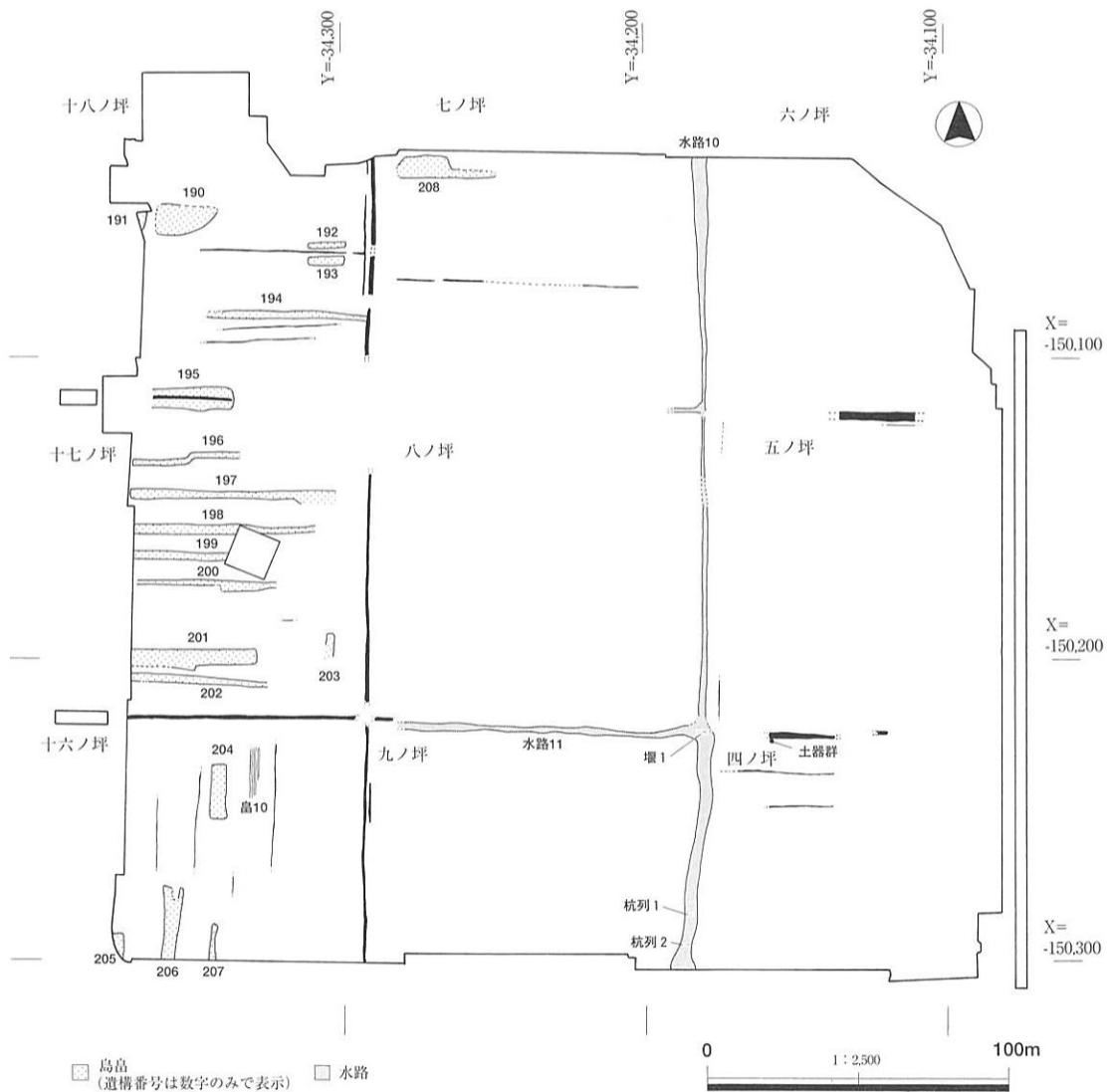
図IV-32 第6 a面遺構・第6 a層出土遺物①

表Ⅳ-10 第6 a面遺構名称

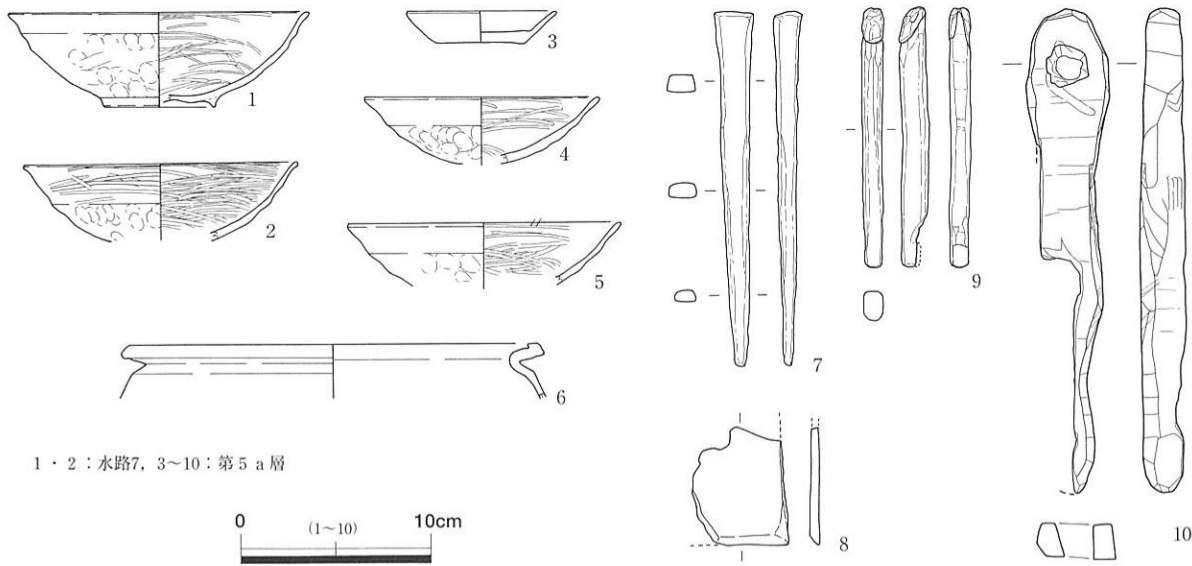
遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
島島190	90-2(H2) 島畑16	島島204	90-1 島畑88
	88-1 島畑801	島島205	92-7 島畑30
島島191	90-1 島畑42	島島206	92-7 島畑31
島島192	90-2(H2) 島畑17	島島207	92-7 島畑32
島島193	90-2(H2) 島畑18	島島208	90-2(H4) 島畑39
島島194	90-3(A) 島畑19	水路10	90-2(H4) 溝152
島島195	90-3(A) 島畑18		90-3(C) 坪境13
島島196	90-3(A) 島畑17		90-3(C) 坪境16
	90-1 島畑43		93-1 坪境27
	87-3 島畑703		93-2(B) 溝23
島島197	90-1 島畑44		93-2(C) 溝61
	87-3 島畑704	水路11	89-2 坪境溝
島島198	90-1 島畑60		93-1 坪境28
島島199	90-1 島畑61	堰1	93-1 堰1
島島200	90-1 島畑63	杭列1	93-1 堰9
島島201	90-1 島畑64	杭列2	93-1 杭列12
島島202	90-1 島畑67	畝10	90-1 畝群23
島島203	90-1 島畑46	土器群	93-1 土器群出土地点

放置されたため、その間の土壌化・攪乱によって明確にはできなかったが、やはり水路10から分岐する水路があった可能性が高い。ただし、その分岐点からは堰は検出されていない。さらに、水路10の南部では水路を横断して打設された杭列1・2が検出された。その性格については明らかにできないが、その南側の調査区外にある坪境交差点と関係する可能性もある。なお、その他の坪境には大畦畔が造成されていた。

その他の遺構については、当地区西部を中心に検出されている。この面で検出された島島は18基で、十七ノ坪・十八ノ



図Ⅳ-31 第6 a面平面図



図IV-30 第5 a面遺構・第5 a層出土遺物

ものは、第7面水路12→第6 a面水路10→第5 a面水路7と、幅を減じながら踏襲されたものである。また、島畠は六ノ坪から4基、四ノ坪から1基検出された。前者は第4 a面には踏襲されない。また、後者は若干位置がずれるものの、第4 a面の島畠183に踏襲される（図IV-21）。造成方法については、前者に属する島畠185~187、後者に属する島畠189が第5 b層の砂層を芯にして造成されたことを確認した。

なお、第6 a面精査中に確認された土坑の中に、埋土に第5 a層のブロックが含まれることから、第5 b面に帰属すると考えられるものが3基存在していた（土坑22~24）。いずれも一辺2 m、深さ1 m程度のもので、壁はほぼ垂直に立ち上がる（図版11-6）。埋土はシルトブロックと砂が入り混じった土であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

次に、第5 a面の遺構と第5 a層から出土した遺物を列挙する（図IV-30）。水路7からは瓦器椀（1・2）等が出土している。時期は12世紀末~13世紀前半のものである。この遺物は本来、第6 a面水路10の中に含まれていた可能性がある。第5 a層からは、鉄製馬銚の歯（7）・不明品（8）、男根状木製品（9）・不明木製品（10）等が出土した。男根状木製品は四・五・八・九ノ坪交点付近から出土したもので、写實的に作られている。また、不明木製品には孔が1ヶ所残存するが、あと2ヶ所穿けられていたと思われ、何かの部材と思われる。第7面水路12の図IV-40:45も同様なものである。

また、取り上げの不備等により断定できないが、第5 a層から出土したと考えられるものとして、中国製白磁皿（3）、瓦器椀（4・5）、土師器羽釜（6）等がある。時期は13~14世紀のものである。

これらの遺物から第5 a面の時期を推定するのは難しいが、上下の層準の状況も勘案して、14世紀に年代の1点を有し、15世紀に一部かかる可能性がある、と推定しておきたい。

第6 a面 この面は、西半部では第4 a層を、東半部では第5 a層を除去して検出した。上層の耕作の影響により遺存状況が悪かったため、等高線図は作成しなかった。

この面で検出された遺構としては、水路、畦畔、島畠等がある。まず当地区東部では、四・九ノ坪、五・八ノ坪、六・七ノ坪間を貫く水路10が検出された。これは第7面水路12が幅を狭めて踏襲されたものである。八・九ノ坪間も水路であるが（水路11）、これは水路10から分岐するものであり、その分岐点には堰が設置されていた（堰1）。また、七・八ノ坪間については、府教委Eトレンチ調査後にしばらく

表IV-9 第5 a面遺構名称

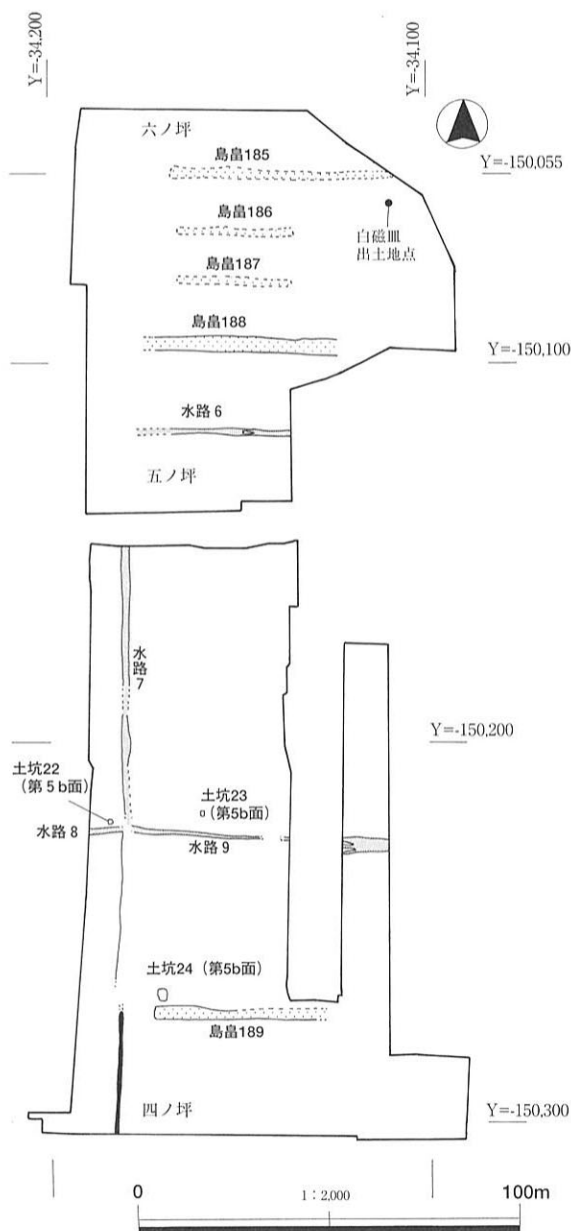
遺構番号	概要における遺構番号
島畠185	90-2(H4) 大畦畔36
島畠186	90-2(H4) 大畦畔37
島畠187	90-2(H4) 大畦畔38
島畠188	90-3(C) 島畑7 93-2(A) 島畑14
島畠189	93-1 島畑42
水路6	90-3(C) 坪境14 93-2(A) 溝21
水路7	93-1 坪境23 93-2(B) 溝22 93-2(D) 溝55
水路8	93-1 坪境25
水路9	93-1 坪境22 Dトレンチ -
土坑22	93-1 土坑5
土坑23	93-1 土坑7
土坑24	93-1 土坑20

断面図を再検討し、この点について整理した。

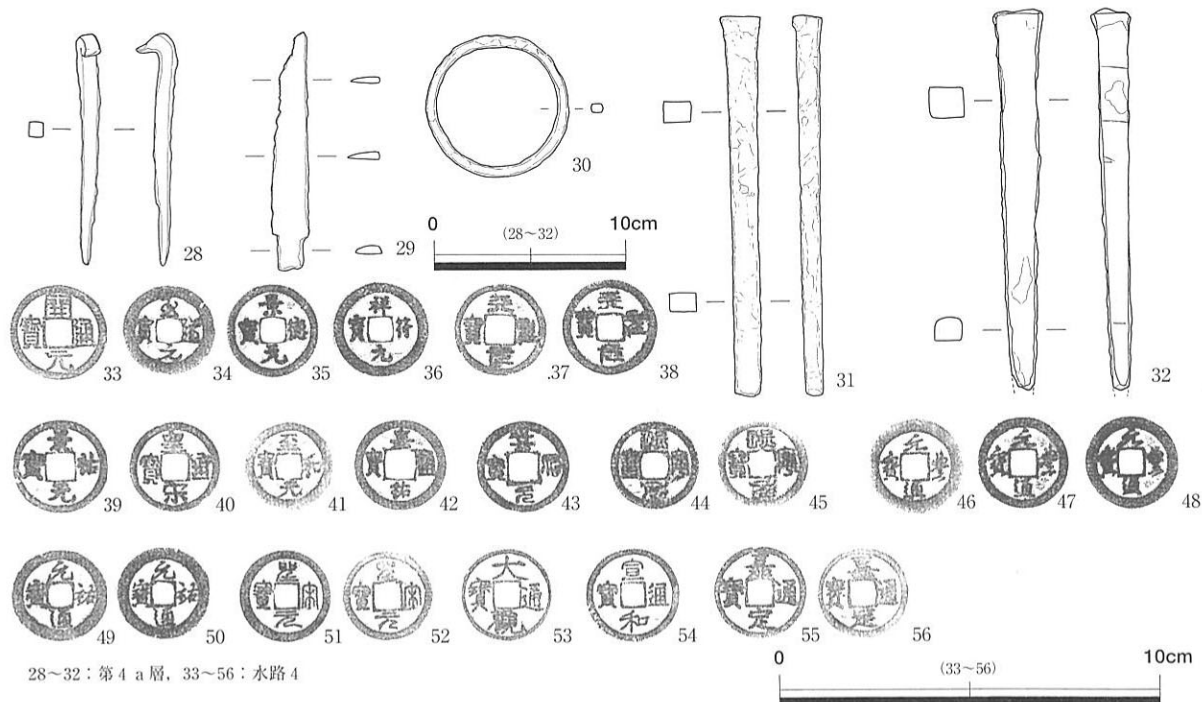
まず93-2調査区の「島畑25」については、第3 b層の堆積以後に造成されたことが、断面図の記載から明らかになった。また、90-3調査区Cトレンチにあたる五・六ノ坪間坪境は遺構が検出されなかったとされているが、断面の検討により、第6 a面に対比される「第8面」で確認した「坪境14」と呼ばれた水路が、この面に帰属することが明らかになった。この調査区では島畠188の帰属面を追究して第5 a面を認識しており、その他の遺構の帰属に関する検討が不十分であったと考えられる。さらに、90-2(H4)調査区「第10面」は第7面に対応するが、この面では島畠が3基検出されたと報告されている(図IV-37:上段、図版11-5)。しかし、第7面の島畠とされた部分の直上に、

第5 b層の砂が堆積しているのは不可解である。この砂の下面は旧地表面にほぼ相当すると考えられるが、図では砂の下面が第6 a面と第7面にまたがってしまっている。これが正しいとすると、第6 a層段階に第7面を残して耕作したことになるが、砂の下面から推定される地表面は平坦であるから、第6 a面段階に不自然な耕作方法を想定しなければならぬ。断面図の記載や写真を参考にする、レンズ状に残存した第5 b層の下の部分が周囲に比べて若干違った色に見えたために、線引きを誤ってしまったと考えられる。なお、この部分の第5 b層は平面では帯状に残存し、10 m程度の間隔を置いて並んでいるため、第5 a面の島畠の芯であった可能性が高い。これらの島畠の盛土は第4 a面の耕作によって削られたと思われる。図IV-29では、以上の認識にもとづいて島畠185~187を図示した。さらに、92-6調査区では第6 a面に対応する「第10面」付近から、完形の白磁皿(図IV-30:3)が出土している。これについて写真で出土状況を確認したところ、若干浮いた状態であったことが判明したため、第5 a層に含まれていた可能性が高いと判断した。

こうした整理にもとづいて、この面に帰属する遺構について説明することにする。まず坪境については、四・九ノ坪間が畦畔、五・六ノ坪間、五・八ノ坪間、八・九ノ坪間、四・五ノ坪間が水路であった(水路6~9)。このうち五・八ノ坪間の



図IV-29 第5 a面平面図



図IV-28 第4 a面遺構・第4 a層出土遺物②

次に、第4 a面の遺構から出土した遺物を列挙する（図IV-27・28）。鳥島179盛土内からは瓦質甕（図IV-27:15）の小片が出土した。14世紀ぐらいのものである。鳥島184盛土内からは瓦質羽釜（図IV-27:24）が出土した。15世紀ぐらいのものである。また、水路4からは銭貨（図IV-28:33~56）がまとめて出土した（図版11-4）。（33）が唐銭（開元通寶）、（34~54）が北宋銭（至道元寶、景德元寶、祥符元寶、天聖元寶、景祐元寶、皇宋通寶、至和元寶、嘉祐通寶、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、聖宋元寶、大觀通寶、宣和通寶）、（55・56）が南宋銭（嘉定通寶）である。初鑄年は955~1208年であり、ばらつきがある。

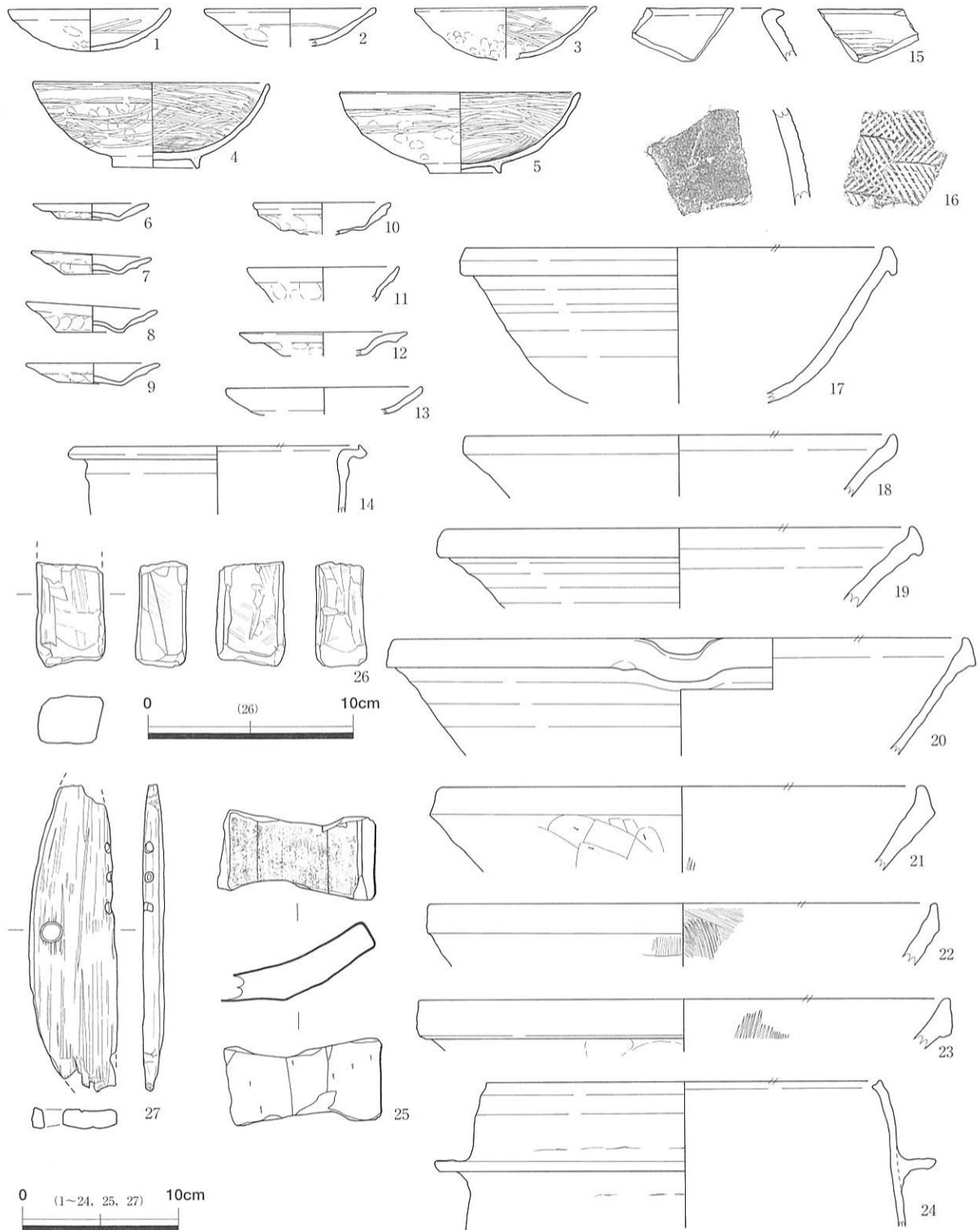
さらに、第4 a層から出土した遺物には、土師器皿（6~11）、瓦器椀（1~5）、須恵器鉢（17~19）、瓦質播鉢（21~23）、瓦？（25）、砥石（26）、不明木製品（27）、鉄製品（28~32）等がある。土師器皿は14~15世紀頃のものである。瓦器椀には12世紀代のもものと14世紀前半のものである。瓦器椀のうち、残りのよいものは五・八ノ坪間坪境付近から出土しており、もともと下層の水路に帰属していた可能性が考えられる。須恵器鉢は13世紀代のも、須恵器甕は14世紀後半~15世紀前葉のもと思われ、東播系のものである。（16）は矢羽根状のタタキである。瓦質播鉢は14~15世紀のもと思われ、土器の時期は15世紀前半までにおさまる。

不明木製品（27）は、何かを差し込んでいたのか、側縁に孔が3個現存している。鉄製品は（28）が釘、（29）が刀、（30）は不明だが轡の一部と思われるもので、（31）・（32）が馬銜の歯である。砥石は流紋岩製で、4面使用している。なお、取り上げ時の不備により断定できないが、第4 a層出土の可能性のある遺物に、土師器皿（12）・羽釜（14）、須恵器鉢（20）等がある。13~15世紀のものである。

以上のような遺物の状況と、第3 b層の堆積時期を合わせて考えると、第4 a層の耕作時期は15世紀代を中心とし、15世紀後半代に第3 b層の堆積によって埋没したと推定される。

第5 a面 第5 a層は当地区東部にのみ残存していた。ただし、この面は調査の終わりごろになって新たに認識され、遺存状況も悪かったため、遺構の帰属に関して混乱が生じてしまった。そこで今回、

群が検出された。これについても畝間の溝の可能性があると判断し、畝跡とした。畝幅は1～1.5mを測る。池島I期地区の第4 a面では、こうした畝跡が広範囲にわたって検出されている。当地区と池島I期地区の第4 a面は同時に埋没したのではない可能性が高いが、中世後期における土地利用のあり方を考える上で重要な資料といえる。その他、七ノ坪において、第3 b層で埋没した井戸49を検出した。これは素掘りの井戸である。



図IV-27 第4 a面遺構・第4 a層出土遺物①

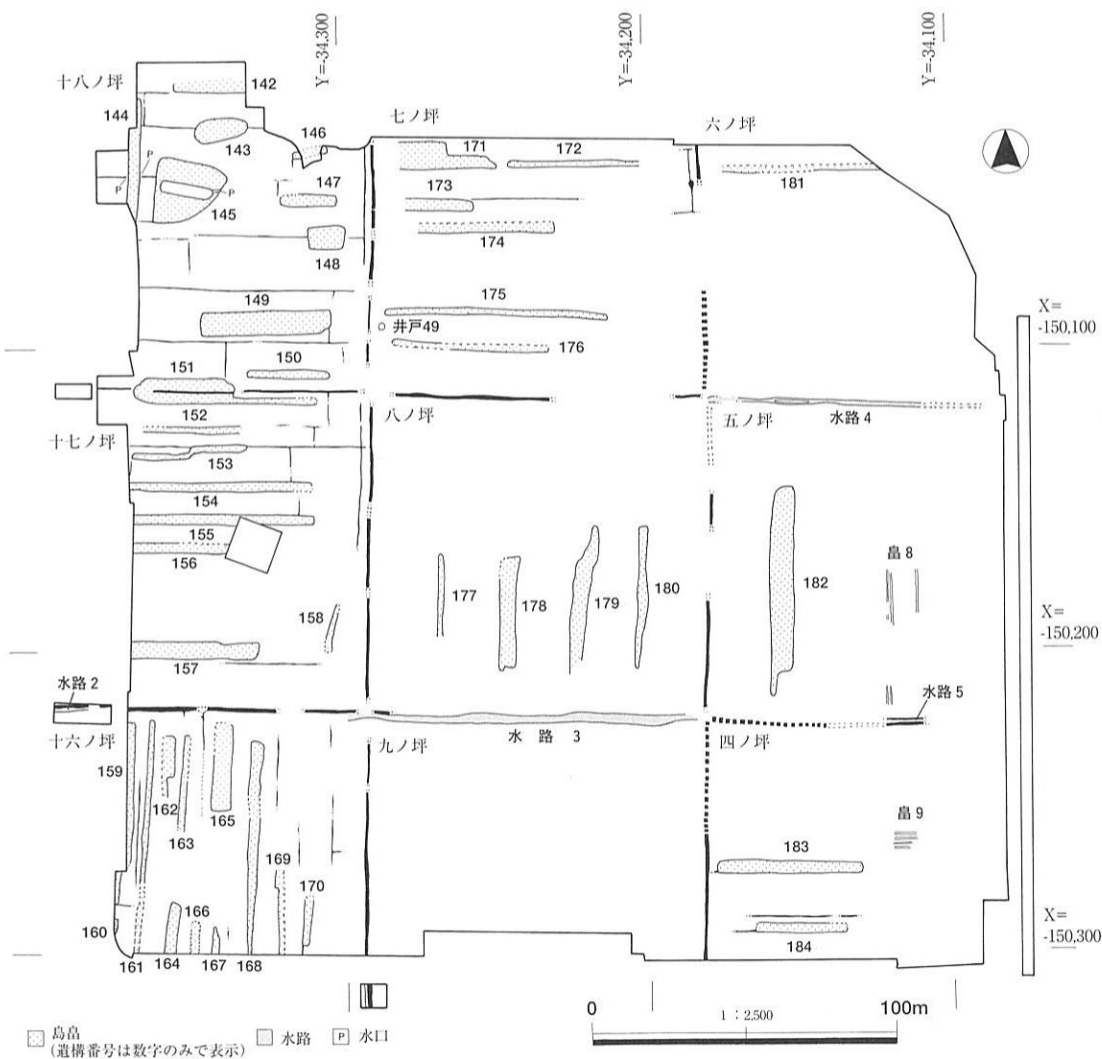
1～11・13・16～19・21～23・25～27：第4 a層，12・14・20：第4 a層？，15：島畠179，24：島畠184

第4 a面 第3 b層を除去して検出した面である。第3 b層は当地区西側では厚く堆積していたものの、東側ではほとんど残存しておらず、第3面島島の下にのみ残存していた。したがって、この面の遺構配置は明確にできたものの、第3面段階の耕作の影響を受けた部分が多く、等高線が本来の起伏を表しているとは言い難いため、等高線図は作成しなかった。

この面で検出された遺構としては、水路、畦畔、島島等がある。坪境においては、八・九ノ坪間で水路3を検出した。水路3は十六・十七ノ坪間坪境のほうにもびているが、この坪境の西端で検出された水路2と接続していたかどうかは不明である。また、五・六ノ坪間では水路4を検出した。さらに四・五ノ坪間では大畦畔の北側に小畦畔が造成され、両者の間が水路として利用されたと考えられる（水路5）。その他の坪境では大畦畔が検出されたが、六・七ノ坪間、七・十八ノ坪間、八・十七ノ坪間では大畦畔に平行して小畦畔が設けられ、細長い水田区画が作られていた。

また、島島は43基検出された。それらは当地区西側の七・十八・十七・十六ノ坪に多く認められ、四・五・六・八ノ坪にも若干存在していた。この面の島島のうち、砂層を芯にして造成されたものは島島168、178～180、183のみであり、大半は盛土のみによって造成されていた。

なお、四・五ノ坪では、第3 b層が第3面の島島の芯に利用されて残存していた部分において、小溝



図IV-26 第4 a面平面図

Y = -36,360ライン断面において、「掘田埋土」の上に「掘田内作土」が存在したとされている（概要X II, p.11, pp.13-14）。この部分を示したのが図版10-6である。この作土は埋没した土坑の上に形成されたもので、土坑の影響で周囲よりもやや低くなっている（埋没後の沈下の可能性もある）が、第3-2 a層とみてよいと思われる。以上のことから、これらの土坑が掘込田である可能性はほとんどないと判断される。この土坑の掘削の目的については明らかにできないが、島島が集中して認められる微高地Aの末端部に存在するという立地にも注意しつつ、今後類例が調査されるのを待ちたい。

次に、第3-2 a層～第3-4 a層関連の出土遺物を列挙する（図IV-24）。第3-2 a面島島83作土・盛土内からは、13世紀前半頃の瓦器椀

（1）、滑石製石鍋（2）等が出土した。石鍋も13世紀ぐらいのものである。第3-2 a層からは、土師器皿（3～5）、砥石（7）、柿経（8）等が出土した。土師器皿は13～16世紀と時期がばらつく。柿経は『法華経』第5巻の一節「生故然（後）乃得成菩」である。砥石は流紋岩製で4面使用している。第3-3 a～4 a層からは、木製下駄（9）、鉄製馬鋏の歯（10）等が出土した。また、第3-4 a層からは、14世紀ぐらいの時期の土師器皿（6）等が出土した。

なお、90-1調査区A地区では、第3-2 a層から染付碗が出土したとされている（概要X II, p.55, 図23-4）が、これは前後の層準の状況と整合しない。この出土地点は、府教委87-4調査区の跡に設置された監視塔の掘り形埋土に接しており、そこからの混入の可能性がある。したがって、この資料も第2 b層から出土したとされていた染付と同じように、時期推定には利用できない。

第3 b層 氾濫・破堤堆積物と考えられる第3 b層から出土した遺物を列挙する（図IV-25）。出土したのは、陶器茶碗（3）、土師器皿（1）、瓦器椀（2）、瓦質羽釜（4・5）・播鉢（6）等である。

陶器茶碗は瀬戸窯系灰釉で、トチン跡がある。15世紀後半頃のものである。土師器皿は14世紀ぐらい、瓦器椀は13世紀末～14世紀初めのもの、瓦質土器類は15世紀ぐらいのものである。

このように、第3 b層から出土した土器は15世紀後半までのものである。前後の層準から出土した遺物のあり方と合わせて考えると、この層の堆積時期は15世紀後半代と推定される。

第3 b層・第2 b層出土遺物の時期からみて、第3-4 a～3-1 a層の時期は15世紀後半～16世紀後半であり、氾濫堆積物が供給されるたびに復旧され、耕作が続けられたと考えられる。

表IV-8 第4 a面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
島島142	86-1 島煙4001	島島168	90-1 島煙86
島島143	86-1 島煙4005		92-7 島煙21
島島144	90-1 島煙33	島島169	92-7 島煙22
	86-1 島煙4002	島島170	92-7 島煙23
島島145	90-2(H2) 島煙15	島島171	90-2(H3) 島煙37
	86-1 島煙4003・4004	島島172	90-2(H3) 大畦畔4
島島146	90-2(H2) 島煙12	島島173	90-2(H3) 島煙38
	86-1 島煙4006	島島174	90-2(H3) 島煙35
島島147	90-2(H2) 島煙13	島島175	90-3(B) 島煙8
島島148	90-2(H2) 島煙14	島島176	90-3(B) 島煙9
島島149	90-3(A) —		86-2 島煙501
島島150	86-2 島煙502	島島177	89-1 島煙8
島島151	90-3(A) 島煙12	島島178	89-1 島煙7
	86-2 坪境畦畔504		89-2 島煙19
島島152	90-1 島煙34	島島179	89-1 島煙6
	90-3(A) 島煙11		89-2 島煙18
	87-3 島煙702	島島180	89-1 島煙5
島島153	90-1 島煙35		89-2 島煙17
	90-3(A) 島煙10	島島181	90-2(H4) 大畦畔34・35
	87-3 島煙703	島島182	90-3(C) 島煙24
島島154	87-3 島煙704		93-1 島煙24
島島155	90-1 島煙55		93-2(B) 島煙10
島島156	90-1 島煙56		93-2(C) 島煙24
島島157	90-1 島煙58		87-2 島状遺構801
島島158	90-1 島煙45	島島183	93-1 島煙40
島島159	90-1 島煙81	島島184	93-1 島煙41
	92-7 島煙17	島8	88-2 島903・904・905
島島160	92-7 島煙18	島9	88-2 島902
島島161	90-1 島煙82	水路2	Gトレンチ —
島島162	90-1 島煙83	水路3	89-2 坪境溝
島島163	90-1 島煙84		93-1 坪境21
島島164	92-7 島煙19	水路4	90-3(C) 坪境10
島島165	90-1 島煙85		93-2(A) 溝19
島島166	92-7 —		90-5 溝74
島島167	92-7 島煙20	水路5	88-2 坪境溝901
		井戸49	90-3(A) 井戸2

形成されたことを意味する。

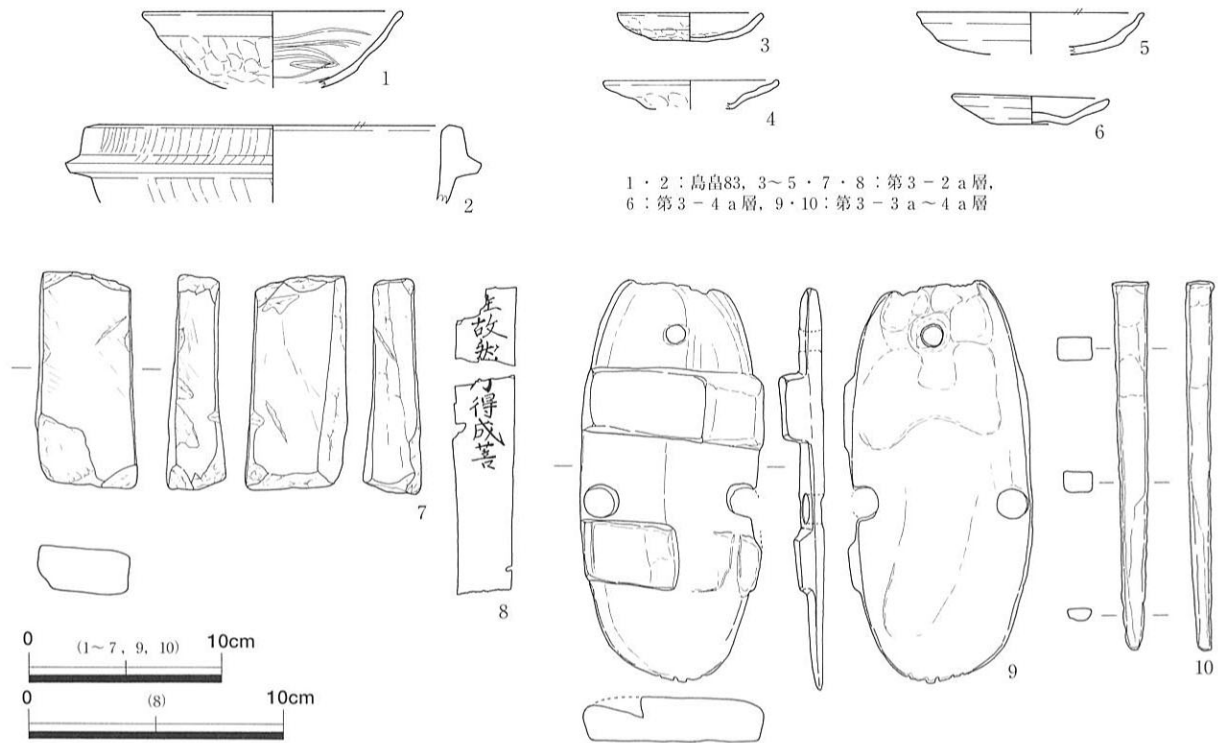
また、この面で特徴的なのは、島畠が氾濫堆積物の供給に伴って拡張されていく過程が明瞭に観察できたことである（図IV-22・23）。島畠は第3 b層（氾濫・破堤堆積物）を芯とするものが多いが、第4 a面の島畠を踏襲する形で造成されたものもある。ただし、拡張の過程を見落としている調査区が少ないため、拡張の過程を平面図に表すことは困難である。概要X Vでは93-1調査区における島畠の変遷を表した平面図が提示されているので、それを修正して島畠の拡張過程を示しておく（図IV-21）。この調査区では第5 a面から島畠が造成されているが、第3 b層の堆積を契機にして島畠が増加し、第3-2 a面では四ノ坪にあたる範囲において、7割以上の面積を島畠がしめるようになる。

なお、第3-2 a面島畠125、島畠118とその前身の第3-3 a・4 a面島畠271の作土・周辺の水田作土・氾濫堆積物を対象にして、花粉分析を実施した（図IV-20、第V章2-1）。その結果、島畠作土をはじめ、ほとんどの層準からソバ属の花粉が検出された。また、ゴマ属の花粉が検出された層準もあった。試料採取地点かどうかは難しいが、これらが周辺で栽培されていた可能性が考えられる。

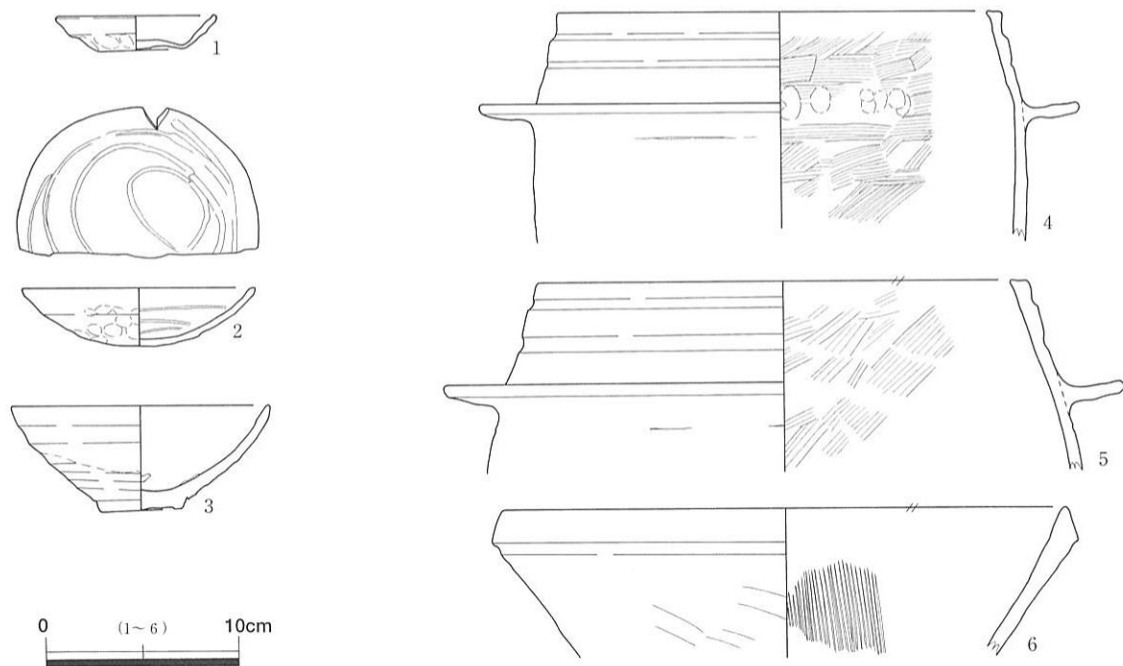
また、田面と同じレベルの場所で小溝群が検出された部分もあった。これについては畝間の溝の可能性があると判断し、畠跡と推定した（畠1~7、図版9-3・4）。こうした遺構は、八ノ坪の南東、九ノ坪の西端と東端、十六ノ坪の島畠の脇、六ノ坪の島畠間で検出された。畝幅は、畠1が1.2m、畠3が0.6~1m、畠2・4が約1m、畠5~7が0.5~0.7mを測る。いずれも残存高は数cmであるが、これについては圧密の影響を考慮する必要がある。

なお、第3層掘削中に土坑が8基検出された。これらは基本的に第3-2 b面に帰属すると考えられる。このうち、土坑50は平面形が長辺約2m、短辺約1mの長方形を呈し、深さは約1mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、砂とシルトブロックの入り混じった土で埋められていた。また、土坑20・21は、概要では「掘田」と解釈されている（概要X II, p.45）。前者は長さ63m、幅4m、深さ0.3~0.4mを測るもので、後者は調査区外にのびるため長さは不明であるものの、幅や深さは前者と共通する。また、土坑16・18・19についても、やや確証に欠けるとしながら、やはり「掘田」としている。ここで問題なのは、「掘田」とは何を指すのか、ということである。少なくとも、第VI章4で言及する掘上田に伴う掘り潰れの井路（図VI-12）とは全く異なる。概報の記述を参考にすると、一段深く掘り下げた部分を水田として利用する「掘込田」（能登1997）のこのようであり、それは「極度の渇水に対する取組」であるとされる。しかしながら、この土坑底面が水田として利用されたとする根拠は明確ではない。土坑の底面に農耕具痕が残っていることが根拠のひとつにあげられているが、この農耕具痕は土坑底面から数cmしか深さがなく、土坑の埋土が中に入り込んでいる。このことからみて、これらは土坑底面の耕作に伴うものではなく、土坑掘削時につけられた掘削具の刃先の痕跡と考えられる。また、掘削は砂混じりシルトの第4 a層まで到達しているにもかかわらず、埋土には砂が多く、砂の間にシルトブロックが含まれていた（図版10-6・7）。この砂は第3 b層起源のものと考えられるが、掘り返した土でそのまま埋め戻したとすれば、もっとシルトブロックが含まれていてもよいのではなかろうか。さらに、埋土の状況が第1 b面土坑群5に類似していることも注意される。これらのことからみて、この土坑は下層のシルトを採取した痕跡の可能性が高い。概報では、「掘田」の中で井戸や畦畔が検出されたとされている。しかし、土坑20西端にある円形の掘り込みを井戸とする積極的な根拠は存在しないし、土坑20・21内で検出されたとされる「畦畔」は、写真で確認したところ、その粒度からみて第4 a層を掘り残したものである可能性が高い。これは土坑掘削の方法に関わるものではなかろうか。また、土坑21については、

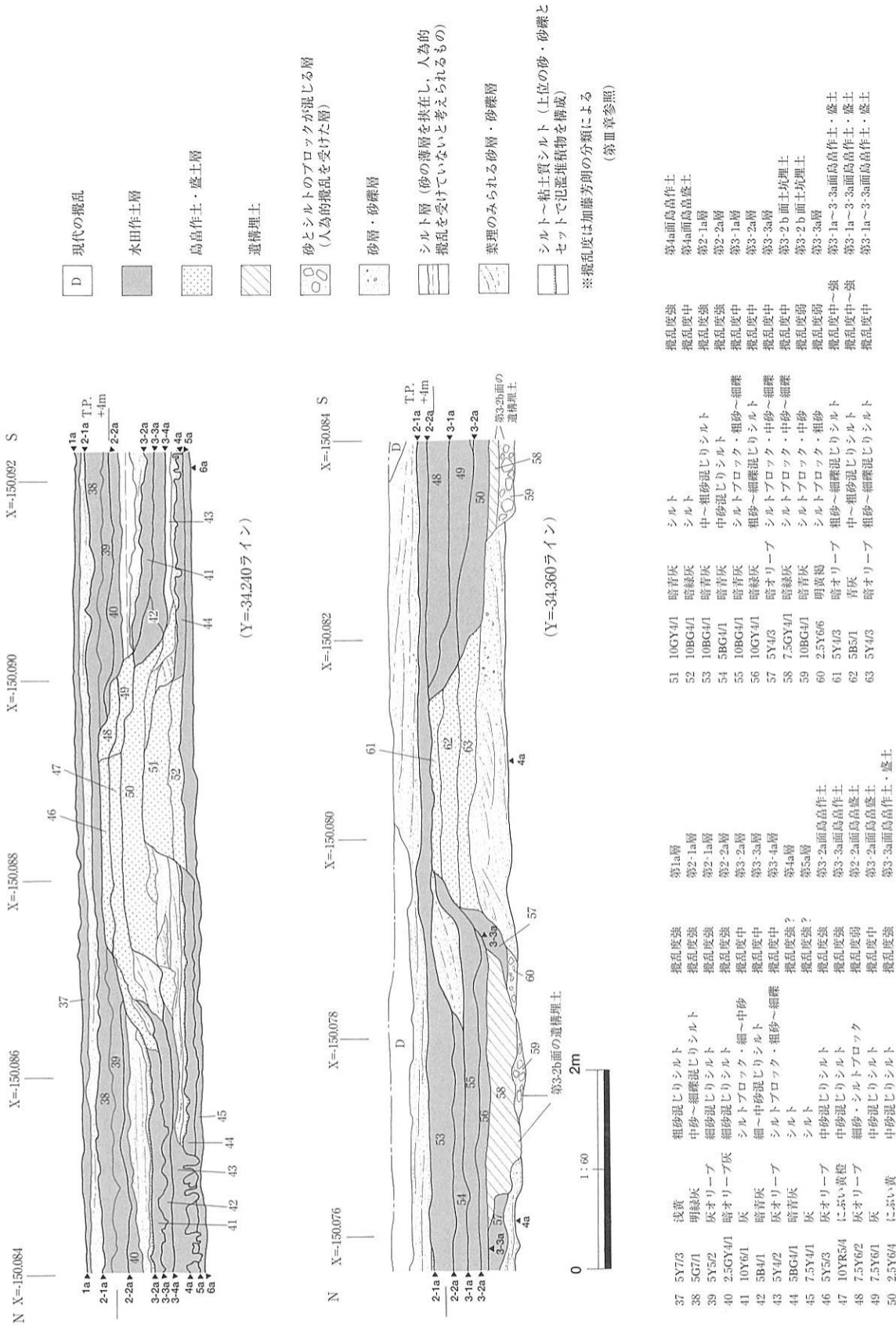
小溝群は、高まりの上ではなく、田面と同レベルの場所に立地している。このように、鳥島が少ない部分では別の土地利用のあり方が推定できるため、鳥島の集中部分は本来のあり方を示すと考えられる。また、この面の鳥島の多くは第3 b層を芯にして造成されており、この砂礫層が厚く堆積した部分を中心に鳥島が造成されたと思われる。表層微地形と比較すると、鳥島が集中する部分は微高地AとCの末端部にほぼ一致するが、このことは、当地区周辺における表層微地形の原型が第3 b層の堆積によって



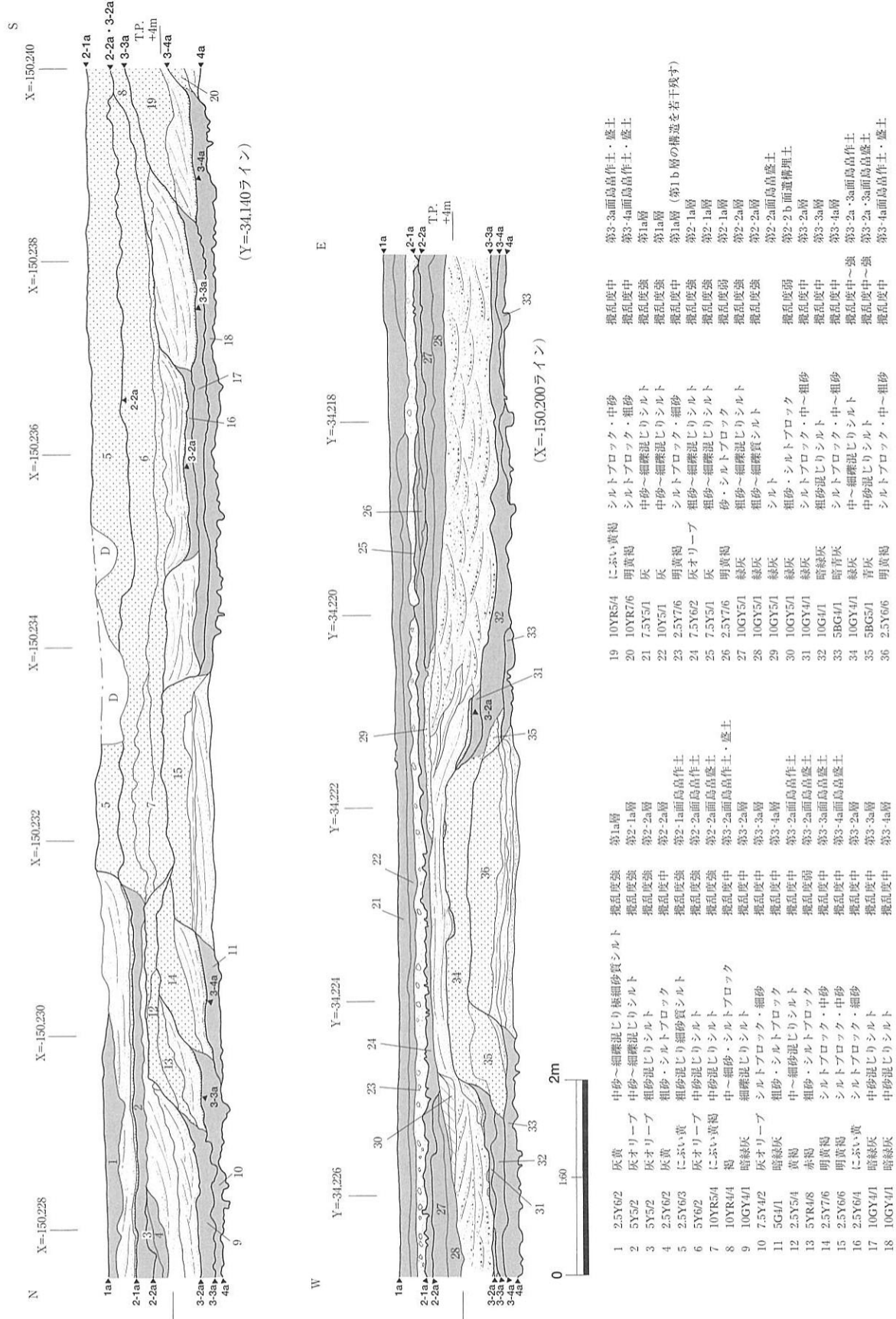
図IV-24 第3-2 a面遺構・第3-2 a・3 a・4 a層出土遺物



図IV-25 第3 b層出土遺物



図IV-23 第2-1a面～第4a面島島断面図②



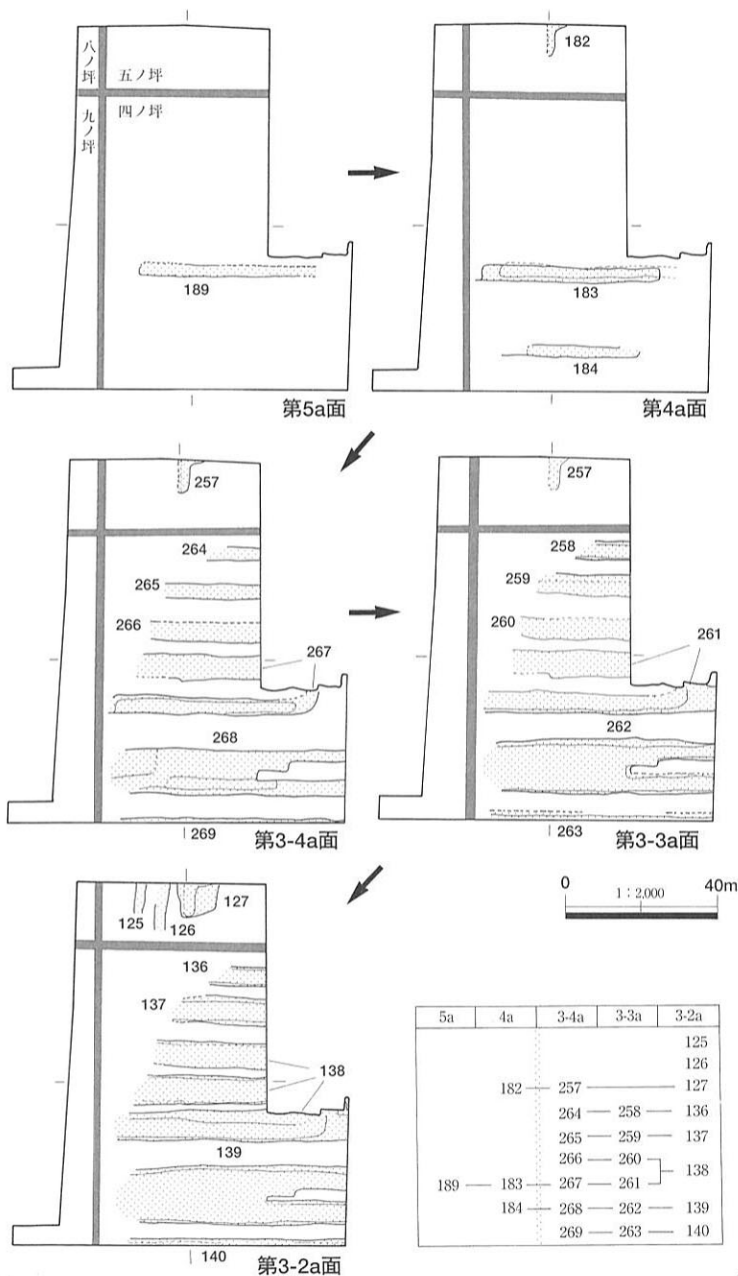
図IV-22 第2-1 a面～第4 a面島断面図①

表IV-7 第3-3a面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	備考
島窟257	93-1 島畑19	第3-3a~4a面
島窟258	93-1 島畑20	
島窟259	93-1 島畑21	
島窟260	93-1 島畑22	
島窟261	93-1 島畑23	
島窟262	93-1 島畑37	
島窟262	93-1 島畑38	第3-4a面
島窟263	93-1 島畑39	
島窟264	93-1 —	
島窟265	93-1 —	
島窟266	93-1 —	
島窟267	93-1 —	
島窟268	93-1 —	
島窟269	93-1 —	

堆積時の侵食痕と考えられる。同様の凹地は四ノ坪北西部でも認められ、島窟の一部が侵食されていた。さらに、当地区西半にある2つの坪境交差点も侵食されていた。

第3-2a面で検出された遺構としては、畦畔、島窟、島などがある。坪境はすべて大畦畔であるが、侵食により流出してしまった部分もある。流出をまぬがれた四・五・八・九ノ坪交点では水口が検出された(図版9-5)。なお、八・九ノ坪間坪境では、89-2調査区で水路が検出されたと報告されている(概要I, p.59)。しかしながら、



では第3-2a層が流出して遺存していないばかりか、最も侵食された箇所では第3-3a・4a層すら流出していた。検出された水路は明瞭に認識できたようであるが、この調査区の情報だけではその帰属面を明らかにすることはできない。その後、89-2調査区の脇の90-1・93-1調査区において、第3-2a面で大畦畔が、第4a面では水路が検出されており、89-2調査区で検出された水路は第4a面に帰属する可能性が高い。第3-2a面では、この水路を埋めた砂を芯にして大畦畔が造成されていたと考えられる。

島窟の分布をみると、集中部分の存在が目される。集中するのは、十六ノ坪の一部・十七・十八・七ノ坪と、四・五ノ坪・六ノ坪の南側の2つである。中央部が侵食されたため、結果としてそのような形になった、という意見も予想されるが、十六ノ坪~十七ノ坪の中央付近に南西-北東方向のラインを引くと、その北側に島窟が集中し、南側では畦畔が存在している。また、四ノ坪では島窟のしめる割合が水田の割合よりも多いが、坪境畦畔を挟んだ九ノ坪東部では畦畔および島跡と考えられる小溝群が検出されている。この

図IV-21 第3-2a面~第5a面における島窟の変遷

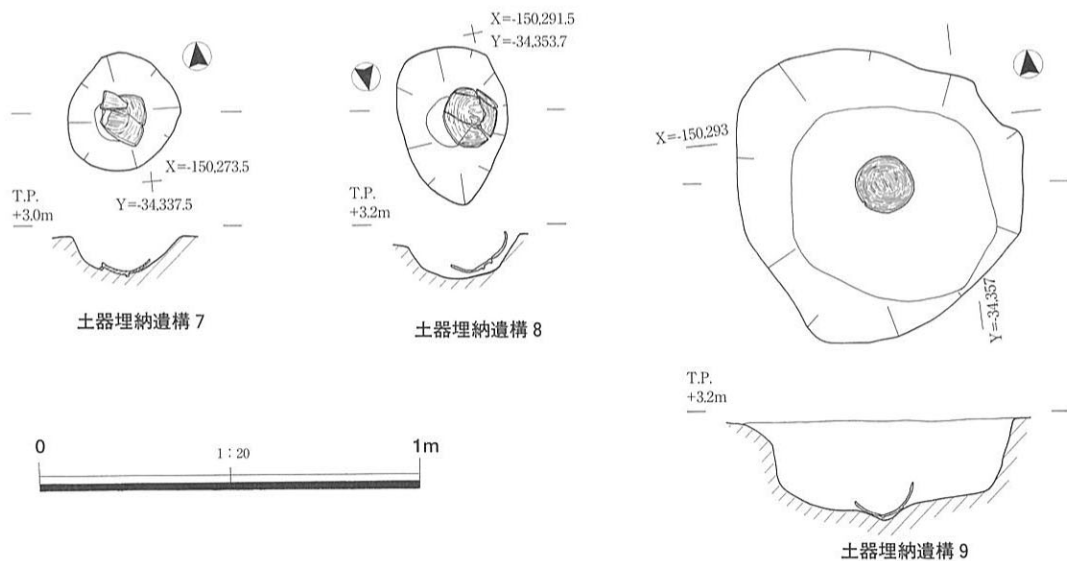
(6) が出土した。大和型で12世紀中頃～後半のものである。土器埋納遺構22からは瓦器椀(8)が出土した。大和型で12世紀中頃のものである。土器埋納遺構87からは黒色土器A類椀(7)が出土した。11世紀前半のものである。落ち込み4からは黒色土器A類椀(9)が出土した。11世紀前半のものである。

土器埋納遺構の時期を見ると、11世紀前半～中頃のもの、12世紀初頭頃のもの、12世紀中頃～後半のものがある。最初のは第8a層の最新遺物の時期に重なっており、2番目のものは第7面出土遺物の時期と重なっている。また、最後のグループに属する瓦器椀は第7面の最新遺物や第6a面直上土器群の時期に重なっており、一応第7b面に帰属すると推定した。ただし、これらの大半は第6b面に帰属すると考えられる土器埋納遺構の近くから検出されており、第6b層(下)の堆積後に埋納された可能性も残されている。

いずれにせよ、以上述べた状況をまとめれば、氾濫堆積物である第7b層は11世紀前半ないし中頃に堆積し、その堆積後すぐに第7-3a層の耕作が開始されたと思われる。また、第7面の耕作は11世紀後半代には開始され、12世紀後半まで継続したといえる。そして、12世紀後半には第6b層の堆積が始まり、第6a層の段階へ移行していったと考えられる。第7面関連の最新遺物と第6a面に関連する最古の遺物の時期が重なっているのは、第7面と第6a面の間に断絶がなく、砂礫堆積後すぐに復旧され

表IV-17 第7b面土器埋納遺構一覧

構番号	調査区	調査報告時名称	出土遺物	所在坪名	遺構の概要			時期	遺物図番号
					遺構の形態	規模 (cm) 長径×短径×深さ	土器の埋納状況		
土器埋納遺構2	86-1調査区 (府発III)	土坑6011	瓦器椀1	十八ノ坪	土坑	79×77×16	底面西寄りに正位で埋納	12世紀中頃	—
土器埋納遺構5	90-2調査区		瓦器椀1	七ノ坪	不明	不明		12世紀中頃	図IV-45:1
土器埋納遺構7	92-7調査区 (XIV)	瓦器ビット4	黒色土器B類椀1	十六ノ坪	土坑	直径30×10	土坑底面中央に正位で埋納	11世紀中頃	図IV-45:2
土器埋納遺構8	92-7調査区 (XIV)	瓦器ビット3	瓦器椀1	十六ノ坪	土坑	43×29×10	土坑底面西寄りに正位で埋納	12世紀中頃	図IV-45:3
土器埋納遺構9	92-7調査区 (XIV)	瓦器ビット2	瓦器椀1	十六ノ坪	土坑	直径76×24	土坑底面中央に正位で埋納	12世紀初頭	図IV-45:4
土器埋納遺構10	92-7調査区 (XIV)	瓦器ビットA	瓦器椀1	十六ノ坪	不明	不明		12世紀中頃	図IV-45:5
土器埋納遺構11	92-7調査区 (XIV)	瓦器ビットC	瓦器椀1	十六ノ坪	不明	不明		12世紀後半	図IV-45:6
土器埋納遺構87	90-2(H2) (III)	不明	黒色土器A類椀1	十八ノ坪	不明	不明		11世紀前半	図IV-45:7
土器埋納遺構93	89-3(1)	—	瓦器椀1	九ノ坪	—	—		12世紀中頃	図IV-45:8

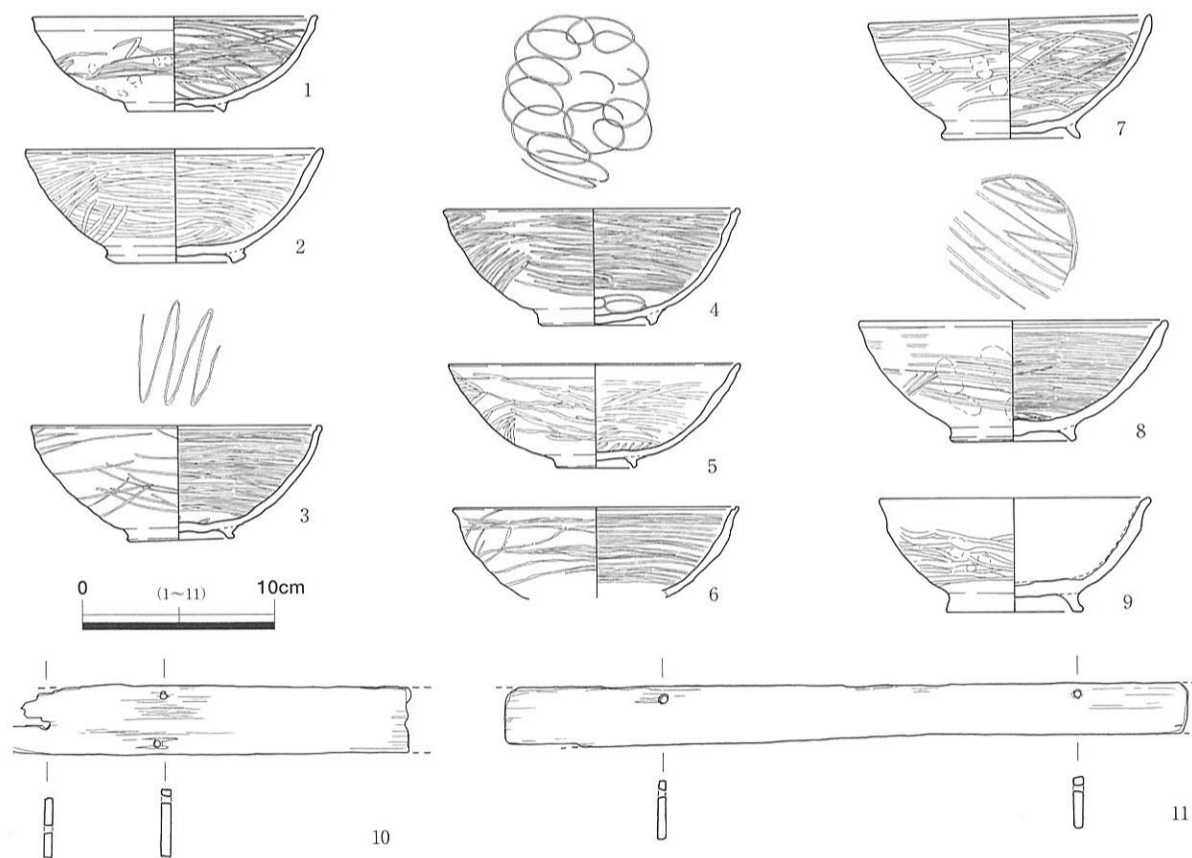


図IV-44 第7b面土器埋納遺構

て耕作が続けられたことを示している。

第8 a面 第7 b層を除去して検出した面である。第7 b層の氾濫堆積物は畦畔1よりも西側に分布しており、その東側では第7層の泥層が厚く堆積していた。したがって、東側では遺構面の検出に苦労した部分が多く、第8 a層が認識できない部分も存在した。これは第8 a層が残存していなかったのではなく、第7層と類似していたため、識別できなかった可能性が高い。例えば府教委Iトレンチでは、こうした状況を「湿地状の澱んだ堆積」と理解し、「土地利用がされていなかったのであろうか」と報告した（府発Ⅱ，p.12，p.54）。しかし、この推定は周囲の調査区で畦畔が検出されたことで否定された。

遺構の説明に入る前に、この面の微地形についてみておきたい（図Ⅳ-47）。当地区南西部には、南東-北西方向にのびる微高地が存在している。後述するように、この微高地は第11-2 a面流路1の埋没に伴って形成されたものである。そして、こうした地形に対応して、微高地周辺は畠、その周囲は水田として利用されていた（図版16）。また、当地区南西隅における第8 a面は、南西方向に緩やかに下がっていた。十六ノ坪には南東-北西方向にジグザグにのびる幅広の畦畔が存在するが、レベルが低くなるのはこの畦畔の南西側である。この畦畔の位置は第11-2 a面流路2の位置と重なっている。流路2も埋没に伴って微高地を形成し、南西側に緩やかに下がる起伏をつくり出した。こうした地形が第8 a面まで影響を与え、それに合わせて畦畔が設定されたと考えられる。なお、七ノ坪南部中央付近に存在する凹地は、第8 a面埋没時に水流によって侵食された部分である。この部分の第7 b層は斜交層理のみ



図Ⅳ-45 第7 b面遺構・第7 b層出土遺物

1：土器埋納遺構5，2：同7，3：同8，4：同9，5：同10，6：同11，7：同87，8：同93，9：落ち込み4，10・11：第7 b層

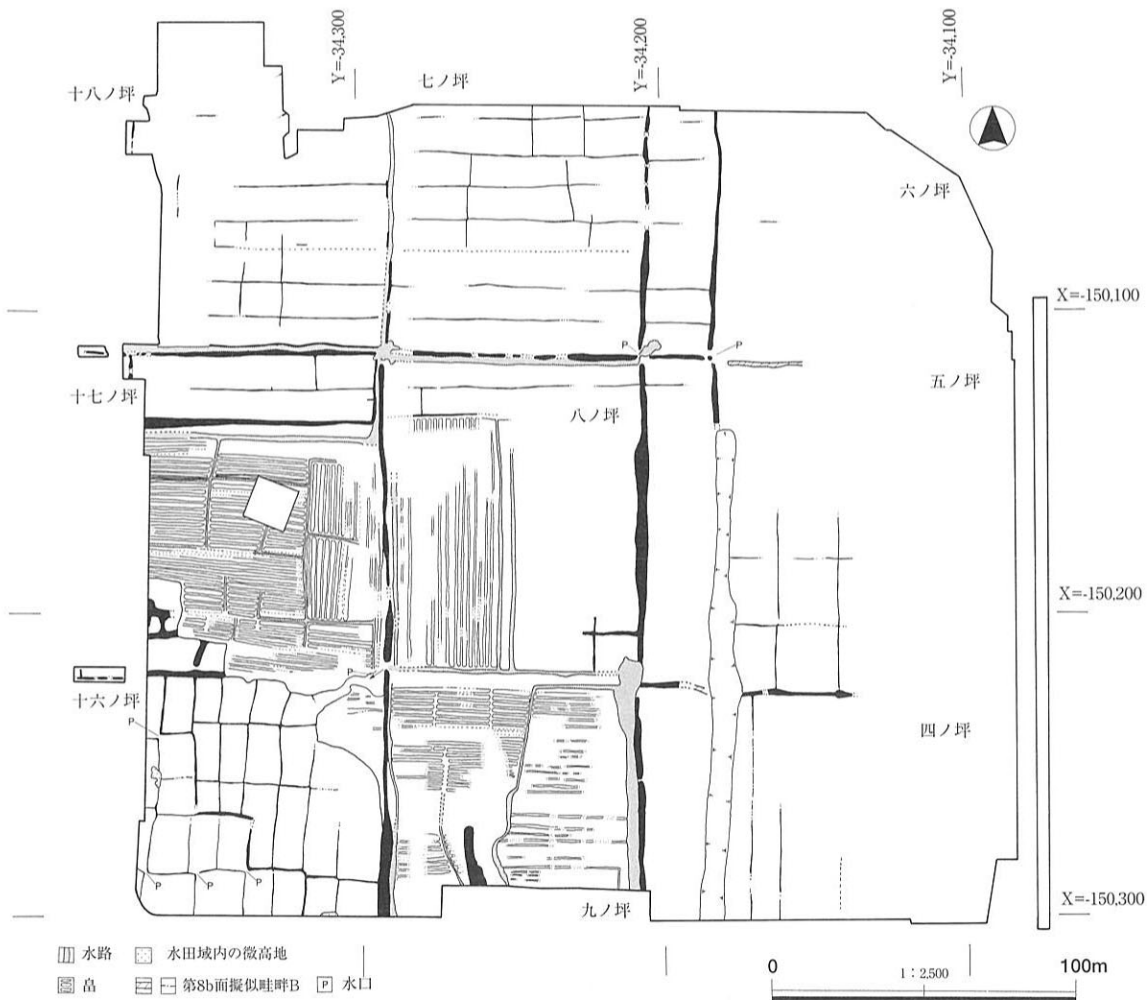
表IV-18 第8a面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
水路15	89-2 流路1
	89-3 溝24
水路16	87-3 溝1101・1102
	90-3(A) 水路
水路17	90-3(A) 水路
水路18	90-3(B) 溝
水路19	90-2 溝32
水路20	89-3 溝22
水路21	89-3 溝23
水路22	89-1 —
	89-2 —
	89-1 —
水路23	89-1 —
	89-2 —
	90-3(B) —
水路24	90-1 —
水路25	90-1 —
水路26	90-1 溝568
水路27	90-1 溝569
水路28	90-1 —
水路29	90-1 溝564
水路30	90-1 溝75
水路31	90-1 溝562
水路32	90-1 溝563
水路33	89-2 坪境溝
水路34	90-1 —
	92-7 —
	89-1 畦畔19
	89-2 大畦畔1・2
大畦畔1	89-3 大畦畔1・2
	90-2(H3) 大畦畔6・7・10・11・12
	90-3(B) 畦畔19
	90-3(B) 畦畔19

られる砂礫層であり、水路15の北端から溢れたものであることを確認している。

この面では水路、畦畔、畠等が良好に検出され、遺構配置の全容がほぼ把握できた。地割の基本となるのは、坪境に設けられた畦畔や水路である。ただし、本地区東部の南北坪境から西側に約20m離れた場所に、南北方向の大畦畔1が設けられている点が特異である。なお、五・六ノ坪間坪境は、第9a層の上で確認された擬似畦畔から復原したものである(概要XI, pp.32-33)。八・九ノ坪東端部分で検出された畦畔も同様のものである。また、本地区東部の南北方向の坪境は、第7面水路12によって破壊された部分が多かったが、水路12の幅が狭かった北部では畦畔が遺存していた。

次に、坪ごとに検出遺構の状況をみていきたい。まず十八ノ坪は南東部を中心に畦畔が検出されている。その状況をみると、東西方向の長地型地割を基本とし、東西方向の畦畔の間を南北方向の畦畔でつないでいる。ただし、北部では斜めにのびる可能性が



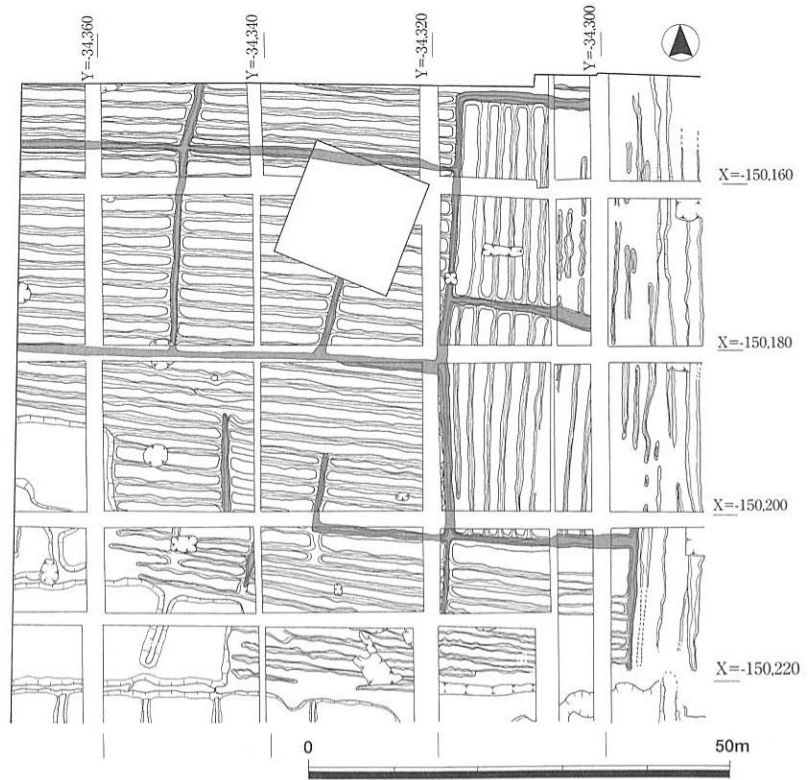
図IV-46 第8a面平面図

ある畦畔もみられる。七ノ坪も東西方向の長地型地割を基本とするが、六・七ノ坪間坪境の大畦畔から西へ約20m離れた場所には大畦畔1が存在し、それによって東西方向の区画が分断されている。十七ノ坪においても、十七・十八ノ坪間坪境から南へ約20m離れた場所に、東西方向にのびる幅広の畦畔が設けられていた。そして、その北側では畦畔が検出され、南側では畝の畝が検出された。この面で検出された畝の畝幅は1.2~2.4mであり、1.4m前後のものが多い。なお、この坪の南西部は一段低くなっているが、畦畔状の高まりが検出されているため、おそらくこの部分も水田として利用されたと考えられる。八ノ坪においても、十七ノ坪で検出された幅広の畦畔の延長線上に畦畔が設けられ、その北側では畦畔が、南側では畝の畝が検出された。なお、東半部では遺構の遺存状況が悪かったが、一部で畦畔が検出されているため、水田として利用されていた可能性が考えられる。また、五ノ坪でも畦畔が検出されており、南北方向の畦畔の間が東西方向の畦畔で区切られることによって、一辺20mの正方形に近い区画を形成している。そして十六ノ坪は、北東隅を除いて畦畔が良好に検出された。地割の方向は南北方向であるが、中央付近を南東から北西に向かってジグザグにのびる幅広の大畦畔が存在し、それが北東部と南西部をわけている。前述したように、これは微地形に合わせて畦畔を配置した結果である。なお、この坪内からは、島状に残された微高地が2つ検出されている。さらに、九ノ坪では全体で畝と畝間の溝が検出され、四ノ坪では南北方向にのびる畦畔が若干検出されている。この畦畔の一部については、第9 a 層の上で確認された擬似畦畔から復原した部分もある（概要X V, p.65）。

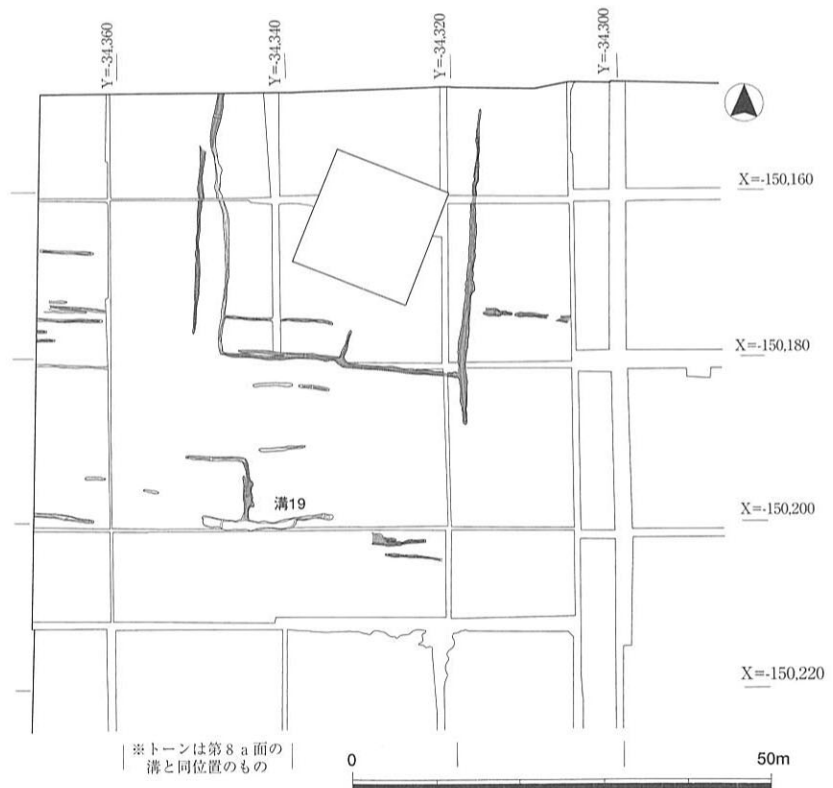


図IV-47 第8 a 面等高線図

この面の水利系統については、江浦（1992b）・井上（1995）で検討され、畠域を迂回して南側と西側から水路を回していた状況が復原されている。まず、水路15は南北方向の水利系統の中心的役割を果たす基幹水路と考えられるが、これが九ノ坪の大畦畔1沿いを北流し、八・九ノ坪間坪境との交差点から八ノ坪の水田に導水する。そして、この交差点から水路33に水が送られ、八・九・十六・十七ノ坪交差点の水口を通して十六ノ坪の水田に導水される。なお、水路22～24は畠域を灌漑するものであったと考えられているが、畠部分からの排水を水路33に流すという機能もあった可能性がある。そして、もうひとつの基幹水路と考えられる水路17は十七・十八ノ坪間坪境を東流し、七ノ坪の水田に導水する。さらに水路18にも水が送られ、大畦畔1の東側や六ノ坪の水田に導水される。また、十七ノ坪を東流する水路16は、北に折れて坪境交差点に至るが、これは十七ノ坪の水田の灌漑に関わったものであろう。なお、水路19は十八ノ坪の灌漑に関わった可能性もあるが、この坪への導水は西方の調査範囲外でおこなわれたとも考えられる。この場合、水路19は水路17を中心とする水利系統における排水の機能を果たしたものと推定される。なお、十七ノ坪の畠域に存在する水路



図IV-48 第8a面畠平面図



図IV-49 第8b面溝平面図

24～26・28～32は、畠域の排水の機能を果たしていた可能性がある。また、四・五・六ノ坪の灌漑方法については、南北方向の坪境が破壊されていたため、不明な点が多い。六ノ坪には七ノ坪のほうからも導水できるが、五ノ坪のほうから導水された可能性も考えられる。

さて、第10b面に対比される90-1調査区の「第16-2面」では、東西方向や南北方向にのびる溝が検出され、「鋤溝」として報告されている（図IV-49）。この遺構については第8a面の畠域にあたる部分で検出されているため、これらと第8a面の遺構の位置（図IV-48）とを比較してみたい。まず、アミで示した部分は第8a面畠域内の水路と一致する。その他、東西方向の溝がまばらに検出されているが、断面図をみるとさらに多くの溝が記載されている（概要XII, pp.13-14, pp.21-22）。断面の記載から考えて、これらは第8b面に帰属するものと思われる。第8a面から溝底までは30～50cmあり、断面の記載によれば、第8a面畠間の溝の位置とは必ずしも一致しないようである。このような状況からみて、これらの溝は畠作土下面に残された耕作痕（佐藤1998）と考えられる。その性格については、作土の形成・維持と関連して下層を掘削した痕跡と想定されている（松田・パリノ・サーヴェイ1996, 佐藤1998）。

この面からは、遺構面や遺構に関連して多くの遺物が出土している。それらは第8a面直上から出土したもの、第8a面の畦畔内から出土したもの、第8b面の遺構から出土したものにわけられる。

第8a面直上出土遺物のうち、出土状況が注目されるものとして、十六ノ坪の大畦畔付近から出土した土器、骨、炭化物（図IV-50：28地点）がある。土器は土師器皿（図IV-53：3）で、骨はウマの上腕骨（右）である。炭化物集中部ではプラント・オパール分析が実施された⁴⁾。それによると、イネの珪酸体（茎・穂・籾殻に含まれるもの）が全体の9割を占め、中でも穂の部分に含まれる珪酸体が多く検出された。ただし、炭化物の水洗選別の結果、イネの種実（籾）は検出されなかったため、収穫後に残った籾を焼いた痕跡と推定されている（概要XIV, p.48）。また、この大畦畔付近からはウマの下顎骨も出土している（概要XII, p.62）。両側が存在しており、歯からみて年齢は4～5才と考えられる²⁾。この骨は第8a層に半ば埋もれた形で出土したが、埋納されたのではなく、地表面に置かれていたと考えられる。さらに、八・九・十六・十七ノ坪交差点の西側では、断面観察のために掘削したトレンチから、ウマの臼歯が出土した（表IV-19）。これらの出土層準は第7b層の下部～第8a面と考えられる。ウマの上顎臼歯・下顎臼歯が複数出土しているが、出土状況が不明なため、これ以上の検討はできない。なお、五ノ坪の第7層最下部からは、シカの下顎骨（右）が出土した。第8a面に近い高さから出土したため、本来は第8a面直上に存在していた可能性もある。

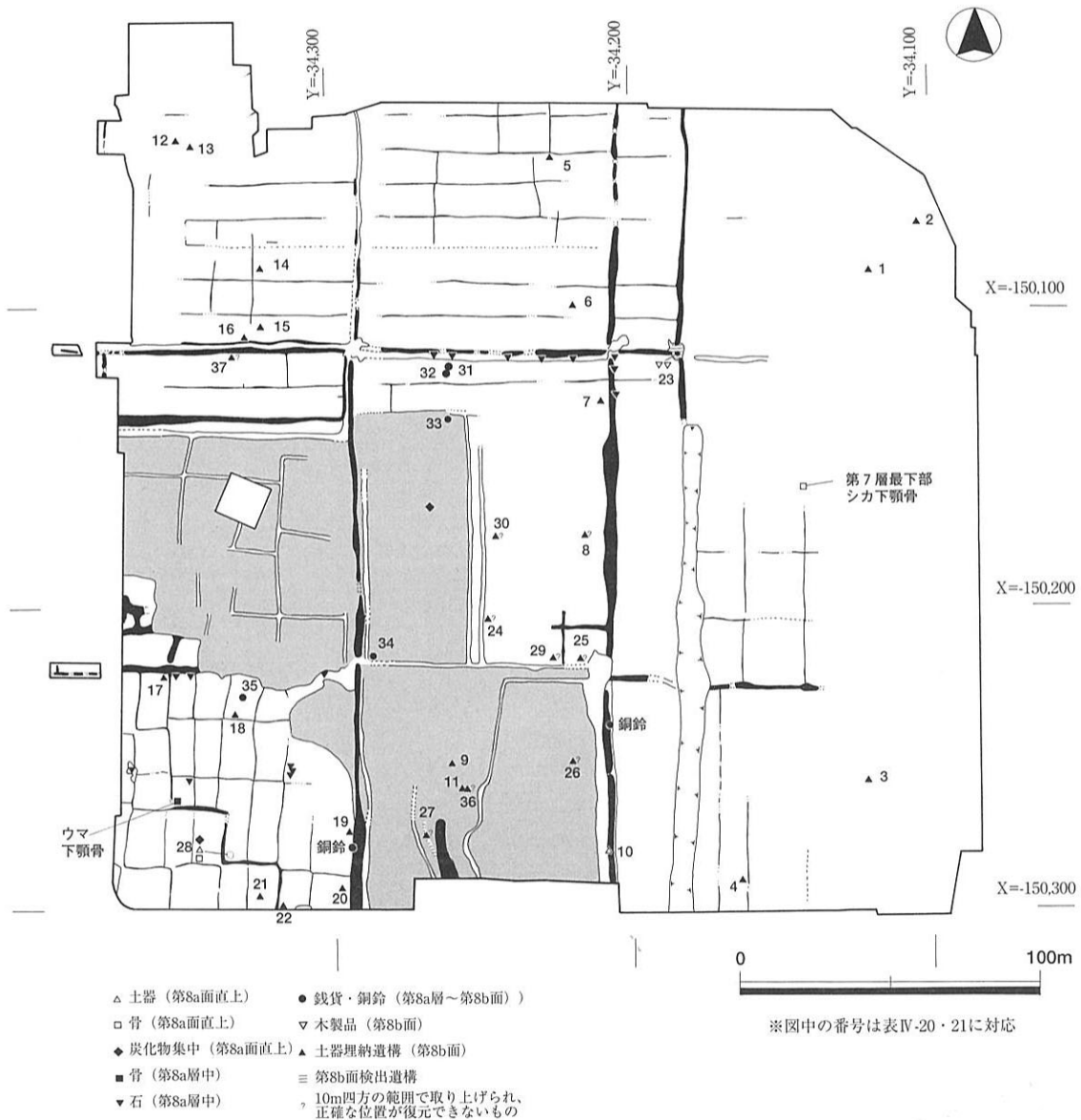
また、第8a面ないし第8a層中からは拳大前後の石が多く出土した。このような石が自然の営力で泥質堆積物中に取り込まれるとは考えがたいため、人為的に持ち込まれたものと思われる。このうち、特に注目されるのは七・八ノ坪間坪境の状況である。多くは大畦畔盛土内にあったが、この坪境と大畦畔1の交点には第8a面直上に石が置かれていた（概要VII, pp.21-23, p.84）。また、十六ノ坪においても、石が第8a層中から出土した。

次に、第8a面の遺構ないし面直上から出土した遺物を列挙する。まず、水路15からは土師器皿（図IV-53：1）が出土した。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。また、(2)・(3)は第8a面直上から出土した土師器皿である。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。

大畦畔盛土内から出土した遺物としては銅製鈴がある。まず、大畦畔1から出土したものについては、大畦畔に直交する形で掘削された溝状の落ちのひとつから出土した（図IV-51）。正置された状態で出土しており、意図的に埋納されたと考えられる。また、九・十六ノ坪間坪境畦畔盛土中から出土した銅製

表IV-19 第8a面関連動物遺存体一覧(90-1調査区)

出土層位・遺構面	調査区	調査時の		時期	遺物番号	種名	部位	左右	部分	観察
		出土層位	遺構名称							
第7b層下部	90-1	12~13層			197	ウマ	上顎臼歯	左		計3本
第7b層下部	90-1	12~13層			197	ウマ	下顎臼歯	右		計2本
第8a層	90-1	14層			242	ウマ	上顎臼歯	右		
第8a層	90-1	14層			246	ウマ	上顎臼歯	左		
第8a層	90-1	14・15層			882	ウマ	臼歯破片			
第8a層	90-1	14層			987	ウマ	上顎臼歯	左		
第8a層	90-1	14・15層			2500	不明	骨破片			
第8a層	90-1	14・15層			2502	ウマ?	臼歯破片			
第8a層	90-1	14層			2525	不明	椎骨			
第8a層	90-1	14層			2525	不明	椎骨破片			
第8a層	90-1	14面				ウマ	下顎骨			年齢は4~5才。歯は永久歯
第8a層	90-1	14・15層			2473	ウマ	上顎臼歯			
第8a層	90-1	14・15層			2483	ウマ	下顎臼歯	右		第4前臼歯。若い



図IV-50 第8a面~第8b面遺物出土位置図

表Ⅳ-20 第8 a 面直上遺物一覧

遺構番号	出土遺物	所在坪名	遺構の概要			時期	備考	遺物図番号	図Ⅳ-50
			遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土器の埋納状況				
	土師皿1、馬の右 上腕骨、炭化物	十六ノ坪				10世紀後半～ 11世紀初頭		図Ⅳ-53:3	28

表Ⅳ-21 第8 a 層・第8 b 面遺物一覧

遺構番号	出土遺物	所在坪名	遺構の概要			時期	備考	遺物図番号	図Ⅳ-50
			遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ	土器の埋納状況				
土器埋納遺構12	黒色土器椀1	六ノ坪	土坑	直径31×36	土坑底面に中央からやや偏して正位で埋納	10世紀初頭		図Ⅳ-58:1	1
土器埋納遺構13	土師器杯1	六ノ坪	土坑	直径27×19	土坑底面中央に正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ-58:2	2
土器埋納遺構14	土師器皿1	四ノ坪	土坑	直径18×3<	土坑底面中央に正位で埋納	10世紀後半～ 11世紀初頭		図Ⅳ-58:3	3
土器埋納遺構15	土師器杯1	四ノ坪	土坑	26×22×18	土坑底面中央から南東に偏して正位で埋納	10世紀前半	口縁部打ち欠き ?底面に墨書あり	図Ⅳ-58:4	4
土器埋納遺構16	黒色土器A類椀2 土師器杯1	七ノ坪	土坑	直径90×37	口縁部の一部を欠失した黒色土器椀と土師器皿を正位で組み合わせ、その中に桃核を6個入れる	10世紀前半～中頃		土師器: 図Ⅳ-58:5、黒色土器: 図Ⅳ-58:6、図Ⅳ-58:7	5
土器埋納遺構17	土師器杯1	七ノ坪	土坑	37×27×6	土坑底面の北寄りに正位で埋納	10世紀中頃	口縁部打ち欠き、 内面に焼成後のへら記号?あり	図Ⅳ-58:8	6
土器埋納遺構18	土師器杯1	八ノ坪	土坑	63×58×22	直径36cmで一段深く掘り込まれた部分に正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ-58:9	7
土器埋納遺構19	土師器杯1	八ノ坪	土坑	直径30×25	土坑底面に正位で埋納	10世紀前半		図Ⅳ-58:10	8
土器埋納遺構20	土師器杯1	九ノ坪	土坑	直径95×20	土坑底面に中央からやや偏して正位で埋納	11世紀前半		図Ⅳ-58:11	9
土器埋納遺構21	土師器皿2	九ノ坪	畦畔盛土	幅50～100	畦畔盛土中への一掃埋納?詳細不明	10世紀後半～ 11世紀初頭		図Ⅳ-58:12・13	10
土器埋納遺構22	黒色土器A類椀1	九ノ坪	土坑	直径95×35	土坑底面に中央からやや偏して正位で埋納	11世紀前半		図Ⅳ-58:14	11
土器埋納遺構23	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	50×32×22	土坑底面中央から偏して正位で埋納	11世紀前半	北側は深く3層に分かれる	—	12
土器埋納遺構24	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	54×36×12	土坑底面中央からやや偏して正位で埋納	10世紀前半		—	13
土器埋納遺構25	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	直径30×10	土坑底面中央に正位で埋納	11世紀前半	底面に墨書あり	図Ⅳ-58:15	14
土器埋納遺構26	土師器杯1	十八ノ坪	土坑	直径45×12	土坑底面の北西部を深く掘り込み、その部分に正位で埋納	11世紀前半		図Ⅳ-58:16	15
土器埋納遺構27	土師器杯1	十七ノ坪	土坑	直径50×22	土坑底面中央からやや偏して正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ-58:17	16
土器埋納遺構28	黒色土器B類椀1	十七・十八ノ坪間	畦畔上土坑	46<×37<×6	坪境畦畔上のビット状の落ち込みのほぼ中央に正位で埋納。底面からはやや浮く	11世紀前半～中頃	畦畔盛土への埋納?	図Ⅳ-58:18	17
土器埋納遺構29	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	直径17×5	土坑底面に正位で埋納	10世紀前半		図Ⅳ-58:19	18
土器埋納遺構30	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	直径27×14	土坑底面からやや浮いて正位で埋納	10世紀中頃		図Ⅳ-58:20	19
土器埋納遺構31	黒色土器A類椀1	十六ノ坪	土坑	直径22×45	土坑下層に逆位で埋納	10世紀中頃	高台を全周打ち欠き	図Ⅳ-58:21	20
土器埋納遺構32	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	直径34×20	土坑底面からやや浮いて正位で埋納	10世紀後半	口縁部打ち欠き	図Ⅳ-58:22	21
土器埋納遺構33	土師器杯1	十六ノ坪	土坑	39×24×12	土坑底面中央よりやや北寄りに正位で埋納	11世紀前半	底部に墨書あり	図Ⅳ-58:23	22
土器埋納遺構34	土師器杯					10世紀前半		図Ⅳ-58:24	29
土器埋納遺構35	黒色土器A類椀1					10世紀前半	底面に墨書「日下宅」あり	図Ⅳ-58:25	24
土器埋納遺構36	土師器杯1					10世紀前半		図Ⅳ-58:26	25
土器埋納遺構37	土師器杯1					10世紀中頃		図Ⅳ-58:27	26
土器埋納遺構89	黒色土器A類椀1	八ノ坪	土坑?			10世紀前半	第10 b 層掘削時に確認	図Ⅳ-58:28	30
土器埋納遺構91	土師器杯	九ノ坪				11世紀前半		図Ⅳ-58:29	36
土器埋納遺構92	土師器椀	十七ノ坪				10世紀中頃		図Ⅳ-58:30	37
落ち込み5	木柱1・曲物(桶)1							曲物: 図Ⅳ-59:4、木柱: 図Ⅳ-59:6	23

(溝)

溝3	黒色土器A類椀			幅70～50、深さ30		10世紀後半		図Ⅳ-59:3	27
----	---------	--	--	-------------	--	--------	--	---------	----

第8a層出土銭貨

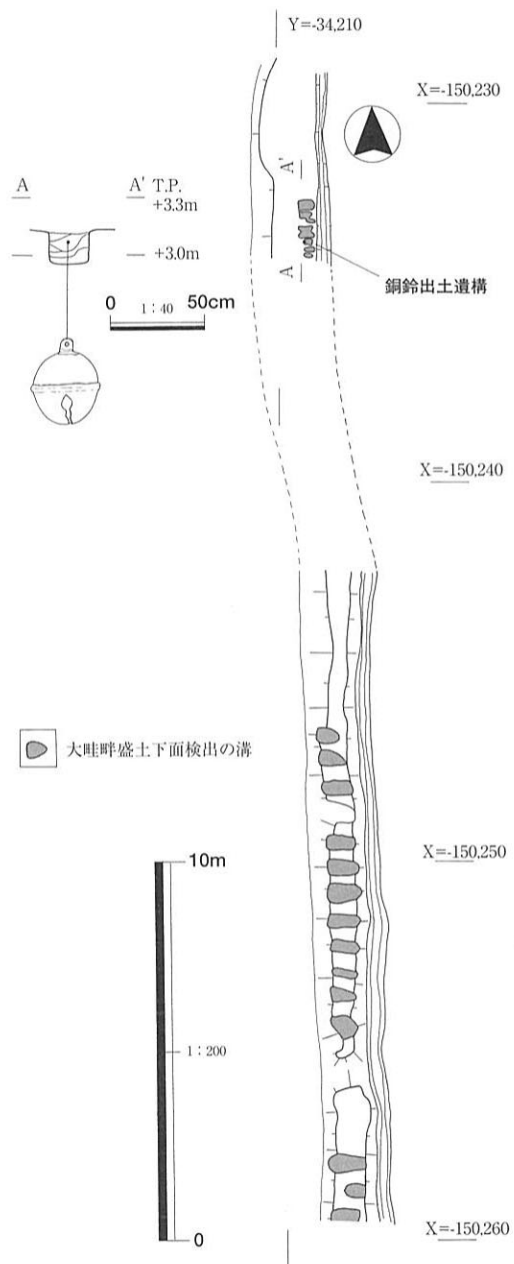
	銭貨(乾元大寶)	八ノ坪	—	—	—			—	31
	銭貨(乾元大寶)	八ノ坪	—	—	—			—	32
	銭貨(富壽神寶)	八ノ坪	—	—	—			図Ⅳ-56:115	33
	銭貨(富壽神寶)	八ノ坪	—	—	—			図Ⅳ-56:114	34
	銭貨(神功開寶)	十六ノ坪	—	—	—			図Ⅳ-56:116	35

鈴も、意図的に埋納されたものと考えられている（渡辺1995）。図IV-59：（7）が大畦畔1から出土したもの、（8）が九・十六ノ坪間坪境畦畔から出土したものである。銅製鈴は古代から寺院の地鎮め具のひとつとして用いられることがあり、これも地鎮め具として水田畦畔に埋納されたものかもしれない。

第8b面検出遺構のほとんどは土器埋納遺構である（図IV-52、表IV-21、図版17-7・8）。なお、調査の不備により出土状況が十分に観察できなかったが、状況から土器埋納遺構と推定されるものも存在しており、それらについても図IV-50に大まかな位置を示した。土器埋納遺構には、土坑の中に土師器杯や黒色土器碗を1個体埋納するものが多く、土器埋納遺構16のように、桃の核を入れたものもあった。その分布については、江浦（1992b）で指摘されたように、第8a面の畦畔付近の位置に当たるもの（図IV-50：4・5・7・14・15・16・17・19・20・22地点）があり、畠域の境付近に存在する可能性があるもの（24・30地点）もある。しかしながら、畦畔の位置とは合わないもの（6地点など）や、畠域内に存在するものもある（9・11・26地点）。また、五・六・七・八ノ坪交差点付近では、第8b面で落ち込み5が検出されたが、この中には木柱と曲物（桶）が埋納されていた（図版17-6）。

次に、第8b面の遺構から出土した遺物を列挙する（図IV-58・59）。

まず、土器埋納遺構出土遺物を見ていきたい（図IV-58）。土器埋納遺構12からは黒色土器A類碗（1）が出土した。10世紀初め頃のものである。土器埋納遺構13からは土師器碗（2）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構14からは土師器皿（3）が出土した。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。土器埋納遺構15からは土師器杯（4）が出土した。10世紀前半頃のものである。外底面に「利富」⁵⁾という吉祥句が墨書されている。土器埋納遺構16からは土師器杯（5）、黒色土器A類碗（6・7）が出土した。10世紀前半～中頃のものである。土器埋納遺構17からは土師器杯（8）が出土した。10世紀中頃のものである。口縁に打ち欠きがあり、内面にヘラ記号？がある。土器埋納遺構18からは土師器碗（9）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構19からは土師器杯（10）が出土した。10世紀前半頃のものである。土器埋納遺構20からは土師器杯（11）が出土した。11世紀前半頃のものである。外底面にヘラ記号がある。土器埋納遺構21からは土師器皿（12・13）が出土した。10世紀後半～11世紀初め頃のものである。土器埋納遺構22からは黒色土器A類碗（14）が出土した。11世紀前半頃のものである。土器埋納遺構25からは土師器杯（15）が出土した。11世紀前半頃のものかと思われる。



図IV-51 大畦畔1下面検出遺構・遺物出土位置図

内底面に「卍」と墨書されている。土器埋納遺構26からは土師器杯（16）が出土した。11世紀前半頃のものかと思われる。土器埋納遺構27からは土師器碗（17）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構28からは黒色土器B類碗（18）が出土した。11世紀前半～中頃のものである。口縁部に打ち欠きかと思われる欠けがある。土器埋納遺構29からは土師器杯（19）が出土した。10世紀前半頃のものである。土器埋納遺構30からは土師器碗（20）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構31からは黒色土器A類碗（21）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構32からは土師器杯（22）が出土した。10世紀後半頃のものかと思われる。口縁部に打ち欠きかと思われる欠けがある。土器埋納遺構33からは土師器杯（23）が出土した。11世紀前半頃のものである。外底面に「つ」と墨書されている。土器埋納遺構34からは土師器杯（24）が出土した。10世紀前半頃のものである。土器埋納遺構35からは黒色土器A類碗（25）が出土した。10世紀前半頃のものである。外底面に「日下宅」と墨書されている。「宅」は律令制下にあつて、私的な土地所有を内包する語であり、「日下」を当遺跡の北北東約5kmの地（東大阪市）の地名と関連づける考え方もある（信田1995）。土器埋納遺構36からは土師器杯（26）が出土した。10世紀前半のものである。土器埋納遺構37からは土師器碗（27）が出土した。10世紀中頃のものである。土器埋納遺構89からは黒色土器A類碗（28）が出土した。10世紀後半のものである。土器埋納遺構91からは土師器杯（29）が出土した。11世紀前半頃のものである。土器埋納遺構92からは土師器碗（30）が出土した。10世紀中頃のものである。

その他の第8b面検出遺構からは、次のような遺物が出土している（図IV-59）。溝19からは土師器甌（2）、弥生土器甕（1）が出土した。土師器甌は5世紀中頃～6世紀ぐらい、弥生土器甕は第V様式で、本来は下層に含まれていた遺物と思われる。溝3からは黒色土器A類碗（3）が出土した。10世紀後半頃のものである。また前述したように、落ち込み5からは木製品（4～6）が出土した。（4）は桶、（5）は杭？である。（6）は全長2.05mの擬宝珠のある柱で、断面7角形を呈し、ホゾ孔が15個残存し、一部炭化している。

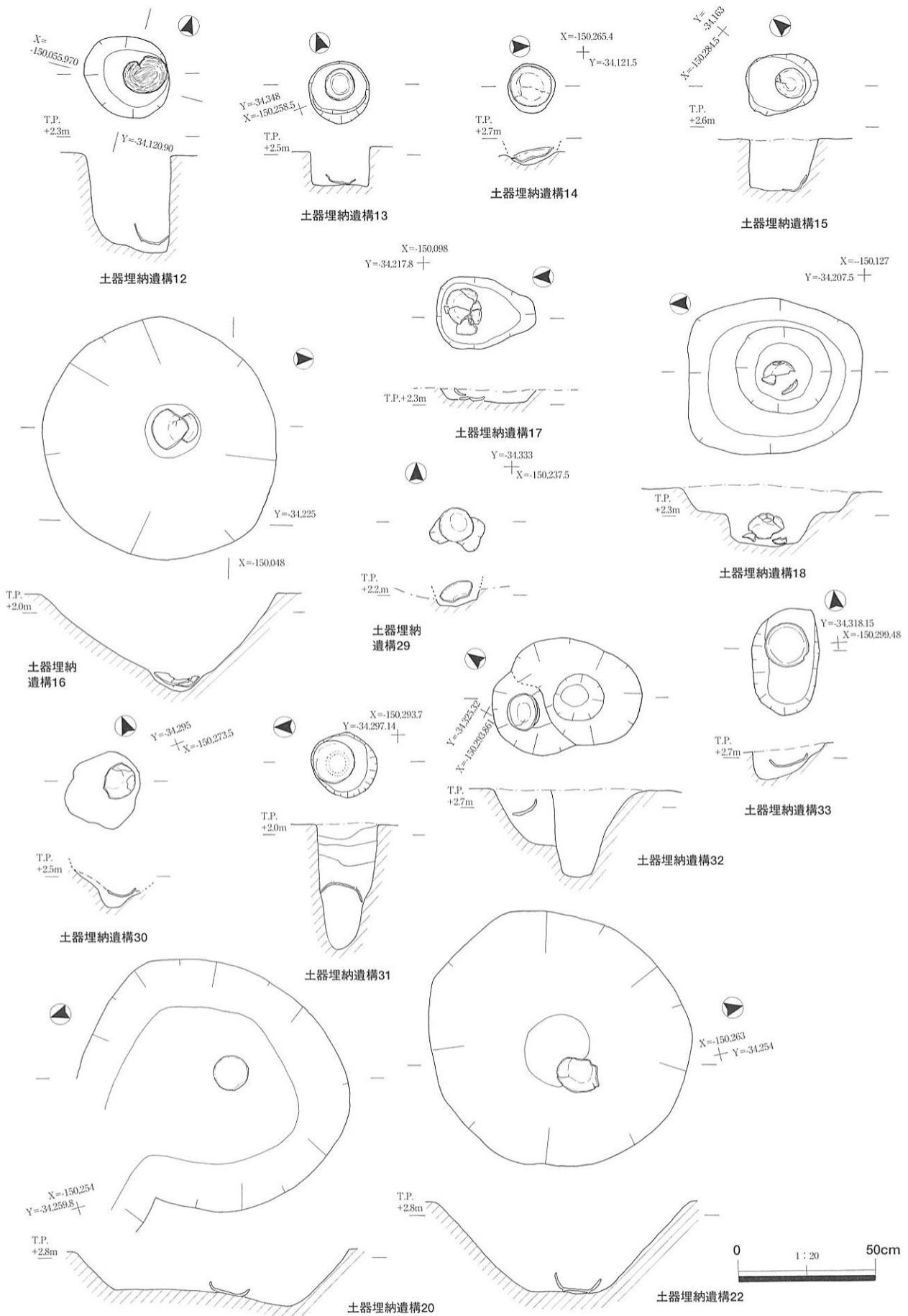
第8a層出土遺物 第8a層から出土した遺物は後述する古墳時代後期の集落と関連するものが多く、後の記述の便宜上、ここでまとめておきたい（図IV-53：4～図IV-57：133、図版57-117・118）。

土師器皿（4～12）・杯（13）・碗（14～19）・甕（23）、黒色土器A類碗（20～22）、墨書土器片（24～28）、須恵器杯蓋（29～49）・杯（50～75）・皿（76）・高杯（77～83）・提瓶？（84）・樽形甌（85）・壺（86～89）・甌（90）・短頸壺（91）・甕（92～94）・筒形器台（95）、灰釉鉢（96）、製塩土器（97）、韓式系土器片（98・99）、埴輪片（100～103）、土器片（104）、鉄製品（105～109）、砥石（110～113）、銭貨（114～116、図版57-117・118）、水晶製切子玉（119）、滑石製品（120～133）等が出土した。

土師器皿は10世紀後半～11世紀前半のもの他、8世紀中頃と9世紀かと思われるものがある。土師器碗も、8世紀末～9世紀初めと思われるものと10世紀中頃と思われるものがある。黒色土器A類碗は9世紀後半～10世紀前半のものである。墨書土器⁵⁾のうち、(24)は「華」の一部の可能性が高く、(25)

表IV-22 第8b面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号
土器埋納遺構12	92-6 土器埋納遺構1
土器埋納遺構13	92-6 土器埋納遺構2
土器埋納遺構14	93-1 土器埋納遺構3
土器埋納遺構15	93-1 土器埋納遺構4
土器埋納遺構16	90-2(H3) 土坑11
土器埋納遺構17	90-3(B) 土器埋納遺構2
土器埋納遺構18	90-3(B) 土器埋納遺構1
土器埋納遺構19	89-1 土器埋納ビット2
土器埋納遺構20	89-1 土坑32
土器埋納遺構21	89-1 大哇畔6
土器埋納遺構22	89-1 ビット218
土器埋納遺構23	86-1 土坑8022
土器埋納遺構24	86-1 土坑8024
土器埋納遺構25	90-3(A) 土器埋納ビット1
土器埋納遺構26	90-3(A) 土器埋納ビット5
土器埋納遺構27	90-3(A) 土器埋納ビット2
土器埋納遺構28	90-1 坪境36出土土器
土器埋納遺構29	90-1 土器埋納遺構13
土器埋納遺構30	92-7 ビット282
土器埋納遺構31	92-7 ビット283
土器埋納遺構32	92-7 ビット183
土器埋納遺構33	92-7 土器埋納ビットa
土器埋納遺構34	89-2 ビット1
土器埋納遺構35	89-2 ー
土器埋納遺構36	89-2 ー
土器埋納遺構37	89-2 ー
土器埋納遺構91	89-3 掘り残り土坑
土器埋納遺構92	90-3(A) ー
溝3	89-3 溝60
落ち込み5	90-3(C) 落ち込み
土器埋納遺構89	89-1 ー



図IV-52 第8b面土器埋納遺構

が「カ」、(26)が記号「ム」、(27)が「三」、(28)が「鳥」と読める。(26)の記号は第9 b面土器埋納遺構67(図IV-79:10)から出土した須恵器杯にも墨書されている。

須恵器杯蓋は中村 浩編年のI型式第5段階～IV型式第3段階までのものがあるが、II型式第1～2段階のものが多い。(34)・(41)は口縁端部にハケ状刻目を施し、(34)・(42)・(48)にはヘラ記号を施している。杯もI型式第5段階～IV型式4段階までのものがあり、II型式第1～2段階のものが多い。(65)・(67)・(75)にはヘラ記号を施している。須恵器皿はIV型式第1段階、高杯はI型式第5段階～II型式第2段階のものがある。壺類・甕類はII型式のものとIV型式のものがある。甕はII型式第1～3段階のものである。(92)はヘラ記号?が施されている。筒形器台(95)はII型式前半ぐらいのものと思われ、筒部の透かしは長方形8方向、裾部の透かしは三角形4方向である。凸線と刺突文と7～15条の波状文で飾る。

製塩土器(97)は積山 洋編年の丸底I式で、6世紀前半のものである。韓式系土器片(98・99)は外面が格子状?タタキで、内面に当て具痕をもつものである。埴輪片は川西宏幸編年の第V期ぐらいのものである。鉄製品は(105)が鑿かと思われるもので、(106)は雁又鋏、(107～109)は馬鋏の歯である。砥石は流紋岩製と流紋岩質凝灰岩製で、いずれも4面使用している。

銭貨は(114～115)が富壽神寶、(116)が神功開寶である。また、(図版57-117・118)は残りが悪いものの、大きさや材質の粗悪さなどの特徴から、乾元大寶の可能性はある。いずれも皇朝十二銭であり、初鑄年はそれぞれ、818年、765年、958年である。

滑石製品は(121)が剣形、(122～125)が双孔円板、(126～133)が有孔円板である。

その他、第8 a層からは動物遺存体も出土した(表IV-19)。同定できたものは、すべてウマの臼歯である。

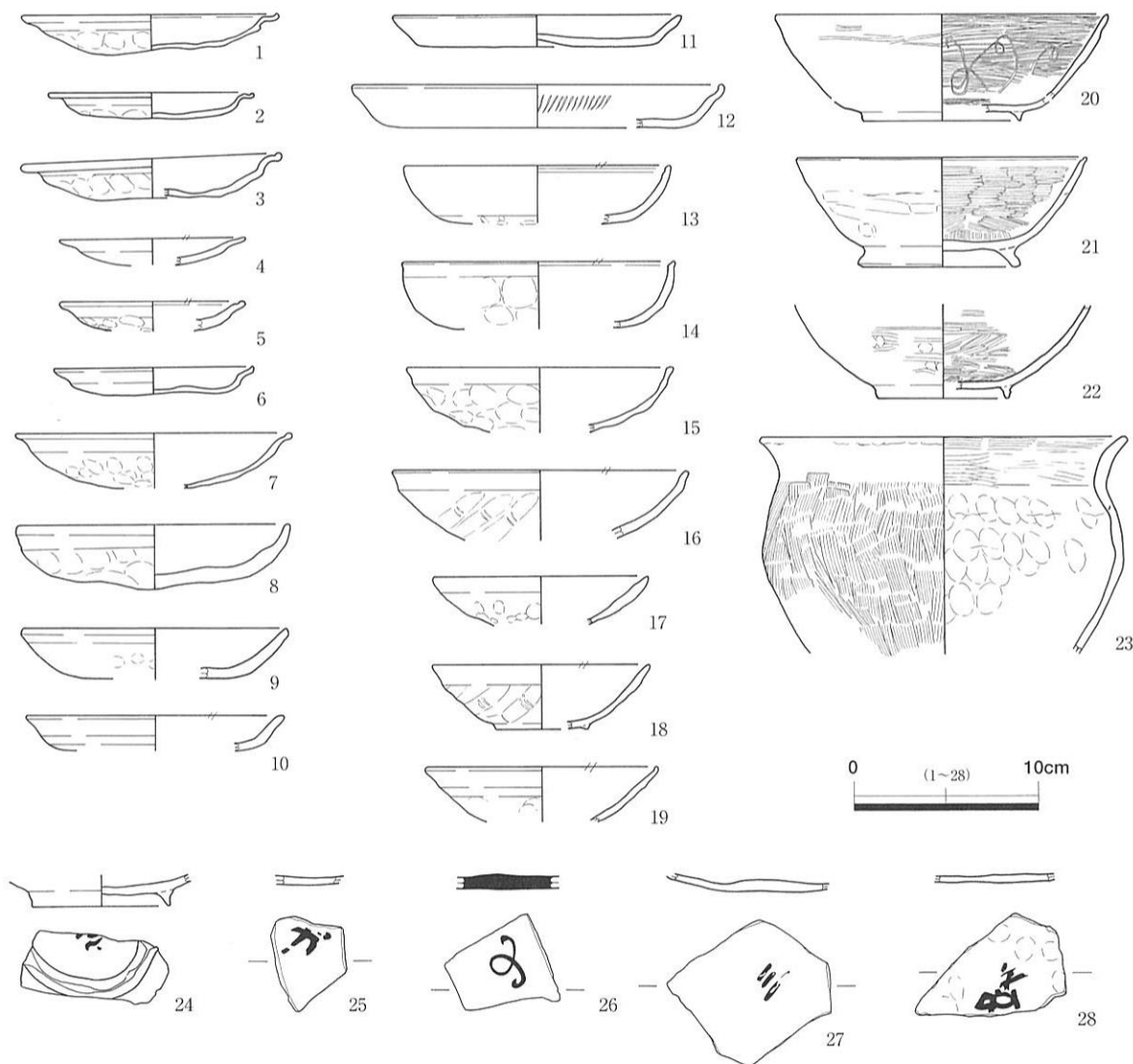
第8 a層出土遺物の多くは、下層から巻き上げられたと思われる6～8世紀のものである。また、10～11世紀のものが散見されるが、これらは第8 a面段階の遺物と考えられる。鉄製品のうち、馬鋏の歯や雁又鋏は第8 a面段階のものと考えられる。銭貨も第8 a面段階のものと思われるが、これらについては意図的に埋納したと推定する意見もある(江浦1992b)。銭貨については、出土段階で掘り込みの有無を確認することは困難であるが、乾元大寶は2枚重なった状態で出土しており、意図的に埋め込まれた可能性が高い。いずれにせよ、水田跡から出土する銭貨は祭祀に関わる可能性があり、今後注意すべき遺物といえる。また、ウマの臼歯に関しては、第10 b面の遺構からも出土しているため、下層から巻き上げられた可能性も考えられる。

ここで提示した第8 a層、第8 a面、第8 b面の遺物からみて、第8 a層の耕作時期は10世紀前半～11世紀前半と推定される。また、第7 b面土器埋納遺構の時期も考慮すると、11世紀中頃までには氾濫堆積物の第7 b層によって埋没したと思われる。

第9 a・b面 第9 a層は部分的にしか残存していなかったため、実態は不明な点が多い。調査では第8 a層掘削後に精査をおこなったが、この段階で第8 b面、第9 b面、第10 b面の遺構を同時に検出した調査区が多く、第9 a面が検出できたのは一部にすぎなかった。これは、第8 a面の耕作によって第9 a層、第10 a層の大半が削られたことを示している。こうした状況に対して概要Iでは、過去の状態をそのまま残していると短絡的に解釈し、古墳時代～平安時代に同一地表面で人間活動がおこなわれたと理解していた(「古墳～古代面」)。しかしながら、その後の調査で第9 a層の存在が確認された結果、そうした考え方が誤りであることが明らかになった。調査段階で層序を念頭に置いて遺構埋土が検討さ

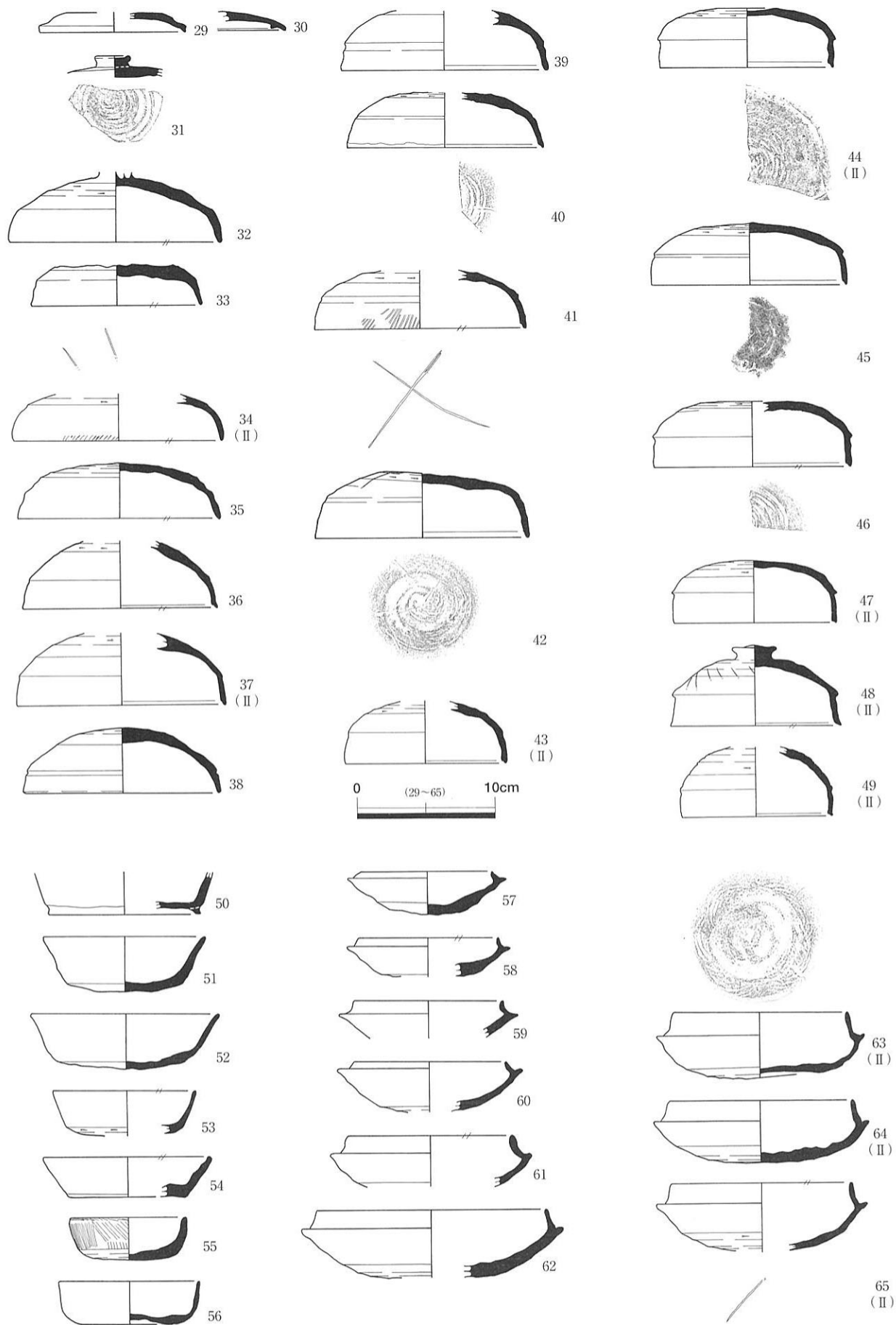
れなかったため、すべての遺構について帰属面を分別することは困難であるが、各遺構の出土遺物と第8 a面・第9 a面の出土遺物とを比較することで、ある程度整理することは可能である。本書では、この段階で検出された遺構のうち、10～11世紀の遺物が含まれていたものを第8 b面、7～9世紀の遺物が含まれていたものを第9 b面、古墳時代の遺物が含まれていたものを第10 b面の遺構として分別した。

まず、第9 a面の遺構をみていきたい。第8 a面大畦畔1の直下では、水路35が検出された。これは当地区中部を南北に貫くもので、第8 a面の耕作の影響を免れた部分では両脇に大畦畔が伴っていたことも明らかになった。第9 a層も人為的に攪乱されていると思われるため、水田が営まれていた可能性が高く、この水路も水田の灌漑に使用されたものと思われる。また、この水路は地形を無視して南北方向にのびているので、正方方位地割にもとづいて掘削されたものであった可能性が高い。水路35の断面については、概要Ⅶ（カラー図版1, p.25）に写真・断面図が掲載されているが、若干矛盾する点があったため、写真を検討して一部修正した（図IV-61）。修正したのは、第8 a面の遺構である大畦畔1の盛土の下に、第8 a層がもぐりこむとされている点である。これは、大畦畔1盛土の下に存在した地層が第8 a層と類似していたため、第8 a層とつないでしまったものである。水路35は砂で埋没していたが、

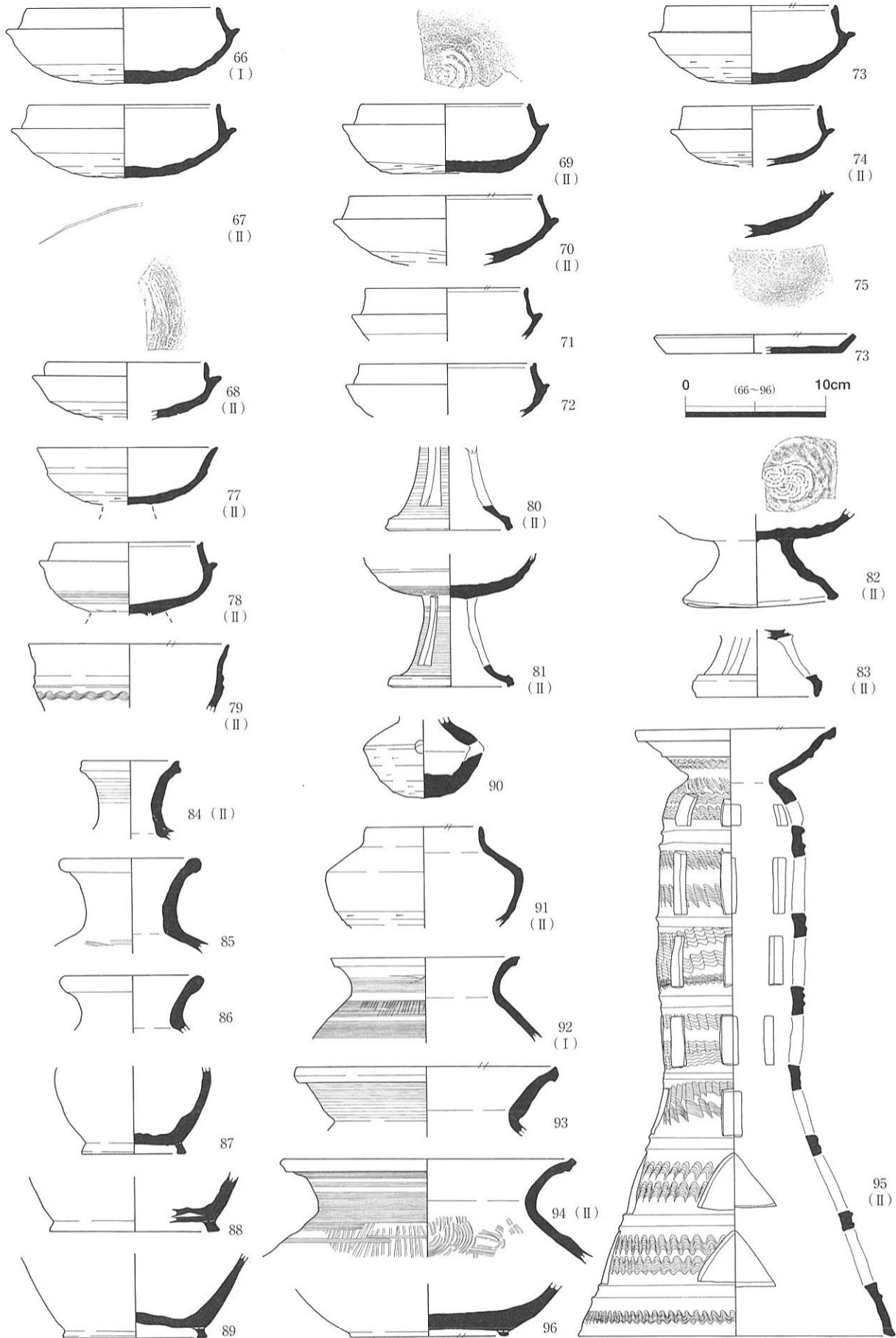


図IV-53 第8 a面遺構・第8 a層出土遺物①

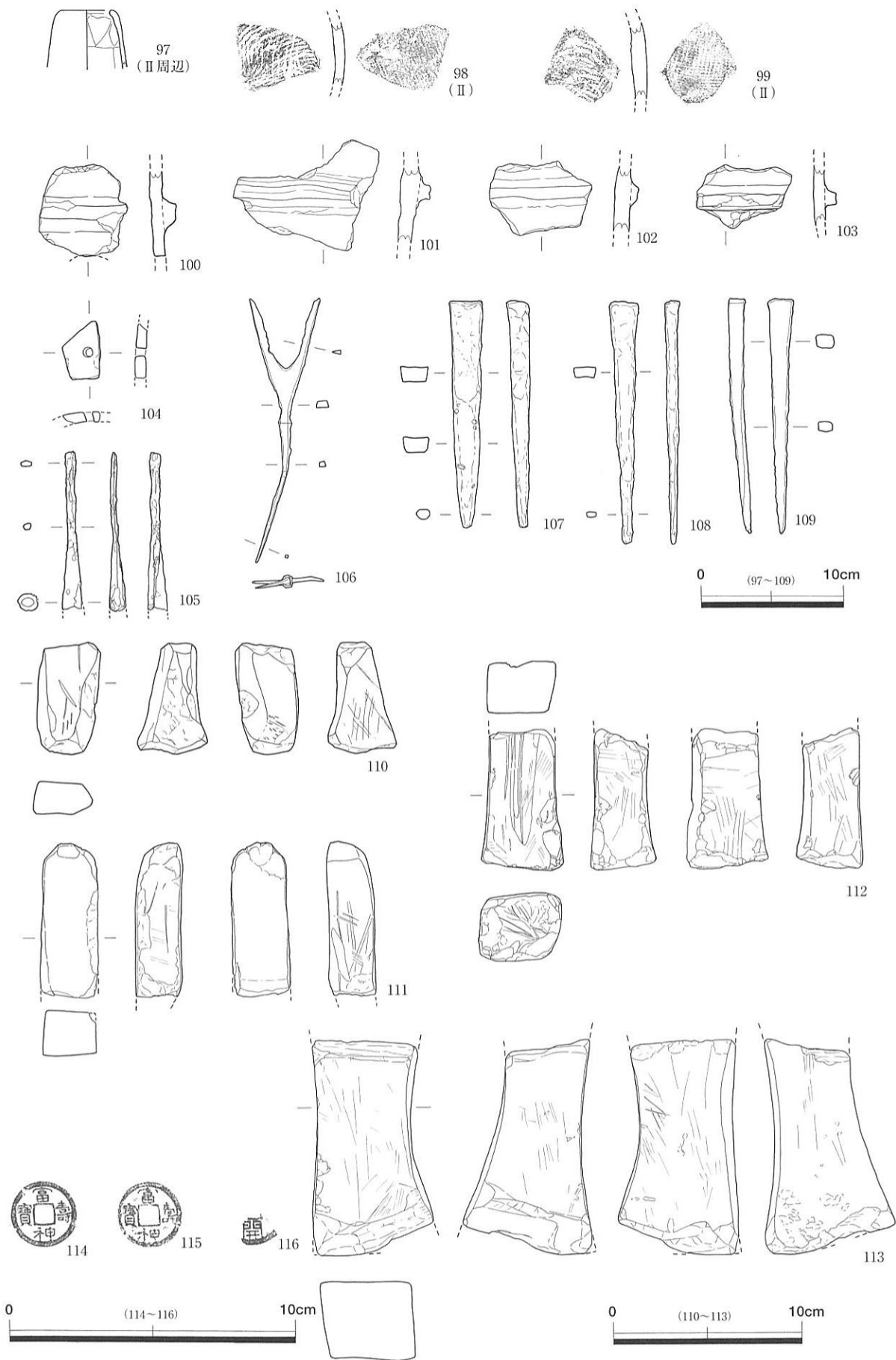
1：水路15, 2・3：第8 a面直上, 4～28：第8 a層



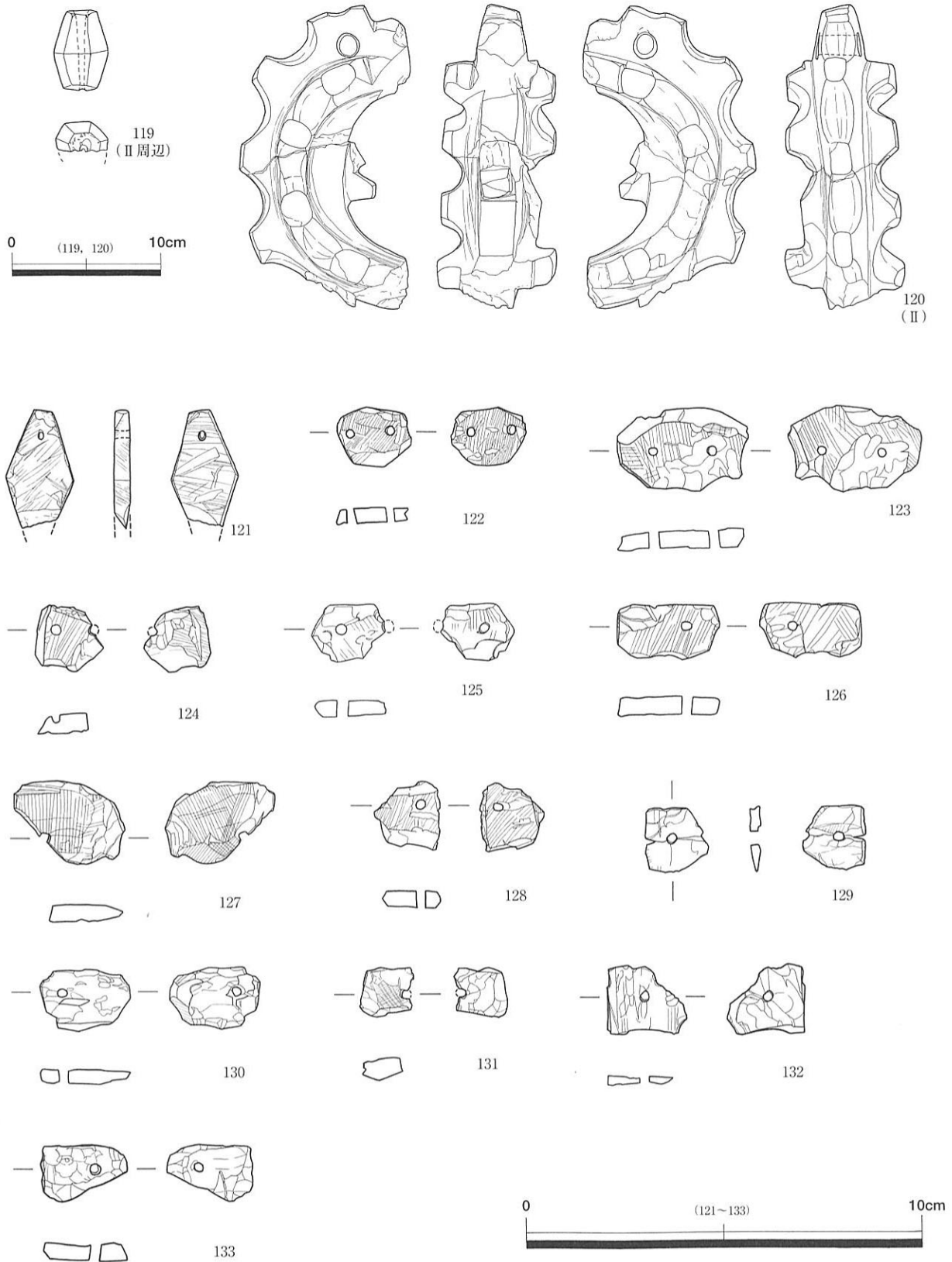
図IV-54 第8 a面遺構・第8 a層出土遺物② (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)



図IV-55 第8a面遺構・第8a層出土遺物③ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

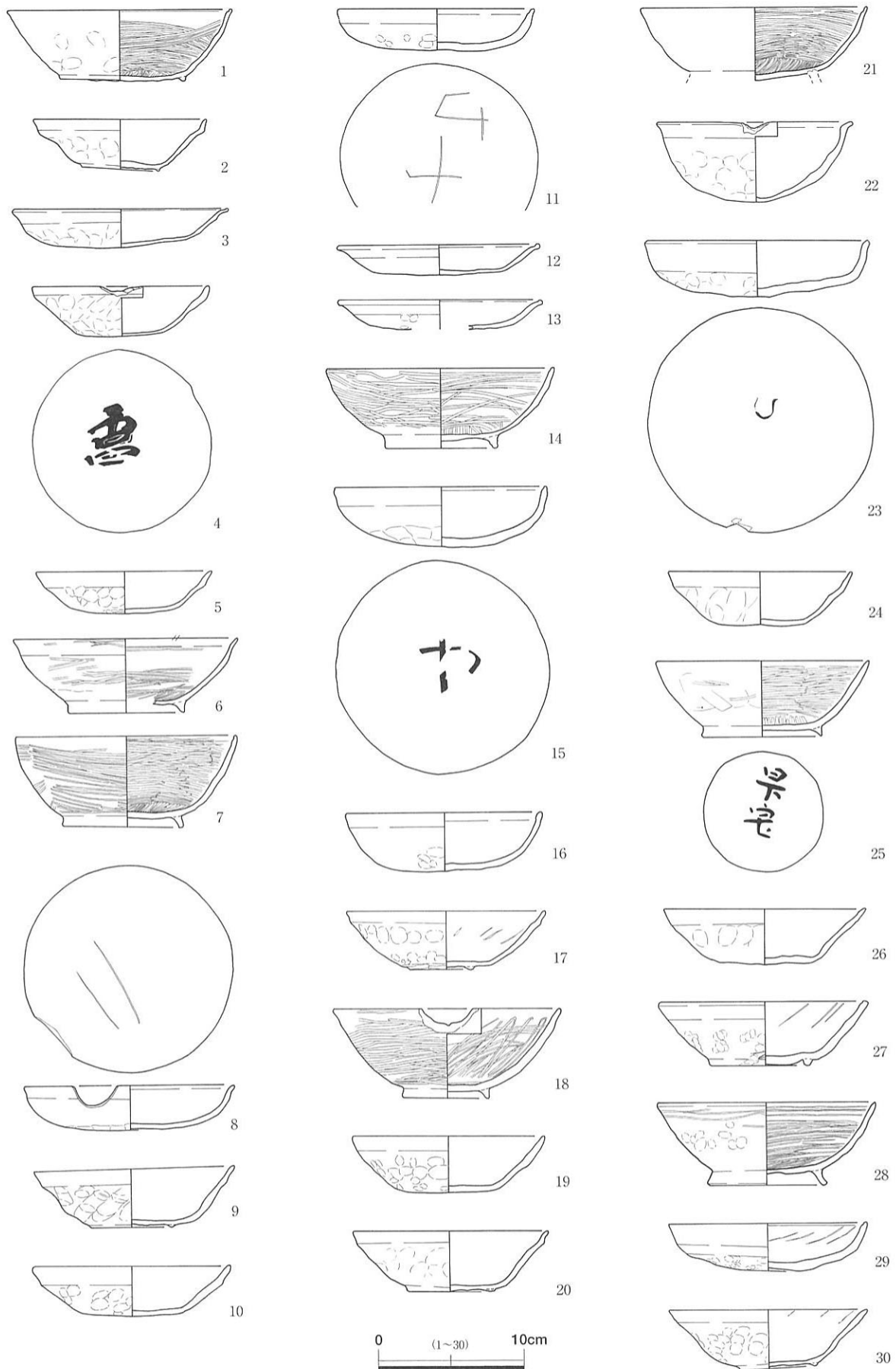


図IV-56 第8 a 面遺構・第8 a 層出土遺物④ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

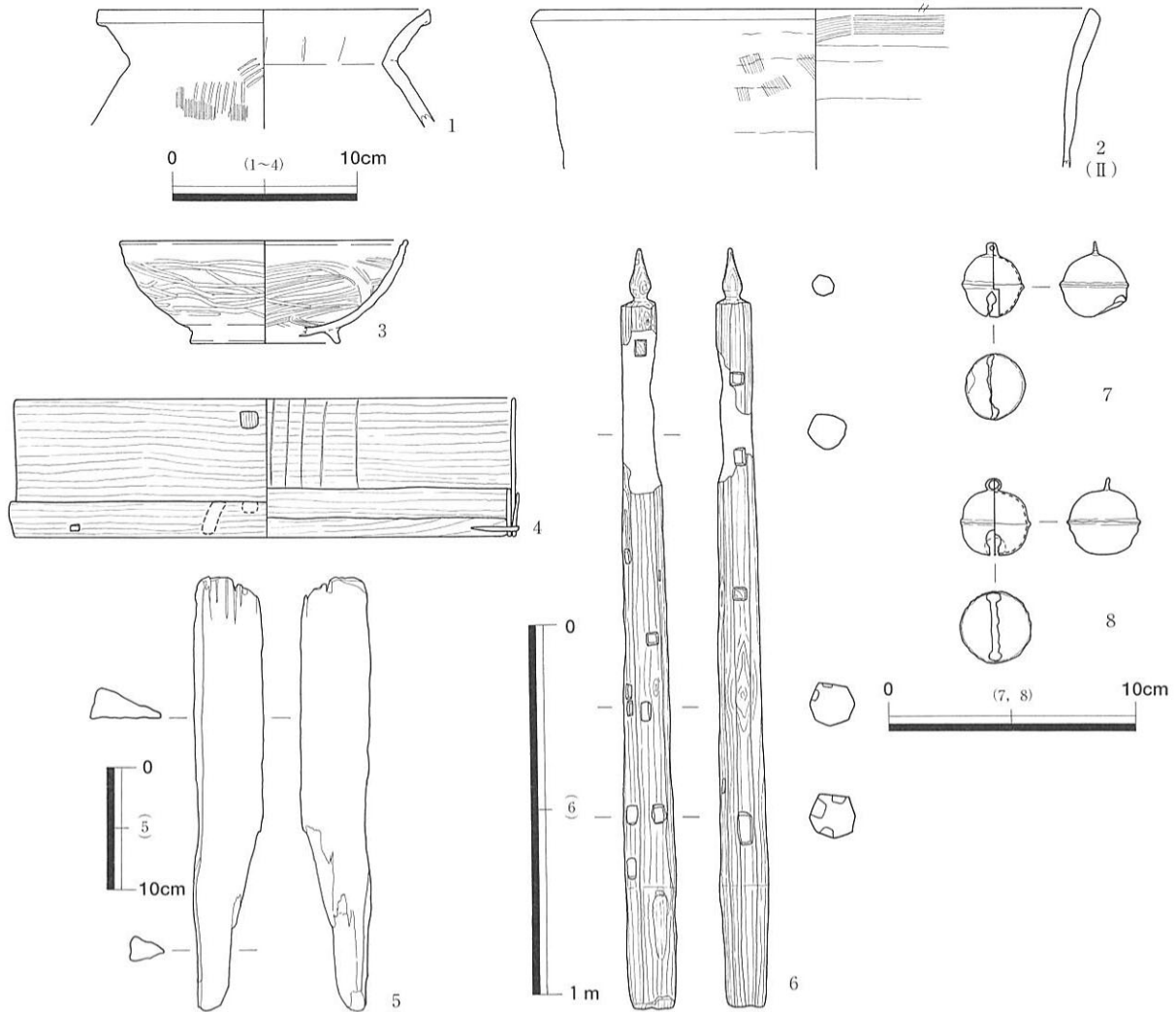


図IV-57 第8a面遺構・第8a層出土遺物⑤ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

図IV-54 29~65 : 第8a層 図IV-55 66~95 : 第8a層
 図IV-56 109~113 : 第8a層 図IV-57 119~133 : 第8a層



图IV-58 第8b面土器埋納遺構出土遺物



図IV-59 第8 b面遺構出土遺物（ローマ数字は古墳時代居住域の番号）

図IV-58 1：土器埋納遺構12, 2：同13, 3：同14, 4：同15, 5～7：同16, 8：同17, 9：同18
 10：同19, 11：同20, 12・13：同21, 14：同22, 15：同25, 16：同26, 17：同27, 18：
 同28, 19：同29, 20：同30, 21：同31, 22：同32, 23：同33, 24：同34, 25：同35, 26：
 同36, 27：同37, 28：同89, 29：同91, 30：同92
 図IV-59 1・2：溝19, 3：溝3, 4～6：落ち込み5, 7：大畦畔1, 8：九・十六ノ坪間坪境畦畔

すべての断面で砂の上にシルトが存在することが確認されていた。注目されるのは、X = -150,080ライン（図IV-61：上段）と、X = -150,100ライン（同：中段）において、水路を埋める砂層が不自然に盛り上がり残存していたことである。これは水路35埋没後、この砂層を芯にして畦畔が造成されたことを示すと考えられ、問題のシルト層はこの畦畔の盛土である可能性が高い。水路を埋める砂層の上ではピットが検出された部分もある（図版18-3）が、これは畦畔に伴う遺構であろう。以上のことから第9 a面は、水路35が機能していた段階と、その埋没後畦畔となった段階の2段階に分けられることがわかる。しかしながら、この2つの段階が層序として完全に分離していたかどうかは不明である。こうした変化が水路35周辺だけで起こり、それ以外の部分では同じ層を耕作し続けた可能性も否定することはできない。

次に、水路35に関連すると思われる遺物を示す（図IV-65：1～7）。その中には、水路周辺の第9 a層上面付近から出土したもの（1～4）と、水路35を埋める砂層から出土したもの（5～7）がある。前者には、須恵器杯蓋（1）・杯（2）、土師器杯A（3）・皿（4）がある。7世紀代と8世紀中頃のも

表Ⅳ-23 第9面遺構名称

(第9 a面)		(第9 b面)	
遺構番号	概要における遺構番号	遺構番号	概要における遺構番号
水路35	89-2 ー	土器埋納遺構58	1トレンチ ビット2
	89-3 ー	土器埋納遺構59	1トレンチ ビット3
	90-2(H3) 溝73	土器埋納遺構60	90-6 ー
	90-3(B) 溝1	土器埋納遺構61	93-1 土器埋納遺構5
		土器埋納遺構62	92-7 土器埋納ビットc
		土器埋納遺構63	92-7 ビット215
		土器埋納遺構64	90-1 土器埋納遺構11
		土器埋納遺構65	90-1 土器埋納遺構7
		土器埋納遺構66	90-1 土器埋納遺構8
		土器埋納遺構67	90-1 土器埋納遺構5
		土器埋納遺構68	89-3 土坑42
		土器埋納遺構69	90-2(H3) ビット614
		土器埋納遺構70	90-1 土器埋納遺構14
		土器埋納遺構71	92-7 土器埋納ビットb
		土器埋納遺構72	89-3 土器埋納遺構12
		土器埋納遺構73	86-3 ビット3-201
		土器埋納遺構74	92-7 土坑1
		土器埋納遺構88	90-1 土器埋納ビット⑦
		土器埋納遺構90	89-3 側溝内出土
		土坑8	90-1 土坑209
		ビット21	90-1 ビット1893
		ビット22	90-1 ビット1779
		ビット23	90-1 ビット2515
		ビット12	92-7 ビット25
		ビット25	92-7 ビット44
		ビット26	92-7 ビット132

のである。後者には、土師器杯C(5)・椀C(6)・杯A(7)がある。8世紀代のものである。なお、土器埋納遺構49は水路35に伴う大畦畔盛土内に土器を埋納したもので、この水路に関連する遺構である。ここから出土したのは須恵器杯(図Ⅳ-80:17)で、Ⅲ型式第3段階のものである。

遺構と遺物の関係を総合すると、水路35は土器埋納遺構49の時期(7世紀末)には存在しており、8世紀代に埋没したと考えられる。そして埋没後、堆積した砂を芯にして



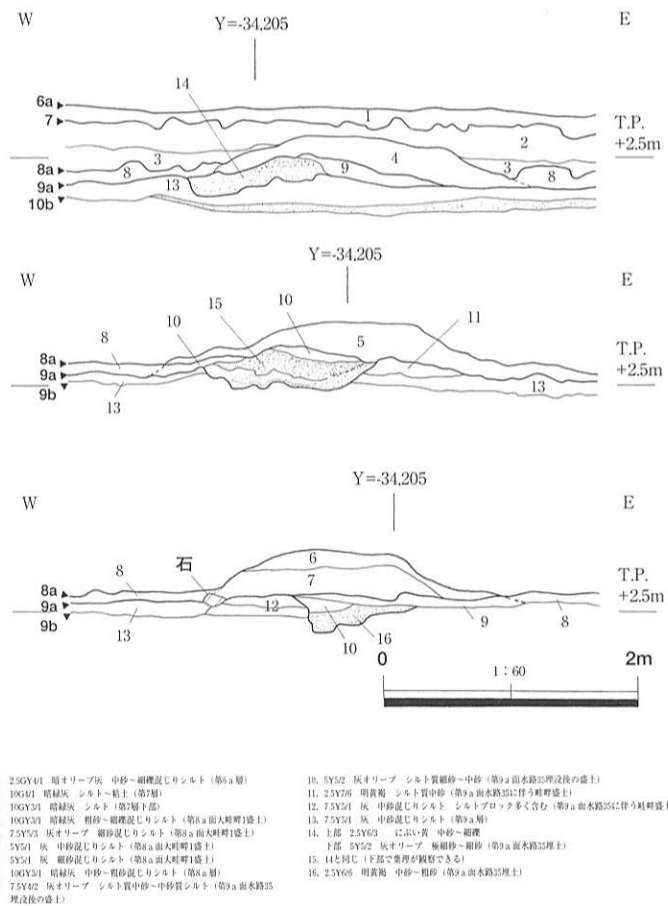
図Ⅳ-60 第9 a面・第9 b面検出遺構

畦畔が造成されたと思われる。水路周辺から出土した遺物のうち、8世紀代のものは畦畔造成後の遺物の可能性がある。

次に、第9 b面の遺構について説明する。この面からは土器埋納遺構が38基検出された(図IV-63・64、表IV-24)。これらのうち、本地区東部において南北方向に並ぶように分布するものがあり、南北方向の地割に沿って埋納がおこなわれた可能性が指摘されている。そこから推定される南北地割は、水路35から東に約110m離れた場所にあることから、第9 a面で確認される正方方位地割は条里型地割であった可能性が指摘されている(江浦1992b)。しかし、それらは土器埋納遺構の一部であり、分布の意味を明らかにするためには、他のものについても検討することが必要である。そこでまず、本地区南西部をみると、土器埋納遺構が南東-北西方向に並んでいることが注目される。これと微地形との関係を明らかにするために、第10 b面の等高線図に土器埋納遺構の位置を記入すると(図IV-62)、それらは微高地の縁辺に沿って分布していることがわかる。この微高地は水田として利用することは難しく、非水田域であった可能性が高い。土器埋納遺構が微高地縁辺に沿って分布することは、水田域と非水田域の境付近に土器が埋納された可能性を示唆する。また、土器埋納遺構69~49も傾斜変換点付近に集中しており、この付近に畦畔が造成されていた可能性も考えられる。

ここで指摘した非水田域の存在は、他の遺構の評価にも影響を与える。概要X II (pp.115-116)では、「第16-2面」で検出された建物の中に7世紀代のものが含まれる可能性が指摘されている。これは、土器埋納遺構51(7世紀中頃)が建物18の柱穴と考えられるためであり、他に建物29の柱穴から、内面に暗文の認められる土師器杯の細片も出土している。概要X IIでは、土器埋納遺構51と建物18柱穴に切り

合い関係があったものの認識できなかった可能性や、集落が存在したことが確実な古墳時代後期の遺物に比べて7世紀代の遺物がきわめて少ないことなどから、これらの建物の時期を保留している。今回、土器埋納遺構51の断面写真を検討したところ、少なくとも複数の遺構の切り合いを示唆するような状況は認められなかった。また、建物29出土の土師器杯の細片については、柱穴を半裁して堆積状況を確認した後、残りを掘削した段階で出土したようである。これ以上の検証は難しいが、少なくとも7世紀代の居住域がここに存在していたとしても、何ら不思議ではない。このことをふまえて図IV-60には、建物18・29とともに、これらと軸が揃っており、同時期の建物の可能性が指摘されている17・19・20・21を示した。また、土坑8は微高地の縁辺に



図IV-61 水路35断面図

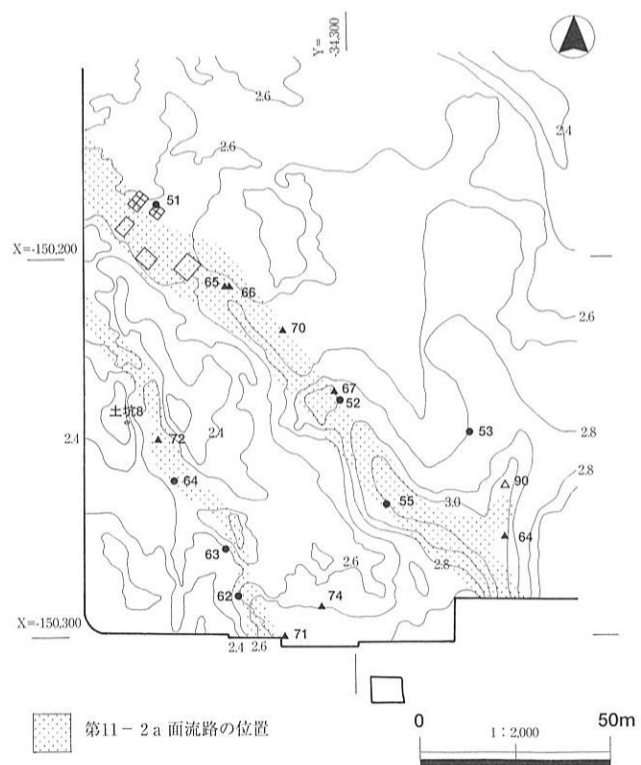
位置している。この遺構には深くなった部分が2ヶ所存在しており、それぞれの断面形状は漏斗状を呈する。ここから出土遺物には複数の時期のものがあることから、2つの遺構が切り合っていた可能性が高いが、断面の残し方が適切でなかったために、断定はできない。ただし、7世紀初め頃～中頃のものも多く、土器埋納遺構51の時期に近接することからすれば、これらの中に飛鳥時代の井戸が含まれている可能性もある。また、図IV-66：(35)の土師器羽釜は6世紀と考えられるものと比べて鍔が小さく、7世紀代の可能性がある。これは第9 a層最下部から出土したが、破片が大きく、残りもよいため、遺構に入っていた可能性も否定できない。この羽釜は建物29の東側から出土した点が注意される。

次に、第9 b面の遺構から出土した遺物を列挙する。

まず、前述の居住域?に関連する遺物を見ていきたい。建物18柱穴の可能性のある土器埋納遺構51からは、土師器杯C（図IV-80：19）が出土した。7世紀中頃のものである。土坑8からは、須恵器杯蓋（1～3）・杯（4・5）、土師器杯C（6・7）・高杯（8）等が出土した。7世紀初め～中頃の時期のものが多い。杯蓋（2）・（3）がそれより古い時期のものである。杯蓋（2）と杯（5）にはヘラ記号が施されている。杯蓋（3）の内面には縄目のような痕跡がある。

また、小規模な遺構から出土した遺物としては、以下のものがある。ピット12からは土師器杯（図IV-79：1）が出土した。7世紀第4四半期頃のものである。ピット21からは土師器碗C（2）・杯A（3）が出土した。8世紀初め頃のものである。ピット22からは、土師器杯A（4）が出土した。8世紀末～9世紀初め頃のものである。ピット23からは、土師器杯B?（5）が出土した。8世紀前半頃のものである。ピット25からは、須恵器杯B蓋（6）が出土した。8世紀初め頃のものである。ピット26からは、土師器片口鉢（7）が出土した。8世紀中頃～後半のものである。

次に、土器埋納遺構から出土した遺物のうち、8世紀代のものを見ていくことにする（図IV-79）。土器埋納遺構65からは土師器杯（8）が出土した。8世紀初め頃のものである。土器埋納遺構66からは土師器鉢（9）が出土した。8世紀初め頃のものである。土器埋納遺構67からは須恵器杯（10）、土師器杯A（11・12）・鉢B（13）・羽釜（14）等が出土した。8世紀前半～中頃のものである。須恵器杯（10）には、外底面に記号「㊀」の墨書がある。第8 a層で同じようなもの（図IV-53：26）が出土している。土師器杯A（11）には、外底面にヘラ記号?が施されている。土器埋納遺構68からは土師器羽釜（15）が出土した。8世紀後半頃のものである。土器埋納遺構69からは土師器杯（16）が出土した。8世紀初め頃のものである。外底面に「華」の墨書がある。土器埋納遺構70からは土師器杯A（17）が出土した。8世紀前半頃のものである。土器埋納遺構71からは土師器杯A（18）が出土した。



図IV-62 土器埋納遺構と微地形の関係

8世紀前半頃のものである。外底面にヘラ書きがある。土器埋納遺構72からは土師器鍋(19)が出土した。8世紀後半頃のものである。土器埋納遺構74からは土師器羽釜(20)が出土した。8世紀前半頃のものである。土器埋納遺構88からは土師器椀X(21)が出土した。8世紀初め頃のものである。土器埋納遺構90からは土師器杯A(22)が出土した。8世紀前半頃のものである。

また、土器埋納遺構のうち、7世紀代のものを図IV-80に示した。土器埋納遺構41からは土師器杯C(9)が出土した。7世紀後半頃のものである。土器埋納遺構42からは、須恵器杯(10)が出土した。II型式第5段階のものである。外底面にヘラ記号を施す。土器埋納遺構43からは土師器杯C(11)が出土した。7世紀後半頃のものである。外底面にヘラ記号を施す。土器埋納遺構44からは須恵器杯(12)が出土した。III型式第2段階のものである。土器埋納遺構45からは須恵器杯蓋(13)が出土した。II型式第5～6段階のものである。土器埋納遺構46からは須恵器杯(14)が出土した。II型式第6段階のものである。土器埋納遺構47からは須恵器杯(15)が出土した。IV型式第1段階のものである。口縁部に打ち欠きかと思える欠けがある。土器埋納遺構48からは土師器甕(16)が出土した。7世紀後半頃のものである。土器埋納遺構49からは須恵器杯(17)が出土した。II型式第3段階のものである。土器埋納遺構50からは土師器杯C(18)が出土した。7世紀後半代のものである。内面にヘラ書きの可能性のあるものが認められる。土器埋納遺構51からは土師器杯C(19)が出土した。7世紀中頃のものである。土器埋納遺構52からは土師器杯C(20)が出土した。7世紀中頃のものである。土器埋納遺構53からは須恵器杯蓋(21)が出土した。II型式第6段階のものである。口縁部に打ち欠きと思われる欠けがあり、天井部にはヘラ記号を施している。土器埋納遺構54からは須恵器杯(22)が出土した。II型式第6段階のものである。土器埋納遺構55からは土師器杯C(23)が出土した。7世紀後半のものである。内面にヘラ書きの可能性のあるものが認められる。土器埋納遺構60からは土師器杯(24)が出土した。7世紀中頃のものである。内面にヘラ書きを施している。土器埋納遺構61からは土師器椀(25)が出土した。8世紀初め頃のものである。外面にヘラ書きの可能性のあるものが認められる。土器埋納遺構62からは土師器杯C(26)が出土した。7世紀中頃のものである。外面にヘラ書きを施している。土器埋納遺構63からは土師器把手付椀(27)が出土した。7世紀第1四半期のものである。土器埋納遺構64からは土師器杯C(28)が出土した。7世紀後半頃のものである。

これらのうち最も古いのは、土器埋納遺構42・45・46であり、7世紀初め頃のものと思われる。また、最も新しいのが土器埋納遺構72で、8世紀後半である。これらを時期別に整理すると、7世紀代のものうち、初頭～前半が8基、中頃が9基、後半が9基となる。また、8世紀代のものうち、前半が10基、中頃が2基、後半が1基となる。土器の時期推定にはある程度の幅を考慮する必要もあるが、この傾向は第9a層の耕作期間を考えるための参考になるとと思われる。

第9a面については遺存状況が悪く、詳細を明らかにすることはできないが、以上のような遺物のあり方からみて、7世紀初め頃から水田開発が始まり、7世紀中頃～末には正方位地割が形成されていたと考えられる。この地割は第8a面に一部継承されるものの、第8a面でみられる条里型地割には基本的に合致しない。また、8世紀代には水路35が埋没したが、畦畔として地割が継承され、継続して耕作が続けられたと思われる。なお、土器埋納遺構の時期をみると、9世紀代のものが皆無である点が注目される。第8a層などから9世紀代に入る可能性がある土器は若干出土しているが、前後の時期の土器と比べるときわめて少ない。9世紀代にどのような土地利用がなされていたかについては明らかにできないが、第8a面における地割変更の背景を考える上でも注意すべき事実である。

第9 a層出土遺物 第9 a層から出土した遺物も、後述する古墳時代後期集落に関連するものが大半をしめるため、後の記述の便宜上、ここにまとめておきたい(図IV-65:8~IV-78:338)。

この層からは遺物が大量に出土しているため、須恵器以外の遺物を先に記述する。土師器椀C(8)・杯(14・16)・杯A(18)・杯C(9~13)・杯B蓋(17)・皿A(15)・甕(19~22・49・50)・高杯(23~25・36~43)・小型丸底壺(26~29)・竈(30~33)・甌(34)・羽釜(35)・複合口縁壺(46)・鉢(52~54)、弥生土器短頸壺(47・48)・高杯(44・45)・甕(51)、軟質土器片(56・57)、韓式系甕(58)等が出土した。

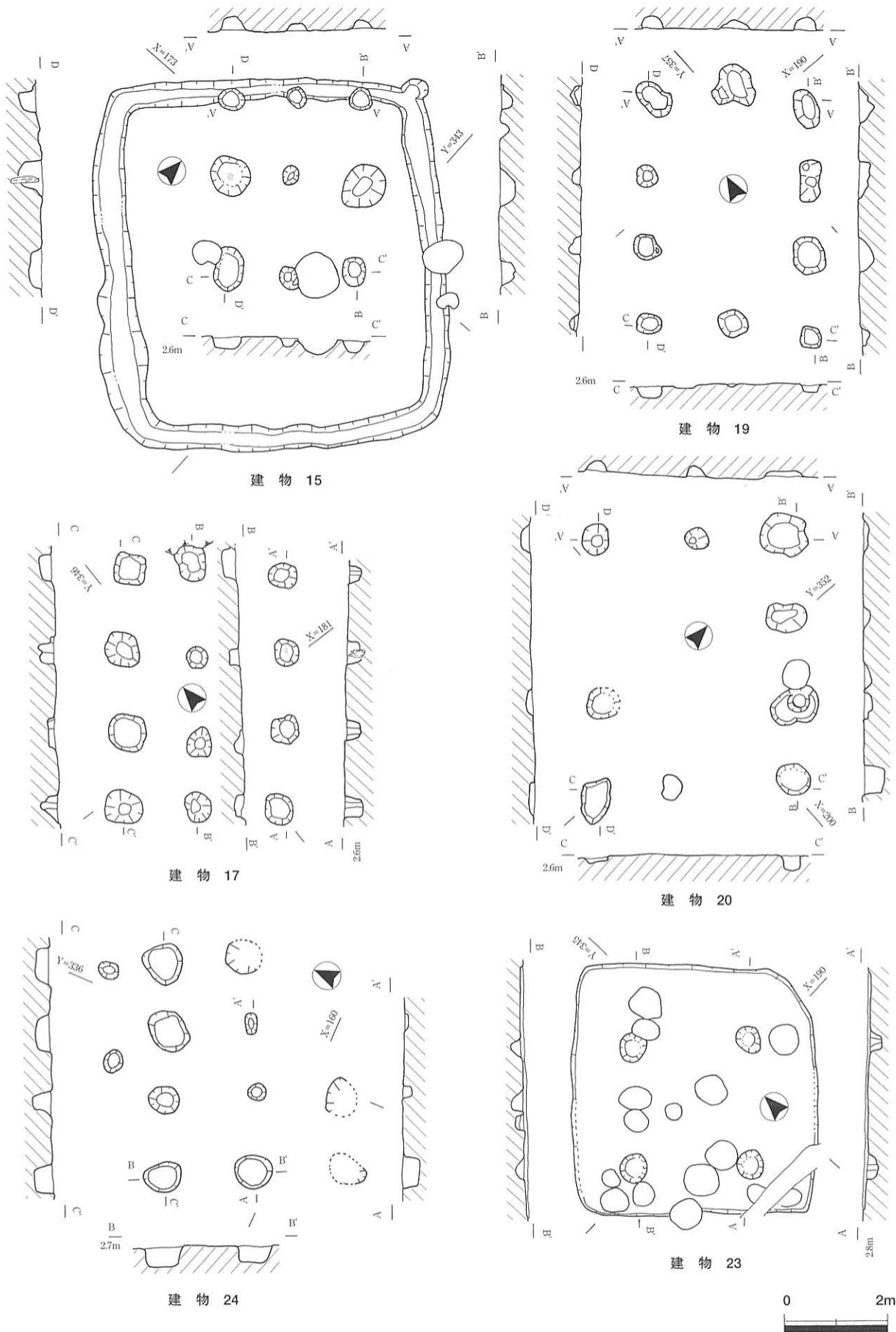
土師器椀・杯・皿類は7~8世紀のものである。甕・高杯・小型丸底壺・甌は5~6世紀のもので、それに若干の弥生土器第V様式~庄内期の土器が混じっている。土師器杯(10)の内面には、ヘラ記号が施されている。土師器竈(30~32)の口縁端部には、同心円スタンプまたは車輪風スタンプが施されている。(33)は竈の庇の部分である。土師器羽釜(35)は7世紀ぐらいのものと思われる。

軟質土器(56)は甕で口縁端部に凸線を持つ。(57)は外面斜格子状タタキである。韓式系甕(58)は陶質で、口縁端部に凸線を持ち、外面には平行タタキの後沈線を施している。

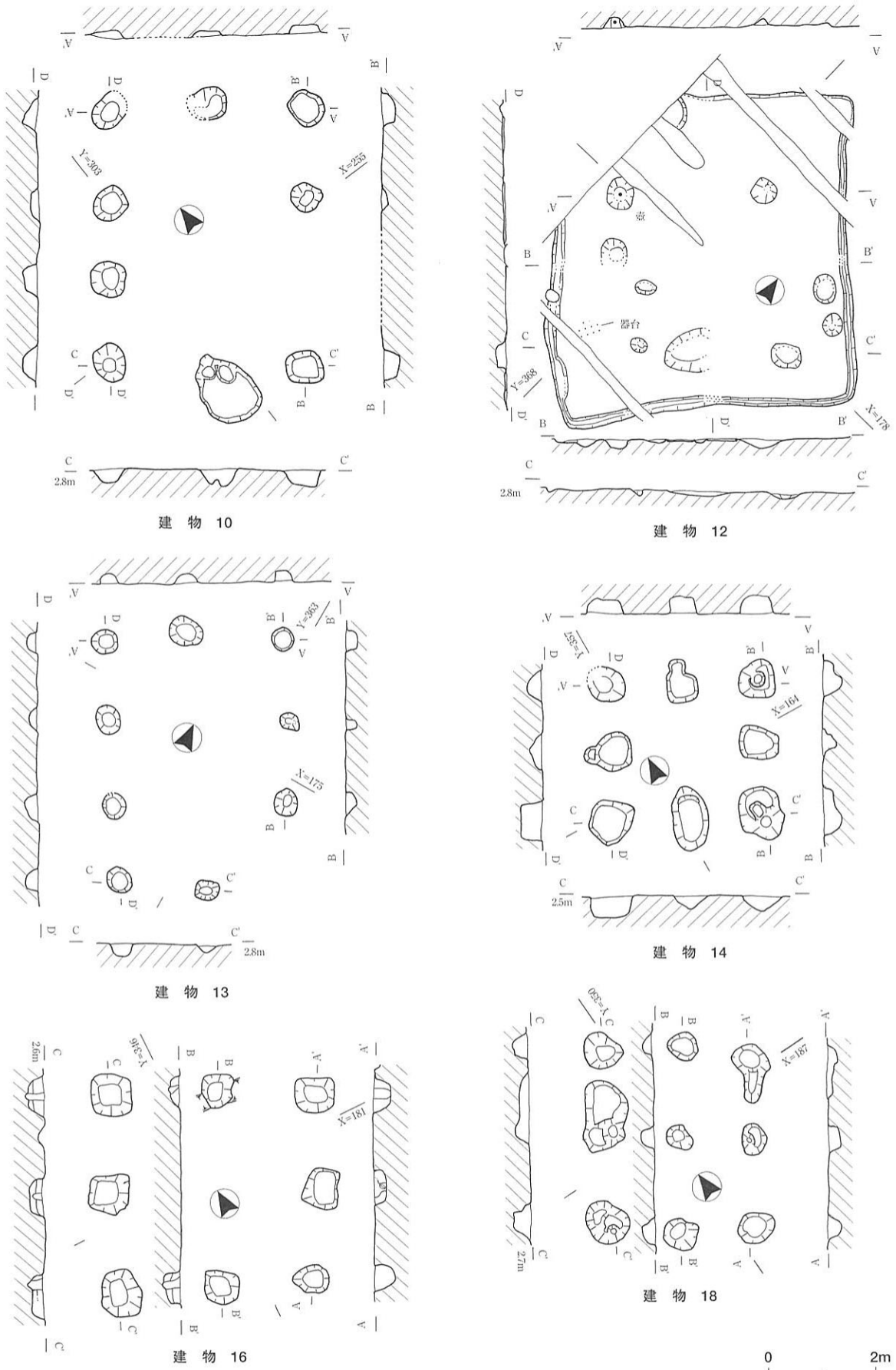
須恵器は杯蓋(59~100)・杯(101~151)・高杯(152~168)・甕(169~175)・壺(176・177・182・183・187~193)・横瓶(178・180)・平瓶(179)・短頸壺(181・184~186)・甕(194~205)・器台(206・207)等が出土した。杯蓋はI型式第4段階~IV型式第1段階までのものがあり、I型式第5段階~II型式第2段階のものが多い。(63)・(78)・(92)にはヘラ記号が施され、(79)・(80)・(87)の口縁部外面にはハケ状刻目が施されている。(88)には別個体の破片が溶着している。(100)は凸線文2条と連続櫛描刺突文で飾られている。杯はI型式第4段階~III型式第2段階までのものがあり、I型式第5段階~II型式第2段階のものが多い。(122)・(142~144)にはヘラ記号が施され、(117)・(124)・(141)・(151)には別個体の破片が溶着している。(133)には、内外面の一部に赤色顔料が付着している。(136)は焼きが悪いものか、須恵器を模倣した土師器か不明のものである。高杯はI型式第4段階~II型式第5段階までのものがあり、I型式第5段階~II型式第2段階がほとんどである。(153)の内面には、点々状の当て具痕が残る。(162)には3方向の透かしが認められるが、そのうちのひとつが未貫通である。甕はI型式第4段階~II型式第5段階までのものである。横瓶はI型式第5段階のものとして7世紀ぐらいのものである。平瓶は7世紀ぐらいのものである。壺はI型式第4段階~II型式第3段階までのものである。(177)は外底面に格子状タタキを施している。(191)には竹管文が1個施されている。短頸壺にはII型式第2段階~第4段階のものがある。甕はI型式第4段階~II型式第3段階までにおさまるものが多いが、(203)はそれより古いI型式第1~2段階のものである。(195)・(200)には頸部外面にヘラ記号が施されている。器台(206)は、凹線文と波状文(13~17条)で飾り、透かしは筒部に長方形のものが4方向、三角形のものが4方向で2段あり、脚部に三角形のものが4方向、半円形のものが4方向に認められる。子持器台(207)は、子杯が6個付いていたと推定され、外面にヘラ記号を施している。器台部分への杯の接合部分は内部を空洞にしており、火通りをよくするためか、空洞に対して穿孔が施されている。体部にも穿孔が1つ残存する。

その他の遺物として、土製紡錘車(208)、鉄滓(209)、砥石(210~222)、滑石製品(223~256・261~339)、ガラス小玉(257~260)等が出土した。砥石は流紋岩製と流紋岩質凝灰岩製のものが多いが、(222)は砂岩製である。4面使用しているものが多い。(221)は砥石かどうか不明のものである。

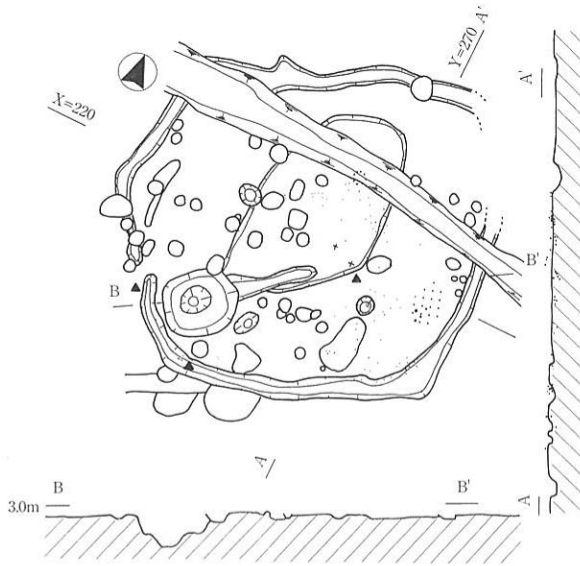
滑石製品は白玉(223~249)、紡錘車(252~256)、切子玉(261)、管玉(250・262~266)、双孔円板



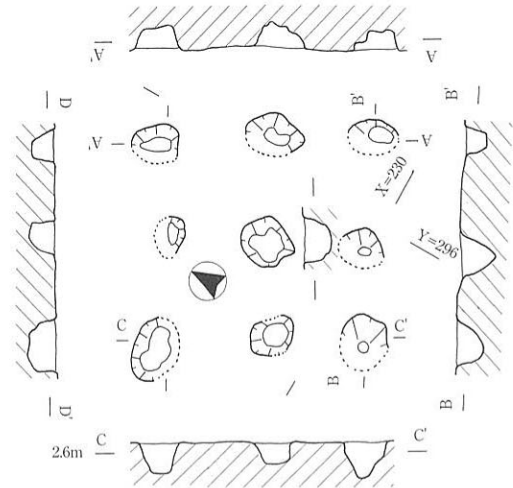
图IV-89 第9b·10b面建物④



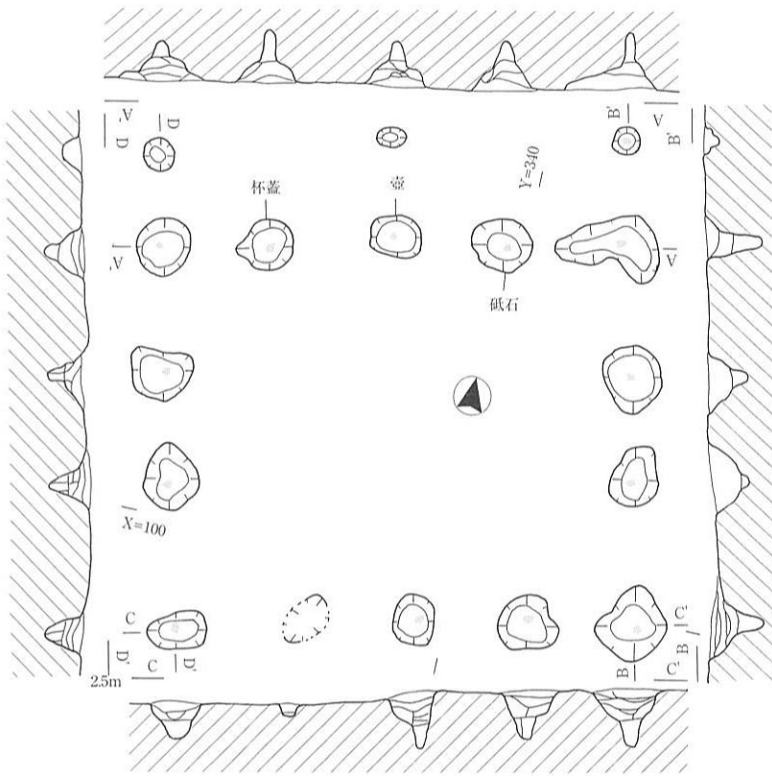
図IV-88 第9b・10b面建物③



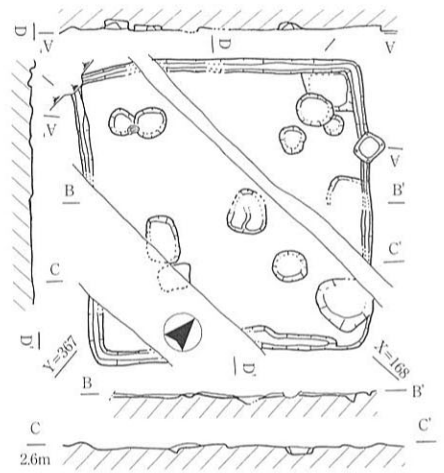
(建物 8)



建物 9








建物 4



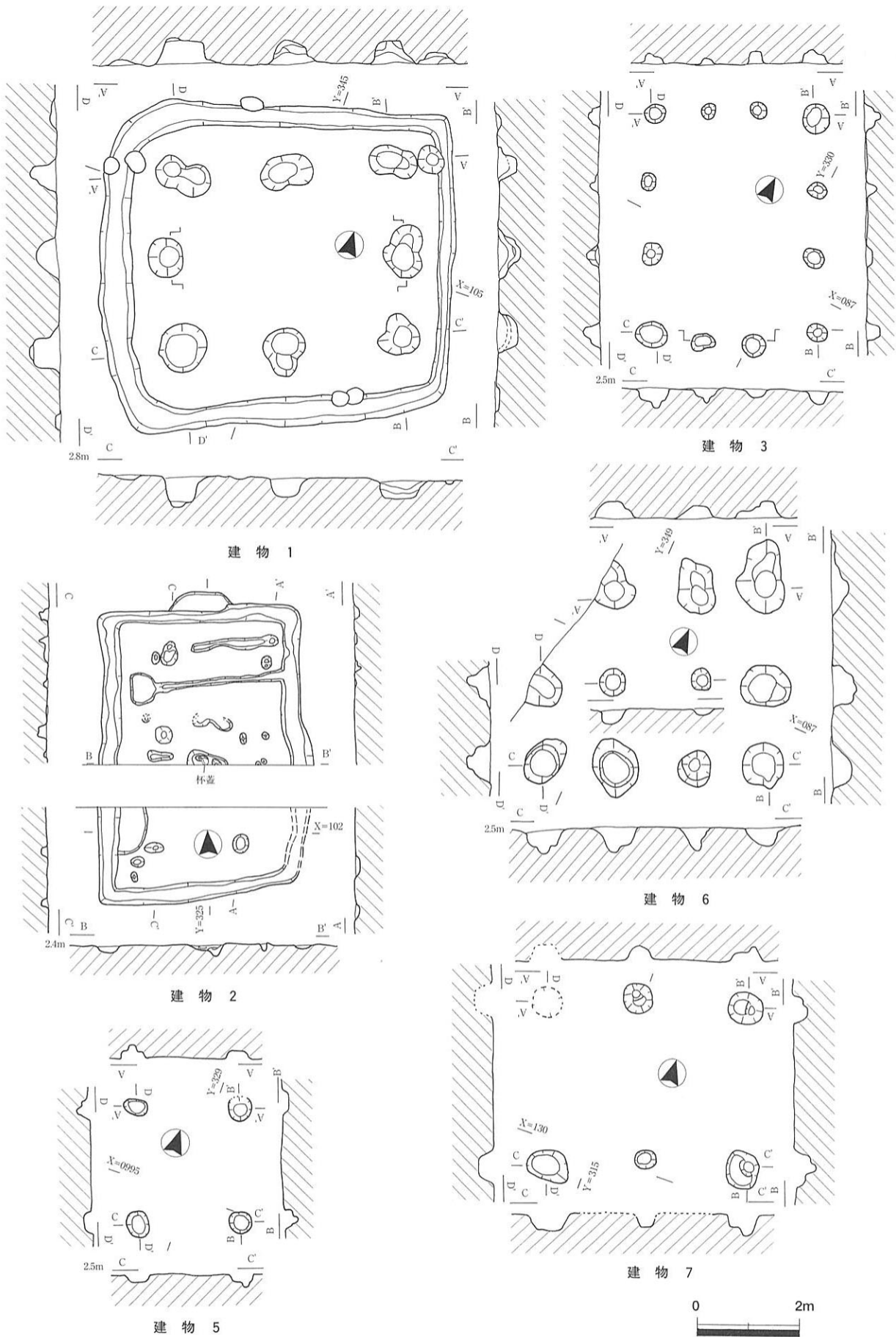
建物 11



- | | | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------|------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------|
|  | 土器集積 |  | 赤色顔料? |
|  | 柱痕跡 | | |
|  | 玉 | | |
|  | 鉄器 | | |

※建物跡の座標、標高の表示について
 1、座標はXの「-150」、Yの「-34」を省略。
 2、標高は「T.P.+」を省略。

図IV-87 第9b・10b面建物②



図IV-86 第9b・10b面建物①

れていたと考えられるものである。

竪穴建物である建物2からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-92：2～4）・杯（5）・高杯（6・7）、土師器竈（8）、滑石製白玉（9～21）等が出土した。このうち、（3）は建物中央のピットに埋納されていた。須恵器はⅡ型式第1～第2段階のものである。（6）は口縁が小さくて高杯かどうか不明である。高杯（7）にはヘラ記号が施されている。（2）は建物中央部のピット内に逆位の状態で埋納されていたものである。土師器竈は口縁部外面に同心円スタンプを施している。滑石製白玉は15個出土した。

建物4の柱穴からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-92：22～25）、土師器甕（26）・直口壺底部（27）、砥石（28）等が出土した。前述のように、これらは複数の柱穴に埋納されたものである。須恵器はⅡ型式第1～第2段階のもので、土師器は6世紀ぐらいのものである。砥石は頁岩で4面使用している。

「建物8」とされた部分の落ち込み内からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-93：29～31）・杯（32・33）・甕（34・35）、土師器高杯脚（36）、滑石製品（37～82）、サヌカイト剥片（83）等が出土した。須恵器はⅡ型式第1段階～第2段階のものである。杯（32）には別個体の破片が溶着している。滑石製品は白玉（37～81）と有孔円板（82）である。白玉は総数237点出土している。

建物9の柱穴からは木製品（図Ⅳ-93：84）が出土した。礎板の可能性のあるものである。

竪穴建物である建物11からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-93：85～87）・杯（88・89）・高杯（90）等が出土した。Ⅰ型式第4段階～Ⅱ型式第2段階のものである。高杯は凸線1条と波状文5条で飾り、透かしは4方向である。

竪穴建物である建物12からは、須恵器壺（図Ⅳ-94：91）・器台（92）、土師器鉢？（93）、弥生土器高杯脚（94）、滑石製白玉（95）等が出土した。（91）は柱抜き取り後、柱穴に埋納されたものである。須恵器の時期はⅠ型式第4段階である。器台は杯部・脚部ともに凸線と波状文（7～12条）で飾る。透かしは三角形で、6方向に2段存在する。土師器鉢？は時期不明である。この土器は器面が変色しており、二次的に被熱した可能性が高い。弥生土器高杯脚は第Ⅵ様式～庄内式ぐらいのものであり、この建物に伴うものではない。白玉は1個出土した。

建物15の柱穴からは、土師器甕（図Ⅳ-94：96）、板状木製品（98）、柱根（97・99）が出土した。土師器は6世紀ぐらいのものである。板状木製品は柱穴底面に貼り付いた状態で出土しており、礎板の可能性もある。柱根は端部が炭化している。

建物16の柱穴からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-94：100・101）・短頸壺（102）、礎板（103）等が出土した。須恵器はⅡ型式第1段階～第2段階のものである。

竪穴建物である建物23からは、須恵器杯（図Ⅳ-94：107）、滑石製剣形石製品（108）が出土した。須恵器杯はⅡ型式第2段階のものである。

建物24の柱穴からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-94：109）・短頸壺（110）等が出土した。杯蓋はⅡ型式第1～2段階、短頸壺はⅠ型式第4段階と若干の時期差がある。短頸壺は凸線2条と刺突文で飾られており、別個体の破片が溶着している。

建物25の周辺からは、滑石製白玉（図Ⅳ-95：111～139）・有孔円板（140～144）が出土した。総数は双孔円板2、有孔円板5、白玉197点である。この建物の中央部で検出された土坑14でも多数の滑石製品が出土しており、それとの関連が考えられる。

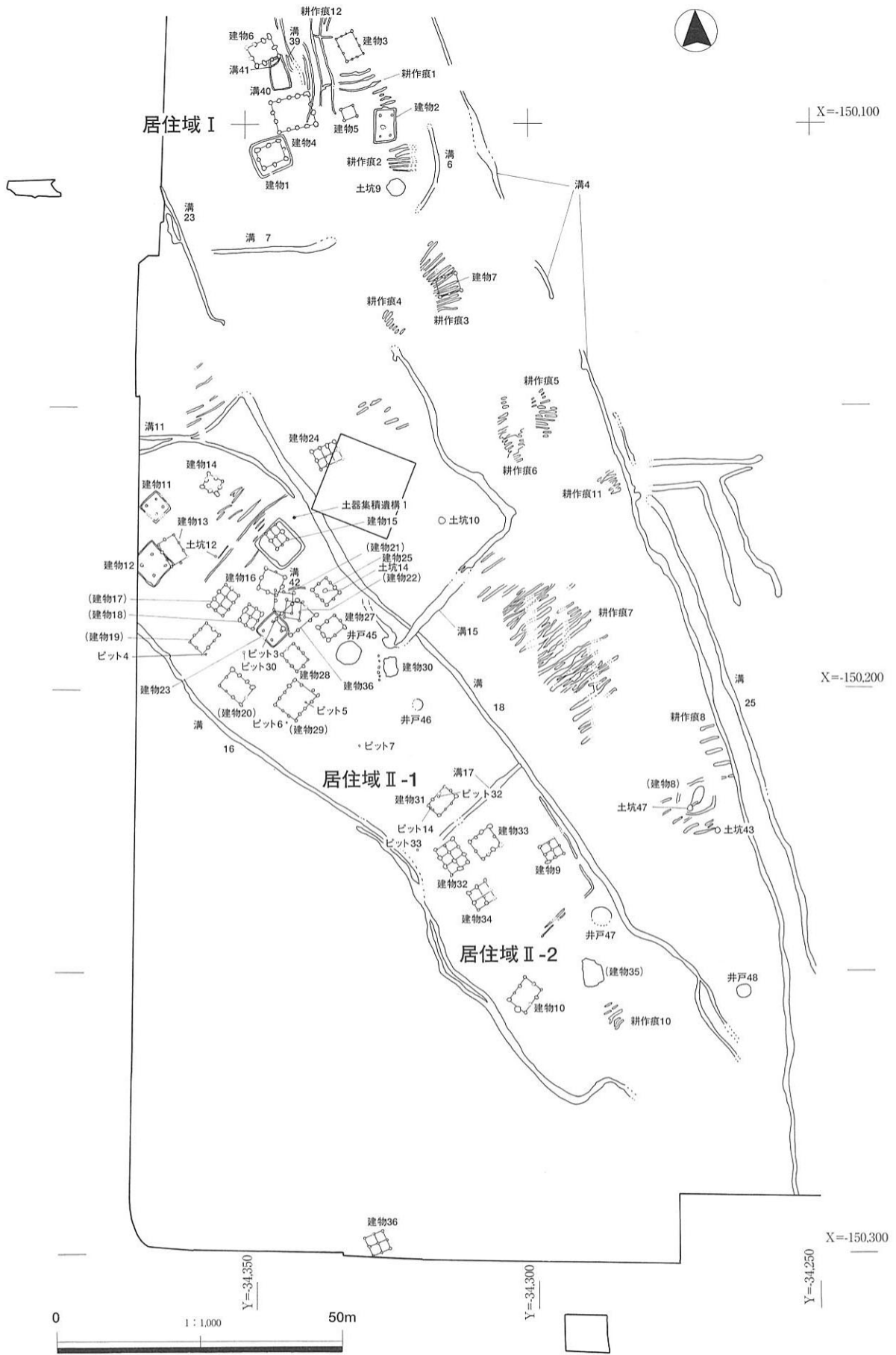
竪穴建物である建物30からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-95：149～154）・杯（155）・高杯（156）・壺（157）、土師器甕（158～160）・甗（161・162）・羽釜（163・164）等が出土した。須恵器はⅡ型式第1段階のも

a層の小さな落ち込みが混在し、そこに新しい時期の遺物が入っている危険がある。実際、建物30では、わずかながら6世紀末～7世紀初め頃と考えられる土師器片が出土している。写真（概要XⅡ，p.81）をみると、建物の平面形が認識された時点で多くの小穴が確認されているが、これらは建物よりも新しい遺構であり、このような中に土器が入っていた可能性がきわめて高い。また、「玉製作址」とする意見もある「建物8」には、以下のような問題が存在する。この「建物」については壁溝が検出されただけで、柱穴と推定されているピットもきわめて浅く、「建物」とは関係しない小穴も多く重複して検出されるなど、遺存状況はきわめて悪かった。そして、「建物」の平面形をみると、かなりいびつな形をしている。周囲の遺構も含めて観察すると、壁溝と認識された溝の2辺が耕作痕9の溝の向きと一致するだけでなく、その延長線上に位置する点も注意される（図版20-5）。なお、玉製作に関連するとされる土坑47は、断面図では明瞭な2段の掘り込みとして表現されているが、写真をみると実際は上半部がすり鉢状をなし、中央部が深くなる形状を呈していたようである。この「建物」内の落ち込みからは、滑石製品と須恵器が多数出土した（図版20-6）。これらの遺物はレベルがほぼそろっており、一連の廃棄の結果残されたものが比較的良好に遺存したと考えられる。断面写真や断面の記載を点検したところ、この部分では第8a層の下に「粗砂混じり黒色粘土」が薄く残存しており、この層に遺物が含まれていたことが判明した。この層は第10a層に対比される可能性が高く、浅い落ち込みのような場所に土器や玉が廃棄され、それらが土壌の中に取り込まれる形で埋没したと推定することができる。ちなみに、この「建物」にあたる地点の第8a層からは遺物が全く出土しておらず、第8a面段階の耕作によって遺物集中部分が攪乱された可能性は低い。以上のことを総合すると、「建物」とされた遺構と白玉などの遺物は直接関係しないと考えられる。この「建物」を玉製作工房跡とする想定は、「建物」内から多くの玉類、刀子状の鉄製品、赤色顔料などが出土したことや、土坑47を玉製作工房跡の事例にみられる方形土坑と同じ性格の遺構とみなすことから導かれている。しかしながら、これを竪穴建物跡とするには柱の並びが不自然なだけでなく、平面形態からみた主軸と合わないなどの問題があるし、仮に建物跡が削られたとすれば、それは遺物が廃棄される以前であったと考えられる。このように、この遺構については、遺構の重なりや遺物の廃棄、埋没後の削削など、人間活動の重複を主体とする遺構形成過程を考慮して、建物かどうかも含めて慎重に評価することが求められる。

また、掘立柱建物については時期を明確にしがたいものが多いが、建物4・16では柱穴の中に土器が埋納されており、時期推定が可能である。また、建物24についても側溝掘削中に完形の須恵器杯蓋が出土しており、これも柱穴に埋納されていた可能性が指摘されている。これらはいずれも、柱抜き取り後に埋納されたもので、建物4の場合、3つの柱穴に土器や砥石が埋納され、須恵器杯蓋を埋めた柱穴からはウリ類の種子も出土した。（概要Ⅱ，pp.46-47）。なお、建物1に関しては、概要Ⅱでは遺物は出土しなかったと記載されているが、遺構掘削を開始した直後に柱穴のひとつから須恵器の細片が出土していたことが判明した。これはⅡ型式第5段階に属するものと考えられ、どの段階で入り込んだかが問題となる。この建物については柱の抜き取り痕が明瞭に残り、柱穴は柱抜き取り後に流入した土で埋積されたことが確認されている。したがって、この土器片は建物廃絶後に入り込んだもので、建物の時期は示さない。

次に、建物跡から出土した遺物を列挙する（図Ⅳ-92～96）。

建物1の柱穴からは、須恵器壺（図Ⅳ-92：1）が出土した。Ⅱ型式第5段階ぐらいのものかと思われる。頸部外面は平行タタキの後ナデている。これは前述のように、柱抜き取り後の流入土の中に含ま



図IV-85 第10b面集落関連遺構平面図

—北東方向に枝分かれして舌状にのびている。以上の微高地は、第11-2 a面～第11-1面流路1・2を埋める流路堆積物と、流路1から供給された破堤堆積物によって形成されたものである。また、当地区南東部には南北方向にのびる微高地が存在するが、これは第11 b層の堆積によって生じ、第11-2 a面から存在していたもので、この部分には第10 b層がほとんど堆積していない。さらに当地区北東部にも、南東-北西方向にのびるわずかな高まりがあるが、これは第13 b層の堆積によって生じ、弥生時代を通じて存在した微高地が痕跡的に残存したものである（弥生時代の堆積物と微地形の関係は次項で詳述）。第10 b面は旧地表面ではないが、第10 a層はここで記述した起伏の上に形成されたものであるから、この起伏が古墳時代の地表面の状況を反映していると考えてよい。

遺構が多く検出されたのは、当地区西部の微高地上である。特に流路1が埋没して形成された微高地の上や、流路1から供給された破堤堆積物によって形成された微高地の末端には遺構が集中する。江浦洋（1991 b）では古墳時代後期の集落について、「グループⅠ」・「グループⅡ」という区分がなされた。その後、概要XⅡではその名称が「集落Ⅰ」・「集落Ⅱ」と呼びかえられ、さらに後者が「集落Ⅱ-1」・「集落Ⅱ-2」と細分された。本書では概要XⅡの区分を踏襲して記述するが、「集落」を「居住域」と言い換えることにする。それは、こうしたグループが別個の集落を形成していたのではなく、いくつか集まってひとつの集落を構成していた可能性が高いと考えるためである。

建物 まず、居住域内で検出された建物についてみていきたい（図Ⅳ-86～91、表Ⅳ-26）。ただし、ここには飛鳥時代に属する可能性がある建物17・18・19・20・21も合わせて図示しているので注意されたい。

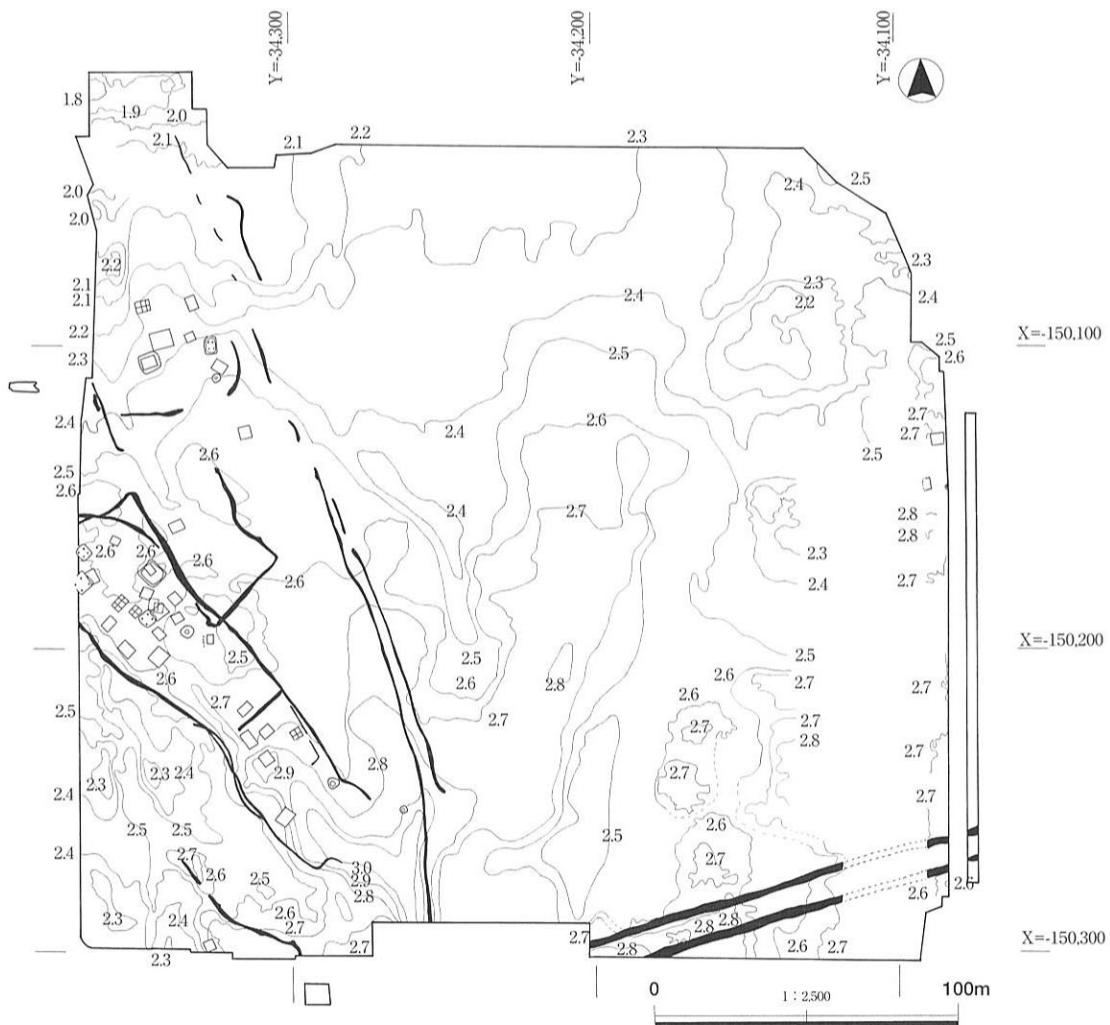
この面で検出された建物跡には、竪穴建物と掘立柱建物がある。前者については、住居として利用されたと考えられるものの他、「竈屋」として使われた可能性が指摘されているものが含まれている。また、後者については、平地式建物か高床式建物かを厳密に区別する基準を見出せないため、両者を一括した呼称として使用する。竪穴建物は確実なもので6基検出されたが、ここでは90-1調査区で「落ち込み6」と呼称され、「竈屋」の可能性があるとされた遺構も「建物35」として含め、計7基を表示している。「竈屋」と推定された建物のうち、建物30では作り付け竈が2基検出されている。このうち1基（図版20-8）は確実で、もう1基は壁体の下に炭化物層がもぐり込むなど、問題も残るとされている（概要XⅡ、p.81）。また、建物2とその周辺では土師器竈・羽釜・甑の破片等が多く出土した。なお、90-3調査区の「建物跡3」は、概報の実測図では壁溝が長方形にめぐるように表現されているが、原図や写真をみると、壁溝と一括された溝の間に切り合い関係が認められる。したがって、これについては建物跡からは除外し、壁溝とされたものを一括して溝40とした。また、掘立柱建物は29基を示したが、このうち5基は、前述のように飛鳥時代に属する可能性がある。また、90-1調査区において、調査時に掘立柱建物の可能性が考えられたものの、その想定に疑問点が多いため概報には掲載されなかった遺構が2つ存在するが、これについても（建物21）・（建物22）として図Ⅳ-85に位置を記載した。なお、建物の実測図は、概要Ⅰ・Ⅱ・XⅡ・XⅣに掲載されたものを若干修正している。建物に関するデータは表Ⅳ-26にまとめたが、詳細はそれぞれの概報を参照されたい。

竪穴建物からは比較的多く遺物が出土しており、時期を決定しやすい。例えば、柱抜き取り後の柱穴に須恵器壺を埋納し、床面直上から須恵器器台が出土した建物12は、炭化物の出土状況からみて最終的に部材の一部が燃やされたと考えられており、遺存状況はよかった。しかし全体としてみると、第10 a層が第9 a層・第8 a層の耕作によって大きく削られているため、竪穴建物の埋土の中に第9 a・第8

第10層と呼称されている。こうした状況をふまえて断面写真を再検討したところ、90-3調査区Aトレンチにおいて、第8 a層と弥生時代後期末の砂礫層の間に、2枚の古土壌が存在することが明らかになった。このうち、上のもの（調査時に「第11層」と呼称）からは古墳時代の遺物の他、飛鳥・奈良時代の遺物が出土しており、第9 a層に対比できる。しかし、下のものについては部分的にしか残存していなかったこともあり、どのような遺物が含まれていたかは明らかではない。ただし、遺構の埋土をみると、弥生時代後期末の器台が出土した溝9など、確実に下の古土壌起源の土で充填された遺構が存在することが判明し、下の古土壌が第9 a層以前に形成されたものであると考えるに至った（図版22-7・8）。この古土壌には、下の砂礫層に起源する砂礫が多く含まれており、これを母材のひとつとしていることがわかる。こうした状況に着目して砂礫層を第10 b層とし、これを母材のひとつとして形成された土壌を第10 a層と呼称することにした。

前項で述べたように、第10 b面に帰属する遺構は第9 b面・第8 b面の遺構と同時に検出された部分が多い。ここでは、第10 b面精査時に検出された遺構の中から、第10 b面に帰属すると考えられるものを抽出して説明することにした。

微地形 まず、この面の起伏を概観したい（図IV-84）。当地区南西部には南東-北西方向にのびる細長い微高地が2つ存在する。また、当地区中部にも微高地が存在するが、これは南東-北西方向と南西



図IV-84 第10 b面等高線図

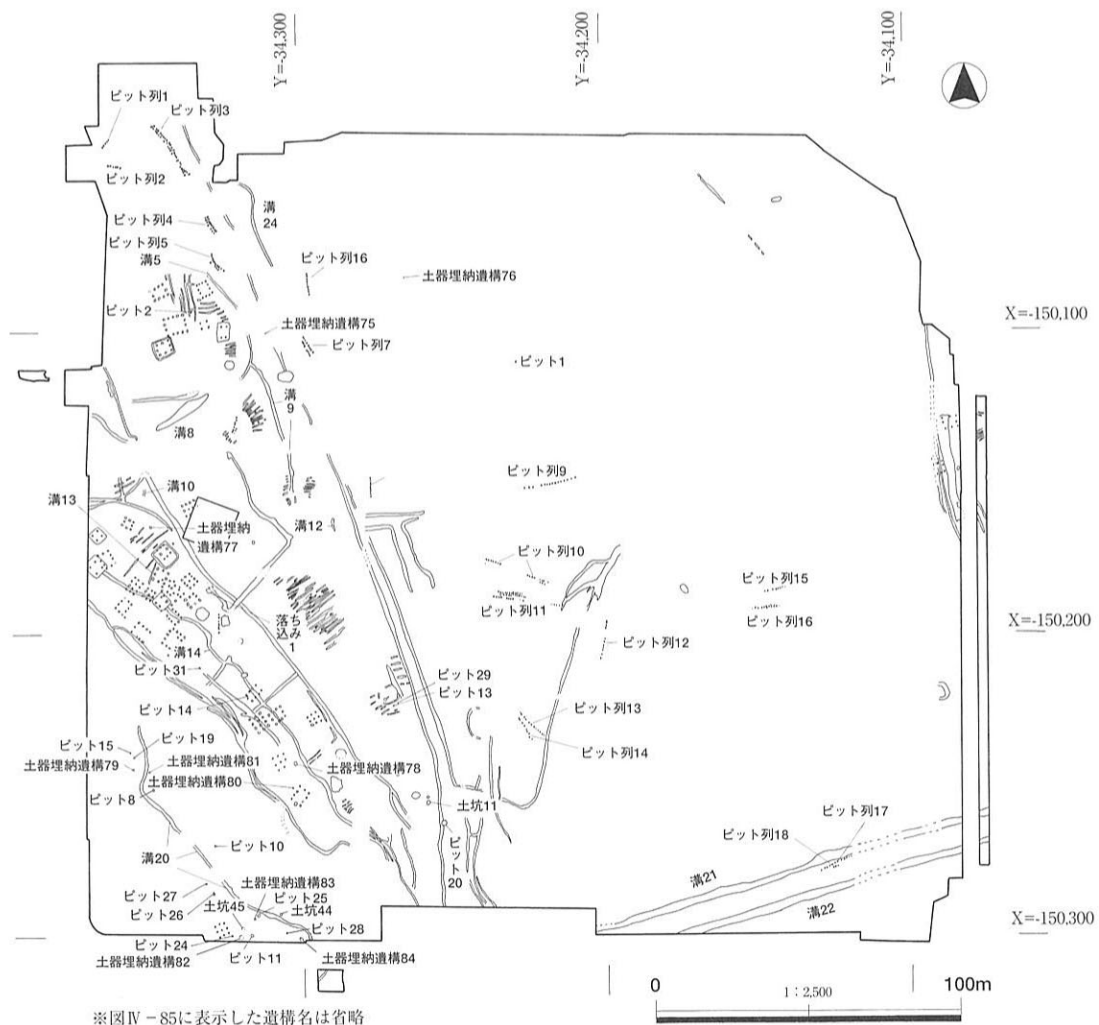
3. 第10b面—古墳時代遺構面の調査—

府教委Cトレンチ（府発I，pp.14-26）において古墳時代後期の滑石製玉類が大量に出土したことから、当遺跡を玉作りの集落とする考え方が早くから出されてきた（小野1995など）。その後の調査によって、この時期の建物をはじめとする多くの遺構が検出され、集落の様子が明らかになってきた。さらに、玉類以外に土師器移動式竈、須恵器器台など、様々な遺物が出土しており、それをもとにした集落の性格に関する検討もおこなわれている（森本1997）。

また、当地区からは古墳時代前期にさかのぼる遺構も検出された。恩智川を挟んで東側に位置する池島I期地区においても、画文帯神獣鏡の破片など、古墳時代前期に属する遺物・遺構が検出されており、今後周辺の調査が進めば、古墳時代前期の土地利用の実態が明らかになると期待される。

本項では、古墳時代の遺構が多数検出された第10b面の調査成果を記述する。

第10b面の設定 当初、この面は「古墳～古代面」（概要I）と呼称され、古墳時代から平安時代まで地表面であったと考えられていたが、その後第9a層が確認されたことで、この認識が誤りであることが明確になった。また、最近の池島I期地区の調査では、古墳時代に属する古土壌が確認されており、



図IV-83 第10b面平面図

表Ⅳ-25 第10b面遺構名称

遺構番号	概要における遺構番号	備考	遺構番号	概要における遺構番号	備考
井戸45	90-1 井戸14		ビット24	92-7 ビット171	
井戸46	90-1 井戸15		ビット27	92-7 ビット130	
井戸47	90-1 井戸 8		ビット28	92-7 ビット 8	
井戸48	89-3 井戸13		ビット29	89-2 ビット 9	
土坑 9	90-3(A) 土坑222		ビット30	90-1 ビット1922	
土坑10	90-1 土坑133		ビット31	90-1 ビット2904	
土坑11	89-3 土坑33		ビット32	90-1 ビット2969	
土坑12	90-1 土坑125		ビット33	90-1 ビット2987	
土坑13	92-7 古墳面土坑	所在不明	土器埋納遺構75	90-3(A) 掘りのこし土器埋納ビット6	
土坑14	90-1 土坑137	玉出土	土器埋納遺構76	90-3(B) 掘りのこし土器埋納ビット?	
土坑43	89-2 土坑 3		土器埋納遺構77	90-1 土器埋納遺構 6	
土坑44	92-7 土坑 1		土器埋納遺構78	90-1 土器埋納遺構 4	
土坑45	92-7 土坑 5		土器埋納遺構79	90-1 土器埋納遺構 9	
土坑47	89-2 土坑 1		土器埋納遺構80	90-1 土器埋納遺構 3	
落ち込み 1	90-1 落15	落93・193と同一	土器埋納遺構81	90-1 土器埋納遺構10	
土器集積遺構 1	90-1 土器集積遺構		土器埋納遺構82	92-7 土坑 4	
溝 4	90-3(A) 溝68		土器埋納遺構83	92-7 土坑 2	
溝 5	90-3(A) 溝40		土器埋納遺構84	92-7 土坑 3	
溝 6	90-3(A) 溝58		建物 1	90-3(A) 建物 7	
溝 7	90-3(A) 溝12		建物 2	90-3(A) 建物 6	
溝 8	90-3(A) 溝22		建物 3	90-3(A) 建物 1	
溝 9	90-3(A) 溝60		建物 4	90-3(A) 建物 4	
溝10	90-1 溝581		建物 5	90-3(A) 建物 5	
溝11	90-1 溝711		建物 6	90-3(A) 建物 2	
溝12	90-1 溝258		建物 7	90-3(A) 建物 9	
溝13	90-1 溝629		(建物 8)	89-2 竪穴住居	
溝14	90-1 溝633		建物 9	90-1 建物 1	
溝15	90-1 溝700		建物10	90-1 建物 2	
溝16	90-1 溝635		建物11	90-1 建物 3	
溝17	90-1 溝314		建物12	90-1 建物 4	
溝18	90-1 溝585	溝313と同一	建物13	90-1 建物 5	
溝19	90-1 溝653	第 8 b面で検出	建物14	90-1 建物 6	
溝20	92-7 溝A		建物15	90-1 建物 7	
溝21	90-1 溝28		建物16	90-1 建物 8	
溝22	93-1 溝29		建物17	90-1 建物 9	
溝23	90-1 溝210		建物18	90-1 建物10	
溝24	87-3 溝1211		建物19	90-1 建物11	
溝25	90-2 溝40・41		建物20	90-1 建物12	
溝39	90-3(A) 溝28		(建物21)	90-1 建物13	
溝40	90-3(A) 建物跡 3		(建物22)	90-1 建物14	
溝41	90-3(A) 溝29		建物23	90-1 建物15	
溝42	90-1 溝649	玉出土	建物24	90-1 建物16	
耕作痕 1	90-3(A) 畝溝状遺構 2		建物25	90-1 建物17	
耕作痕 2	90-3(A) 畝溝状遺構 4		建物26	90-1 建物18	
耕作痕 3	90-3(A) 畝溝状遺構 5		建物27	90-1 建物19	
耕作痕 4	90-3(A) 畝溝状遺構 6		建物28	90-1 建物20	
耕作痕 5	90-1 ー		建物29	90-1 建物21	
耕作痕 6	90-1 ー		建物30	90-1 建物22	
耕作痕 7	90-1 ー		建物31	90-1 建物23	
耕作痕 8	89-2 ー		建物32	90-1 建物24	
耕作痕 9	89-2 ー		建物33	90-1 建物25	
耕作痕10	90-1 ー		建物34	90-1 建物26	
耕作痕11	90-1 ー		(建物35)	90-1 建物28(落ち込み 6)	
耕作痕12	90-3(A) 畝溝状遺構 1		建物36	92-7 掘立柱建物 1	
ビット 1	90-3(B) ビット18		ビット列 1	86-1 ー	
ビット 2	90-3(A) ビット192		ビット列 2	86-1 ー	
ビット 3	90-1 ビット1976		ビット列 3	86-1 ー	
ビット 4	90-1 ビット1889		ビット列 4	90-2(H 2) ー	
ビット 5	90-1 ビット3089		ビット列 5	90-2(H 2) ー	
ビット 6	90-1 ビット2124		ビット列 6	90-3(A) 柵 1	
ビット 7	90-1 ビット2508		ビット列 7	90-3(A) 柵 2	
ビット 8	90-1 ビット2781	耳環ビット	ビット列 8	89-1 ー	
ビット 9	90-1 建物21に切られたビット	所在不明	ビット列 9	89-1 柵列 1	
ビット10	92-7 ビット239		ビット列10	89-1 柵列 3	
ビット11	92-7 ビット94		ビット列11	89-1 柵列 2	
ビット13	89-2 ビット42	玉出土	ビット列12	89-2 ビット列 1	
ビット14	90-1 ビット2976		ビット列13	89-2 ビット列 3	
ビット15	90-1 ビット3086		ビット列14	89-2 ビット列 4	
ビット19	90-1 ビット3084	玉出土	ビット列15	93-2(C) ビット63~72	
			ビット列16	93-2(C) ビット80~104	
			ビット列17	93-1 ビット列 1	
			ビット列18	93-1 ビット列 2	

e. 農耕祭祀に関する問題

古代～中世における農耕祭祀の痕跡については、土器埋納遺構と坪境水路の状況が注目される。

土器埋納遺構に関しては、江浦 洋（1992b・1996）が体系的に整理し、その性格についても論じている。今回、各面の遺構配置に関して最終的な整理が完了したので、改めて土器埋納遺構の分布を各面ごとに再検討した。まず、第9a面に関連するものは、地割に沿った部分とともに、非水田域の可能性が高い微高地と水田域の境界付近などにも分布していることが判明した。続く第8a面に関連するものは、当地区の広い範囲から検出されているが、畦畔の近くなどに位置するものも目立つ。一方、第7面・第6b面に関連するものは、十六ノ坪や十八ノ坪に集中する傾向を示す。その後、土器埋納遺構はほとんどみられなくなり、わずかに第2b面で1基検出されるにとどまる。このように、当初は地割や水田域の境界などを意識して土器が埋納されたが、中世になるとそうした決まりが薄れ、分布にも偏りが生じるようになった。そして、14世紀以降、こうした祭祀形態は衰退したようである。

もうひとつの祭祀の痕跡として、第7面水路12と第6a面水路10から出土した遺物があげられる。ここで注目されるのは、牛馬を中心とする獣骨がまとまって出土していることである。これについては、雨乞いなどに伴う動物犠牲に関連するものと推定されている（松井1995a・b、久保2000）。第7面の場合、水路北部においてはウシの骨にサギなどの骨が伴うのに対し、南部で出土したのはウマの骨であるという違いがある。なお、第6a面水路10南部から出土したものはウマの骨である。これらの骨の中には解体痕が認められるものもあり、水路の周囲でウシやウマが解体された可能性がある。また、水路12の底面には、ウシの頭骨や下顎骨が埋納された土坑が検出された。注目されるのは、土坑5に埋納された頭骨には下顎骨や角が伴っておらず、土坑6に埋納されたものも下顎骨の一部であったことである。こうした状況について松井 章は、何らかの原因で死んだウシの頭骨を祭祀のために準備していたもので、祭祀に使用した際には既に白骨化していた、と推定している。第8a面から出土したウマの下顎骨も、既に白骨化していたものを大畦畔付近に置いた可能性が高い。

その他、祭祀に関連すると考えられる遺物としては、第8a面の大畦畔に埋納されていた銅製鈴、第8a層以降各層準で出土した銭貨、第5a面坪境交差点付近から出土した男根状木製品などがある。ただし、こうした事例は水田でおこなわれた祭祀の一部を示すにすぎない。また、祭祀の性格にも様々な種類があると予想される。祭祀の実態を明らかにするのは簡単なことではないため、漠然としたイメージで理解してしまうのではなく、現場に残された痕跡を詳細に検討することが重要である。

註

- 2) 動物遺存体の同定は松井 章氏（奈良文化財研究所）による。なお、第7面の動物遺存体については、既に松井（1995b）によって考察がなされている。
- 3) 岩石肉眼鑑定はバリノ・サーヴェイ株式会社による。
- 4) プラント・オパール分析は外山秀一氏による。
- 5) 概報作成段階に不明とされた墨書の文字に関しては、清水みき氏（向日市教育委員会）に解説していただいた。なお、図IV-58：(4)に関しては清水氏の他、平川 南氏（国立歴史民俗博物館）にも御教示いただいた。

世初期にクレバースプレー堆積地形が発達すると推定されている。当地区との層序対比を試みると、クレバースプレー堆積物と考えられた7層が第3 b層、5層が第2 b層に対比される可能性がある。また、当地区の北方向に位置する第11次調査地点でクレバースプレー堆積物とされた地層は、レベル・当地区における砂礫の分布などから、6層が第6 b層、10層が第7 b層に対比されると思われる。調査区的位置関係からみて、前者は島島造成の契機となった破堤堆積物に連続するもので、後者は水路15北端から溢れて凹地を形成した流れに関わる堆積物と考えられる。

d. 耕作技術の問題

中世～近世の耕作技術を考えるための資料としては、牛馬耕や畠作に関連するものがある。

牛馬耕関連資料としては、鉄製馬鋤の歯や犁先がある。馬鋤の歯は第8 a層から第3 - 3 a～4 a層より出土しており、犁先は第6 a層・第2 - 2 a層から出土した。馬鋤の歯については金属学的分析を実施し、素材や製作方法について検討している（第V章5）。また、水田作土下面について馬鋤の歯の痕跡は第7 - 3 a層下面や第6 b面^面で検出された。本書では犁溝についてはふれていないが、第8 a層以上の各層準に関わるものが検出されている。

また、今回の調査では田面と同レベルで平行した小溝群が検出されたものもあり、畠の畝と解釈した。この遺構は第3 - 2 a面^面で顕著に認められ、第2 - 1 a面^面や第4 a面^面・第6 a面^面の一部でも検出されている。大半は島島の芯となって残存した砂の下面でバックされた状態で検出されたが、中には畦畔配置から分布範囲を推定できる場合もある。

近世農書の記述を参考にすると、近世以降には二毛作とともに、水田と畠を定期的に繰り返す田畠輪換がおこなわれていたことがわかる。その効果には畠作に対するものの他、水田雑草の繁茂の抑制、乾土効果・地温上昇効果による地力の向上といった、稲の増収につながるものも含まれている（宮本1994、若月1997など）。また河野通明（1994）は、長床犁による「畦立耕」^{うね}が関西では近世からおこなわれていたと推定している。現代でも冬季に水田を畝立てするように耕す光景が若干みられるが、畠作を伴わないことが多いものの、稲作に対する効果という点ではその耕作方法と共通した発想にもとづくものである。田畠輪換農法は排水の徹底と豊富な用水の確保、施肥を前提としており、こうした条件は近世には整っていたと考えられる。したがって、第2 - 1 a面^面の遺構はこうした考え方で説明できるかもしれないが、中世の遺構をこうしたイメージで理解するのは危険である。それでは、14世紀～16世紀の面から検出されたものはどのように理解すればよいのであろうか。奈良盆地では中世後半における耕地拡大に伴い、灌漑水の不足が生じて水田を一時的に畠として利用することがおこなわれたと指摘されている（山川1995）。また、磯貝富士男（2002）は文献史料を検討し、鎌倉末～南北朝期に稲凶作に伴う臨時的救荒の水田裏作が拡大していったことを論じている。ただし、磯貝が気候変化を検討する際に使用した地質学のデータは、現在の学問水準からの批判的検討が必要である。今後はこうした研究を参考にして検討を進める必要があるが、その場合は一般論によって解釈するのではなく、当遺跡の立地や水文・土壌条件の特徴をふまえて具体的な議論をおこなわなければならない。そのためには、遺構の形状だけではなく、堆積環境や土壌の構造も視野に入れた調査が必要であるが、問題解明のための調査技術は未だ整備されているとはいえない。土壌の成分分析や微細形態の検討など、調査技術の向上が望まれる。

から東西に水路が分岐する状況からみて、当地区周辺における基幹水路であったと思われる。この水路は第6 a面の水路10に踏襲される。また、第5 a面では四・九ノ坪間は畦畔となっているが、五・八ノ坪間坪境では水路7となっており、四・五・八・九ノ坪交差点から東西に水路がのびる状況も認められる。こうしたあり方からみて、第5 a面段階には前段階同様、当地区東部の南北方向の坪境沿いに水が集められたと思われるものの、水利系統が変化した可能性がある。第4 a面では四・五ノ坪間、八・九ノ坪間、五・六ノ坪間で東西方向の水路が検出されているが、南北方向の水路は検出されていない。続く第3 - 2 a面では、水路は検出されていないが、四・五・八・九ノ坪交差点では水口が検出され、南から導かれた水が八ノ坪と九ノ坪に送られるようになっている。第5 a面～第3 - 2 a面においては、前段階にみられた基幹水路がなく、大局的には南から北へ、各坪に順番に水を送っていたものと考えられる。坪境に設けられた短い水路や、坪境畦畔に沿う細長い水田区画も、こうした水回りと関連すると思われる。

第2 - 2 a面の水利については、当地区西側の南北方向の坪境が現代のコンクリート水路により破壊されていたこともあり、不明な点が多い。続く第2 - 1 a面では、当地区東側の南北方向の坪境を貫く水路1が検出されたが、『福萬寺村惣繪圖』を参考にすると、西側の南北方向の坪境にも水路があった可能性が高い。このように、この面では基幹水路を中心とする水路網が整備されており、基本的に南側から導水した水を東西方向に送りつつ、各坪の灌漑をおこなうという形態をとっていたと考えられる。

c. 地形形成と土地利用

当地区における土地利用のあり方は、地形形成過程と密接に関わっていた。まず第9 a面では、土器埋納遺構の分布と微地形からみて、第10 b層の堆積によって形成された微高地は非水田域であったと考えられ、7世紀代には居住域として利用された可能性もある。この微高地は第8 a面にも残存し、その周辺が畠として利用されていたが、その他の低い部分は水田となっていた。

第7面では、島畠の原初形態と推定した高まりが造成される。遺存状況が悪いため不確定要素もあるが、水田域内がやや高くなっていた部分において、水回りをよくするために田面の削平がおこなわれ、その結果生じた土砂を畦畔部分にかき寄せて造成されたと推定される。島畠はその後、破堤堆積物や氾濫堆積物の供給に対応して造成・拡張されていく。第6 b面のものは当地区西側に供給された破堤堆積物の分布範囲に対応して造成された可能性が高い。第6 a面では島畠が減少するが、第4 a面になると再び増加する。この面の島畠の分布は第6 b面と類似しており、第6 b面によって形成された微地形がこの面まで影響を与えていたと思われる。また第3面の島畠は、第3 b層の堆積によって形成された微高地に対応して、当地区北西部と南東部を中心に造成されたことが明らかである。さらに第2 - 2 a面では、それまで島畠が少なかった八ノ坪にも多く造成されているが、これは第2 b層が当地区中央部に厚く堆積したことに起因している。なお、第3 b層の堆積により原型が形成された微高地Aは中世末以降畠として利用されてきたが、その状況は当地区の西側周辺において現在でも確認できる。当地区の調査によって、現景観の形成過程が明らかにできた点は重要な成果といえる。

なお、当地区と第二寝屋川を挟んで北側にあたる場所では、(財)東大阪市文化財協会によって池島遺跡第11・12次調査がおこなわれている(松田1994 b・1995、調査地点は図V - 2 - 4参照)。この調査では玉串川起源のクレバスプレー堆積地形の発達時期が検討されており、当地区の調査成果を検証するための重要なデータといえる。このうち、当地区の北西方向に位置する第12次調査地点では、中世末～近

小結 第1 b面から第9 b面の調査では、古代から近世以降の耕作地の実態を明らかにすることができた。ここでは当地区における条里型水田面の成果をまとめておきたい。

a. 条里型地割の変遷

第Ⅱ章で述べたように、当遺跡周辺には近年まで条里型地割が良好に残存しており、その起源と変遷過程を明らかにすることが調査課題のひとつであった。当初はそれぞれの調査区における最古の条里面を明らかにし、その時期に関する検討が進められた。その後、層序の対応関係の検討が進むにつれて、表層条里型地割の初現が第8 a面（10世紀前半～11世紀前半）にあることが認識され、「最古条里面」と呼ばれるようになった。ただし、その下層からは飛鳥～奈良時代の遺構・遺物も確認されており、その時期の土地利用形態の究明が課題となっていた。そうした中で、第9 a面水路35が検出されることによって、さらに古い正方位地割の存在が明らかになり、土器埋納遺構の分布との関係から、それが条里型地割であった可能性も指摘されるに至った。この面では南北方向の地割しか明らかになっていないが、表層地割の坪境から約20m西にずれていることは注目される。なお、土器埋納遺構には9世紀代のものが存在していない。9世紀は第9 a面と第8 a面の時期の間にあたっており、この事実と地割変更との関連を今後検討する必要がある。

第9 a面における地割の詳細については明らかではないが、等高線図を参考にすれば、正方位地割の中に南東－北西方向の微高地が存在し、そこが非水田域であった可能性が高い。また、水路35の埋没後、その堆積物を芯にして畦畔が造成され、それが第8 a面の大畦畔1に踏襲されたことも判明した。第8 a面では表層地割の坪境の位置に大畦畔や水路が作られていたが、同時に第9 a面以来の地割線も一部残存し、地割の中に変則的な部分が存在することになった。第9 a面の地割線が第8 a面にも踏襲されたのは、この部分に基幹水路と考えられる水路15が存在することと関連するかもしれない。なお、この大畦畔1・水路15は第7面には踏襲されず、坪境に沿って基幹水路（水路12）が設定された。

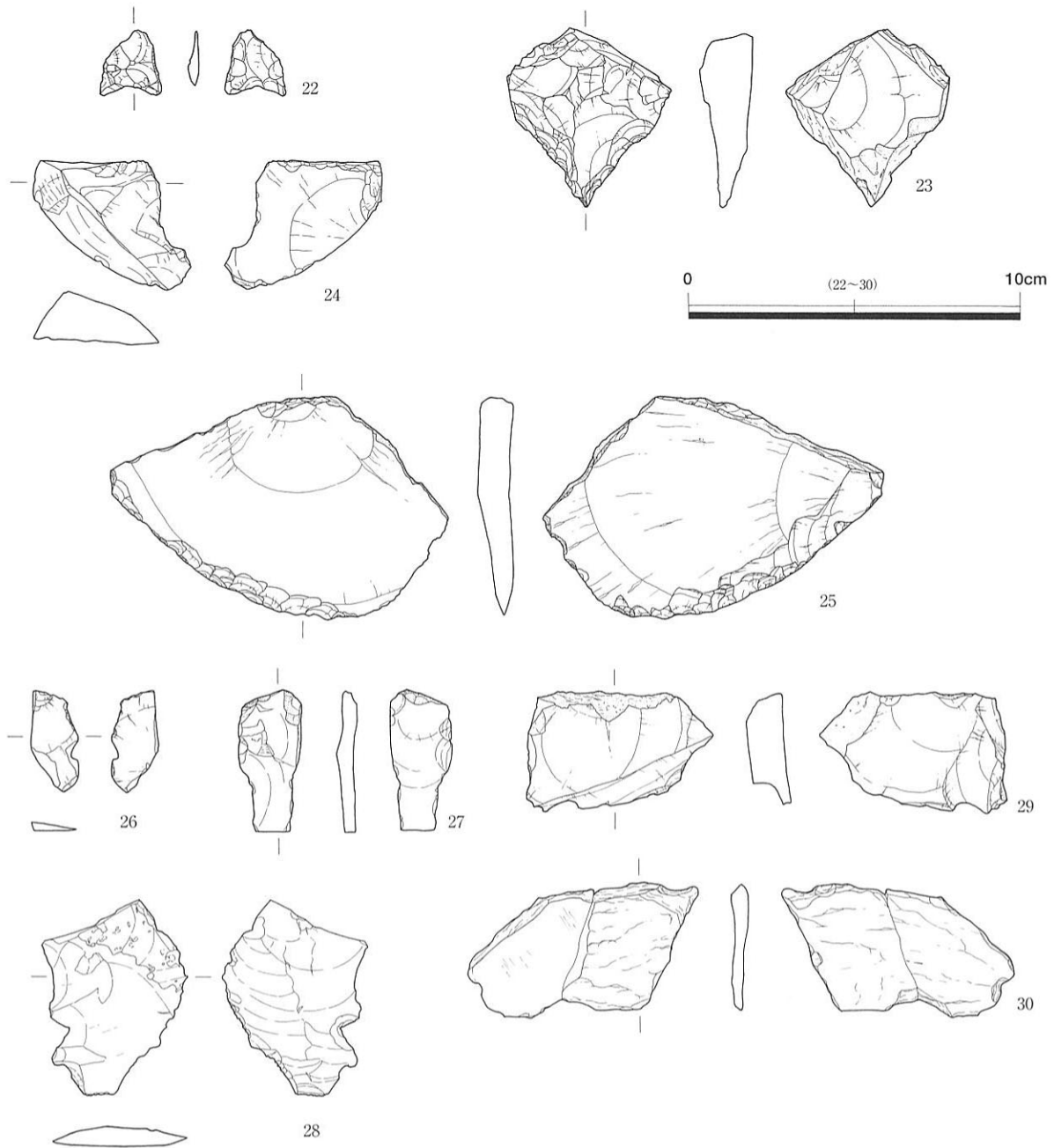
坪内の地割の仕方をみると、畦畔配置は時期によって変化するが、地割の方向にはほとんど変化がない。変化するのは四ノ坪であり、第8 a面では南北方向の地割であったものが、第6 a面以降は東西南方向となる。第7面では畦畔がわずしか検出していないため断定はできないが、こうした変化が第7面で生じた可能性がある。また、九ノ坪においては、第8 a面では畝の畝が東西方向に造成されていたが、第6 b面以降は南北方向の地割になっていた。地割の方向が何に起因して決められるかは不明である。ただし、その要因のひとつが坪内の水回りにあるとすれば、こうした変化が弥生時代後期末に形成された微高地の埋没と関連する可能性もあろう。

b. 水利系統の変化

今回の調査では、検出された水路や微地形などから、各面の水利系統を復原することができた。

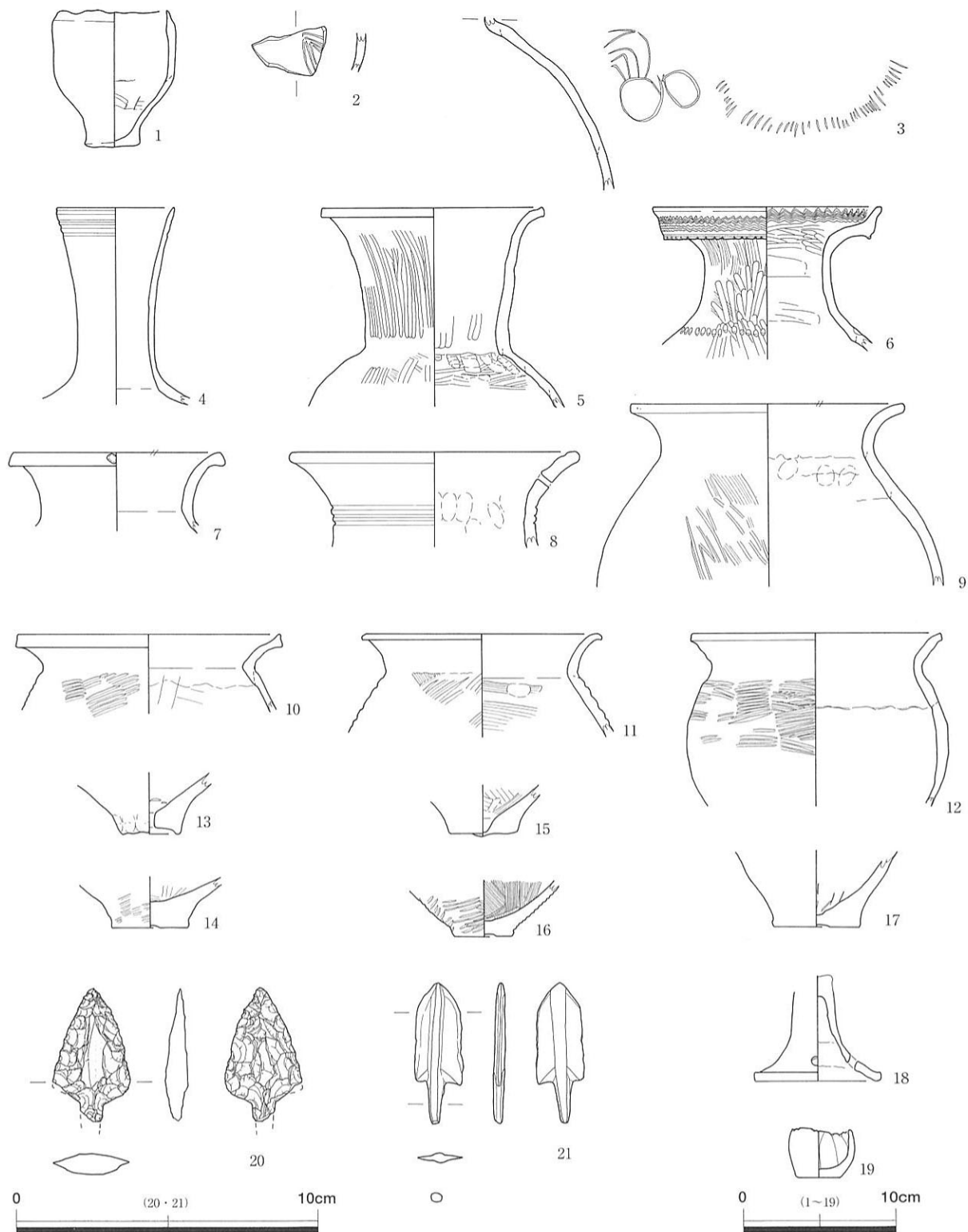
まず第9 a面段階のうち、少なくとも飛鳥時代には水路35が基幹水路のひとつであったと考えられる。また、第8 a面では畝として利用された微高地を避けて南側と西側から導水し、支線水路も配置して、水田域に水が回るように工夫されていた。これらの面では、弥生時代後期末に形成された微地形に合わせて、水利系統が整備されたものと考えられる。

第7面には当地区東部の南北方向の坪境を貫く水路12が存在したが、幅がきわめて広いことや、ここ



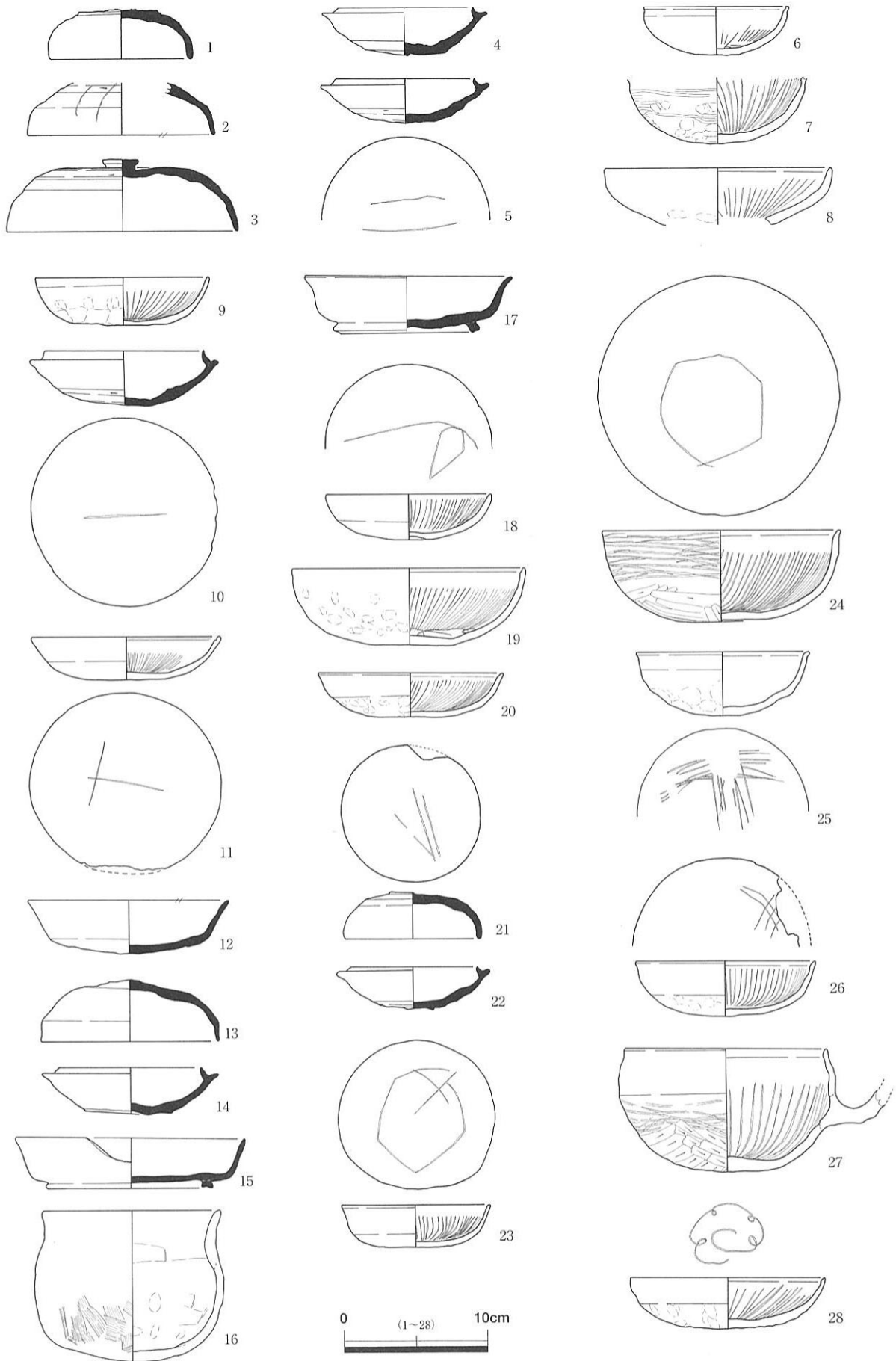
図IV-82 第9 a面以上から出土した弥生時代遺物②

図IV-81 1・2：第7面水路12, 3：第9 a層, 4・5：第8 a面以上, 6-21：第9 a層
 図IV-82 22：第6 a層, 23：第8 b層～第12-1 a層, 24：第2-1 a層, 25：第7層, 26：第2-1 a層
 27：第8 a層, 28：第2-2 a層, 29：第8 b層, 30：第2-1 a層

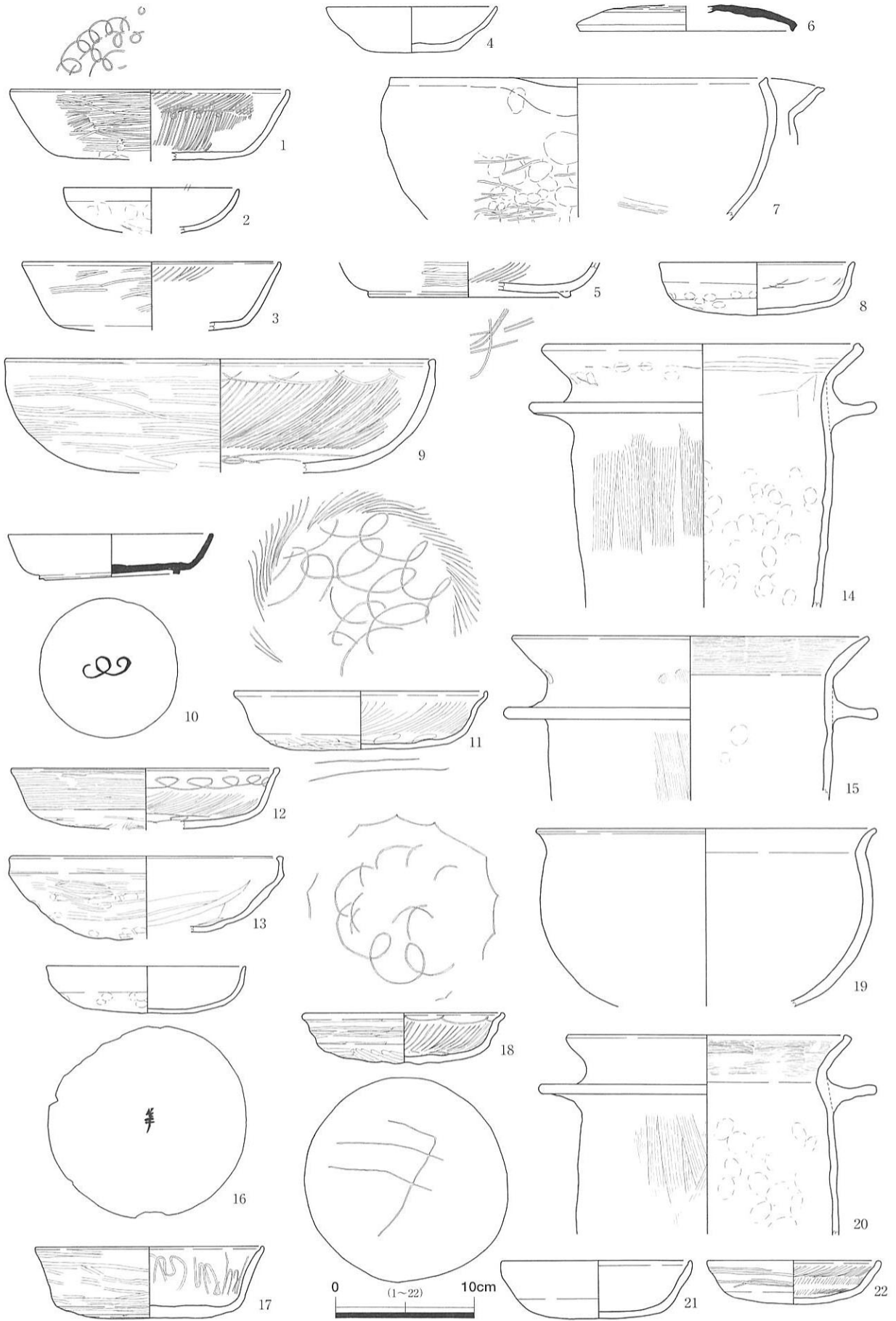


図IV-81 第9 a面以上から出土した弥生時代遺物①

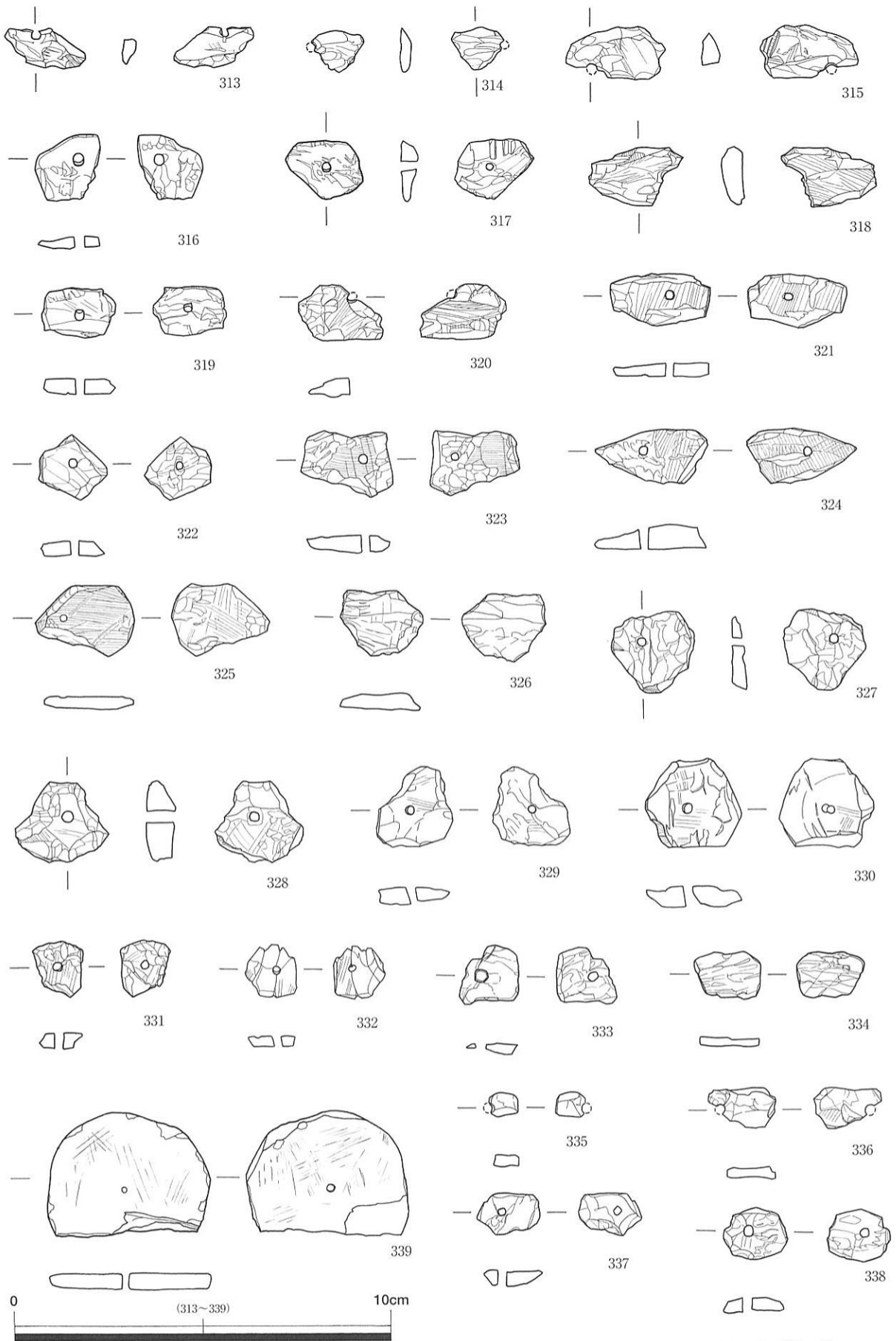
- 図IV-79 1 : ビット12, 2・3 : 同21, 4 : 同22, 5 : 同23, 6 : 同25, 7 : 同26, 8 : 土器埋納遺構65
9 : 同66, 10~14 : 同67, 15 : 同68, 16 : 同69, 17 : 同70, 18 : 同71, 19 : 同72, 20 : 同74, 21 : 同88,
22 : 同90
- 図IV-80 1~8 : 土坑8, 9 : 土器埋納遺構41, 10 : 同42, 11 : 同43, 12 : 同44, 13 : 同45, 14 : 同46
15 : 同47, 16 : 同48, 17 : 同49, 18 : 同50, 19 : 同51, 20 : 同52, 21 : 同53, 22 : 同54, 23 : 同55
24 : 同60, 25 : 同61, 26 : 同62, 27 : 同63, 28 : 同64



图IV-80 第9 b面遺構出土遺物（飛鳥時代）

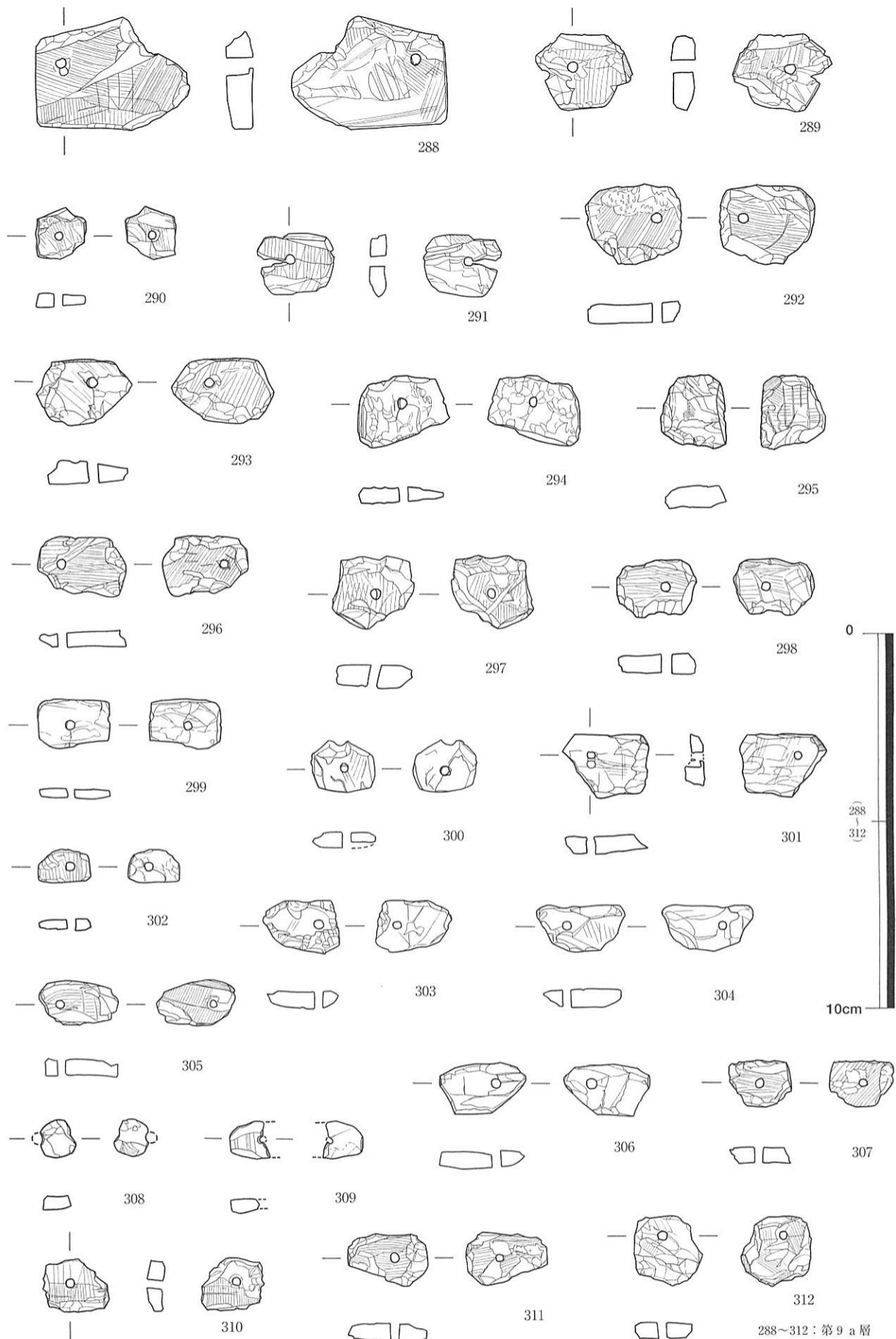


图IV-79 第9 b面遺構出土遺物 (奈良時代)

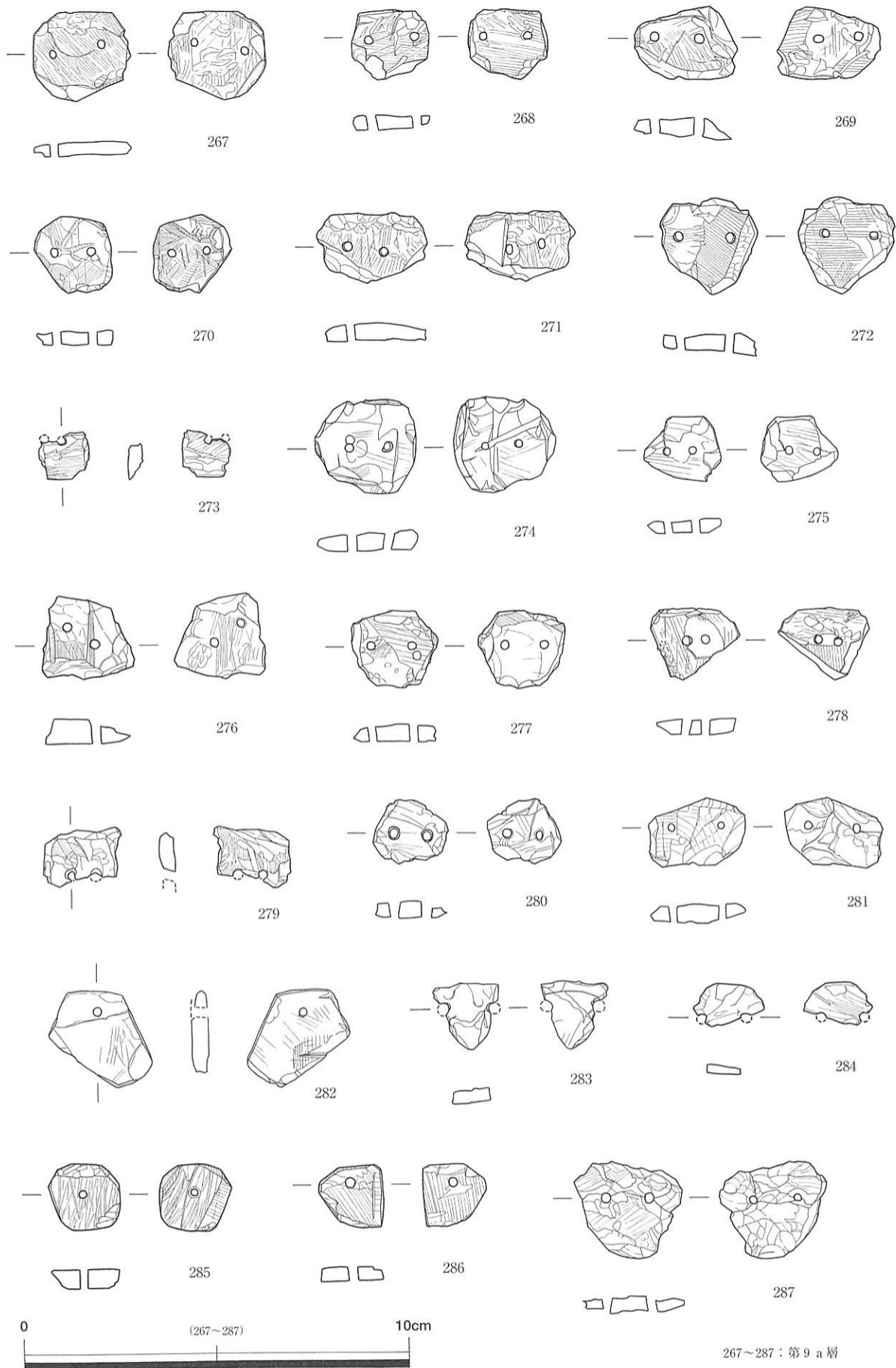


313~339：第9 a層

図IV-78 第9 a層遺構・第9 a層出土遺物⑭

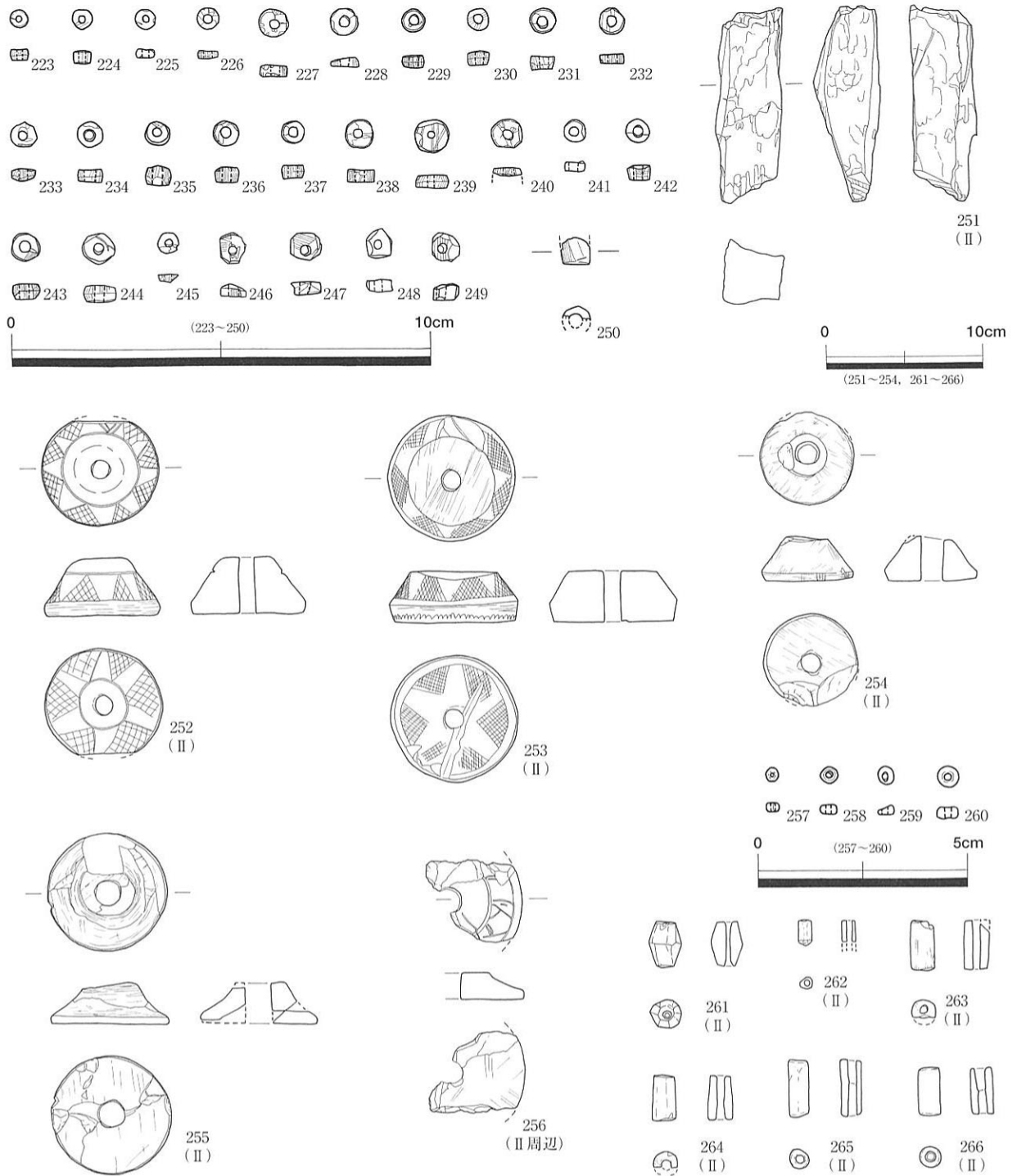


图IV-77 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物⑬



267~287: 第9 a層

图IV-76 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物⑫



図IV-75 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物① (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

223~266: 第9 a層

(267~281・283・284・287)、有孔円板(282・285・286・288~338)である。(251)は滑石の原石である。

第9 a層から出土した遺物のほとんどは古墳時代後期のものである。後述するように、この時期の遺物に関しては、本来は第10 a層に含まれていた可能性が高い。

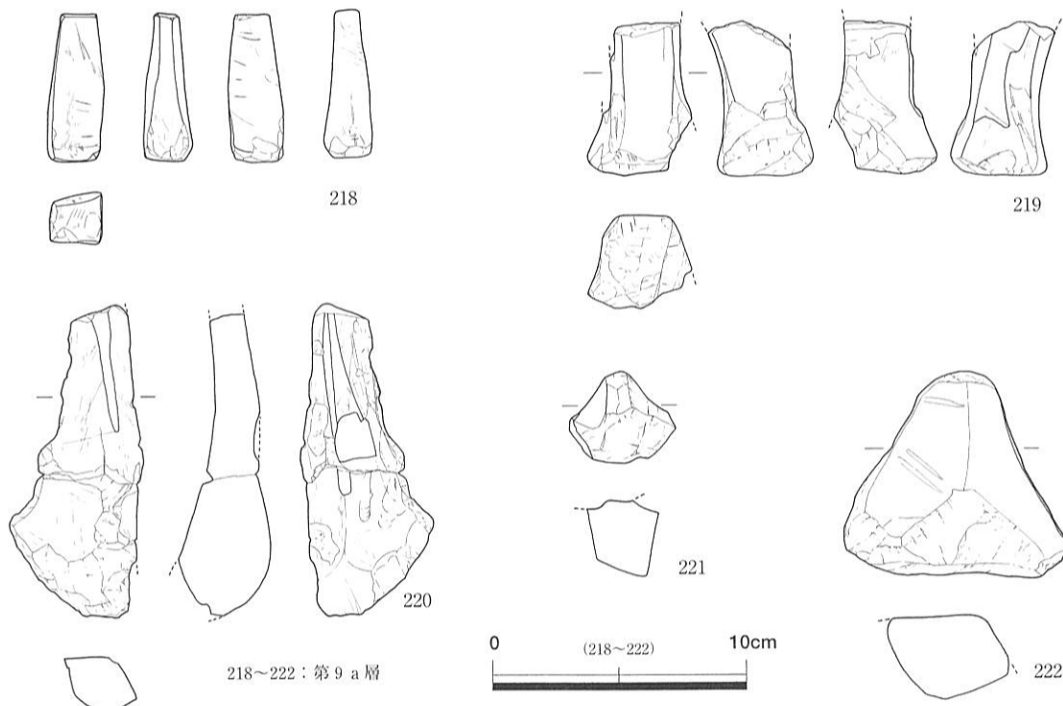
第9 a層以上から出土した弥生時代遺物 条里型水田に関連する遺構面の記述を終えるにあたって、第9 a層以上の層準から出土した弥生時代に属すると考えられる遺物をまとめておきたい(図IV-81・82)。

弥生土器は第V~VI様式のものが多い。(2)は第I様式のもの体の部片と思われ、木葉文が施されている。(3)は第V様式の壺であり、肩部に絵画文が施されている。何を表しているか不明である。

(21)は銅鏃である。有茎で、逆刺は左右非対称であり、両面に樋が通っている。弥生時代後期~古墳時代前期初頭のもものと推定されている(概要XVI, p.53)。なお、この銅鏃については非破壊の成分分析を実施した(第V章5-1)。

石製品としては、石鏃(20・22)、石錐(23)、楔形石器(24)、不定形刃器(25)、サヌカイト剥片(26~29)、石庖丁未製品(30)がある。

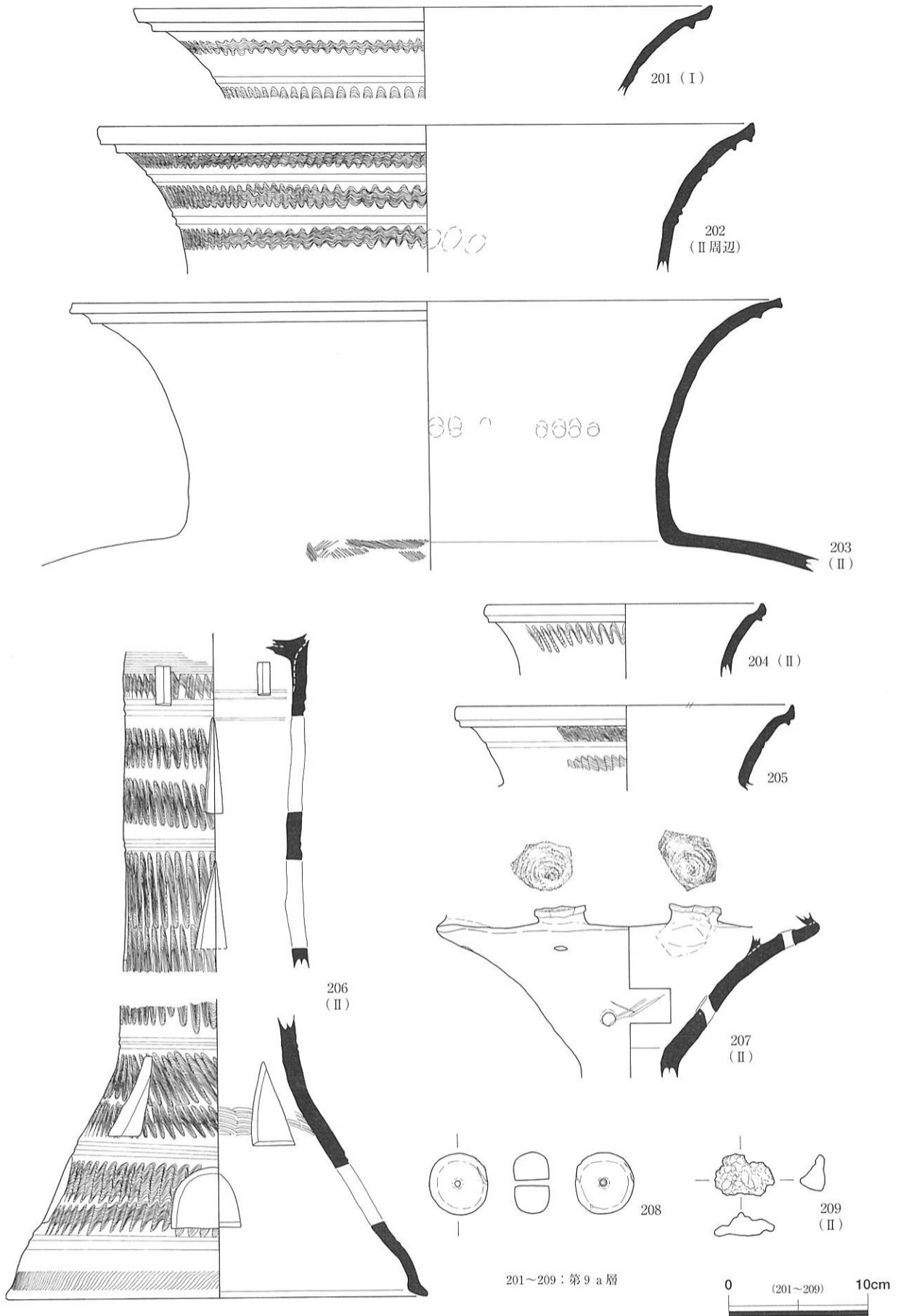
(20)はサヌカイト製の凸基有茎式石鏃で、両面に主要剥離面を残す。(22)はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃で、基部のみが残っている。(30)は未製品ながら部分的に研磨痕がある。



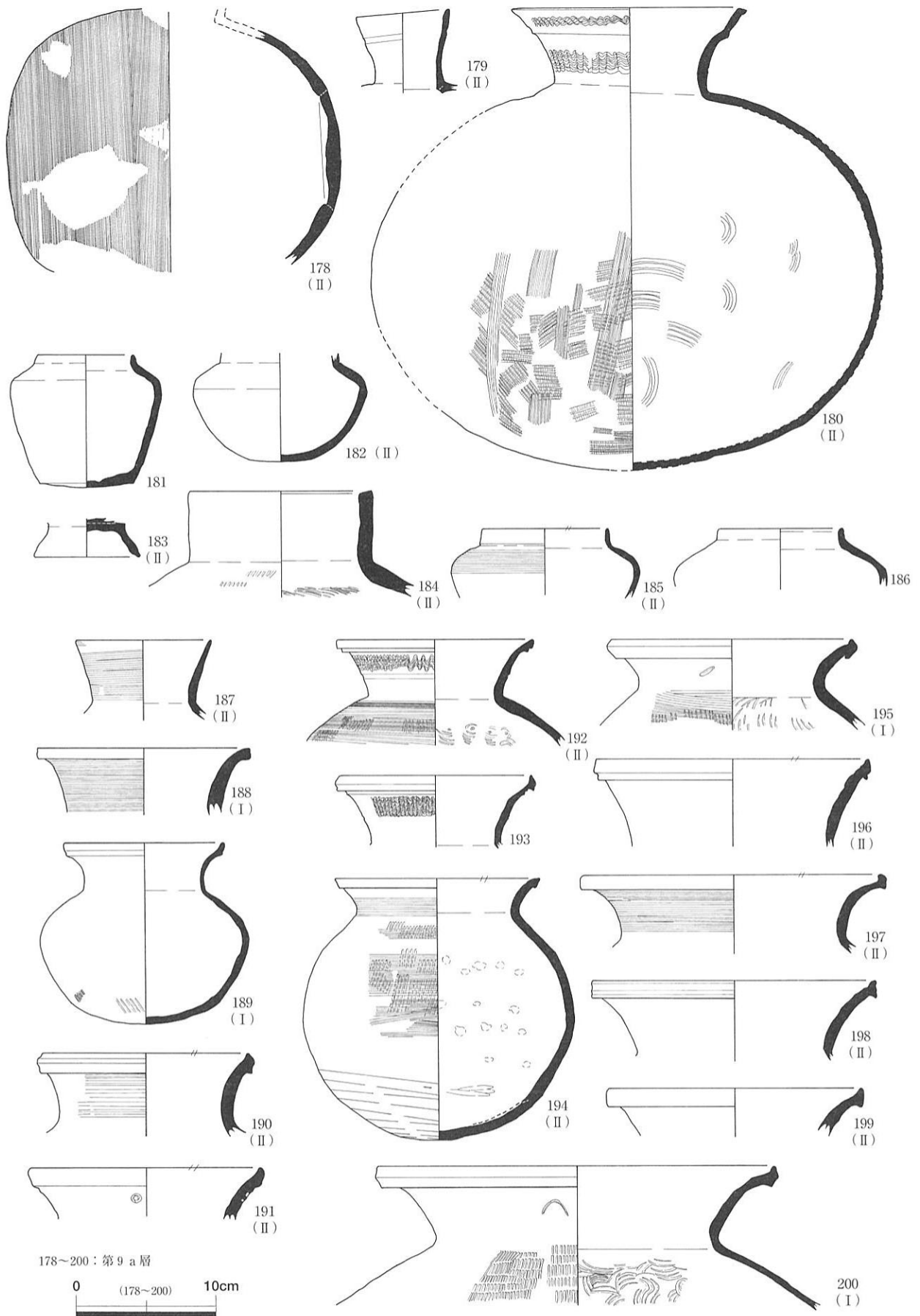
図IV-74 第9 a層遺構・第9 a層出土遺物⑩



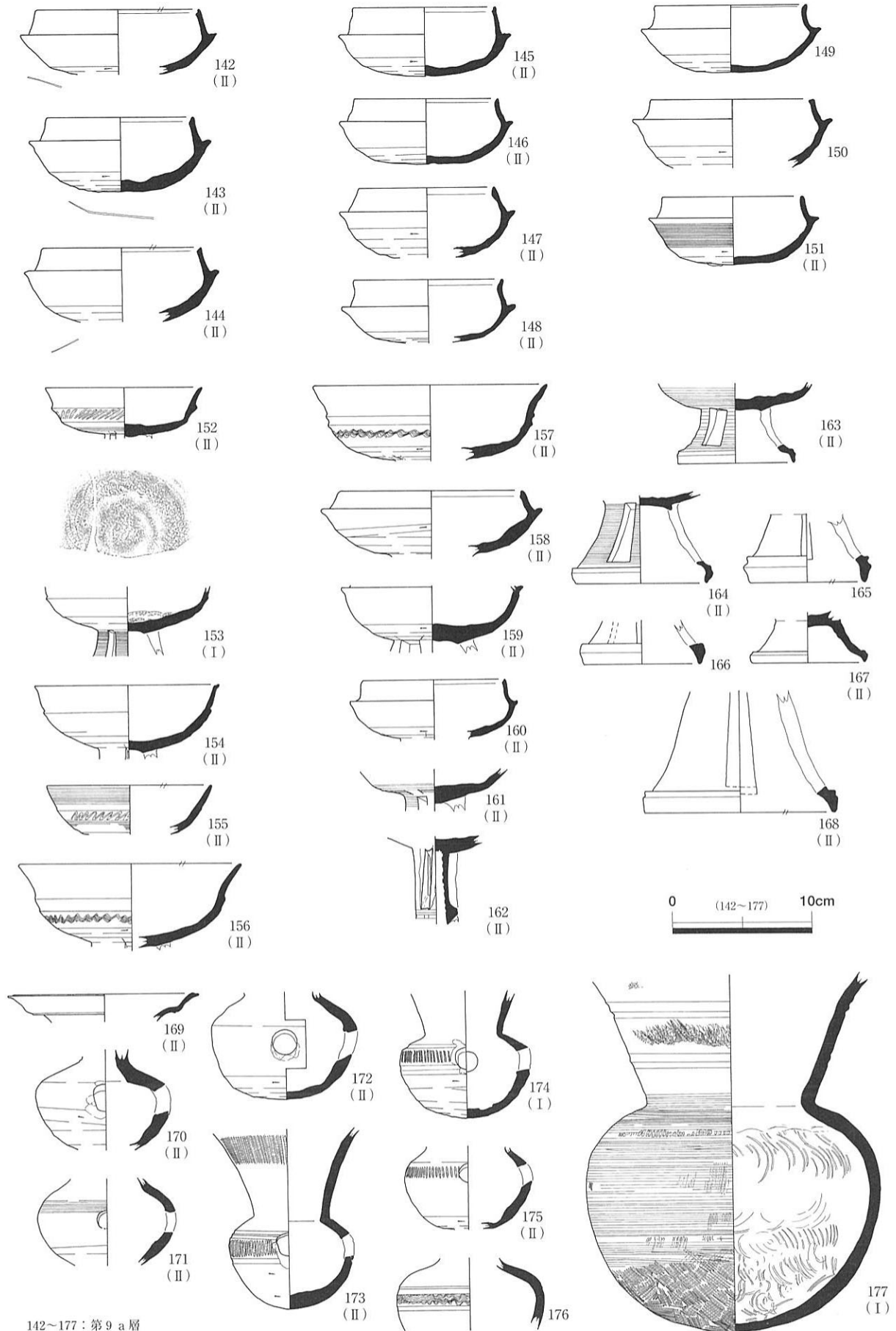
图IV-73 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物⑨



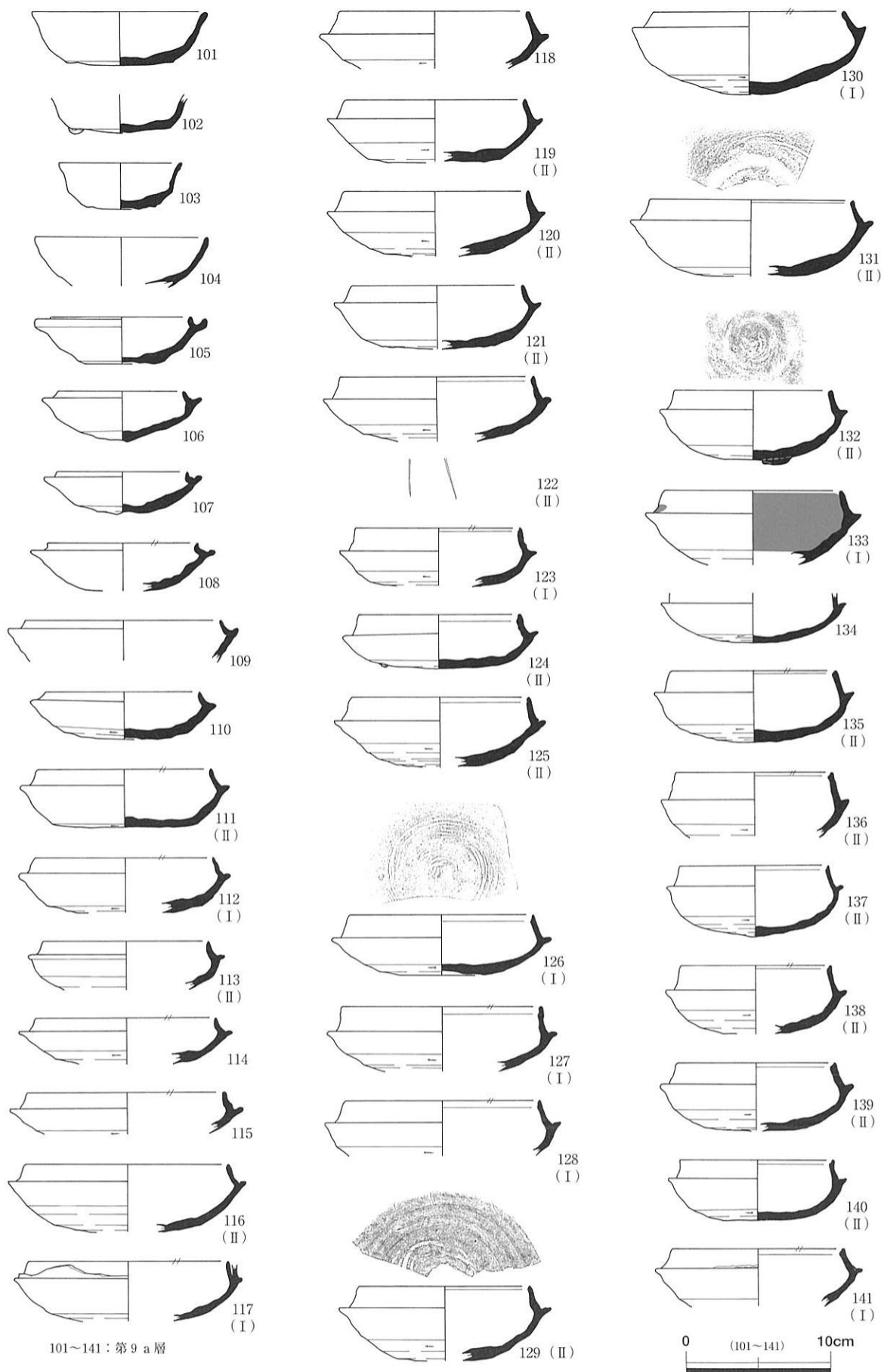
図IV-72 第9a面遺構・第9a層出土遺物⑧ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)



図IV-71 第9a面遺構・第9a層出土遺物⑦ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)



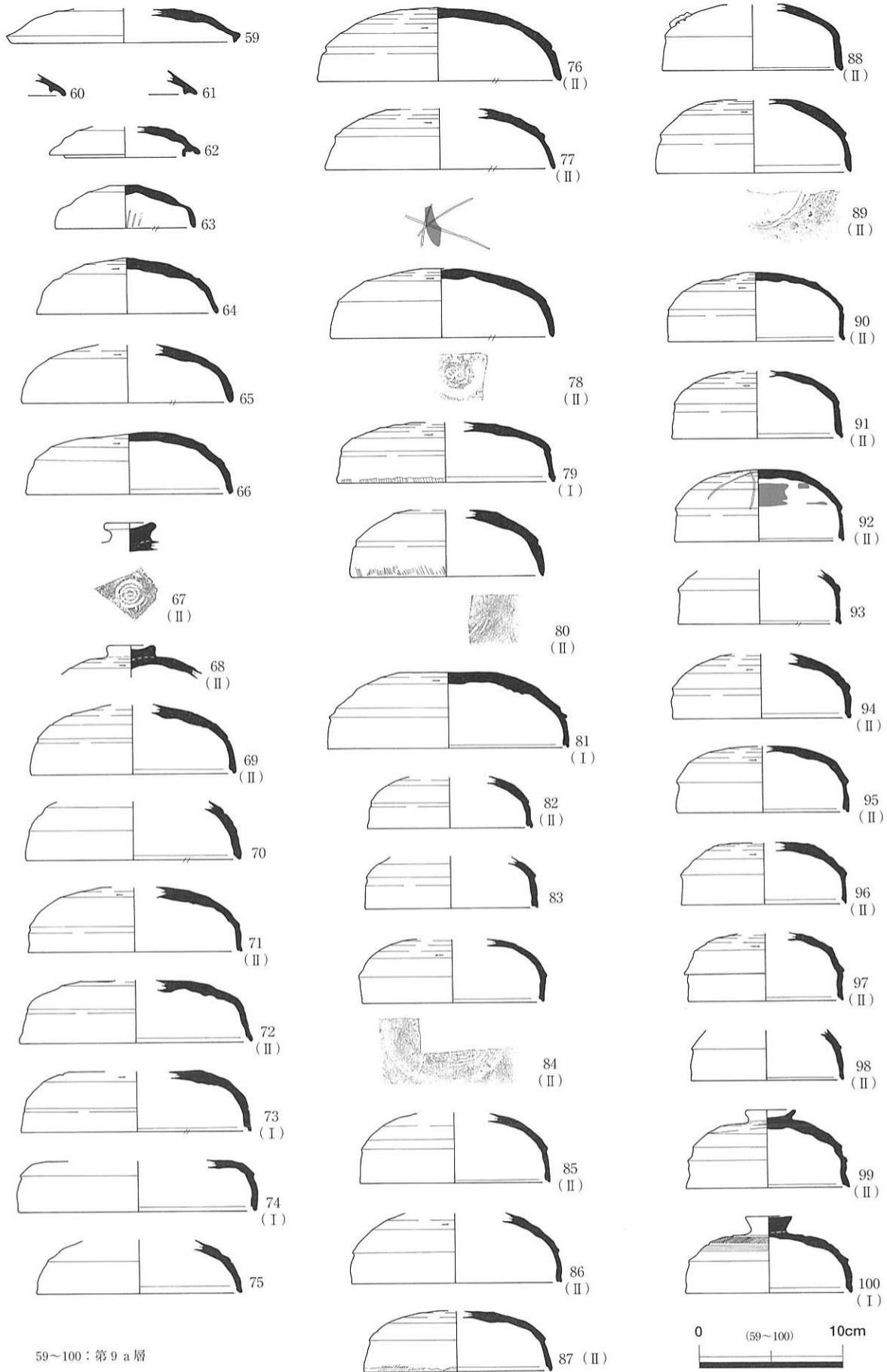
図IV-70 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物⑥ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)



101~141 : 第9 a層

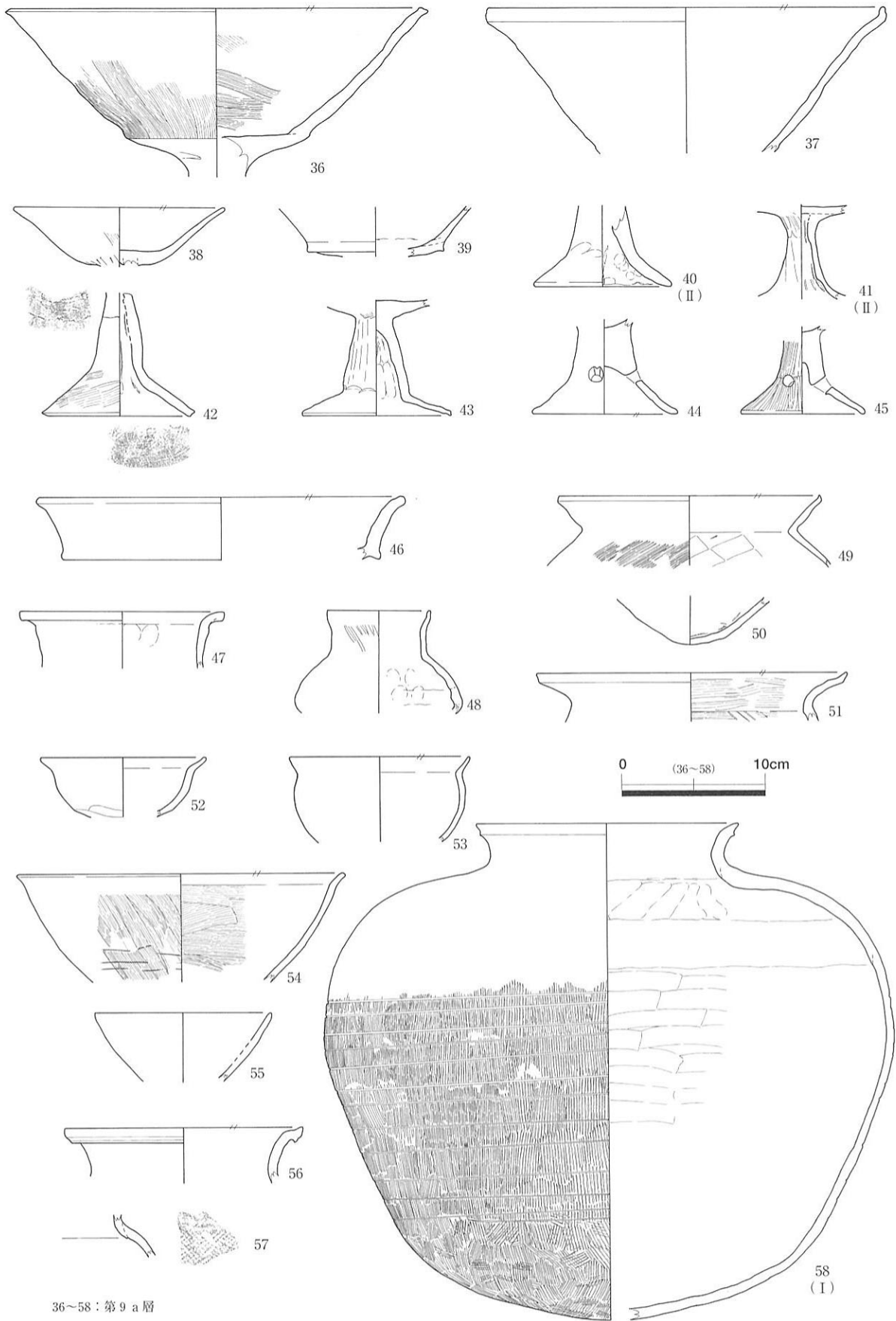
0 (101~141) 10cm

図IV-69 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物⑤ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

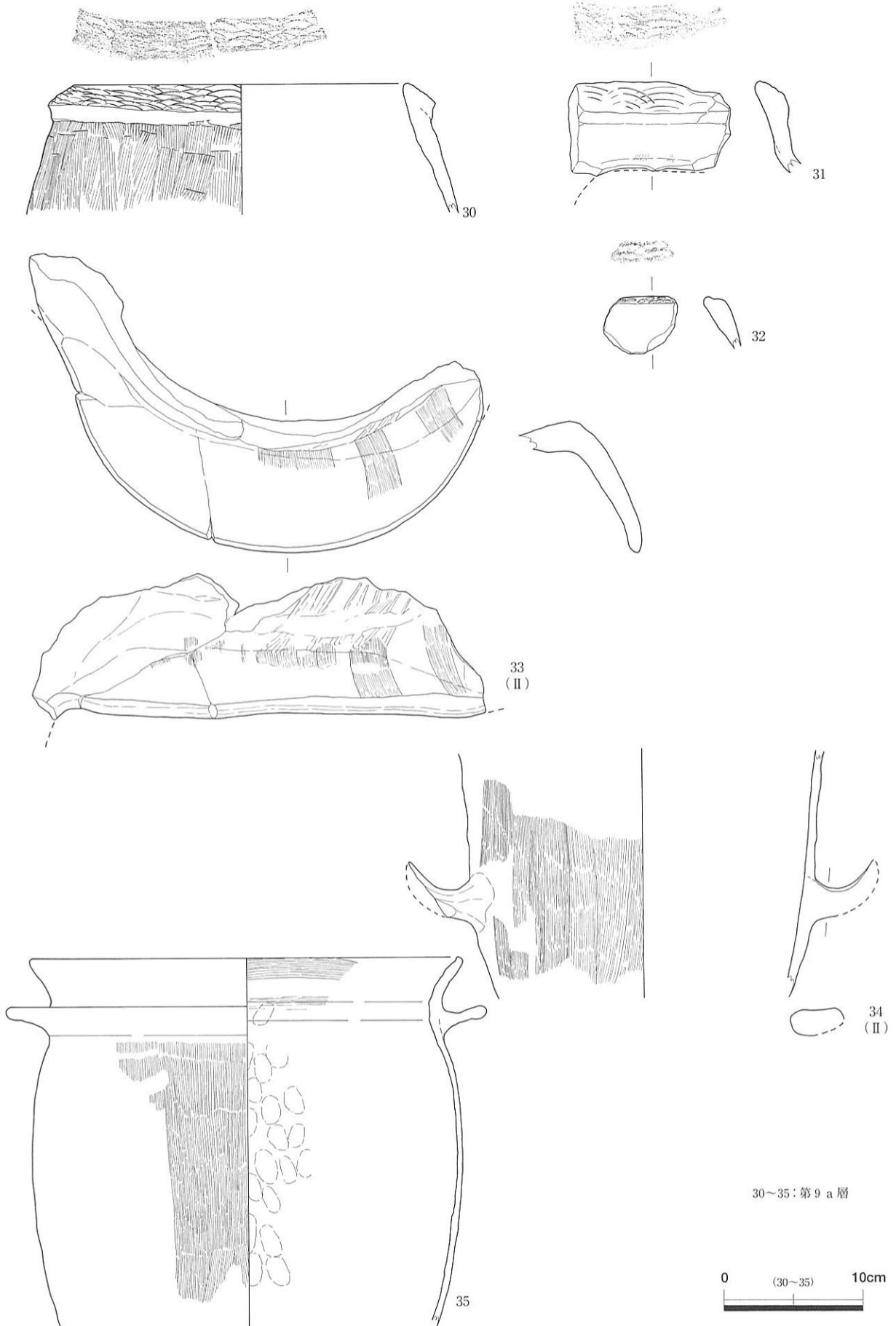


59~100: 第9 a層

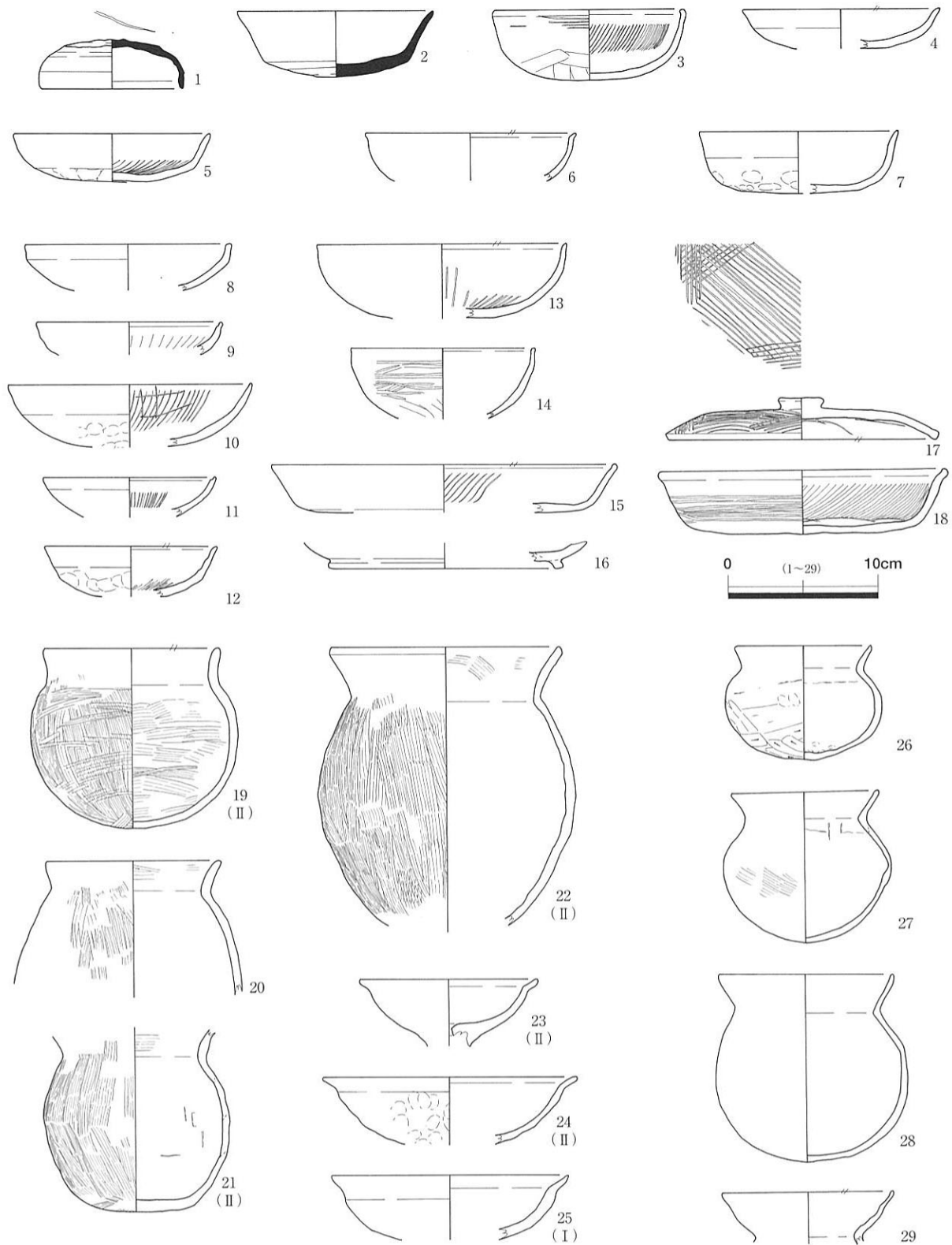
図IV-68 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物④ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)



図IV-67 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物③ (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

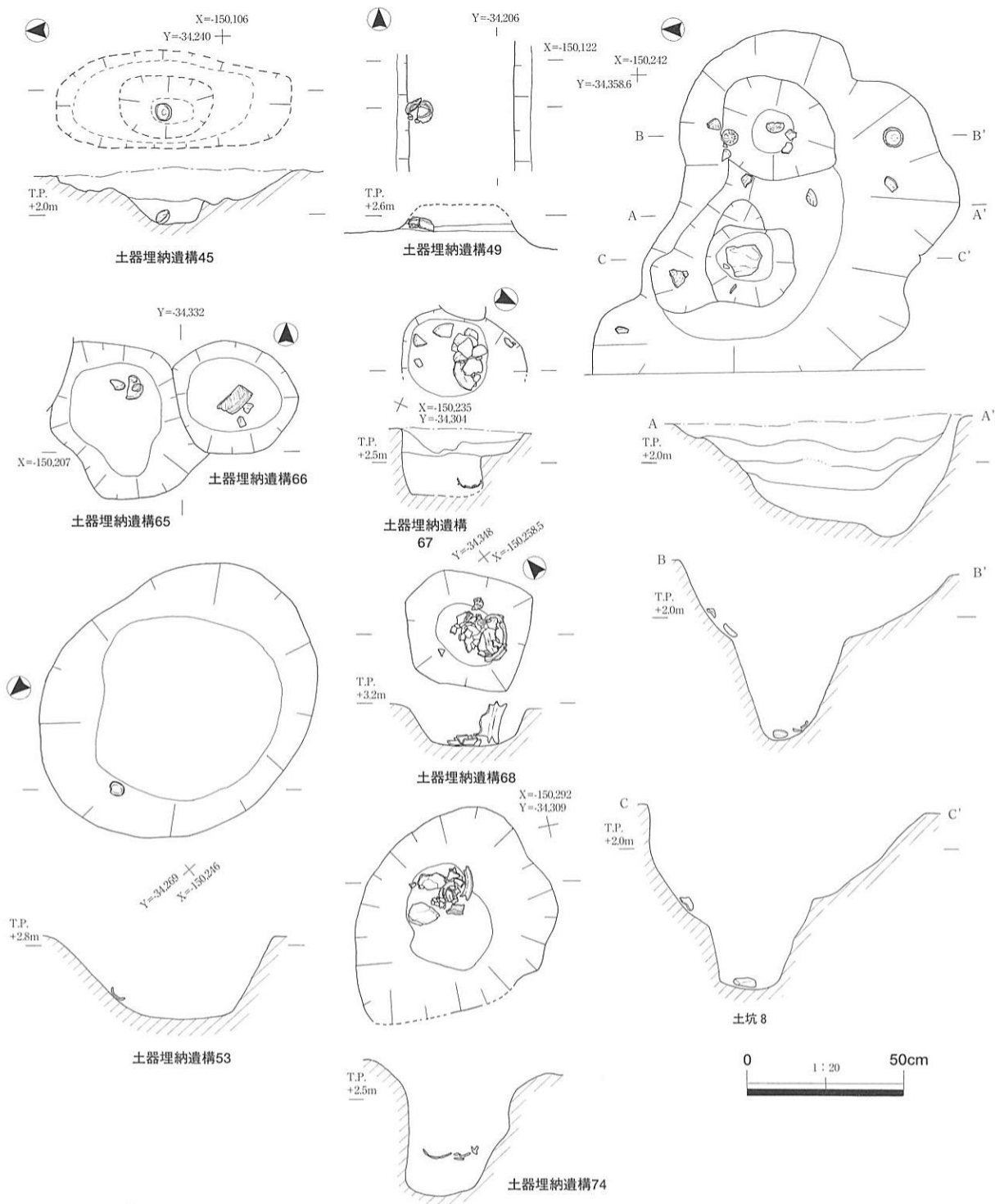


図IV-66 第9 a 面遺構・第9 a 層出土遺物② (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

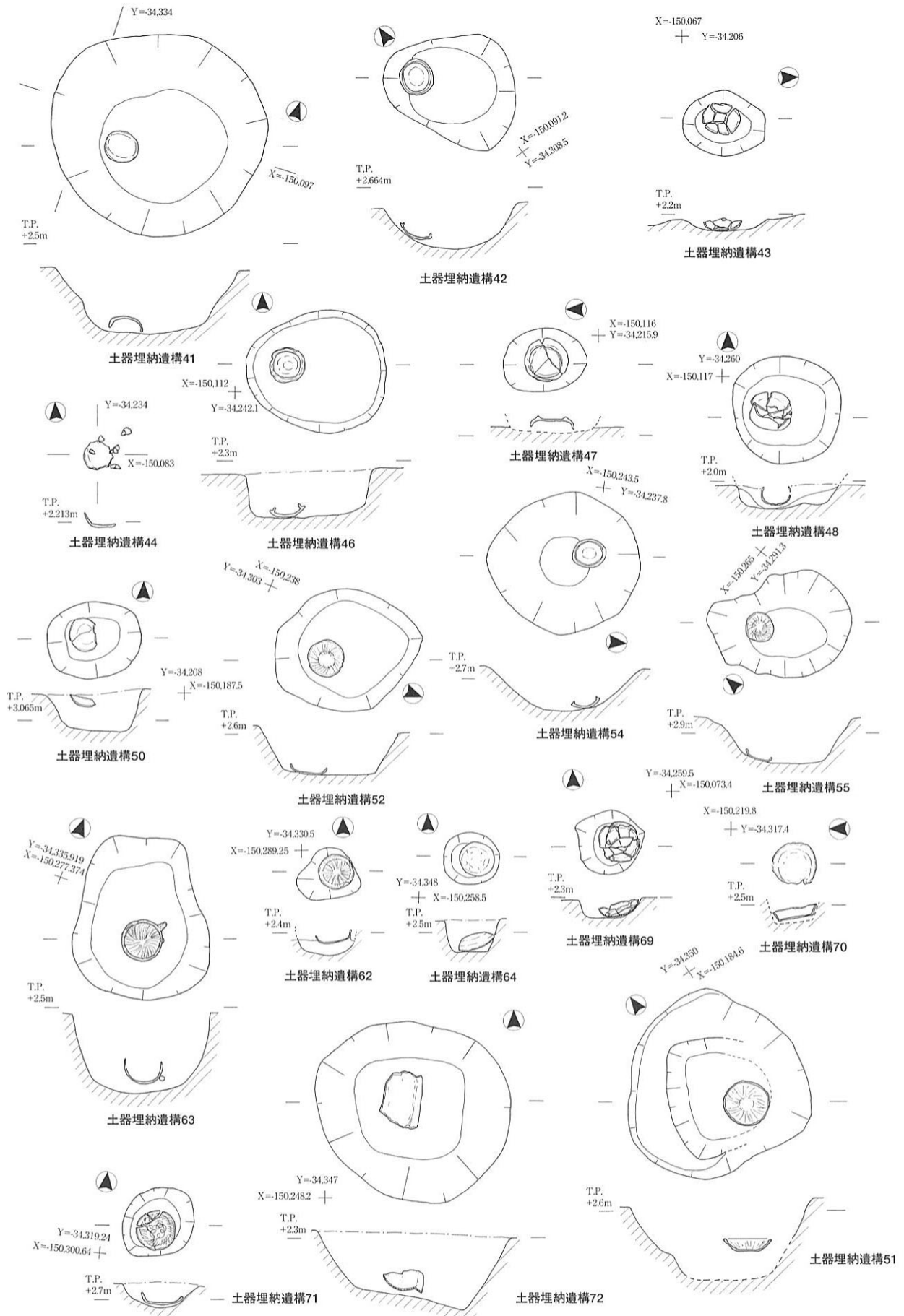


図IV-65 第9 a面遺構・第9 a層出土遺物① (ローマ数字は古墳時代居住域の番号)

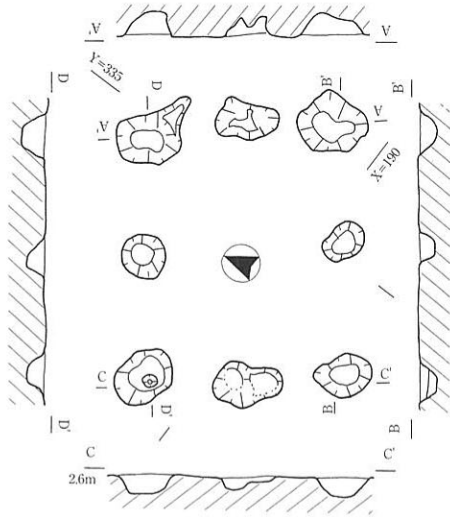
1~7:水路35, 8~29:第9 a層



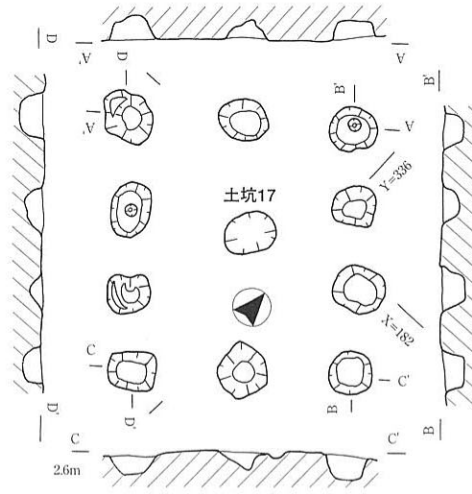
图IV-64 第9b面土器埋納遺構②·土坑



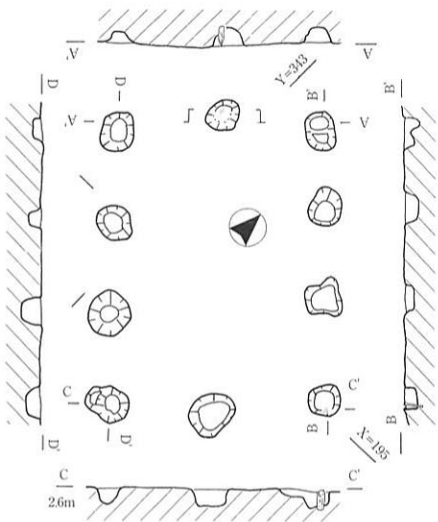
図IV-63 第9b面土器埋納遺構① (スケールは図IV-64と共通)



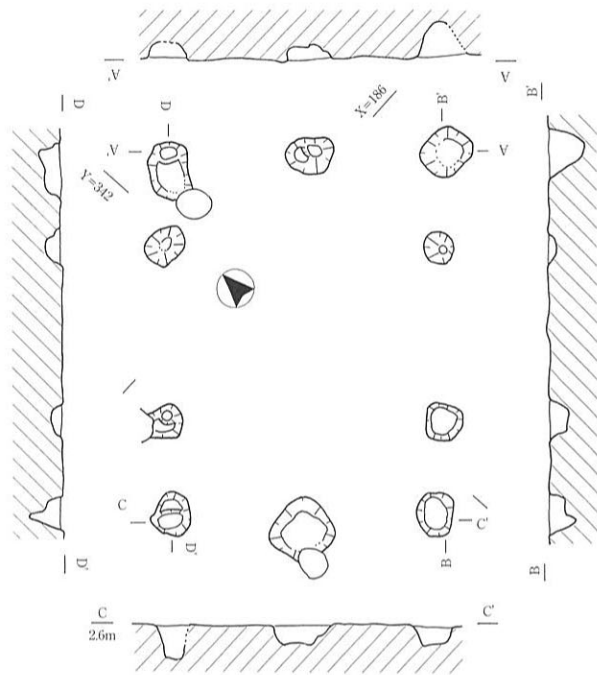
建物 27



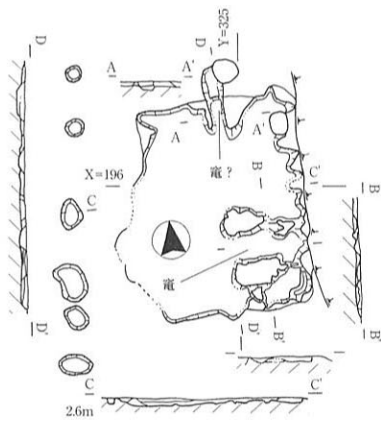
建物 25



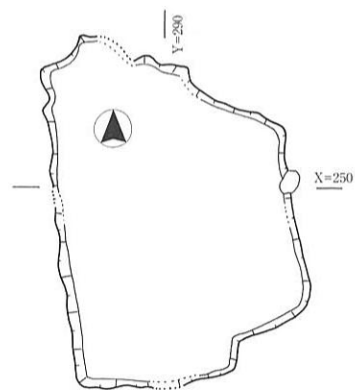
建物 28



建物 26



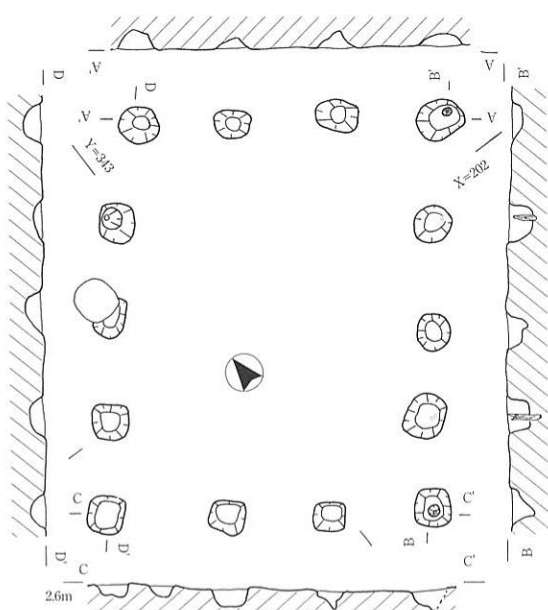
建物 30



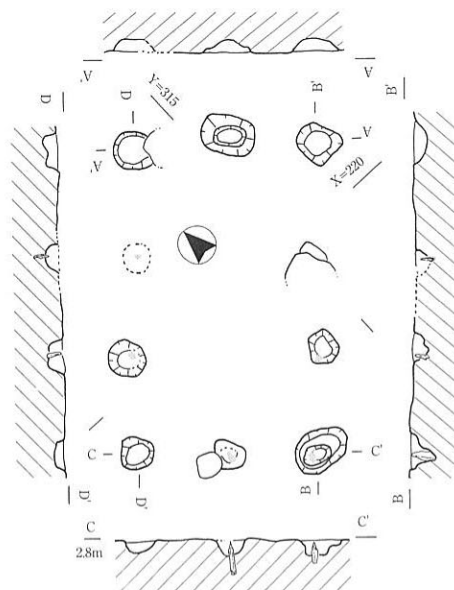
(建物 35)



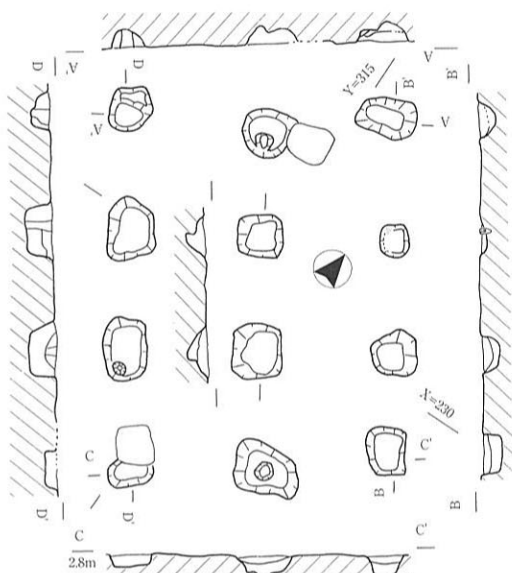
図IV-90 第9b・10b面建物⑤



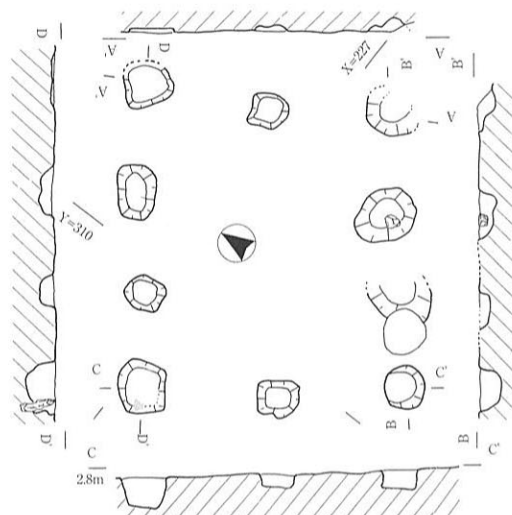
建物 29



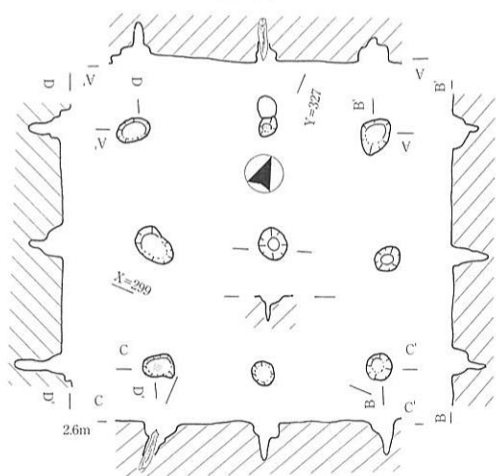
建物 31



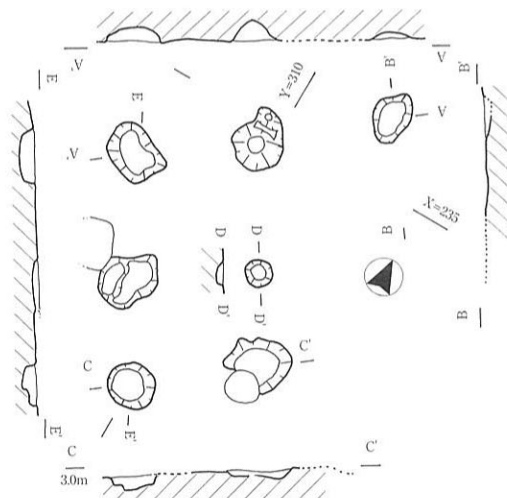
建物 32



建物 33



建物 36



建物 34



图IV-91 第9b·10b面建物⑥

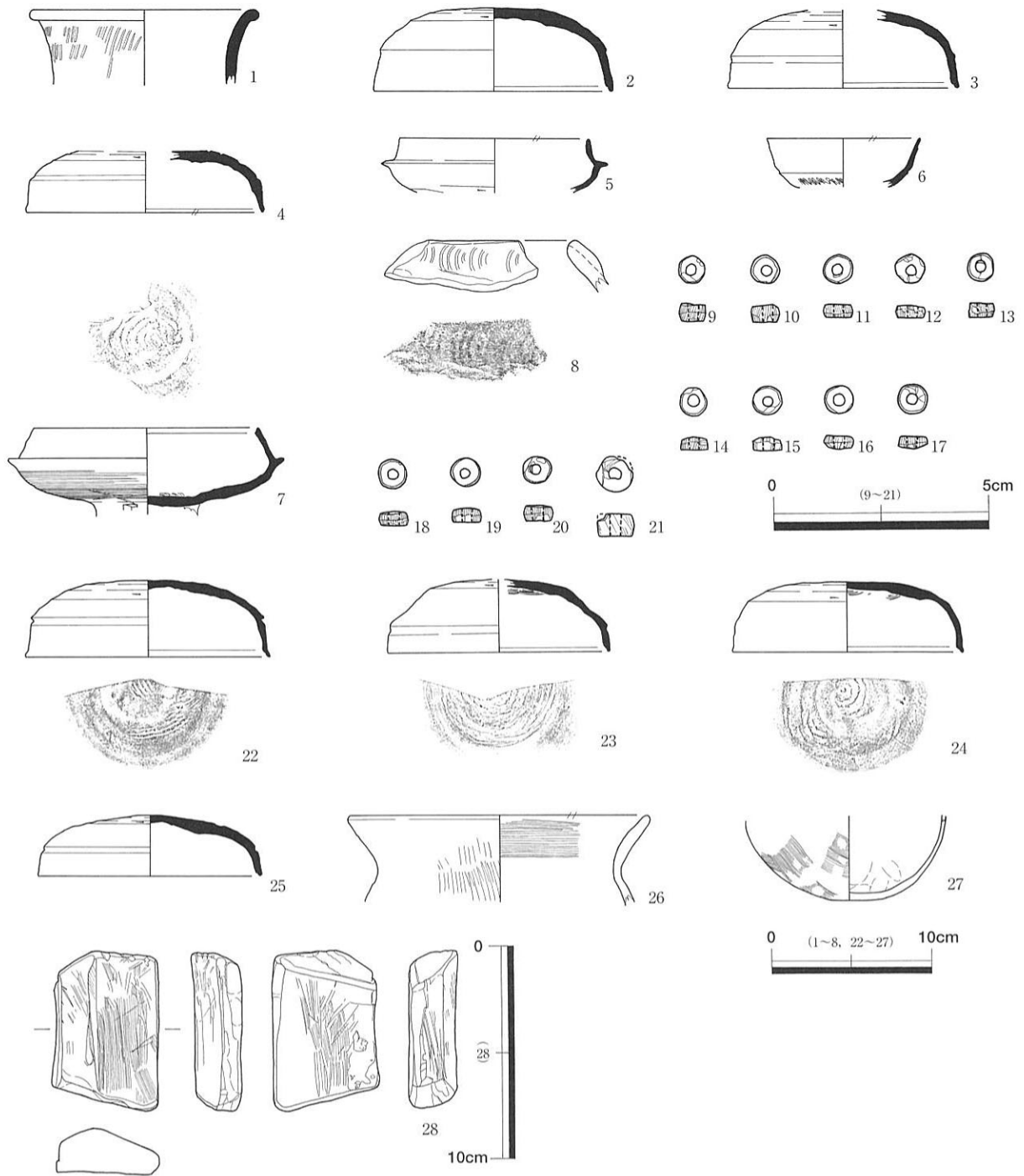
表IV-26 第9b・10b面建物一覧

統一名称	調査区	調査時の遺構名称	種別	構造	規模 (m)	建物方向	面積 (m ²)	柱穴規模 (m)	時期	特徴
建物1	90-3 (A)	建物跡7	掘立	2間×2間	4.50×3.65	N-20.5° - W	16.4	0.65~1.00		柱抜き取り 周溝あり
建物2	90-3 (A)	建物跡6	竪穴	—	5.80×4.30	N-1° - W	24.9	0.20~0.35	II-1~2	
建物3	90-3 (A)	建物跡1	掘立	3間×3間	4.35×3.30	N-26° - W	14.4	0.25~0.60		
建物4	90-3 (A)	建物跡4	掘立	4間×3間	6.75×5.60	N-13.5° - W	37.8	0.75~1.10	II-1~2	柱抜き取り後に土器埋納底あり
建物5	90-3 (A)	建物跡5	掘立	1間×1間	3.35×2.15	N-20° - W	5.1	0.40~0.45		
建物6	90-3 (A)	建物跡2	掘立	3間×2間	4.50×3.50	N-23° - W	15.8	0.35~0.95		束柱2 羽釜破片3
建物7	90-3 (A)	建物跡9	掘立	2間×1間	4.1×3.15	N-18° - W	12.9	0.40~0.65		耕作痕3を切る
(建物8)	89-2	竪穴住居跡		—	5.1×6.2	—	—	—		土器類・玉類150以上建物かどうか不明
建物9	90-1 (B)	掘立柱建物1	掘立	2間×2間	2.7×2.9	N-31° - W	8.4	0.52~0.96		束柱あり 礎板?あり
建物10	90-1 (B)	掘立柱建物2	掘立	2間×3間	3.8×4.9	N-38.5° - E	18.6	0.60~0.72		
建物11	90-1 (B)	建物3	竪穴	—	4.2×4.25	N-40° - W	17.9	0.34~0.48	II-2?	
建物12	90-1 (B)	建物4	竪穴	—	5.6×5.8	N-45° - E	32.6	0.30~0.58	I-4	土器埋納・炭化部材出土
建物13	90-1 (B)	建物5	掘立	2間×3間	3.4×4.6	N-32° - W	15.6	0.36~0.68		建物12より新しい
建物14	90-1 (B)	建物6	掘立	2間×2間	2.6×3.0	N-29° - E	7.8	0.54~1.20	II-1~2	
建物15	90-1 (B)	建物7	掘立	2間×2間	2.6×3.5	N-40° - W	9.1	0.36~0.88		周溝 束柱 柱根1
建物16	90-1 (B)	建物8	掘立	2間×2間	3.8×3.95	N-28° - E	13.8	0.64~0.90	II-1~2	土器埋納 礎板
建物17	90-1 (B)	建物9	掘立	2間×3間	3.3×4.75	N-37° - E	15.7	0.40~0.74	飛鳥?	束柱 柱根1
建物18	90-1 (B)	建物10	掘立	2間×2間	2.75×3.4	N-33.5° - E	9.4	0.46~0.72	7世紀中頃	束柱 土器埋納遺構51
建物19	90-1 (B)	建物11	掘立	2間×3間	3.2×4.7	N-42° - E	15.0	0.41~0.78	飛鳥?	
建物20	90-1 (B)	建物12	掘立	2間×3間	3.9×4.95	N-42° - E	19.3	0.46~0.92	飛鳥?	
(建物21)	90-1 (B)	建物13	掘立	2間×2間	3.0×3.8	N-14.5° - E	11.4	0.46~0.80		概要未掲載
(建物22)	90-1 (B)	建物14	掘立	2間×2間	2.85×3.05	N-10° - E	8.7	0.26~0.52		概要未掲載
建物23	90-1 (B)	建物15	竪穴	—	4.8×4.9	N-41° - W	23.5	0.50~0.60	II-2	土器埋納? 剣形石製品
建物24	90-1 (B)	建物16	掘立	2間×3間	3.5×4.3	N-26.5° - W	15.0	0.32~0.84	II-1~2	束柱 土器埋納?
建物25	90-1 (B)	建物17	掘立	2間×3間	3.3×3.6	N-43° - E	11.9	0.60~0.84	II-1~2?	白玉集中
建物26	90-1 (B)	建物18	掘立	2間×3間	4.0×5.45	N-42° - W	21.8	0.43~0.92		建物23より古い建物25と軸が揃う
建物27	90-1 (B)	建物19	掘立	2間×2間	2.8×3.8	N-41° - W	10.3	0.62~1.00		建物25と軸が揃う
建物28	90-1 (B)	建物20	掘立	2間×3間	3.15×4.15	N-43° - W	13.4	0.44~0.66		柱根2
建物29	90-1 (B)	建物21	掘立	3間×4間	4.7×5.85	N-38° - E	27.5	0.47~0.66	飛鳥?	柱根2
建物30	90-1 (B)	建物22	竪穴	—	3.5×4.4	N-5.5° - W	15.4	—	II-1	片屋根? カマド検出
建物31	90-1 (B)	建物23	掘立	2間×3間	2.55×4.65	N-42.5° - E	11.9	0.42~0.79		柱根6
建物32	90-1 (B)	建物24	掘立	2間×3間	3.8×5.25	N-35° - W	20.0	0.48~0.92		束柱 柱根1
建物33	90-1 (B)	建物25	掘立	2間×3間	3.55×4.2	N-37.5° - W	14.9	0.51~0.82		柱根1
建物34	90-1 (B)	建物26	掘立	2間×2間	3.5×3.75	N-32° - W	13.1	0.64~0.90		束柱
(建物35)	90-1 (B)	落ち込み6	竪穴	—	—	—	—	—		
建物36	92-7	掘立柱建物1	掘立	2間×2間	—	—	—	—		柱根2 遺存

のが主である。土師器甕は6世紀ぐらいと思われるものと6世紀末~7世紀初め頃と思われるものがある。前述のように、後者は建物埋没以後の落ち込み内に含まれていた可能性が高く、この建物には伴わないと思われる。土師器甕は6世紀ぐらいと思われるものである。また土師器羽釜については、江浦洋(1991a)によって、従来良好な資料がなかった6世紀前半代の事例として評価されている。なお、土師器甕(158)には割れ口に擦ったような痕跡がある。

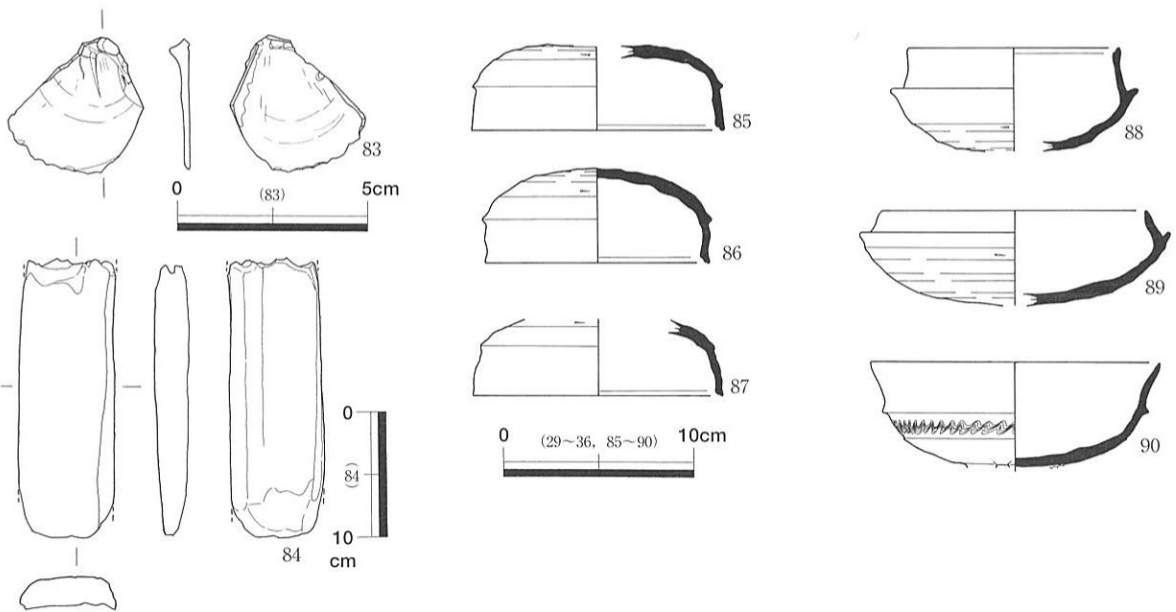
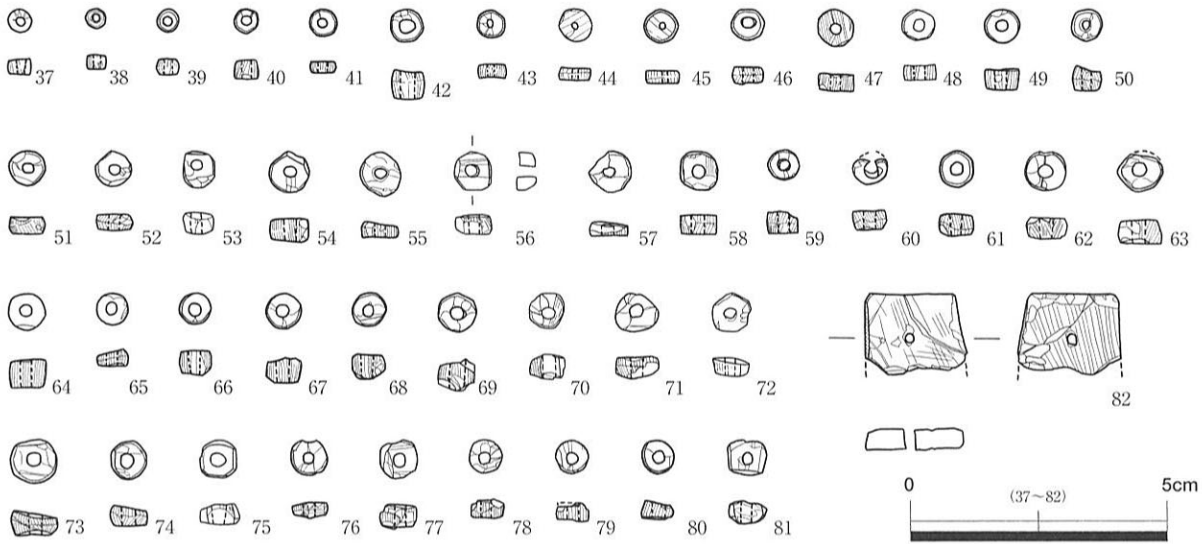
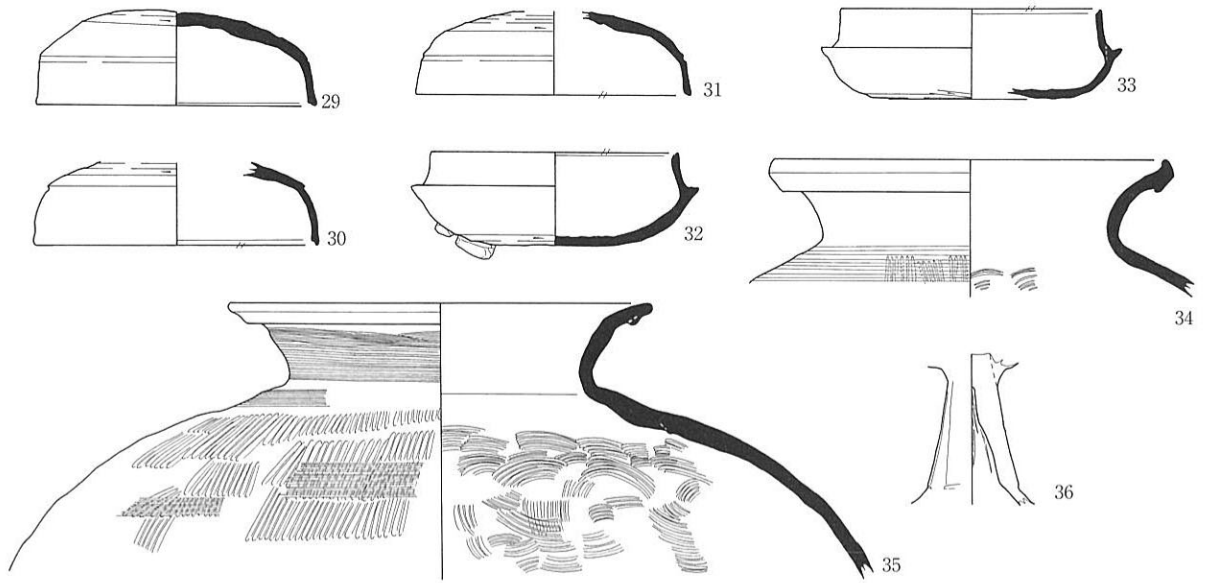
その他、掘立柱建物の柱穴に柱根が残存していたものがあつた(図IV-96)。(165)~(170)は建物31、(171)は建物32、(172)は建物33、(173・174)は建物36から出土した。その多くは居住域II-2から検出されている。このことについて概要XII(p.116)では、この居住域が集落存続期間の後半に形成されたことと関連する可能性を示唆しているが、その解釈にあたっては、包含される地層の地下水量の差といった埋没環境も考慮する必要がある。

なお、前項でふれた飛鳥時代の可能性がある建物の柱穴からも、遺物が出土している。建物17からは柱根(図IV-94:104)が出土した。建物19柱穴からは、須恵器杯蓋(図IV-94:105)が出土した。II

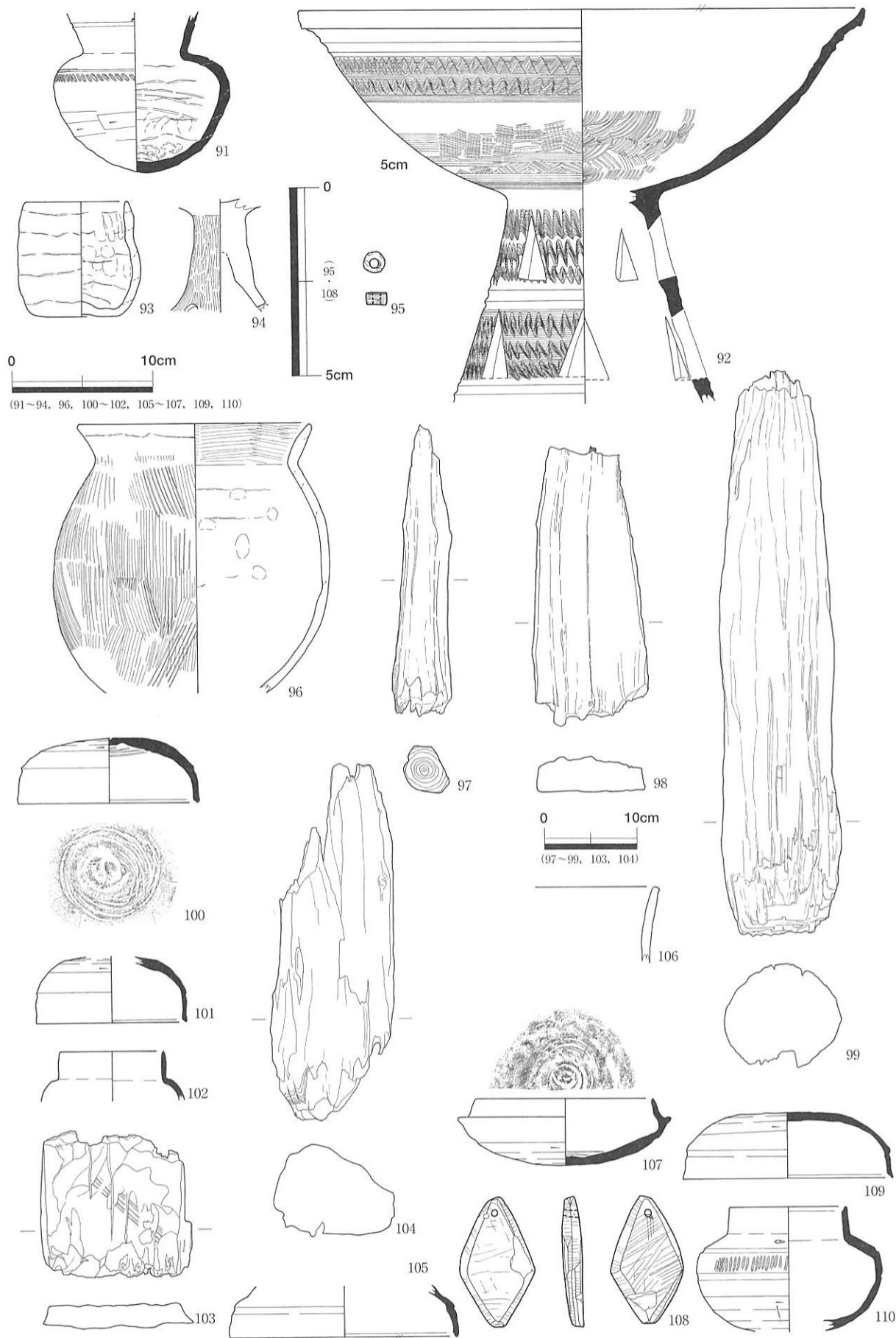


图IV-92 第9b·10b面建物出土遺物①

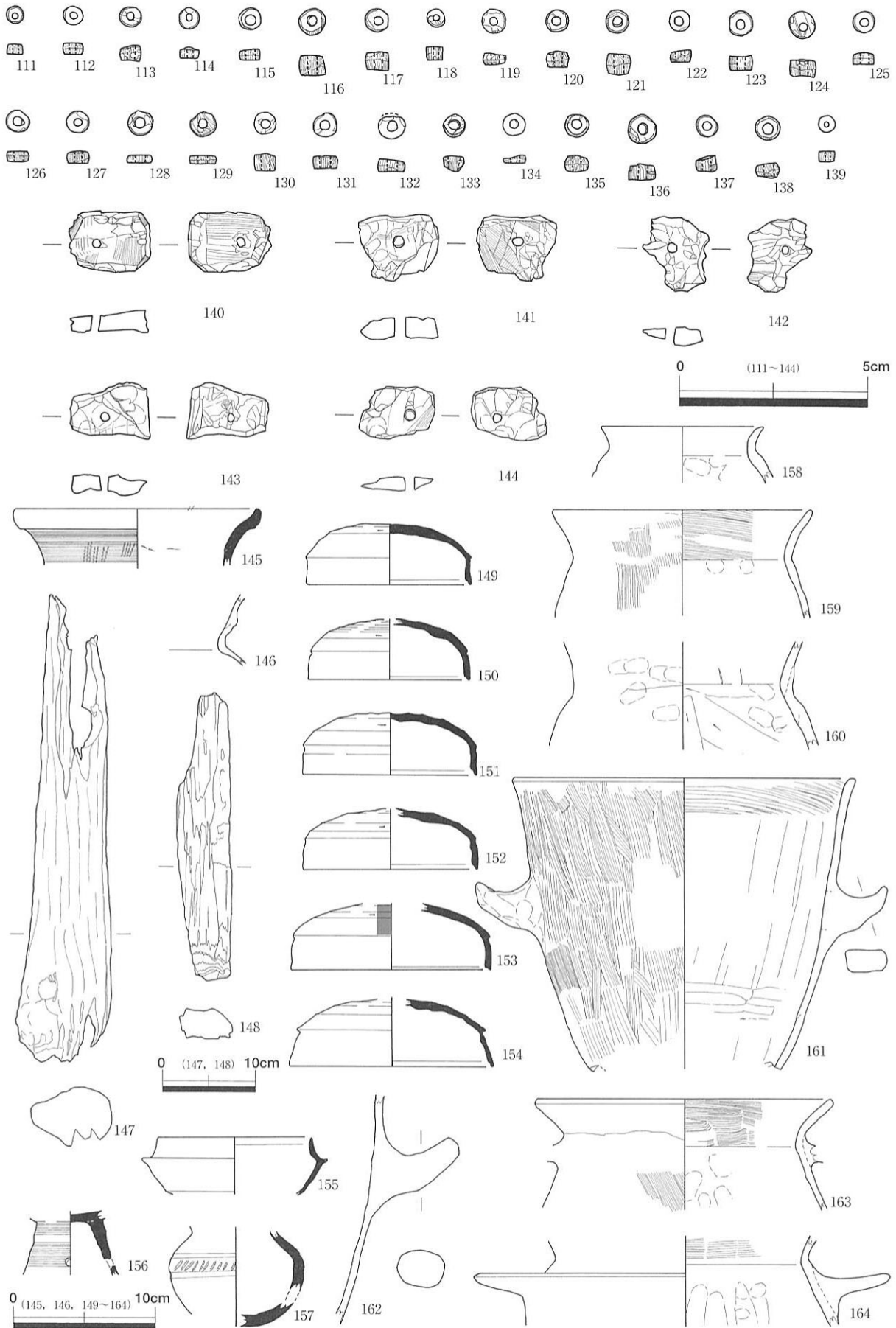
- 图IV-92 1: 建物1, 2~21: 建物2, 22~28: 建物4
 图IV-93 29~83: 建物8, 84: 建物9, 85~90: 建物11
 图IV-94 91~95: 建物12, 96~99: 建物15, 100~103: 建物16, 104: 建物17, 105: 建物19
 106: 建物20, 107~108: 建物23, 109~110: 建物24
 图IV-95 111~144: 建物25, 145~148: 建物29, 149~164: 建物30
 图IV-96 165~170: 建物31, 171: 建物32, 172~174: 建物36



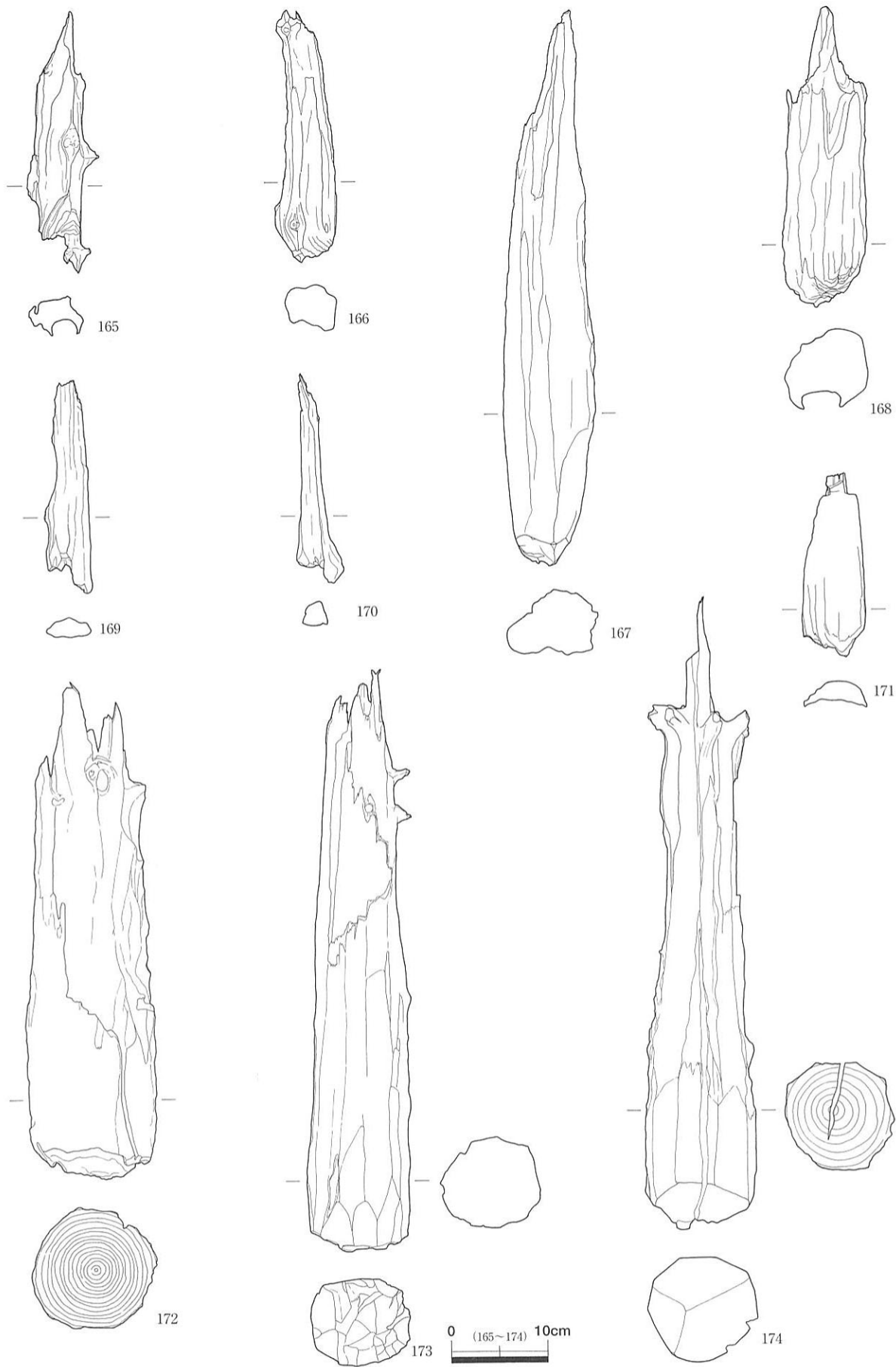
図IV-93 第9b・10b面建物出土遺物②



图IV-94 第9b·10b面建物出土遺物③



図IV-95 第9b・10b面建物出土遺物④



图IV-96 第9b·10b面建物出土遺物⑤

型式第2段階のものである。また、建物20柱穴からは土師器甑片（図Ⅳ-94:106）が出土した。6世紀ぐらいのものと思われる。建物29の柱穴からは、須恵器甕（図Ⅳ-95:145）、土師器小形複合口縁壺の破片（146）、柱根（147・148）等が出土した。須恵器甕はⅠ型式第5段階～Ⅱ型式第1段階のものである。土師器小形複合口縁壺は布留期のもので、山陰・北陸地方系になるのか、頸部の形が似ている。なお、この建物の柱穴のひとつからは、前述したように飛鳥時代のものと思われる土師器杯の細片が出土している。

ピット ここでいうピットは小規模な落ち込みの総称である。ここから出土したもののほとんどは意図的に埋納されたものではなく、周辺に存在していた遺物が入り込んだものである。ただし、居住域Ⅱ周辺のピット8から出土した耳環については、意図的に入れられた可能性もある。さらに、居住域Ⅱおよびその周辺からは、建物になる可能性は低いが、柱根や礎板と考えられる木製品が出土したピットもある。

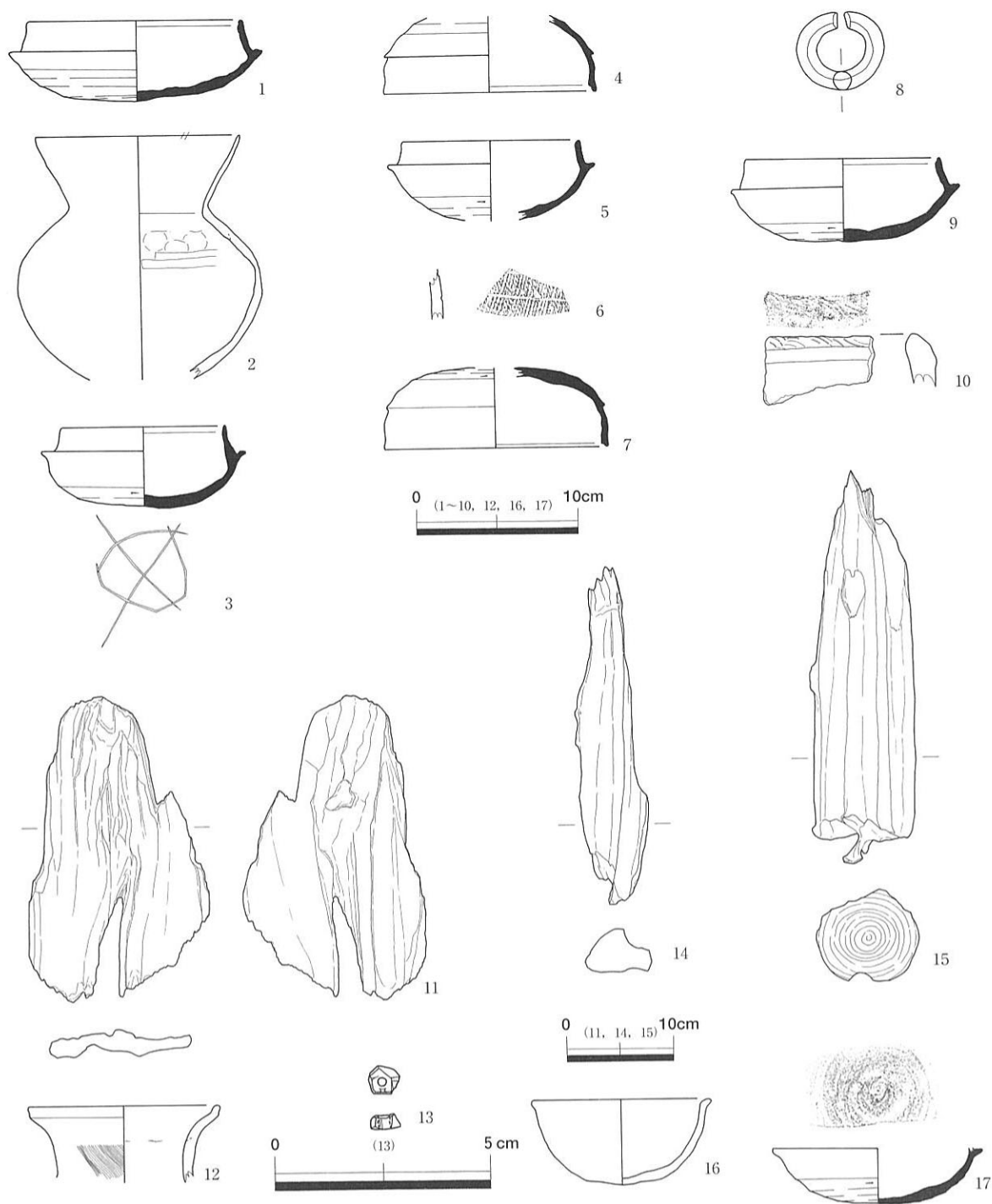
ピットから出土した遺物としては、以下のようなものがある。ピット2からは、須恵器杯（図Ⅳ-97:1）、土師器直口壺（2）が出土した。須恵器杯はⅡ型式第1段階、土師器直口壺は6世紀ぐらいのものと思われる。ピット3からは須恵器杯（図Ⅳ-97:3）が出土した。Ⅰ型式第5段階のものである。外底面には、○の上に×印のヘラ記号を施している。ピット4からは須恵器杯蓋（図Ⅳ-97:4）が出土した。Ⅰ型式第4～5段階のものである。ピット5からは須恵器杯（図Ⅳ-97:5）が出土した。Ⅱ型式第1段階のものである。ピット6からは韓式系土器片（図Ⅳ-97:6）が出土した。陶質で、縄蓆文タタキの上に沈線文を施している。ピット7からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-97:7）が出土した。Ⅱ型式第1段階のものである。ピット8からは金銅製の耳環（図Ⅳ-97:8）が出土した。また、ピット9は建物29の柱穴との切り合いが認められたとされる遺構であるが、記録の不備により正確な位置がわからなくなってしまった。このピットからは須恵器杯（図Ⅳ-97:9）が出土した。Ⅰ型式第5段階～Ⅱ型式第1段階のものである。ピット10からは土師器甑片（図Ⅳ-97:10）が出土した。口縁部外面に同心円文スタンプを施している。ピット12からは弥生土器長頸壺（図Ⅳ-97:12）が出土した。第Ⅵ-2様式である。ピット27からは土師器杯（図Ⅳ-97:16）が出土した。5世紀後半～6世紀初め頃のものである。ピット28からは須恵器杯（図Ⅳ-97:17）が出土した。Ⅱ型式第1～2段階のものである。

また、柱根や礎板と考えられる木製品が出土したピットとして、礎板？（図Ⅳ-97:11）が出土したピット11、柱根（図Ⅳ-97:14）が出土したピット14、柱根（図Ⅳ-97:15）が出土したピット15がある。

ピットのうち、滑石製品が出土したものとしては以下のものがある。ピット13からは滑石製白玉（図Ⅳ-97:13）が出土した。なお、図示はしなかったが、ピット29から滑石製白玉2個、ピット30から滑石製白玉2個、ピット31から白玉1個、ピット32から白玉1個が出土した。

井戸・土坑 この面では、井戸や水溜と考えられる土坑も検出されている（図Ⅳ-98）。まず、居住域Ⅰからは土坑9が検出された。これは泥質の堆積物で埋積されており、水溜として利用された可能性が指摘されている。また、居住域Ⅱ-1からは、井戸45・46が、同Ⅱ-2からは井戸47が検出されている。このうち、井戸46からは種子が約400点出土した。その種類としては、イヌホオズキ、ヒョウタン類、ウリ類などがある（第Ⅴ章2-3）。さらに、溝4と溝18で囲まれた部分では井戸48が検出された。

なお、溝15で囲まれた区画内からは土坑10が検出されたが、ここからは須恵器甕、白玉172点、有孔板9点などが出土しており、祭祀性の強い遺構と評価されている。



図Ⅳ-97 第10b面ピット出土遺物

1・2：ピット2，3：同3，4：同4，5：同5，6：同6，7：同7，8：同8，9：同9，10：同10，11：同11
12：同12，13：同13，14：同14，15：同15，16：同27，17：同28

次に、井戸・土坑から出土した遺物を列挙する。井戸45からは、須恵器杯蓋（図Ⅳ-99：1～7）・杯（8～12）・平瓶（13）、土師器高杯（14）、滑石製有孔円板（15～17）、骨製品（18）、木製品（19・20）等が出土した。須恵器杯蓋がⅡ型式第1～2段階、杯がⅠ型式第5段階～Ⅱ型式第3段階までのもので、平瓶はⅡ型式後半のものと思われ、時期差がある。断面図の記載によると、この井戸から出土した遺物には中層出土のものと最上層出土のものがあり、その時期差かもしれないが、各層準出土の遺物が一括

して遺物登録されてしまったため、検証することができない。また、土師器高杯は5世紀末～6世紀ぐらいのものである。骨製品は孔のあき方が自然ではないということで製品とした。これについては鹿角製の可能性がある⁶⁾。剣形木製品(19)は両側が鋸歯状になっている。板状木製品(20)には加工痕が残っている。滑石製品は有孔円板が3点、白玉が4点出土した。

井戸46からは、須恵器杯蓋(図Ⅳ-99:21)・杯(22)・壺(23)・甕(24)、土師器直口壺(25)・甕(26~29)等が出土した。須恵器の時期はⅡ型式前半におさまる。土師器は6世紀ぐらいと思われるものである。土師器甕(27)・(28)の一部には赤色顔料が付着している。

井戸47からは、須恵器杯(図Ⅳ-100:30~32)・有脚短頸壺(33)、土師器甕(34・35)・鍋(36)、滑石製子持勾玉(37)等が出土した。須恵器はⅡ型式第2~3段階ぐらいのもので、土師器甕・鍋は6世紀ぐらいのものである。土師器鍋は焼成後に二次的に被熱した痕跡がある。

井戸48からは、須恵器杯(図Ⅳ-100:38)、土師器甕(39)が出土した。須恵器杯はⅠ型式第5段階、土師器甕は6世紀ぐらいのものである。

居住域Ⅰに関わる水溜と推定されている土坑9からは、須恵器甕(図Ⅳ-101:1)・壺(2)、土師器竈(3)等が出土した。須恵器はⅠ型式第5段階~Ⅱ型式第1段階のものである。土師器竈片の口縁端部には同心円文スタンプが施されているようである。

土坑10からは、須恵器甕(図Ⅳ-101:4)、滑石製品(5~29)等が出土した。須恵器甕はⅡ型式前半頃のものである。滑石製品は白玉(5~21)、有孔円板(22~26)、双孔円板(27~29)である。実測しなかったものを合わせると、白玉172点、双孔円板3点、有孔円板6点出土した。なお、白玉のうちの2つは甕の中から出土した。

土坑11からは土師器甕(図Ⅳ-101:30)が出土した。6世紀ぐらいのものである。

土坑12からは土師器小形甕(図Ⅳ-101:31)、滑石製白玉(32)が出土した。土師器小形甕は6世紀ぐらいのものである。

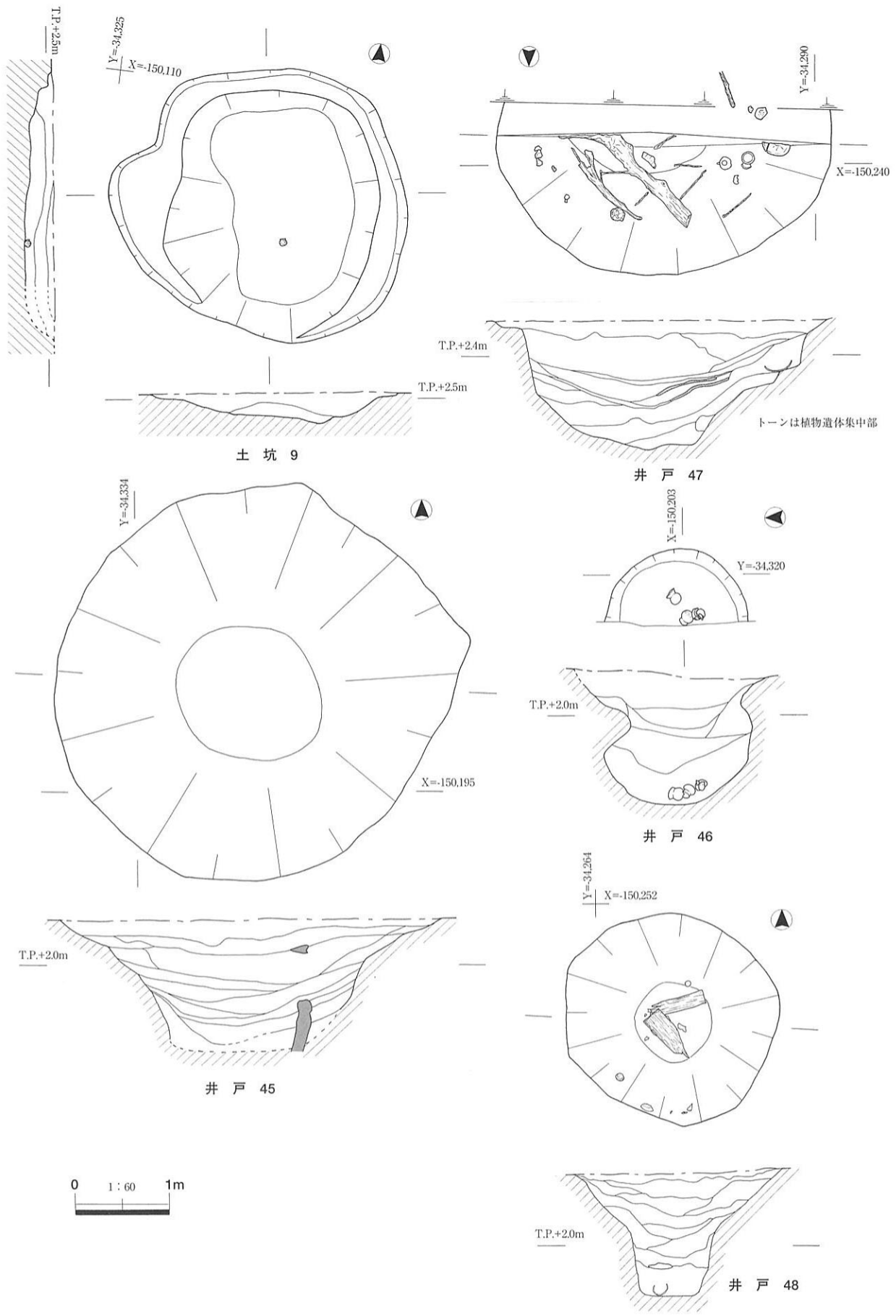
土坑13は92-7調査区で検出されたものであるが、記録の不備により位置がわからなくなってしまった。この土坑から出土した可能性のあるものとして、須恵器杯(図Ⅳ-101:33)、弥生土器甕(34)がある。須恵器杯はⅠ型式第1~2段階のものと思われ、外面に波状文(7条)を2段施している。弥生土器は第Ⅴ様式である。土坑13から出土したと記載されている遺物には土師器高杯(図Ⅳ-101:35)がある。6世紀ぐらいのものと思われる。

土坑14は建物25の中心付近で検出された遺構であり、滑石製白玉(図Ⅳ-102:36~62)・有孔円板(63・65)・双孔円板(64)が出土した。出土した白玉の総数は126点である。

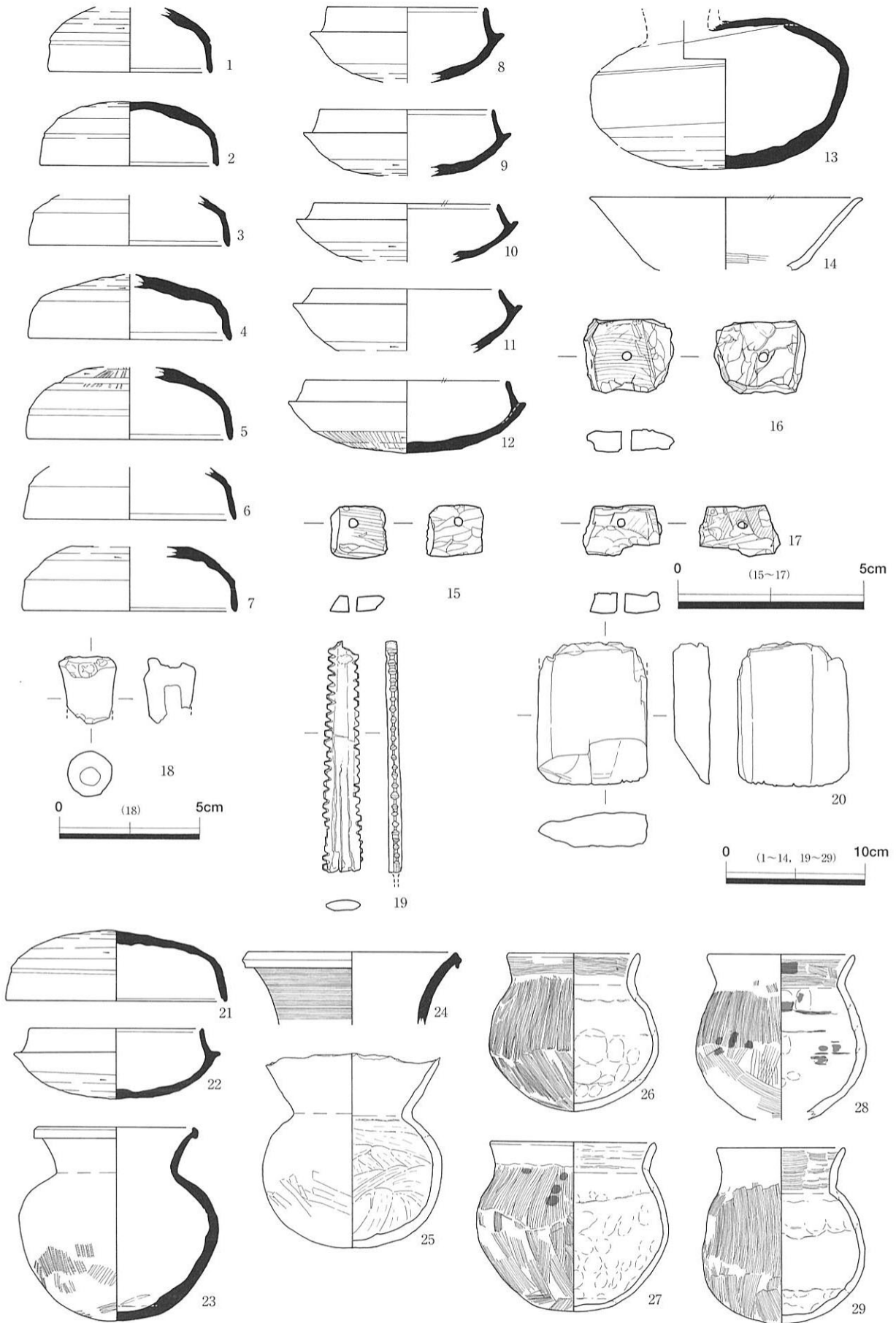
土坑43からは滑石製白玉(図Ⅳ-102:66・67)が出土した。その総数は8点である。

その他、図示していないが、土坑47からは滑石製白玉が17点出土した。

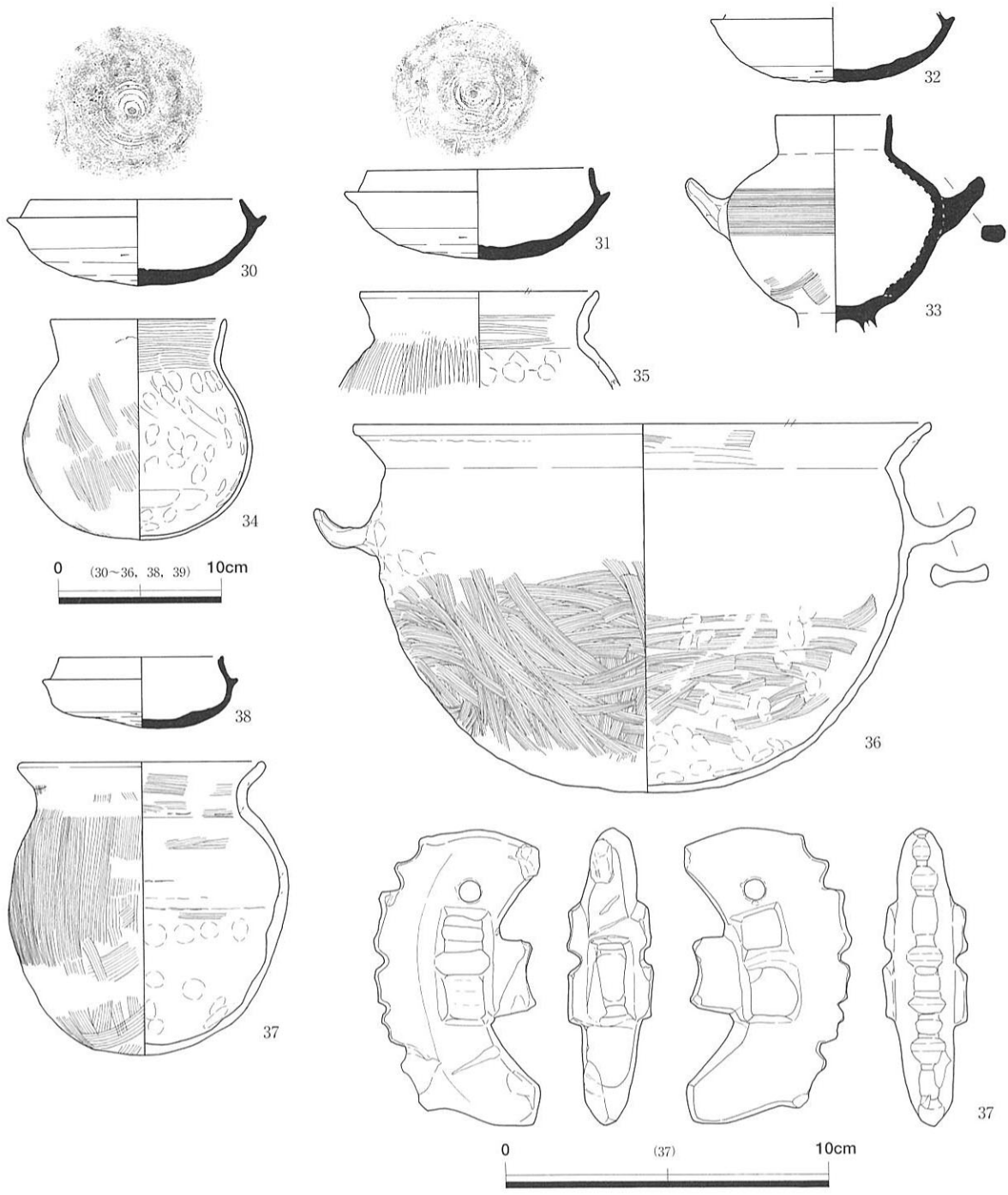
溝 次に、この面で検出された溝について記述したい。注目されるのは、100m以上のびる溝や、建物群を取り囲むように配置された溝が存在することである。まず、居住域Ⅰは溝6・溝7・溝23によって囲まれている。また、溝18・溝16で囲まれた部分が居住域Ⅱにあたり、2つの溝をつなぐ溝17の北西側がⅡ-1、南東側がⅡ-2となる。また、溝15はコの字状に巡る溝で、溝18を切っている。これと溝11が本来つながっており、居住域Ⅱ-1の南東端を画する時期があった可能性もある。なお、溝15(90-1調査区「溝700」)からは比較的多くの遺物が出土しているが、この溝に切られた落ち込み1(同「落ち込み193」)からも遺物がまとまって出土したと報告されている(概要ⅩⅡ, pp.93-96)。溝15は落ち込み1



図IV-98 第10b面井戸

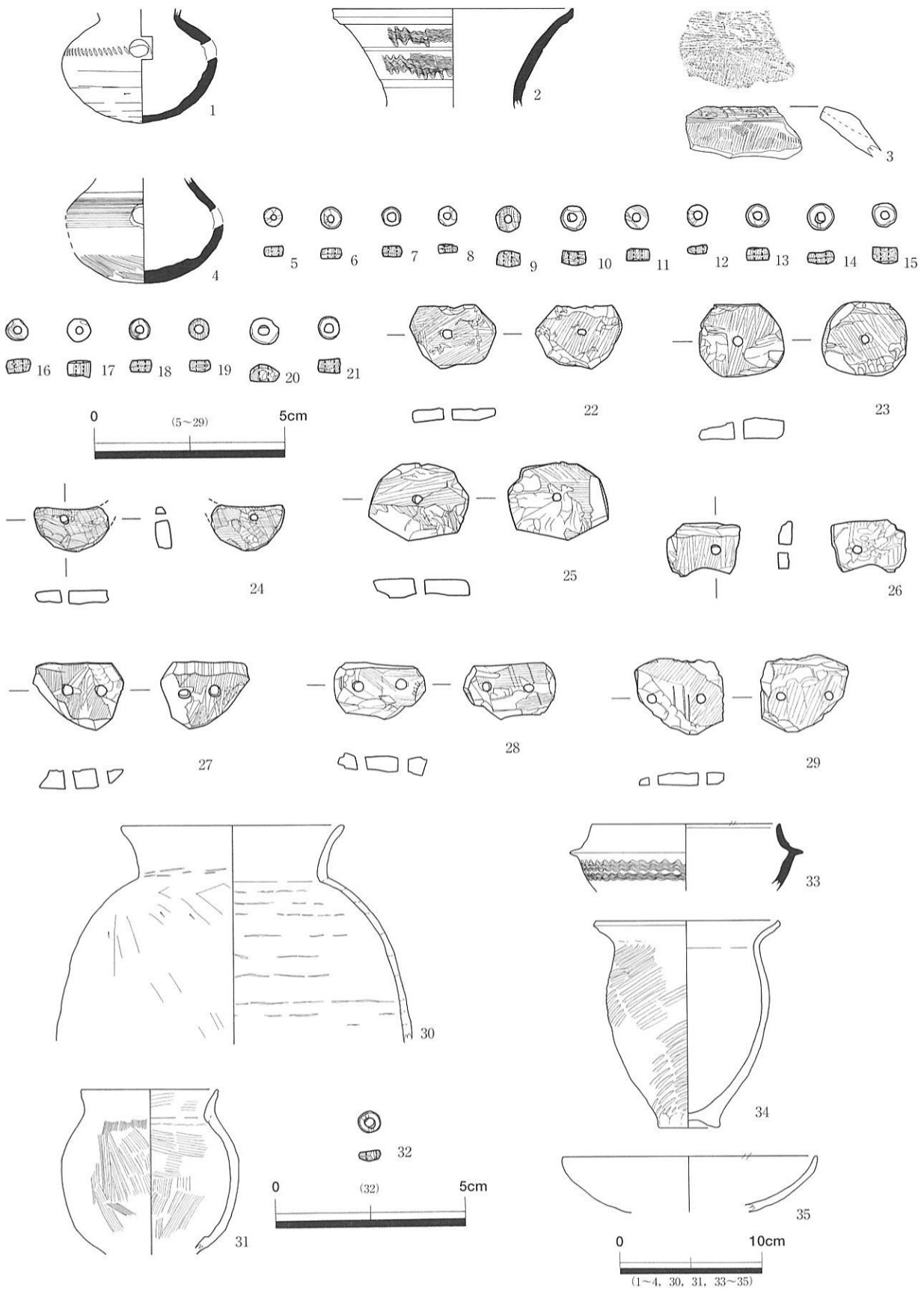


図IV-99 第10b面井戸出土遺物①



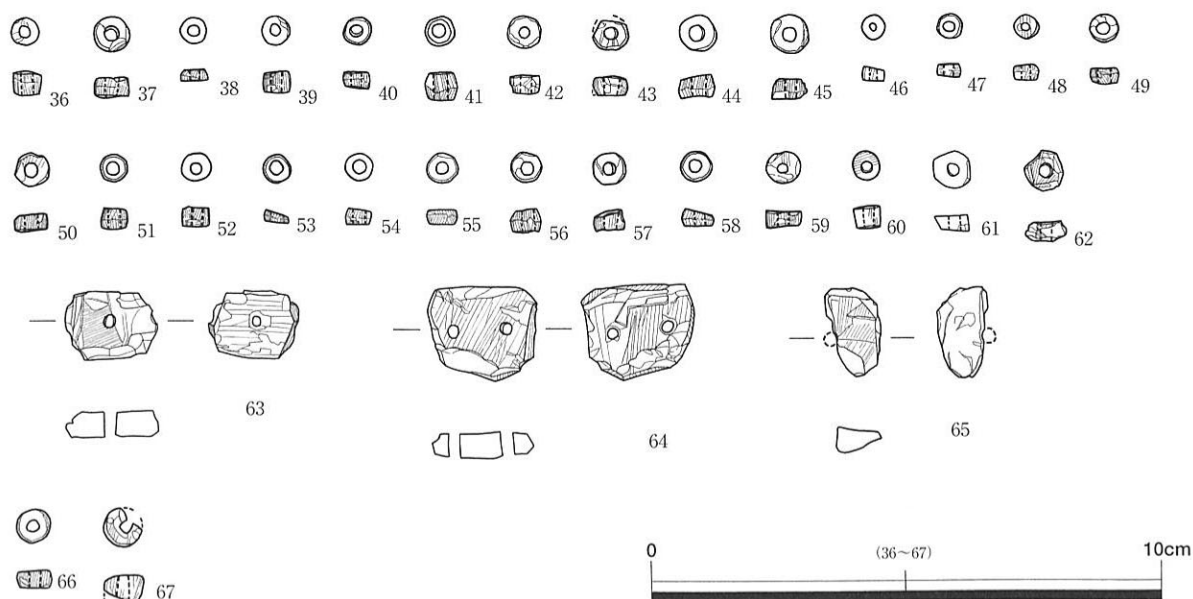
图IV-100 第10b面井戸出土遺物②

图IV-99 1~20:井戸45, 21~29:井戸46
 图IV-100 30~37:井戸47, 38·39:井戸48



图IV-101 第10b面土坑出土遺物①

图IV-101 1~3: 土坑9, 4~29: 土坑10, 30: 土坑11, 31·32: 土坑12, 33·34: 土坑13?, 35: 土坑13
 图IV-102 36~65: 土坑14, 66·67: 土坑43



図IV-102 第10b面土坑出土遺物②

と重なる部分で幅が狭くなり、やや湾曲して収束すると認識されたが、落ち込み1の西辺は直線的であり、その部分に沿って土器片がまとまって出土した。その部分の土器の時期をみると、落ち込み1の他の部分から出土したもの比べて新しいものが多く、溝15出土土器と同時期と考えられる。このことから、落ち込み1の西端と認識された部分は本来溝15の肩であった可能性が高い。したがって本書では、「落ち込み193」出土とされていた遺物のうち、溝15に含まれていた可能性が考えられるものについては、溝15出土遺物に含めて掲載している。また、90-1調査区の「溝711」はY字状に分岐する溝とされている（概要X II, pp.96-98）。しかし、溝の位置関係からすると、溝18とカーブしてのびる溝が切り合っていた可能性がある。ここで溝11としたものは、このうちの後者を指している。さらに、溝4や溝25は耕作痕や建物が検出された範囲の南東端に位置する。なお、居住域Ⅱ-1・2の中央部にあたる位置を南東-北西方向に縦断する溝14は、居住域よりも古い溝であるが、ここからは5世紀末の須恵器と弥生時代後期の土器が出土した。この溝は、居住域Ⅱ-1の中で最も古い建物である建物12に切られている。両者の出土土器は同型式であり、1型式内での変遷と考えることもできるが、この溝が本来1つの遺構ではなかったか、掘削時に別の遺構も一緒に掘削してしまい、遺物が混入した可能性も考慮する必要がある。

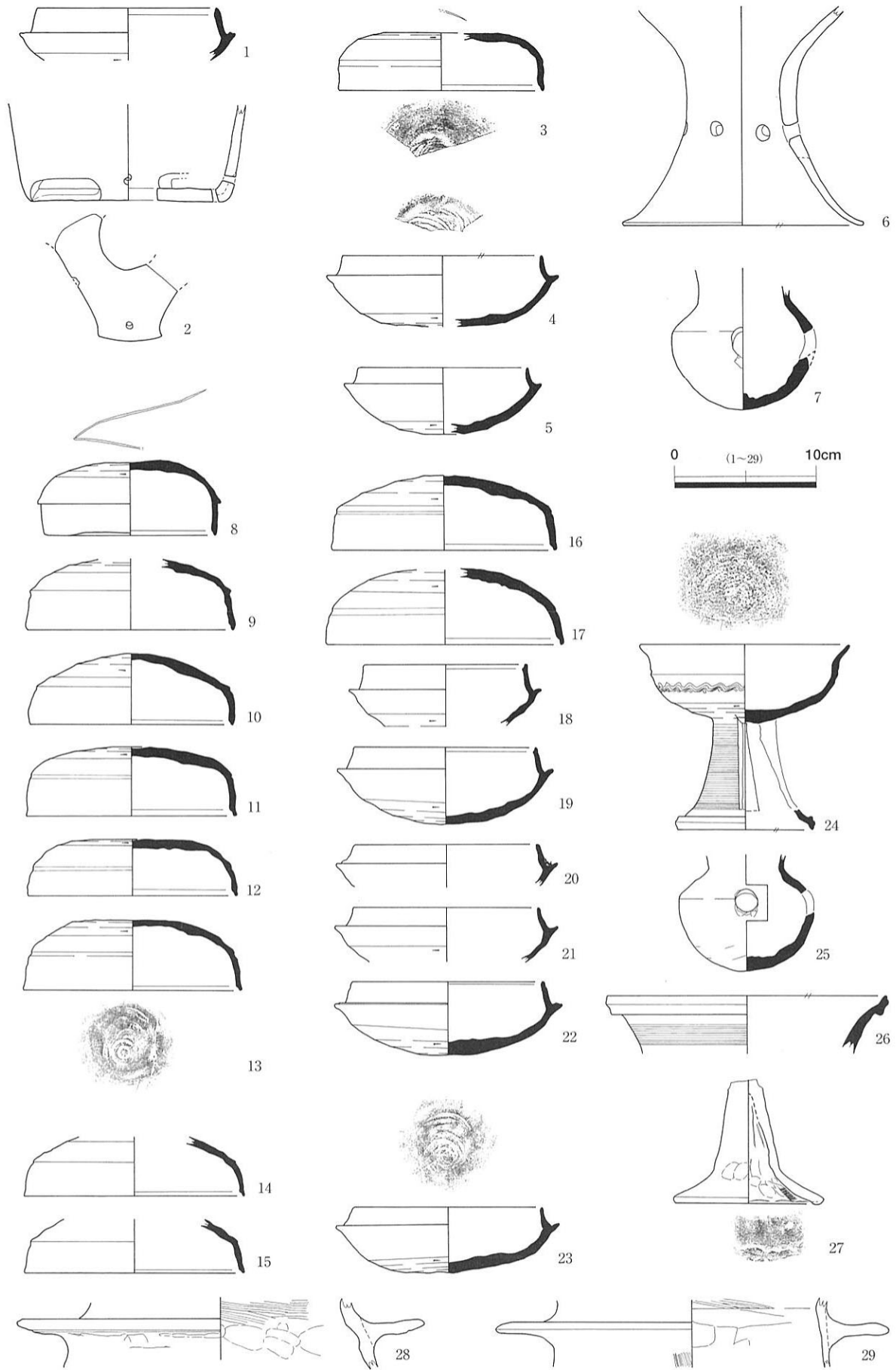
居住域Ⅰおよびその周辺の溝から、以下のような遺物が出土した。溝4からは滑石製白玉、須恵器杯（図IV-103：1）が出土した。須恵器はⅡ型式第1段階のものである。

溝5からは土師器甑（図IV-103：2）が出土した。6世紀ぐらいのものと思われる。底部中央に円形孔1個、周辺に楕円孔4個を配すると思われる。その間に底面に推定4個、側面に4個の小孔を穿けていると思われる。この小孔は布を結束するためのものと推測されている（概要Ⅱ, p.56）。

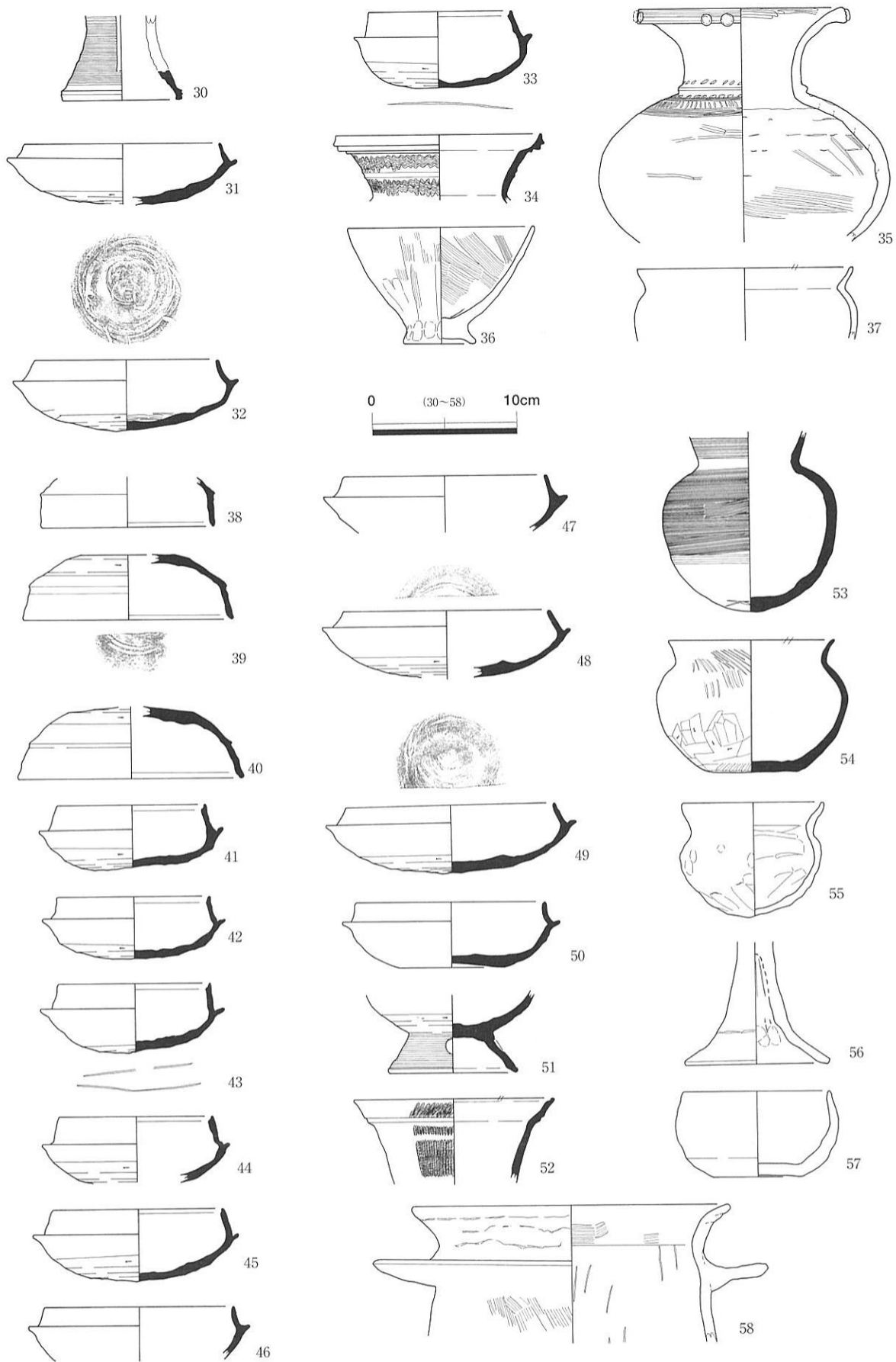
溝6からは須恵器杯蓋（図IV-103：3）等が出土した。Ⅱ型式第2段階のものである。外底面にヘラ記号が施されている。

溝7からは須恵器杯（図IV-103：4）が出土した。Ⅱ型式第2段階のものである。

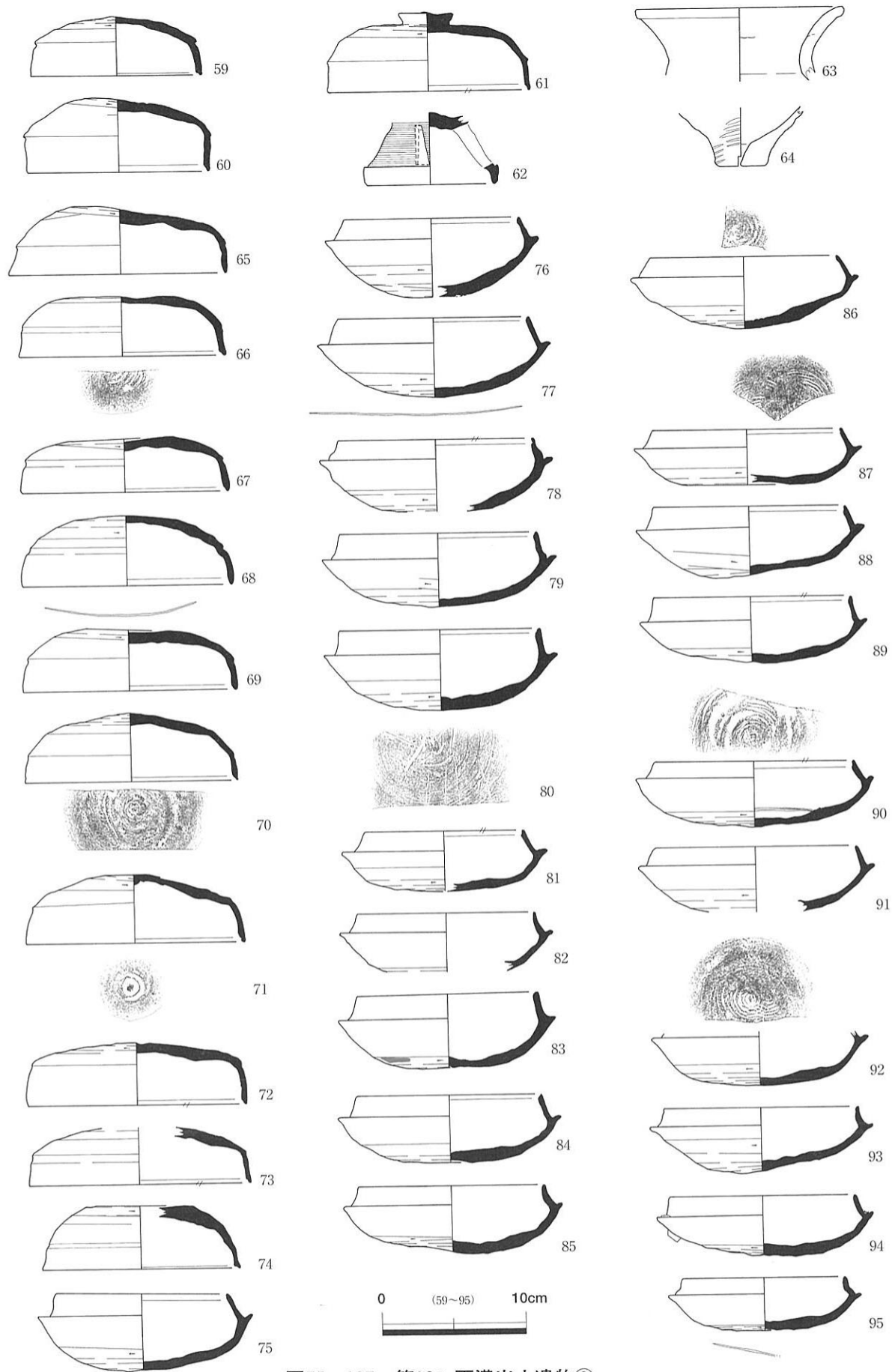
溝8からは須恵器杯（図IV-103：5）が出土した。Ⅱ型式第2段階のものである。



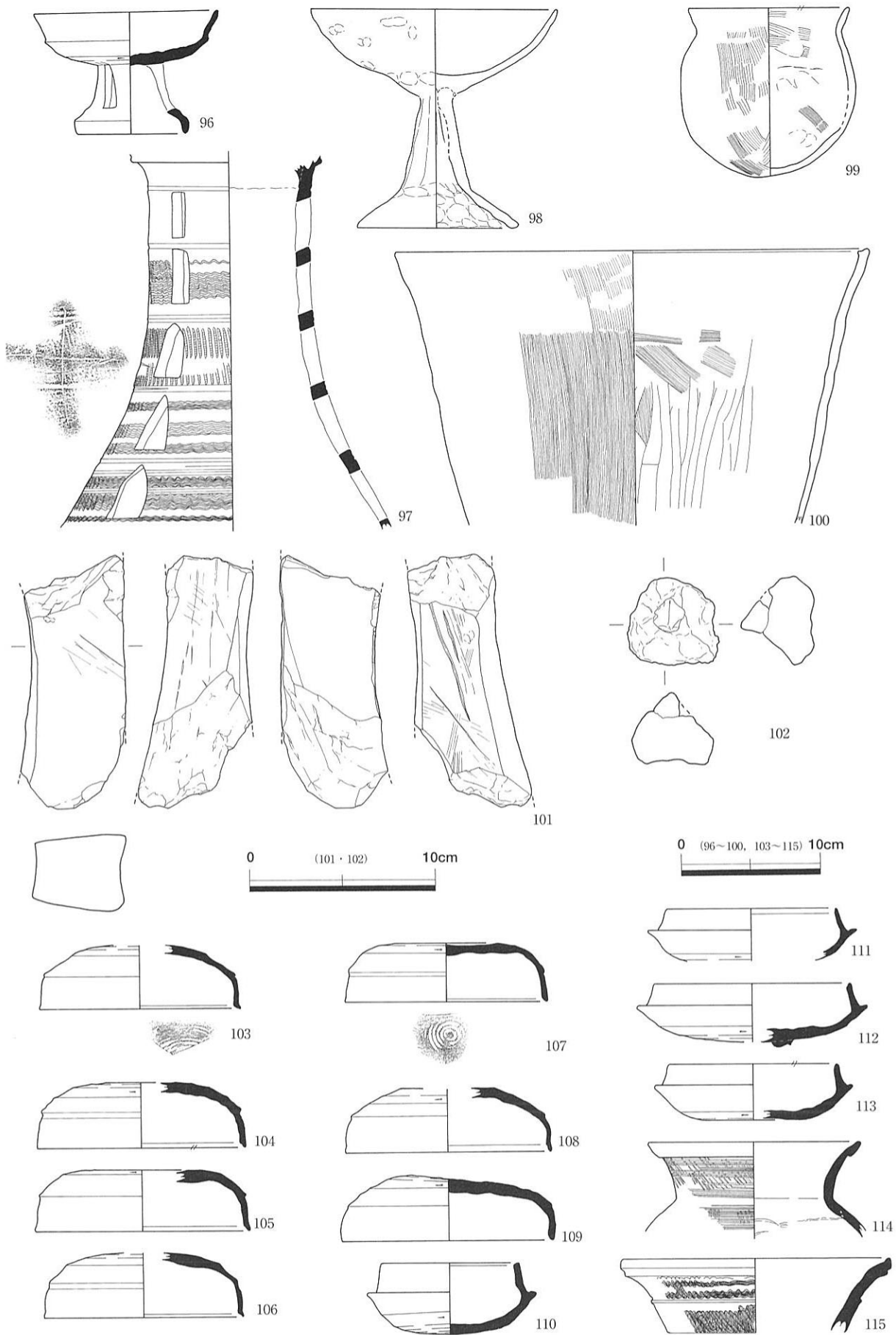
图IV-103 第10b面溝出土遺物①



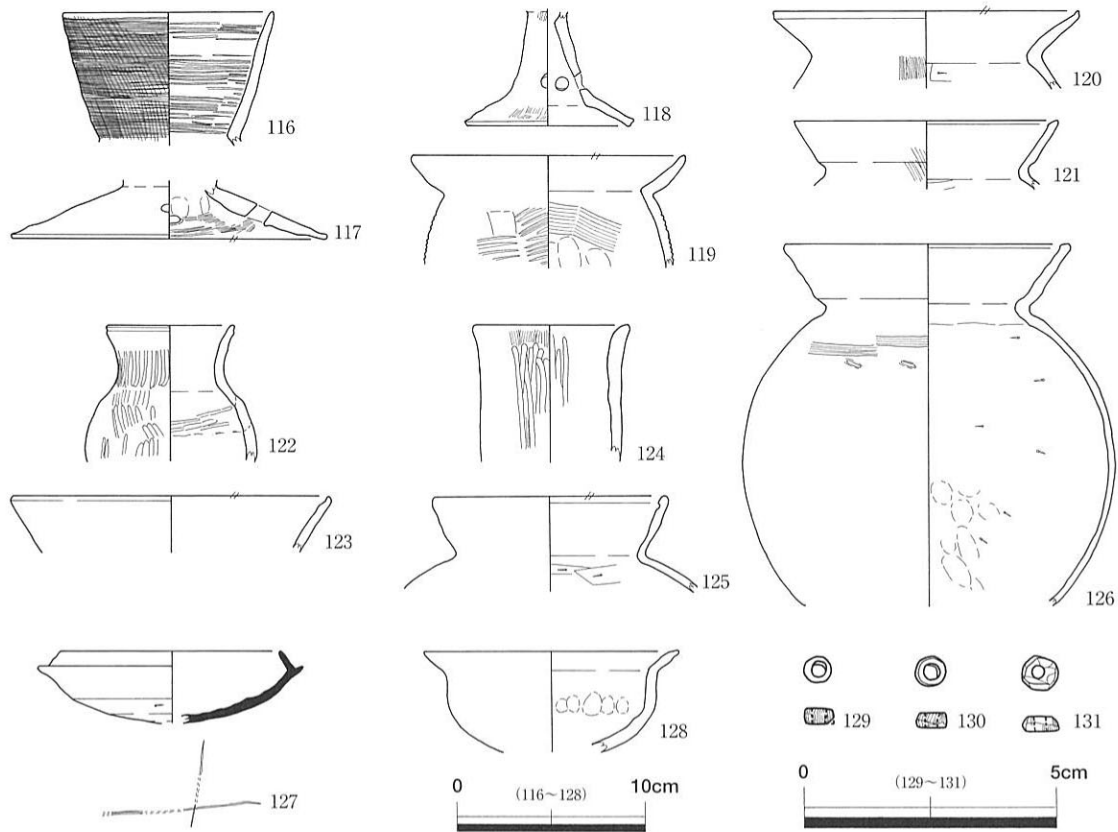
图IV-104 第10b面沟出土遗物②



图IV-105 第10b面溝出土遺物③



图IV-106 第10b面沟出土遗物④



図IV-107 第10b面溝出土遺物⑤

- 図IV-103 1：溝4, 2：溝5, 3：溝6, 4：溝7, 5：溝8, 6：溝9, 7：溝10, 8~29：溝11
 図IV-104 30：溝12, 31・32：溝13, 33~37：溝14, 38~58：溝15
 図IV-105 59~64：溝16, 65~95：溝17
 図IV-106 96~102：溝17, 103~115：溝18
 図IV-107 116~121：溝20, 122~123：溝21, 124~126：溝22, 127~128：溝40, 129~131：溝42

溝10からは須恵器甕（図IV-103：7）が出土した。II型式第2段階のものである。

なお、概報で「建物」とされていた溝40からは、須恵器杯（図IV-107：127）、土師器鉢（128）が出土した。須恵器杯はII型式第4段階のものであり、外底面にヘラ記号を施している。土師器鉢は6世紀ぐらいのものと思われる。

居住域II内および周辺の溝から、以下のような遺物が出土した。溝11からは須恵器杯蓋（図IV-103：8~17）・杯（18~23）・高杯（24）・甕（25）・甕（26）、土師器高杯脚（27）・羽釜（28・29）等が出土した。須恵器はI型式第5段階～II型式第2段階ぐらいまでのものである。土師器高杯脚は6世紀ぐらいのものと思われる。また、土師器羽釜は、前述のように江浦（1991a）によって6世紀代と位置づけられたものである。須恵器高杯（24）は凸線1条と波状文を施し、透かしは4方向である。土師器高杯脚は内面に布目痕が残る。

溝12からは須恵器高杯脚（図IV-104：30）が出土した。II型式第2段階のものである。凸線1条を施し、透かしは3方向である。

溝13からは須恵器杯（図IV-104：31・32）が出土した。II型式第2～3段階のものである。

建物12に切られている溝14からは、須恵器杯（図IV-104：33）・壺（34）、弥生土器壺（35）・鉢（36・37）等が出土した。須恵器はI型式第4～5段階のものである。弥生土器は第VI様式のものである。須恵器杯は外底面にヘラ記号を施す。須恵器甕は凸線2条、凹線文1条、波状文（8条、10条）で飾る。

弥生土器壺は口縁端部に沈線文3条、2個1対の円形浮文が6ヶ所認められ、頸部から肩部に凸帯1条、直線文(4条、6条)、刺突文が3帯施されている。

溝15からは、須恵器杯蓋(図Ⅳ-104:38~40)・杯(41~50)・高杯脚(51)・甕(52)・壺(53・54)、土師器小型丸底壺(55)・高杯脚(56)・椀(57)・羽釜(58)等が出土した。須恵器はⅠ型式第4段階~Ⅱ型式第3段階までにおさまり、Ⅱ型式第2段階のものが多い。壺(54)は静止ヘラ削り等の調整から考えてⅠ型式第1~2段階のものとした。なお、第9a層出土の甕(図Ⅳ-72:203)もこれと同じぐらいの時期のものである。杯(43)はヘラ記号を施している。壺(53)も外底部にヘラ記号?が施されている。須恵器高杯脚の透かしは1ヶ所未穿孔である。甕は凹線文と波状文(6~18条)で飾られている。土師器の時期は小型丸底壺が布留Ⅳ期、高杯脚が6世紀ぐらいである。土師器椀(57)は時期不明である。

溝16からは、須恵器杯蓋(図Ⅳ-105:59~61)・高杯脚(62)、弥生土器壺(63)・底部(有孔)(64)等が出土した。須恵器はⅠ型式第5段階~Ⅱ型式第1段階、弥生土器は第Ⅵ様式のものである。

溝17からは、須恵器杯蓋(図Ⅳ-105・106:65~74)・杯(75~95)・高杯(96)・器台(97)、土師器高杯(98)・甕(99)・甗(100)、砥石(101)、鉄滓(102)等が出土した。後述するように、この溝からはウシ・ウマの歯も出土している。須恵器杯蓋はほとんどがⅡ型式第1~2段階におさまるものであるが、(74)のみⅡ型式第3~4段階のものである。(69)の外面にはヘラ記号が施されている。須恵器杯はⅡ型式第1~3段階におさまる。(77)・(80)・(95)の外面にはヘラ記号が施されている。(75)・(83)の外面の一部には赤色顔料が付着している。(94)には別個体の破片が溶着している。(77)・(78)・(95)は生焼けである。須恵器高杯はⅠ型式第5段階~Ⅱ型式第1段階で、器台はⅡ型式前半頃のものである。器台(97)にはヘラ記号が施され、凸線文、凹線文、波状文、列点文で飾り、透かしは方形のものが3方向に2段、三角形のものが3方向に3段存在する。土師器は6世紀ぐらいのものである。土器の時期はⅠ型式第5段階~Ⅱ型式前半におさまる。砥石は流紋岩製で4面使用している。鉄滓は分析の結果(第Ⅴ章5-1)、鍛錬鍛冶滓であることが判明したものであるが、単独で出土し、鍛冶に関連するような遺物は伴っていない。

溝18からは、須恵器杯蓋(図Ⅳ-106:103~109)・杯(110~113)・壺(114)・甕(115)等が出土している。Ⅰ型式第4段階~Ⅱ型式第3段階におさまり、Ⅱ型式第1~2段階が主である。杯(112)には別個体の破片が溶着している。

溝42からは滑石製白玉(図Ⅳ-107:129~131)が3点出土した。

この面では古墳時代前期ないしそれ以前と考えられる溝も検出されている。まず溝9は、これまで古墳時代後期集落の区画溝のひとつとされてきたが、弥生時代後期末の器台が出土している。写真で出土状況を確認したところ、溝の底面から横位の状態で出土しており、第10a層起源と考えられる土に包含されていたことを確認した(図版23-8)。この部分は第10b層が厚く堆積しており、89-3調査区のように第11-2a面の微高地上に存在していた遺物を掘り出してしまった可能性は低い。この遺物は第10b面の遺構形成の開始時期を考える上で重要な資料である。また、溝20からは古墳時代前期に属する土師器が出土しており、その時期の遺構である可能性が高い。

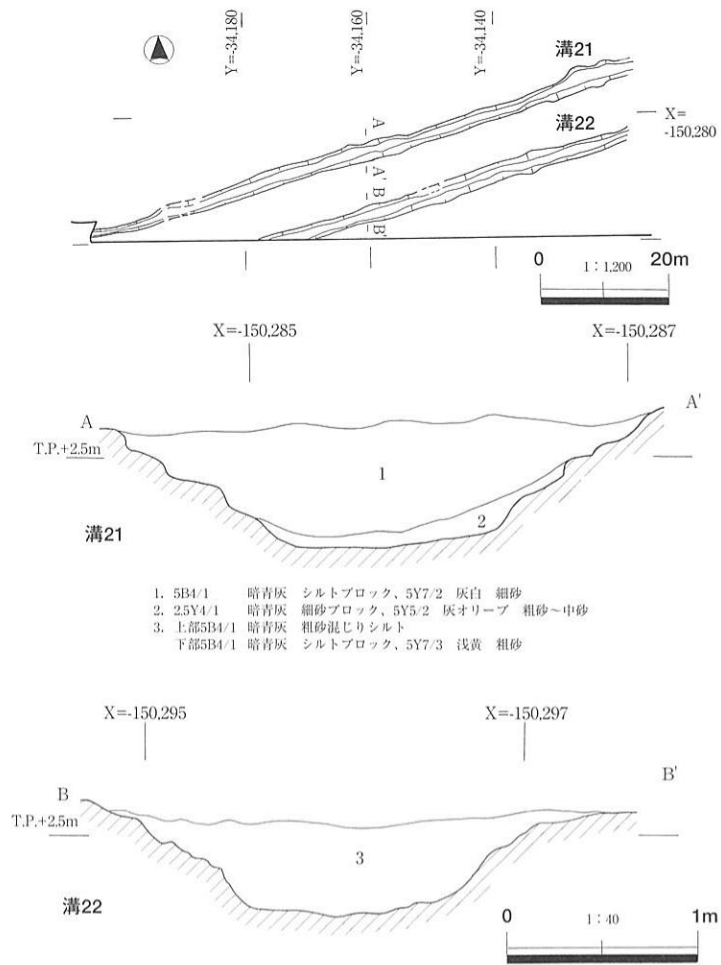
さらに、溝21・22は当地区南東部で検出された、西南西-東北東方向にのびる溝である(図Ⅳ-108)。当センターの調査では93-1調査区において検出されたが、これらは府教委86-3・87-1調査区の「溝状遺構3-201・3-202」に連続すると考えられる。また、府教委Ⅰトレンチ(第10b面は未調査)におい

て第11-2 a 面検出時に確認された「溝状遺構1・2」が、これらに連続すると思われる。ちなみに、「溝状遺構2」では布留式甕が出土しており(府発Ⅱ, pp.39-40)、93-1調査区の出土土器と時期が一致する。このように、当地区の範囲では長さ約130mにわたって、2条の溝が平行して直線的にのびることが確認された。ただし、恩智川の対岸にあたる池島Ⅰ期地区では、これらの溝の続きは検出されていないため、現在恩智川が存在している場所で収束するか、そこから南東方向に屈曲すると考えられる。なお、ピット列17・18は溝21の南側に沿って存在しており、溝と関連する遺構の可能性がある。これらの溝の性格は現段階では不明であるが、その解明の手がかりが福万寺Ⅱ期地区に存在する可能性もあり、今後の調査が期待される。

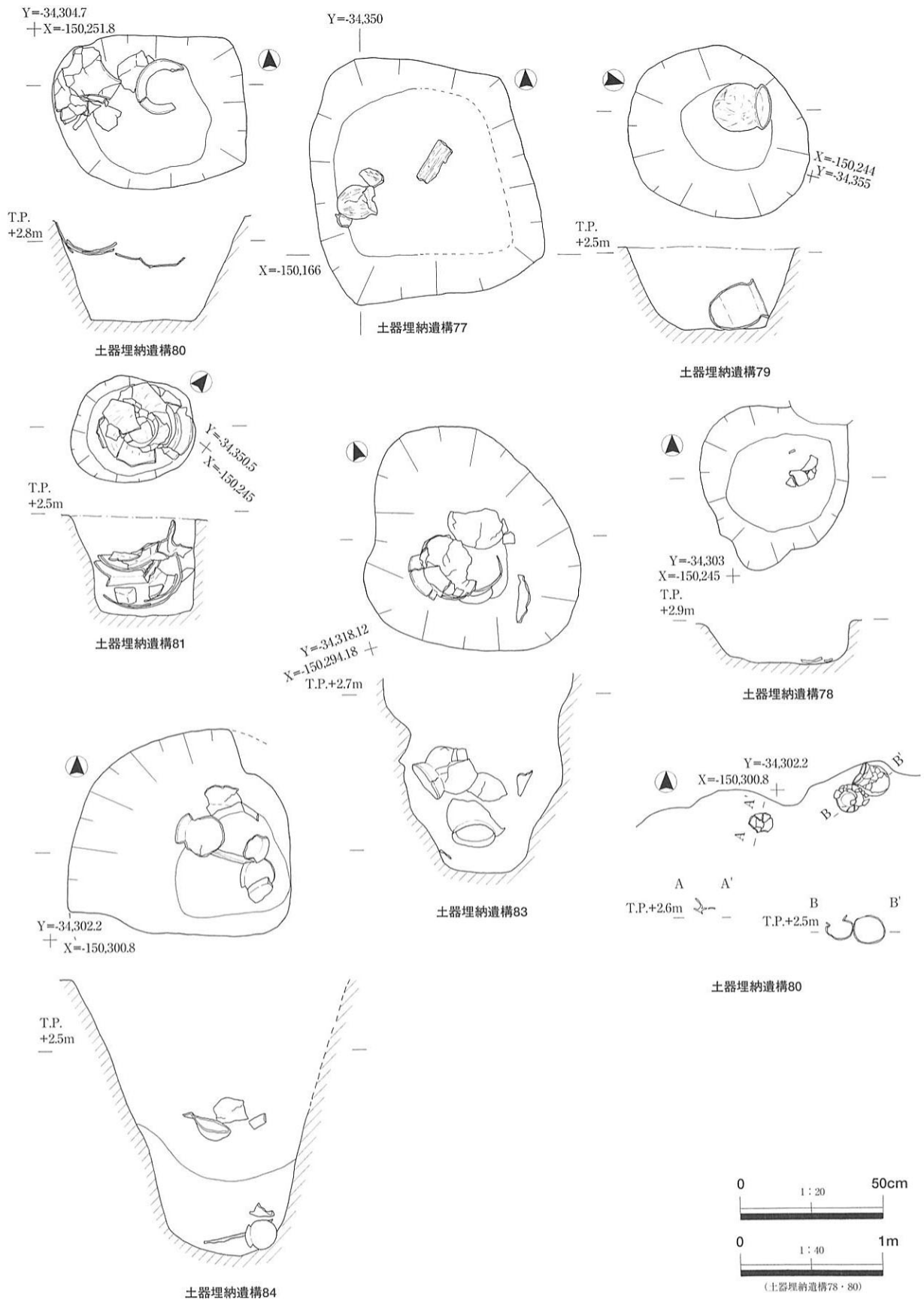
これらの溝から出土した遺物を列挙する。溝9からは弥生土器器台(図IV-103:6)が出土した。第Ⅵ様式である。溝20からは、土師器直口壺(図IV-107:116)・高杯脚(117・118)、弥生土器甕(119)、庄内式甕(120)、布留式甕(121)等が出土した。布留Ⅰ期～Ⅲ期におさまると考えられるが、高杯脚(118)が布留Ⅳ期?で、弥生土器甕(119)が第Ⅴ様式～庄内期のいずれかの時期のものである。

また、平行してのびる溝21・22のうち、前者からは弥生土器壺(図IV-107:122)、庄内式甕(123)が出土した。弥生土器は第Ⅵ様式のものである。また、後者からは布留式甕(図IV-107:125・126)、弥生土器長頸壺(124)が出土した。布留式甕は布留Ⅱ～Ⅲ期のもので、弥生土器長頸壺は第Ⅵ様式のものである。(126)は肩部に刺突文を施している。前述したように、この布留式甕と同時期のものが府教委調査区からも出土しており、これらの溝の時期を示す可能性が高い。

土器集積遺構・埋納遺構 土器集積遺構1は居住域Ⅱ-1で検出された(図版21-5)。これについては掘り形が検出されていないが、古土壌下面である第10b面に接して土器が出土したことからみて、浅く掘りくぼめた場所に土器が置かれたと考えられる。また、ここでいう土器埋納遺構とは、土器を意図的に埋め込んだ遺構の総称である(図IV-109、表IV-27)。古代以降の水田祭祀に関連する土器埋納遺構とは性格が異なるため、別名称にすることも考えたが、90-1調査区における名称を尊重して変更しなかった。古墳時代に属する土器埋納遺構は、後期のものと前期のものがそれぞれ5基ずつ検出されている。それらはすべて当地区南東部に存在する。



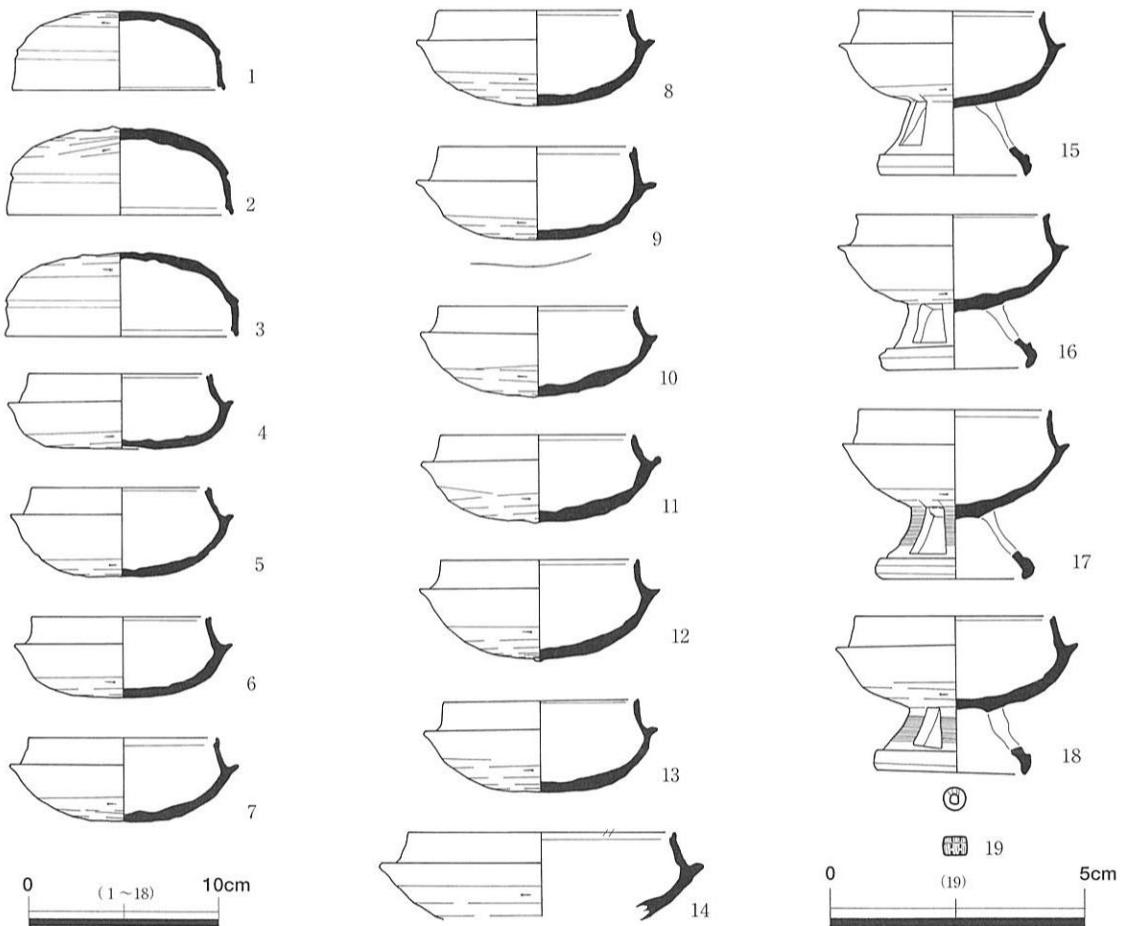
図IV-108 第10b面溝21・22



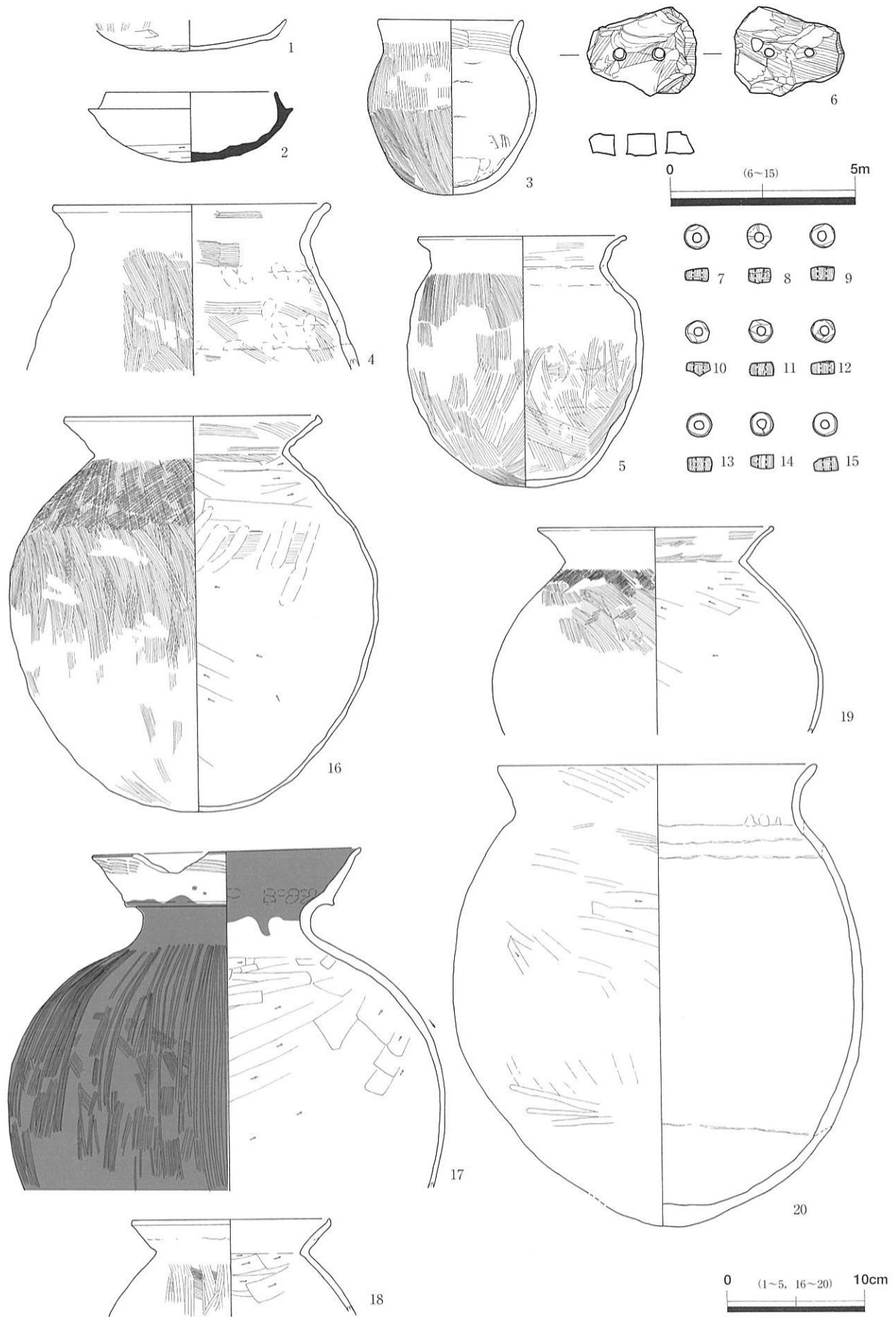
図IV-109 第10b面土器埋納遺構

表IV-27 第10b面土器埋納遺構一覧

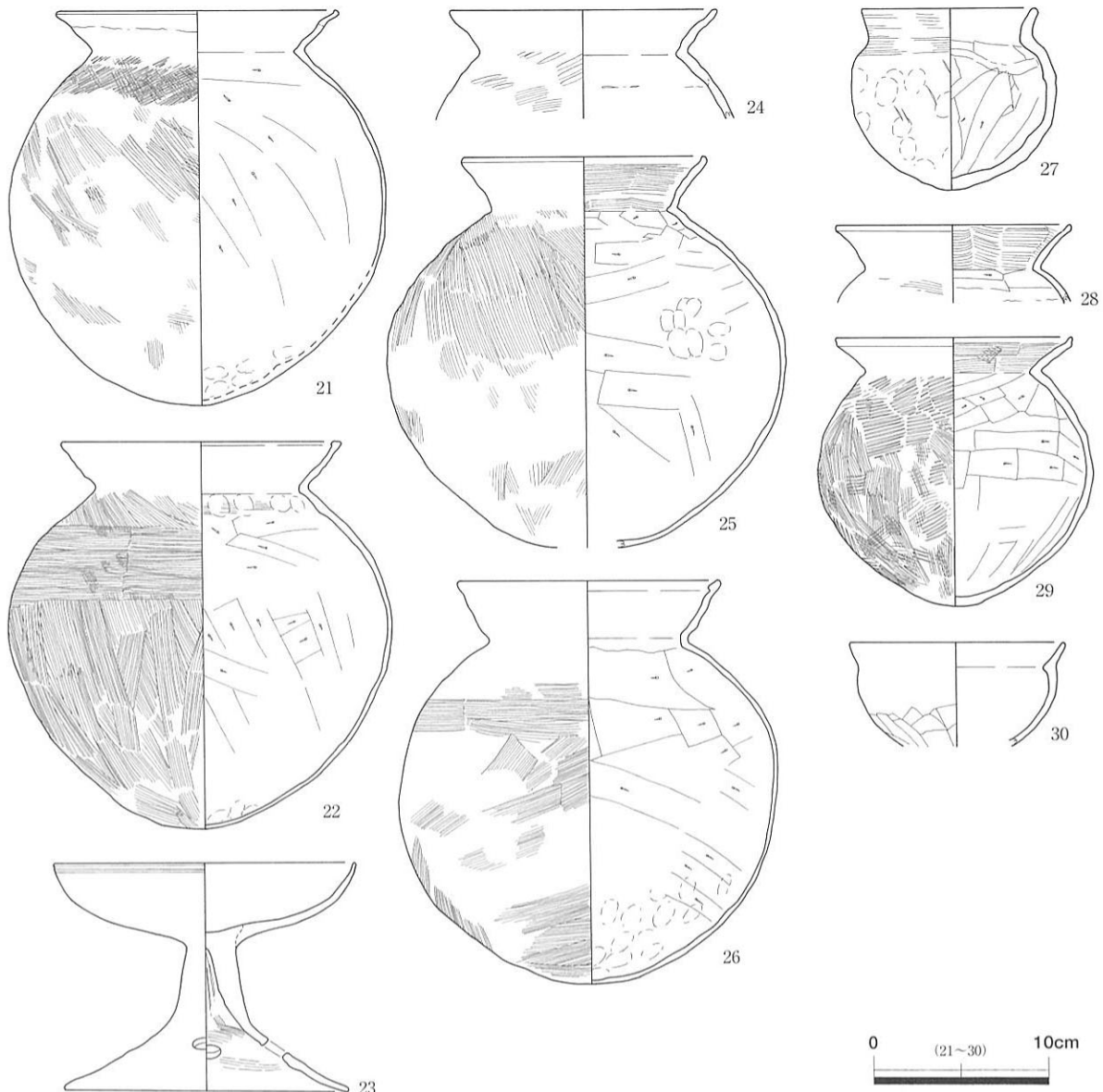
番号	調査区	調査報告時名称	出土遺物	遺構の概要		時期	備考	遺物図番号
				遺構の形態	規模(cm) 長径×短径×深さ			
土器埋納遺構80	90-1調査区 (X II)	土器埋納遺構 3	土師器甕	円形土坑	54×67×35	破片を重ねて埋納		図IV-111:16
土器埋納遺構81	90-1調査区 (X II)	土器埋納遺構10	土師器甕 3、土師器壺 1	不整形円形土坑	37×42×36	粗雑な作りの甕以外は口縁部から体部上半のみを埋納		図IV-112:17~20
土器埋納遺構82	92-7調査区 (X IV)	土坑 4	土師器甕 2	大半が調査区外	不明			図IV-112:21~23
土器埋納遺構83	92-7調査区 (X IV)	土坑 2	土師器甕 2	不整形円形土坑	直径75×70			図IV-112:24~26
土器埋納遺構84	92-7調査区 (X IV)	土坑 3	土師器甕 2、小形壺 1、鉢 1	大半が調査区外	70×75×95			図IV-112:27~30
土器埋納遺構75	90-3(A) (II)	掘り残し土器埋納ビット 6	土師器甕/鍋底部	不明	不明		6C	図IV-111:1
土器埋納遺構76	90-3(B) (VII)	掘り残し土器埋納ビット?	須恵器杯	不明	不明		II-1~2	図IV-111:2
土器埋納遺構77	90-1調査区 (X II)	土器埋納遺構 6	土師器甕、須恵器杯片、滑石製双孔円板	不整形円形土坑	83×78	土坑底面に西に偏して埋納。また、土坑底面中央に木片。	6C	図IV-111:3・4
土器埋納遺構78	90-1調査区 (X II)	土器埋納遺構 4	土師器甕	不整形円形土坑	112×104×32	正面からやや東よりに埋納	6C	図IV-111:5
土器埋納遺構79	90-1調査区 (X II)	土器埋納遺構 9	土師器甕	円形土坑	61×63×28	完形の土師器甕の口を北へ向けて倒れかかった状態で埋納。内部から滑石白玉 9点、有孔板 1点を検出。	6C	図IV-111:6~15



図IV-110 第10b面土器集積遺構 1 出土遺物



图IV-111 第10b面土器埋納遺構出土遺物①



図IV-112 第10b面土器埋納遺構出土遺物②

図IV-111 1：土器埋納遺構75，2：同76，3：同77，4：同78，5～15：同79，16：同80，17～20：同81
 図IV-112 21～23：土器埋納遺構82，24～26：同83，27～30：同84

土器集積遺構1からは須恵器杯蓋（図IV-110：1～3）・杯（4～14）・高杯（15～18）、滑石製白玉（19）が出土した。須恵器はI型式第4段階～II型式第1段階におさまる。杯（9）の外底面にはヘラ記号？が施されている。高杯（15）～（18）の透かしは3方向である。白玉の出土総数は10点である。

土器埋納遺構75からは、土師器甕か鍋底部（図IV-111：1）が出土した。6世紀ぐらいのものである。土器埋納遺構76からは須恵器杯（図IV-111：2）が出土した。II型式第1～2段階のものである。土器埋納遺構77からは土師器甕（図IV-111：3）が出土した。土師器甕は6世紀ぐらいのものである。土器埋納遺構78からは土師器甕（図IV-111：4）が出土した。6世紀ぐらいのものである。土器埋納遺構79からは、土師器甕（図IV-111：5）、滑石製双孔円板（6）・白玉（7～15）等が出土した。土師器甕は6世紀ぐらいのものである。滑石製品の総数は双孔円板1、白玉9点である。土器埋納遺構80からは庄内式甕（図IV-111：16）が出土した。布留I期のものである。土器埋納遺構81からは、土師器複合口縁

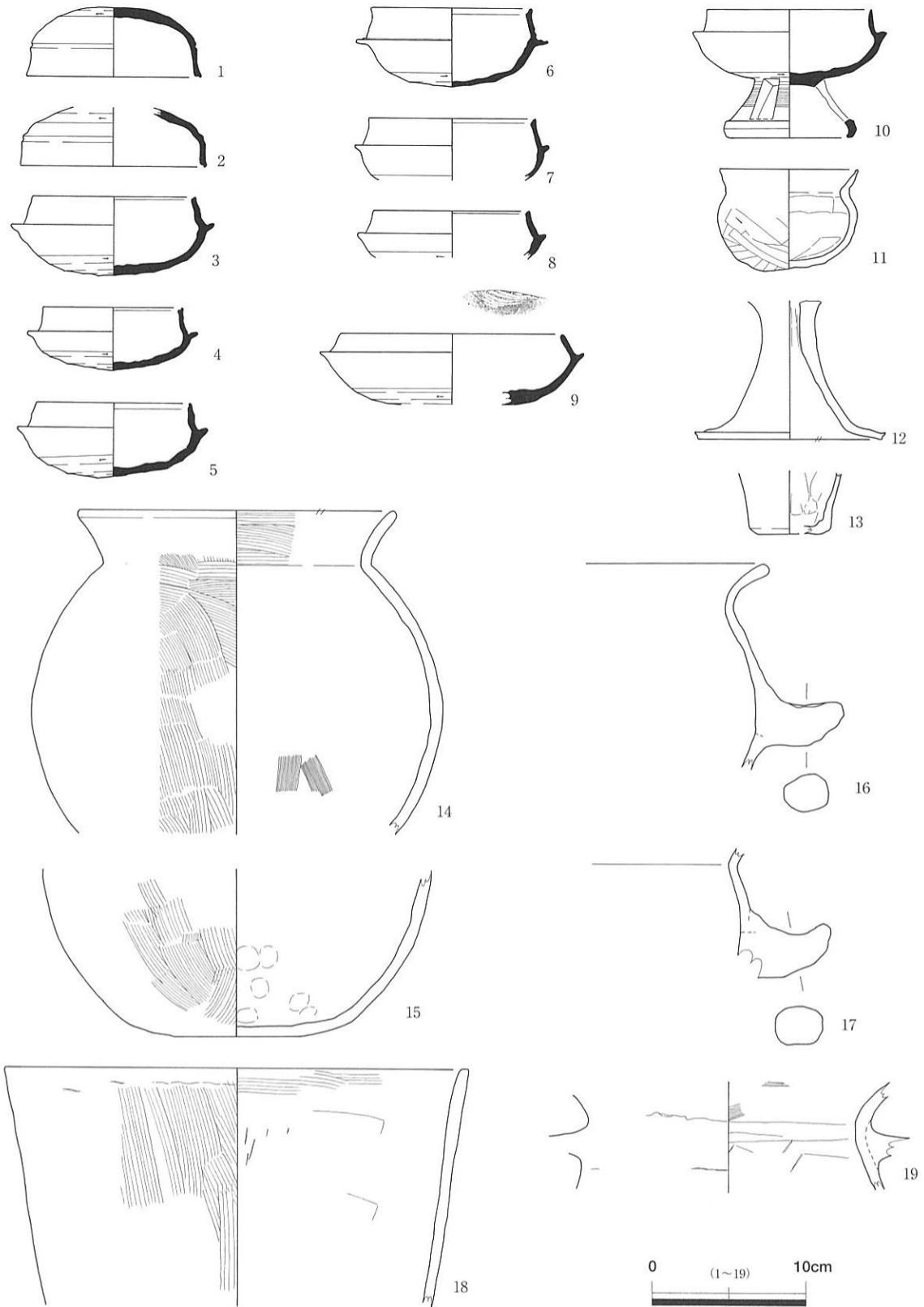
壺(図Ⅳ-111:17)・甕(20)、庄内式甕(18・19)等が出土した。布留Ⅰ期のものと思われる。土師器複合口縁壺は山陰・北陸地方系と思われるが、胎土は生駒西麓産である。口縁部には打ち欠きかと思われる欠けがあり、外面頸部以下と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。胴部以下には赤色顔料の下に黒色物質が塗布されている。土師器甕は撰津系と思われる形態をしている。土器埋納遺構82からは、庄内式甕(図Ⅳ-112:21)、布留式甕(22)、弥生土器高杯(23)が出土した。このうち、前二者は後者と離れて存在しており、別遺構の可能性が高い。(21)・(22)が布留Ⅰ期のもので、弥生土器高杯は第Ⅵ様式～庄内期にかけてのものと思われる。土器埋納遺構83からは、庄内式甕(図Ⅳ-112:25)、布留式甕(26)、弥生土器甕(24)が出土した。(25)・(26)が布留Ⅰ～Ⅱ期のもので、弥生土器甕は第Ⅵ様式～庄内期にかけてのものである。後者は破片であり、混入の可能性もある。土器埋納遺構84からは、土師器小形壺(図Ⅳ-112:27)・鉢(30)、庄内式甕(28・29)等が出土した。このうち、(27)・(28)が上層、(29)・(30)が下層から出土した。(27)は庄内期ごろ、(28)が布留Ⅰ期のものと思われ、(29)が庄内Ⅲ期、(30)が庄内Ⅰ期のものと思われる。

その他の遺構 居住域Ⅱ-1内で検出された落ち込み1は溝15に切られている。この遺構内には土器が散在していた。また、小溝群も12ヶ所で検出されている(図版22-5)。これらは第10a層と考えられる土壌で充填されており、深さ10cm程度のもが多い。溝の底面は凹凸が激しく、肩がほぼまっすぐに立ち上がるものもある。溝の間隔は30～40cm程度のもが多い。これらについては「畝溝状遺構」と呼称されていたが、こうした特徴からみて、畝間の溝ではなく、畝作土形成に関わる耕作痕の可能性が高い(松田・バリノ・サーヴェイ1996・佐藤1998)。なお、居住域Ⅰの区画内にある耕作痕12について、概要Ⅱでは溝のひとつが建物4の柱穴に切られるように図示されていたが、平面図を確認したところ、溝のほうが柱穴を切っていたことが判明した。なお、前述した溝40は耕作痕12に接しており、溝の向きに共通性が認められる。このことは、溝40が耕作痕12の一部であった可能性を示唆している。それが正しければ、溝40から出土したⅡ型式第4段階の須恵器杯から考えて、この耕作痕は居住域Ⅰの廃絶後に形成された可能性も考えられる。また、建物2に隣接する耕作痕2からは、比較的多くの遺物が出土した。その中には土師器甕の破片も含まれており、本来は建物2の周囲に廃棄された遺物であった可能性がある。さらに、居住域Ⅰの外側にある耕作痕7は建物7の柱穴に切られており、建物以前の遺構と考えられる。

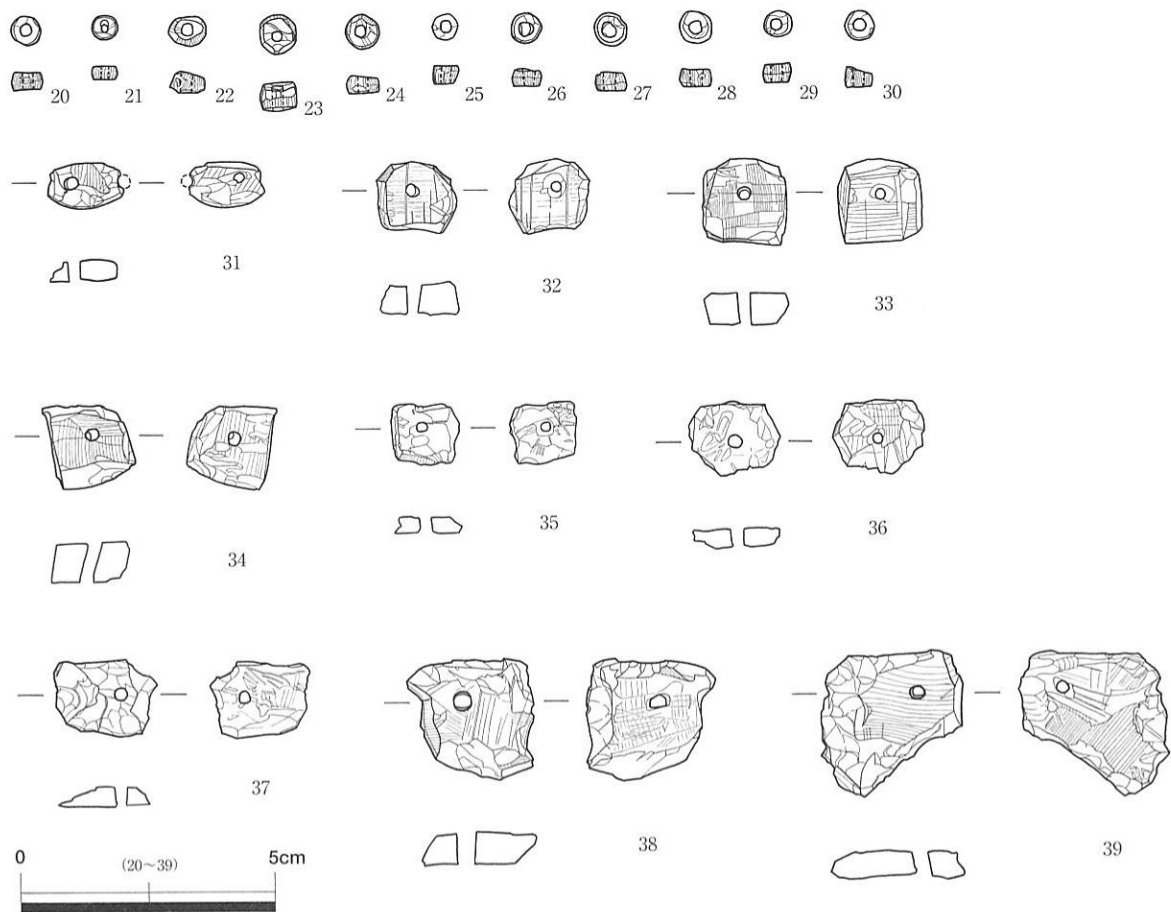
その他、ピット列も16ヶ所で検出された。これらの時期は不明であるものの、第9a面でみられた正方位地割とは全く合わず、微高地の縁辺付近で多く検出された点からみて、古墳時代に属する可能性がある。ただし、これらが同時に存在していたどうかは不明である。

次に、落ち込み・耕作痕などから出土した遺物を列挙する。落ち込み1からは、須恵器杯蓋(図Ⅳ-113・114:1・2)・杯(3～9)・高杯(10)、土師器小型丸底壺(11)・高杯脚(12)・ミニチュア土器(13)・甕(14)・鍋(15～17)・甌(18)・羽釜(19)、滑石製品(20～39)等が出土した。須恵器はⅠ型式第4段階～Ⅱ型式第2段階におさまる。土師器は6世紀かと思われるものがほとんどである。滑石製品は白玉(20～30)、双孔円板(31)、有孔円板(32～39)である。総数は双孔円板1、有孔円板8、白玉293点が出土した。

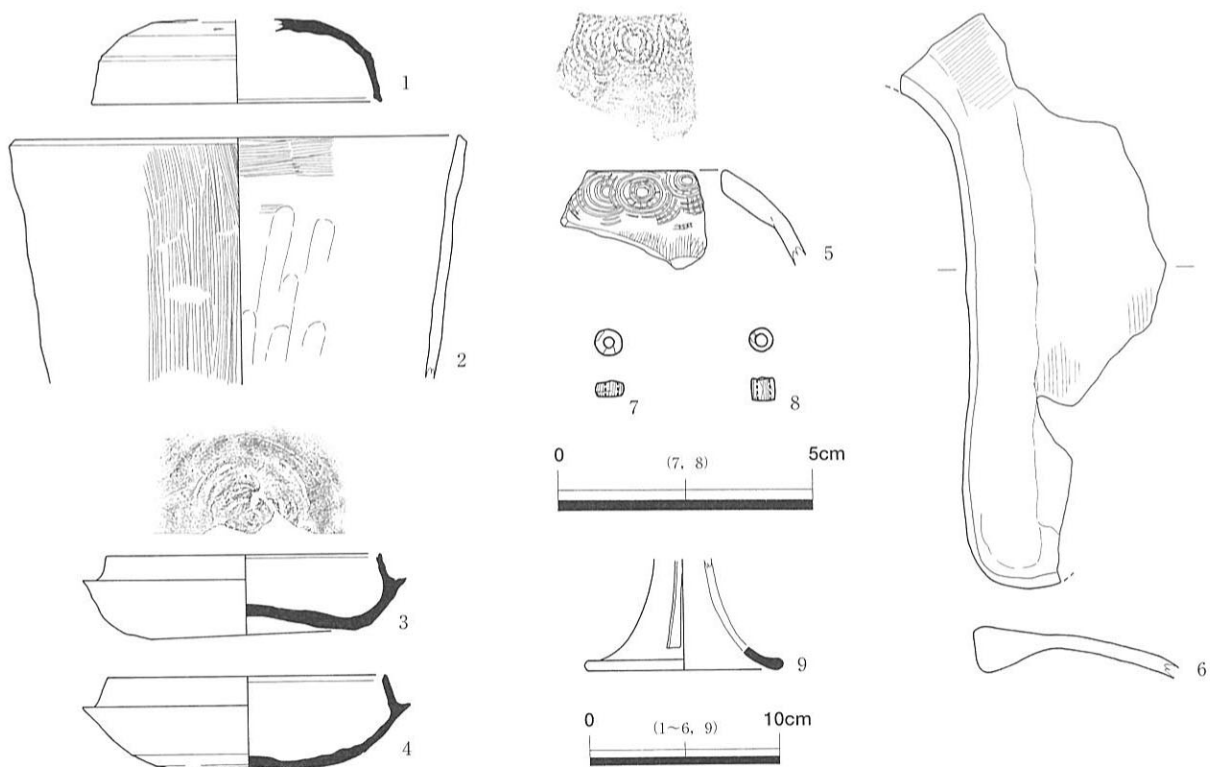
耕作痕1からは須恵器杯蓋(図Ⅳ-115:1)、土師器甌(3)が出土した。須恵器はⅡ型式第2段階のもので、土師器甌は6世紀ぐらいのものである。耕作痕2からは須恵器杯(図Ⅳ-115:4・5)、土師器甕(6・7)、滑石製白玉(8・9)が出土した。須恵器杯はⅡ型式第1段階のものである。甕(6)



図IV-113 第10b面落ち込み1出土遺物①



図IV-114 第10b面落ち込み1出土遺物②



図IV-115 第10b面耕作痕出土遺物

1・2：耕作痕1，3～8：耕作痕2，9：耕作痕12

は口縁部外面に同心円文スタンプを施している。(7)は焚き口下部で支脚状に突出している。白玉は2点出土した。耕作痕12からは須恵器高杯脚(図Ⅳ-115:2)が出土した。Ⅱ型式第2段階のものである。

小結 第10b面では主に、古墳時代前期の遺構と中期後半～後期の遺構が検出された。このうち前者に関しては、遺構分布の中心が調査範囲外に存在する可能性が高いため、現状では十分な評価ができない。したがって、ここでは後者の遺構に着目して、古墳時代中期後半～後期の集落の概要を復原したい。

a. 居住域の実態

前述のように、第10b面の建物群は周囲を囲む区画溝の存在から細分が可能であり、居住域Ⅰ・Ⅱ-1・Ⅱ-2という居住単位を復原した。ここではまず、これらの実態について検討したい。

まず居住域Ⅰについては、江浦(1991b)による復原がある。江浦は、建物1の溝と建物4の柱穴という隣接する遺構の関係について、検出段階が異なったことを層位関係とみなし、建物4→建物1という変遷を考えた。さらに、建物6と建物1の軸が揃うことから両者を同時存在とみなし、この区域の建物群を大きく2時期にわけた。遺構に切り合い関係がないため、この仮説の当否は判断できないが、1時期に掘立柱建物が数棟存在し、竪穴建物1棟、水溜1基、小規模な畠などが伴っていたという想定は可能であろう。なお、この竪穴建物の周辺からは竈・羽釜・甗の破片が出土しており、住居ではなく、「竈屋」としての性格が想定されている。この区域で時期が判明した建物は少ないが、Ⅱ型式第1～2段階の須恵器が柱穴に埋納された事例などから、6世紀前葉～中葉の幅でとらえることができる。なお、建物1・4など、この居住域を構成する建物は、居住域Ⅱ-1・2の建物と比べて規模が大きい点も注意される。

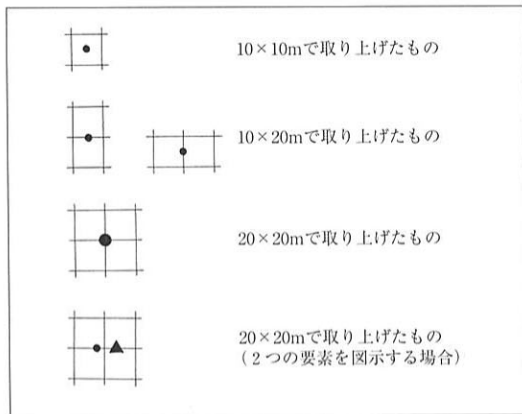
居住域Ⅱ-1からは、竪穴建物と掘立柱建物が検出されている。飛鳥時代に属する可能性のあるものと、認定に疑問の残る「建物21・22」を除くと、前者が4基、後者が9基となる。前者のうち、建物30からは作り付け竈が検出されており、「竈屋」としての性格が想定されている。これらのうち、時期が判明しているのは少ないが、建物12はⅠ型式第4段階の須恵器が出土し、当地区では最も古い5世紀後半のものであることが判明している。また、Ⅱ型式第1～2段階の建物も存在しており、6世紀中葉まで、建て替えが繰り返されたことがわかる。なお、この区域からは井戸も2基検出されている。こうした状況から考えると、この区域でも1時期の状況は、竪穴建物ないし掘立柱建物数棟に「竈屋」や井戸が伴うものであった可能性が高い。なお、「竈屋」と想定される建物は建物30しか検出されていないが、作り付け竈と推定された2つの遺構の時期が異なる可能性や、土師器炊飯具を伴う簡単な施設が存在した可能性を検討する必要がある。

また、居住域Ⅱ-2からは、掘立柱建物5棟、「竈屋」の可能性も指摘された竪穴1基、井戸1基が検出されている。建物の順序は不明であるものの、1時期の状況としては他の居住域と類似したものであったと考えられる。

その他、居住域とは離れた位置で、建物や井戸が単独で検出される場合がある。建物7や井戸48である。建物24・36もこれに含まれる可能性があるが、両者の周囲には未調査部分が広がっており、断定はできない。また、居住域の周囲には畠も広がっていたようで、耕作痕が複数検出されている。

b. 遺物の特徴と出土傾向

この集落に関連すると考えられる遺物は、須恵器の型式でいうとⅠ型式第5段階～Ⅱ型式第2段階ぐらいのものが多く、そして、その中にⅠ型式第1～2段階のものが若干混じるという状況である。また、古墳時代の遺構に関連する第10a層は、第8a層・第9a層段階の耕作によって大きく削られており、本来第10a層に含まれていた遺物の多くが第8a層・第9a層から出土した。したがって、この遺構群を評価するためには、第8a層・第9a層の出土遺物も含めて検討する必要がある。この場合、遺物が後世の耕作によって大きく移動した可能性もあり、これらの層準の遺物出土位置を第10b面の遺構と直結させて理解することには危険が伴う。しかし、第10b面の遺構が集中する部分と第8a層・第9a層の遺物集中範囲を比較すると、両者の間には対応関係が認められる。したがって、上層の遺物出土傾向を居住域単位で整理する程度であれば、一定の意味があると思われる。



図Ⅳ-116 遺物出土位置図凡例

第8a層・第9a層出土遺物のうち、居住域Ⅰ・Ⅱにあたる位置から出土したものについては図Ⅳ-54～57・65～72に記載した。Ⅱ周辺としたものは、主に居住域Ⅱ外側の南西部から出土したものである。これを見てもわかるように、遺物の多くが居住域Ⅱにあたる位置から出土している。さらにいえば、それらは居住域Ⅱ-1部分に集中する傾向がある。須恵器を見ても、居住域Ⅱ-1から出土したものは5世紀後半から6世紀中頃までの各時期のものを含み、それより先行する須恵器もわずかに



図Ⅳ-117 第10b面関連遺物出土位置①(須恵器器台)

出土している。これに対し、居住域Ⅰ部分から出土したものは、韓式系土器甕を除けば6世紀前葉～中頃にあたるものである。こうした事実は調査段階から注目されており、居住域Ⅱ-1が先行して形成され、やや遅れて居住域ⅠやⅡ-2の形成が始まると推測されていた。このことは、各居住域内の建物の時期とも整合する。

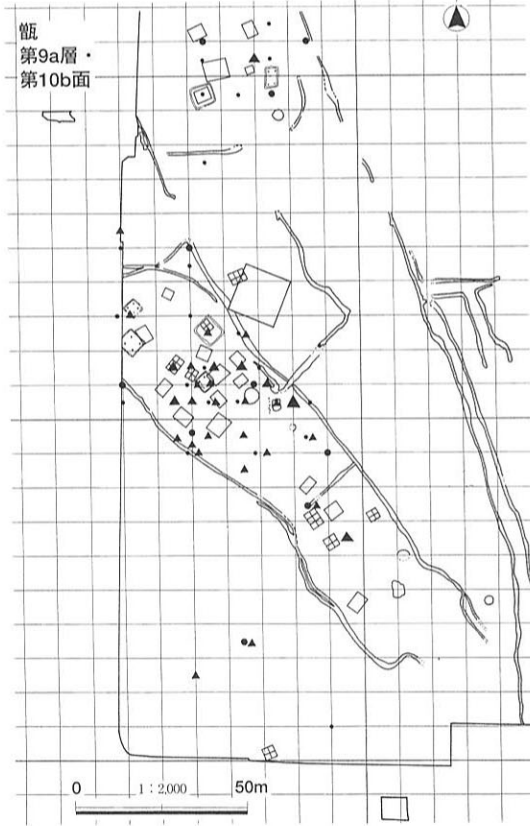
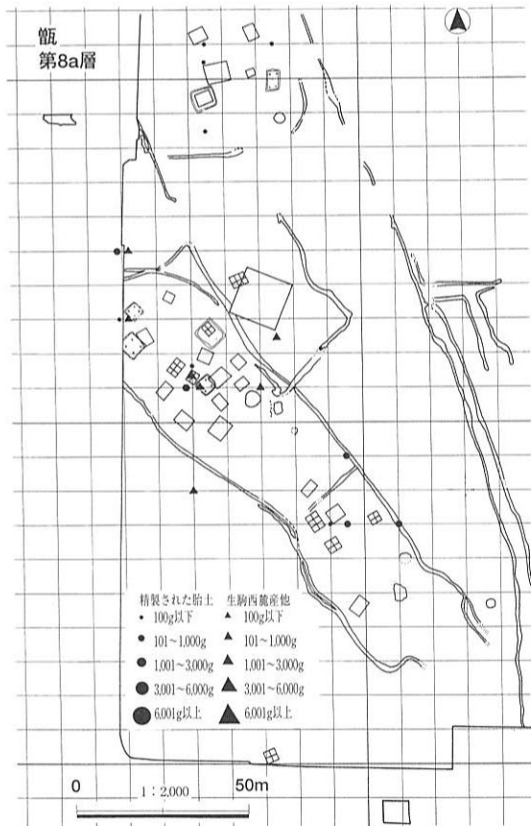
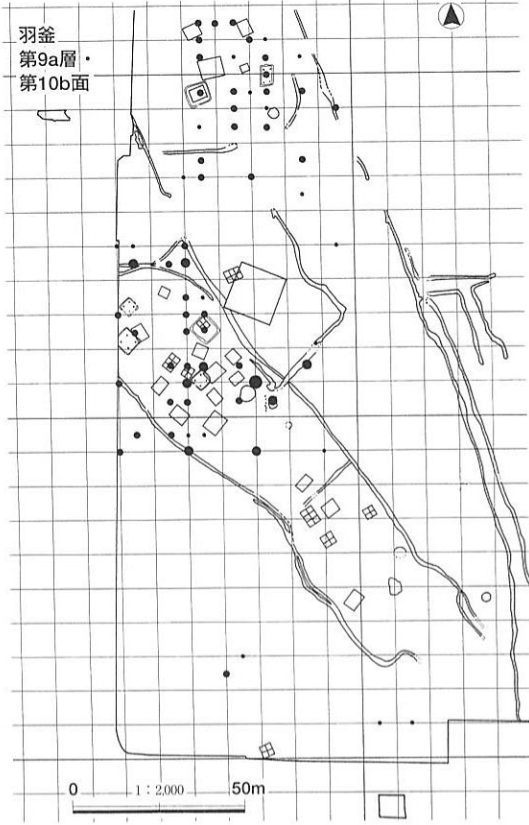
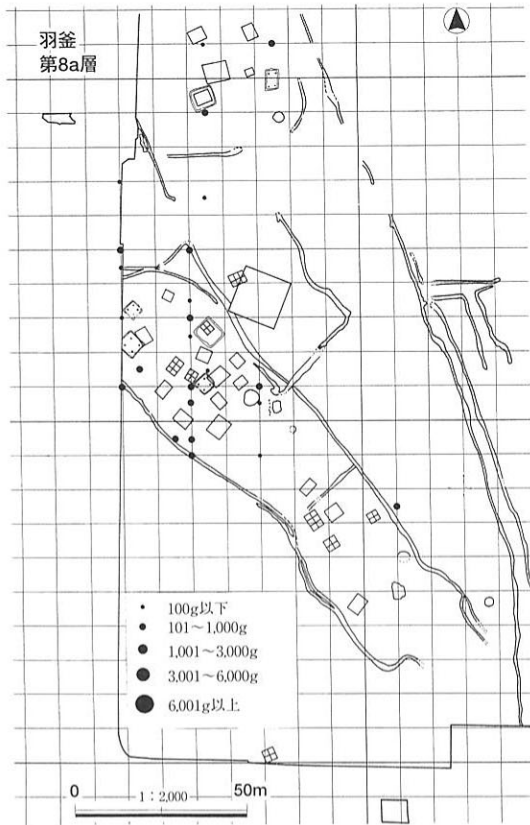
なお、第8a層～第10b面から出土している須恵器のヘラ記号についてまとめると、施されている器種は杯が多く、次いで杯蓋で、壺、甕、器台、高杯にも少し見られる。時期的に見るとⅠ型式第4段階～Ⅱ型式第6段階までのものに施され、多いのはⅠ型式第5段階のものとⅡ型式第2段階のもので、次いでⅡ型式第1段階のものである。ただし、これはその時期の遺物出土量が多いため、結果的にそうなたただけかもしれない。ヘラ記号は1条、2条、3条、4条、6条で書かれたものと、○に×印のもの、竹管文のものがある。その中で多いのは1条のものであり、次いで2条のものが多く見られる。2条のものは、平行状のもの、×印のもの、V字状のもの、+印のもの（器台に書かれたもの）がある。

須恵器の中で注目される遺物は、須恵器大甕（図Ⅳ-72:203）や韓式系土器甕（図Ⅳ-67:58）である。これらは5世紀中頃～後半と、集落の時期に先行するか、開始期のものである。出土位置は居住域Ⅰ、Ⅱ-1、Ⅱ周辺であり、居住域との関連を推測させる。特に、韓式系土器甕の破片は居住域Ⅰの建物1・4周辺の狭い範囲からまとまって出土しており、これらの建物と関連する可能性も考えられる。これらについては、集団の移動とともに、時期的に遡る土器が持ち込まれたとする推定がなされている（森本1997）。江浦（1991b）において、韓式系土器甕が居住した集団の出自を示すと想定されたのも、同様の考え方にもとづいている。

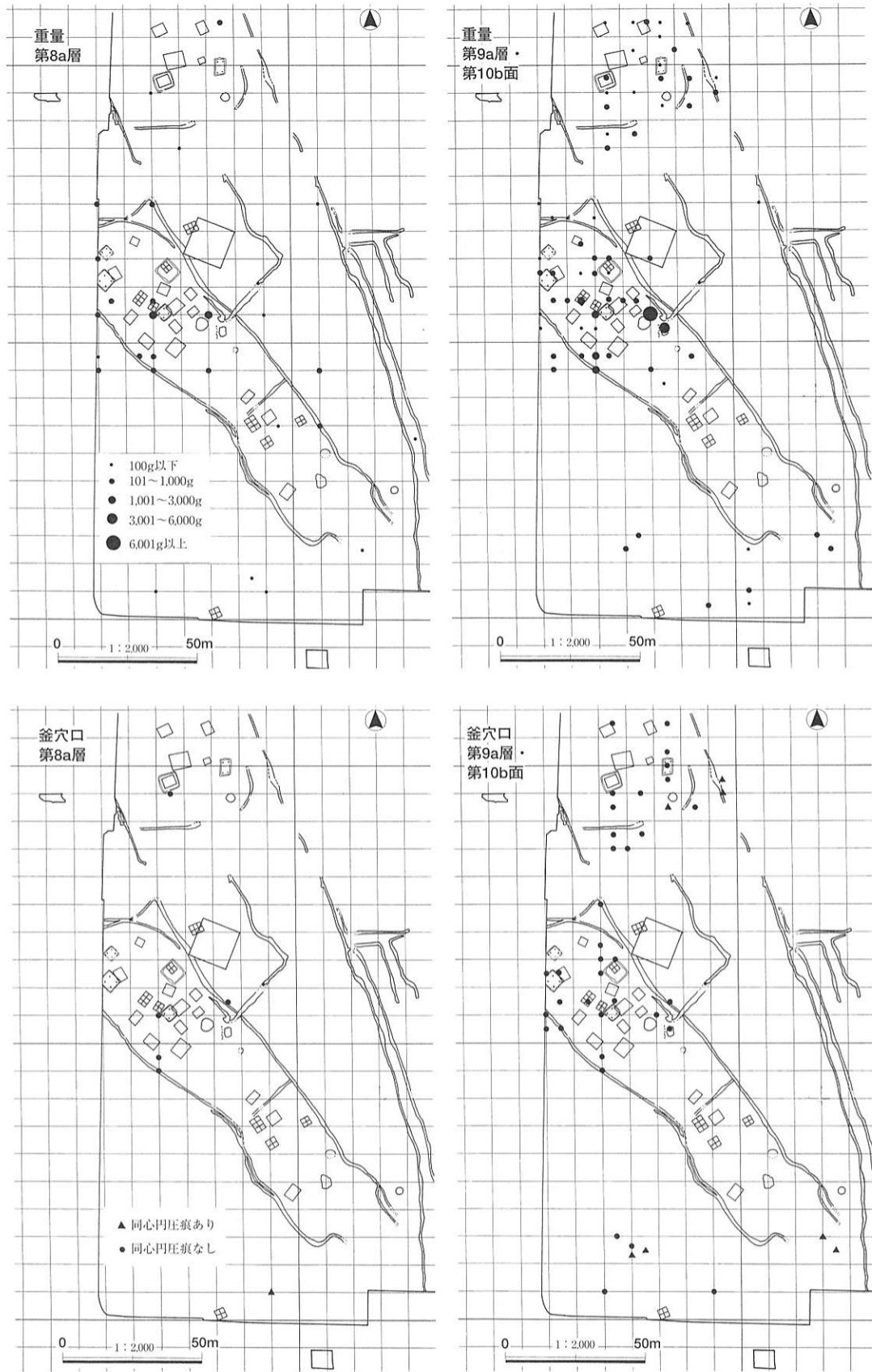
次に、須恵器器台、土師器炊飯具、動物遺存体、滑石製玉類について、出土位置を図示して説明したい（図Ⅳ-116～121）。当初、第Ⅳ区画の10mグリッドごとに遺物の出土量を示そうとしたが、遺物の取り上げが10×20m、20×20mの範囲など、掘削作業の単位にしたがっておこなわれており、一定の面積で取り上げられてはいなかった。このため、10mグリッドごとに遺物の量を集計することができなかったので、図Ⅳ-116に示すように、現地で取り上げられた状態に即した表示方法をとった。この表示方法では、ひとつのグリッドから出土した遺物が複数のドットで表示される場合が生じてしまうが、二重にカウントされることはないので、出土傾向の概略を読み取ることは可能である。なお、土器片については重量、動物遺存体・玉類については個数で表示した。

須恵器器台（図Ⅳ-117）は個体数が少なく、特徴的であるため、個体識別が比較的容易であった。その分布状況をみると、まず、層位的には第8a層と第9a層から出土したものが接合した。また、平面的にも約50m離れて出土したものが接合した。これらは、第10a層埋没後の耕作の影響による遺物移動のあり方を示しており、この面に関連した遺物分布を評価する際には考慮すべき事実である。このような問題もあるが、大局的にみて須恵器器台が居住域Ⅱ-1を中心に分布していることは確かであろう。

また、炊飯具のセットである羽釜・甑（図Ⅳ-118）、竈（図Ⅳ-119）については、居住域Ⅰ、居住域Ⅱ-1という2つの分布の中心が存在することがわかる。居住域Ⅱ-1についていえば、区画中央部の建物集中地点に多いという傾向が認められる。なお図の範囲外であるが、居住域Ⅱ-2外の南東にあたる89-3調査区でも、竈の破片が出土している。また、甑については、生駒西麓産の胎土のものと、砂粒をほとんど含まない精良な胎土のものが存在する。甑のうち実測図を掲載したものは一部であるが、掲載しなかった細片も含めて検討すると、胎土の違いに対応して、口縁端部の仕上げ方に一定の傾向が認められる。すなわち、生駒西麓の胎土の甑は端部がやや外反して丸くおさまるもの（図Ⅳ-95:161）や、



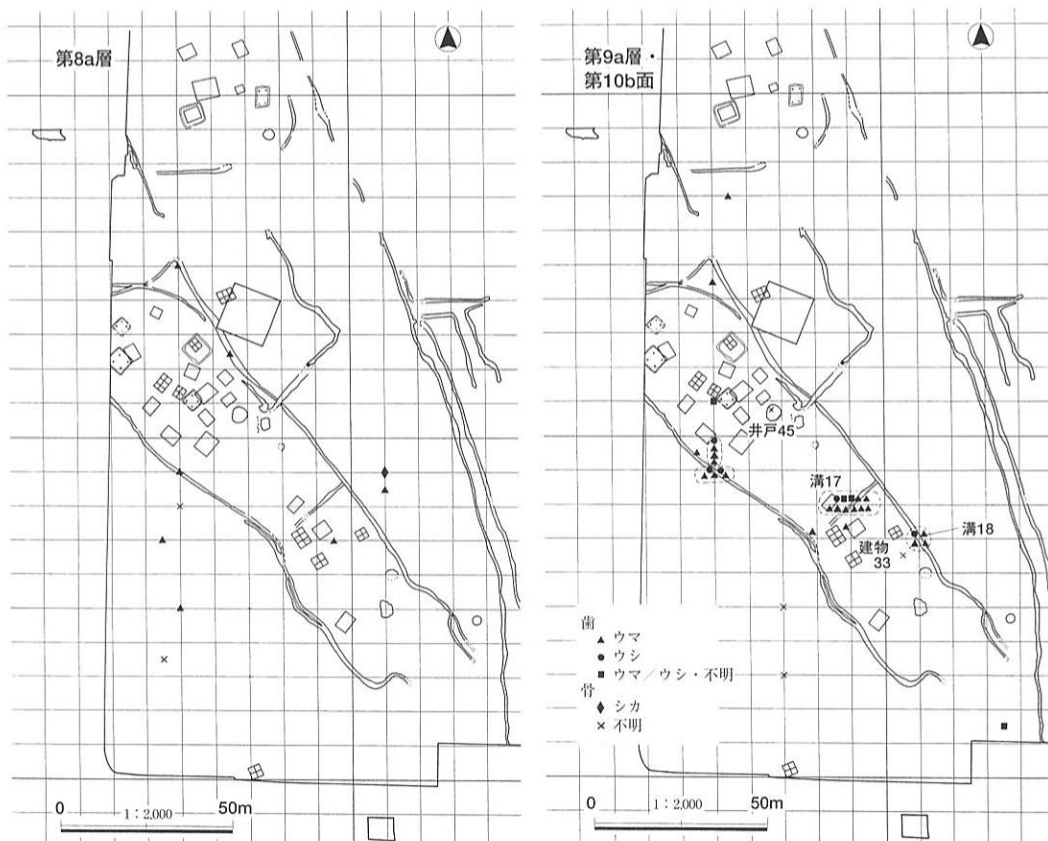
図IV-118 第10b面関連遺物出土位置②(羽釜・甌)



図IV-119 第10b面関連遺物出土位置③(竈)

端部を面取りしたもの（図Ⅳ-95：18）が多く、外側に面を持つように仕上げられるものもある（図Ⅳ-115：3）。これに対し、精良な胎土のものは、端部を面取りしたものについては内面側の端を肥厚させるものが多く、内面側に凸帯をめぐらすもの（図Ⅳ-106：100）も複数存在する。また、竈については釜穴口に同心円文スタンプが施されるものが注意されていたが、これについては居住域Ⅰや居住域Ⅱ-2外の南東側・南西側などから出土している。居住域Ⅱ-1からは同心円文スタンプがないものが出土しているが、竈についてはほとんど接合できておらず、同心円文スタンプがないと判断したものの中に焚口部の破片が混じっている可能性も否定することはできない。なお、甌や竈の個体数については把手の数からの推定がなされている。居住域Ⅰからは竈の把手と考えられるものが14点出土している。また、把手以外の特徴からみた甌の最低個体数は、精良な胎土のもの4個体、生駒西麓産のもの1個体であるが、把手からみると後者は最低3個体存在していた可能性が指摘されている（概要Ⅱ，pp.54-56）。また、居住域Ⅱについては把手の大半がⅡ-1の範囲から出土している。その内訳は精良な胎土のものが18個、生駒西麓産のものが284個である。第8a層・第9a層には古墳時代以降のものも含まれている可能性があるが、第10b面に近いほど出土量が増える傾向があるので、その多くは古墳時代のものである可能性が高い。このうち、生駒西麓産のものに注目すると、竈にしては小さなものが106個、竈の可能性が考えられるものが178個ある。時期の特定が難しいことを考慮しても、古墳時代集落の継続期間中に50個体以上の竈が存在していた可能性が高い。なお、居住域Ⅰから出土した炊飯具セットの多くに煤の付着など、使用した痕跡が認められるため、こうした炊飯具のセットは日常的に使用されていたと推定されている。ただし、居住域Ⅱ-1の建物30には作り付け竈が存在しており、この居住域出土の竈の全てがこの区域で使用されるためのものであったかどうかについては、問題が残る。

動物遺存体（図Ⅳ-120・表Ⅳ-28）については、ウマ、ウシ、シカの骨を確認している⁶⁾。第8a層



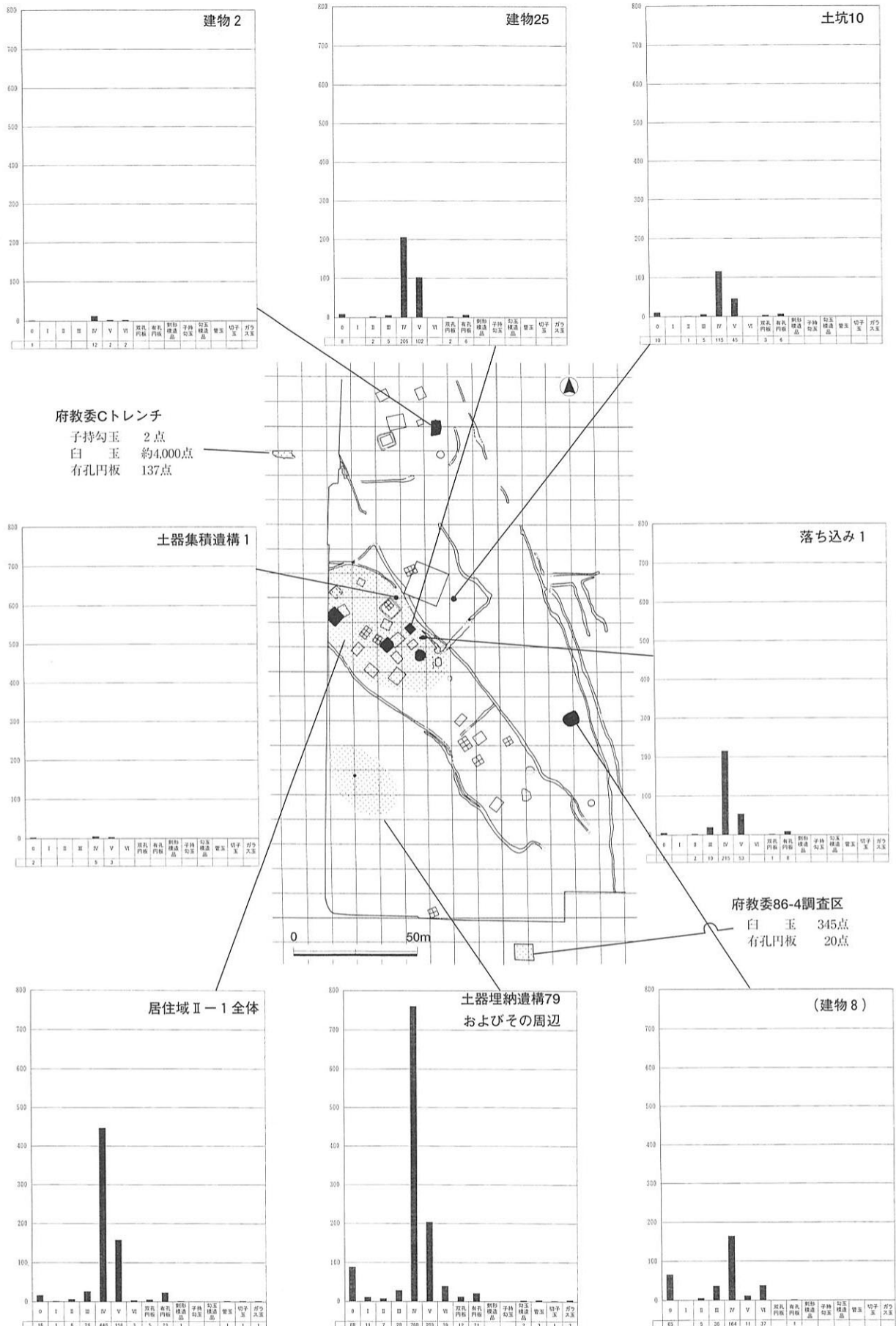
図Ⅳ-120 第10b面関連遺物出土位置④（動物遺存体）

・第9 a層から出土したものの中には飛鳥時代～平安時代に属するものが含まれている可能性もあるが、居住域の区画溝である溝17や、居住域縁辺から出土したものが多く注意される。特に、溝17では3～4本の歯が並んだ状態で出土した地点を3ヶ所確認した(図版21-8)。これらは、歯が上顎や下顎骨についた状態で廃棄され、埋没過程や埋没後の腐食によって大半が消滅したものと考えられる。また、居住域縁辺で出土したものについても、同様な形で廃棄されたものが二次的に移動した可能性がある。さらに、出土したのが比較的遺存しやすい歯であり、上顎や下顎骨が消滅したと考えられることを考慮すると、他の部位の骨も本来廃棄されており、地表面に露出している段階ないし埋没後に消滅した可能性が考えられる。

ここで注目されるのは、ウマだけでなく、ウシの歯の存在も確認されたことである。ウシの普及時期は6世紀後半～飛鳥時代前半と考えられるが、やや古い例として大阪市瓜破遺跡の事例や、長原遺跡の6世紀前半とみられる偶蹄目の足跡があげられている(久保2000)。当遺跡の事例は共伴した土器から6世紀前葉～中頃と考えられ、比較的古い事例といえる。

表IV-28 第10b面関連動物遺存体一覧

出土層位・遺構面	調査区	調査時の		登録番号	種名	部位	左右	部分	観察
		出土層位	遺構名称						
第8～9a層	90-1	14～16-1層	南北・東西セクション	990	ウマ	臼歯破片			
第8a～9a層	90-1	15～16層	南側溝	801	ウマ	上顎臼歯	左		
第9a層	90-1	16-1層		325	ウマ	上顎臼歯	右		
第9a層	90-1	16-1層		325	ウシ	上顎臼歯	右		M2/M3(短いもの)
第9a層	90-1	16-1層		325	ウマ	臼歯破片			
第9a層	90-1	16-1層		325	ウマ	臼歯破片			
第9a層	90-1	16-1層		501	ウマ	下顎臼歯	右		若い
第9a層	90-1	16-2層		504	シカ	上顎骨	右		オス、角座
第9a層	90-1	16-1層		325	ウマ	上顎臼歯	左		
第9a層	90-1	16-1層		325	ウマ	下顎臼歯			
第9a層	90-1	16層		928	ウマ	下顎臼歯	右		
第9a層	90-1	16層		928	ウマ	上顎臼歯	右		
第9a層	90-1	16層		961	ウマ	下顎臼歯	不明		
第9a層	90-1	16層		962	ウシ?	臼歯?			
第9a層	90-1	16層		963	ウマ	臼歯破片			
第9a層	90-1	16層		971	ウマ	下顎臼歯	左		
第9a層	90-1	16層		980	ウマ	上顎臼歯	左		
第9a層	90-1	16層		982	ウマ	上顎臼歯	左		
第9a層	90-1	16-1層		1002	ウマ	臼歯破片			
第9a層	90-1	16-1層		1003	ウシ	臼歯破片			
第9a層	90-1	16-1層		1004	ウシ	上顎臼歯	右		M2/M3
第9a層	90-1	16-1層		1010	ウマ/ウシ	歯破片			エナメル質
第9a層	90-1	16-1層		2519	不明	骨破片			
第9a層	90-1	16-1層		2528	不明	骨破片			
第9a層	90-1	16-2面		1571	不明	骨破片			
第9a層	90-1	16-1層		2513	ウマ	上顎臼歯	右		6.7才
第9a層	90-1	16-1層		2588	ウマ	下顎臼歯	右		第一後臼歯
第9a層	90-1			91②	ウマ	臼歯破片			
第9a層	90-3	11層		183	ウマ	上顎臼歯	左		M3
第9a層	90-3	11層		184	ウマ	臼歯破片			
第10b面	89-3	11-1面		296	ウマ/ウシ	歯破片			
第10b面	90-1	16-1面・土器4		275	不明	不明	不明		
第10b面・ビット33	90-1	16-2面	ビット2987	2640	ウマ	上顎臼歯	右		
第10b面・建物33	90-1	16-2面	建物25柱穴	2644	ウマ	下顎臼歯	左		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-1	2531	ウシ/ウマ	歯破片			エナメル質
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-2	2532	ウマ	臼歯破片			
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-15	2554	ウシ	下顎臼歯破片			計4点
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-17	2556	ウマ	臼歯破片			
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-20	2559	ウマ	切歯	不明		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-23	2562	ウマ	上顎臼歯	左		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-23	2562	ウマ	上顎臼歯	左		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-23	2562	ウマ	上顎臼歯	左		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-43	2582	ウマ	下顎臼歯	右		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-44	2583	ウマ	上顎臼歯	左		M1?
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-45	2584	ウマ	下顎臼歯	右		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-46	2585	ウマ/ウシ	臼歯破片			
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-58	2691	ウマ	下顎臼歯	左		
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-24	2563	ウマ	切歯			
第10b面・溝17	90-1	16-2面	溝314-78	2720	ウマ	上顎臼歯破片			
第10b面・溝18	90-1	16-2面	溝313	351	ウマ	上顎臼歯	左		



図IV-121 第10b面関連遺物出土位置⑤(玉類)

滑石製玉類（図IV-121）については遺構内から出土した場合と、一定の範囲から大量の玉類が出土した場合がある。前者には土坑10や建物2などがあり、祭祀に使用された後に遺棄されたものを含む可能性がある。一方、後者には「建物8」とされた部分の落ち込み内、居住域II-2外側南西部（「土器埋納遺構79およびその周辺」としたものの、土器埋納遺構出土資料の数は白玉9点、有孔円板1点）がある。府教委Cトレンチや86-4調査区も、後者に含まれる。後者の状況は、これまで滑石製玉類の生産に関連すると考えられてきた。しかし今回、廣瀬時習の検討によって、こうした考え方に疑問が出されるに至った（第VI章3）。詳細は廣瀬の論考に譲るが、当遺跡から出土した玉類に関して、集落内で随時生産・使用されたと推定している。図IV-121で示したように、製作段階を基準にした分類（第VI章3）にもとづく白玉の個体数の傾向は、玉類集中部出土資料、遺構出土資料ともに共通している。また居住域II外側南西部からは、水晶製切子玉、ガラス玉なども同時に出土したことが注意される。確かに、滑石の原石や未穿孔の白玉未製品も若干含まれているため、付近で白玉の製作がおこなわれた可能性は考えられるが、こうした玉類集中地点も、玉を使用する何らかの活動に関わる廃棄場所であったと想定することができる。もちろん、そうであったとしても、すべての居住域・集落において玉類が製作されたり、大量に使用されたわけではないと思われるから、多くの玉類を有していた点がこの集落の特徴であることは間違いない。「玉作り」といっても一律ではなく、製品の流通・使用との関連で異なる性格のものが存在したことも予想されるため、今後は集落内での位置づけを遺跡ごとに検討していく必要がある。

なお、当センター調査範囲では、滑石製子持勾玉・紡錘車は居住域IIおよびその周辺にあたる位置から出土した。子持勾玉はその他、府教委Cトレンチからも出土している。

その他の遺物のうち、製塩土器（図IV-56：97）は当地区南西隅から出土したものであるが、製塩土器の可能性のある土器細片は、居住域IやIIからも若干出土している。また、円筒埴輪の破片は集落の時期と重なるものであり、居住域I・IIの周辺から出土している。鉄滓（鍛錬鍛冶滓）は溝17と居住域IIにあたる部分の第9a層から出土したが、その他に鍛冶に関わる遺物や遺構は確認されていない。円筒埴輪や鉄滓の評価は現状では難しく、福万寺II期地区の調査課題としておきたい。

以上のように、居住域II-1からは他の居住域よりも多くの遺物が出土し、種類も多いことが判明した。これは居住期間の長さにも原因があると思われるが、それだけではなく、この区域に居住した集団の集落内での立場や役割を反映している可能性も考えられる。

c. 古墳時代集落の評価をめぐって

本項で記述した古墳時代中期後半～後期集落の性格については、「玉作り集落」（小野1995）、「葬送儀礼専業集落」（森本1997）などとする見解が出されており、特に前者の考え方は広く浸透しているようである。また江浦（1991b）は、陶質土器の存在や炊飯具セットの多量の保有など、外来的要素が強いと考え、渡来人の第二世代を中心とする人々によって営まれた新興集落と推定した。こうした仮説の検証は今後の課題となっており、今回の整理結果をもとに議論を進めていく必要がある。

これまで記述してきたように、この集落は、建物数棟に炊事施設、井戸、畠などが伴う居住単位によって構成されていた。当地区で確認された居住域は3ヶ所であるが、この集落が立地する微高地は調査範囲外にも伸びているため、調査範囲外にも別の居住域が存在し、それらが関連をもって1集落を構成していた可能性が考えられる。しかし、居住域IやII-2が居住域II-1よりも新しく形成されたことでわかるように、こうした居住単位は必ずしも固定的ではなく、集落の継続期間の中でも変動すること

があったと思われる。居住域の廃絶については不明な点が多いものの、前述した耕作痕12が居住域Ⅰ廃絶後に形成されたとすれば、居住域Ⅰ廃絶後にも、周辺に居住域がまだ存続していた可能性も出てくる。また、居住域Ⅱ-1の出土遺物の豊富さから、この区域に居住した集団の立場や性格が異なっていた可能性も指摘したが、居住域Ⅰの建物規模が居住域Ⅱ-1・2と比べて大きい点も、この区域に居住した集団の立場を反映しているのかもしれない。これらのことは、ひとつの集落を構成する居住単位が必ずしも等質的ではなかった可能性を示唆する。集落を構成する個々の居住単位の動向は、集落の実態を整理する際に重要な視点となろう。

また、この集落を「葬送儀礼専門集落」とする仮説については、遺物の中に古墳の祭祀で使用されるものが含まれていることから導かれている。確かに、居住域Ⅱ-1およびその周辺からは古墳の祭祀にも使用されるような遺物が認められるので、そこに居住した集団がそうした物資の流通・使用に際して重要な役割をはたした可能性はある。しかし、これを「専門」と理解するためには不確定要素も多いし、そのように一面的にとらえることで、この集落の特色が見えにくくなってしまう危険もある。理論面での検討は今後さらに必要であるが、抽象的な論理を展開する前に、具体的なデータに即した集落像の検討を進めることが重要である。その際、廃棄・埋没後の腐食・耕作による攪乱等の影響により、本来有していた情報のかなりの部分が失われていることを念頭に置くことも必要である。

いずれにせよ、当遺跡の古墳時代中期後半～後期集落は、居住域の実態をある程度明らかにできただけでなく、出土遺物から集落の性格について議論できる可能性を有しており、今後の古墳時代集落研究にとって重要な資料であるといえよう。

なお、集落が立地する微高地の形成は、弥生時代後期における流路の埋没によるものであるが、これは当地区周辺の流路変遷の中で大きな画期である。これ以降、当地区では堆積速度が遅くなり、第10b面の微地形が第8a面まで影響を与えることになった。古墳時代集落が営まれた時期には、流路はやや離れた位置にあったと考えられる。ただし、流路の周辺では堆積環境が大きく異なることが予想され、古墳時代後期の水田跡が検出される可能性も否定できない。周辺の調査においては、層序関係を機械的に当地区に合わせるのではなく、堆積過程を正確に把握し、出土遺物などと合わせて層序対比を進める必要がある。

註

- 6) 古墳時代関連の骨製品・動物遺存体についても、松井 章氏（奈良文化財研究所）の同定による。